

龍角寺五斗蒔瓦窯出土文字瓦の報告について

龍角寺五斗蒔瓦窯出土文字瓦の再調査は、千葉県の栄町教育委員会の協力・支援のもと、当初は文部科学省・科学研究費基盤研究（B2）「文字瓦・墨書土器のデータベース構築と地域社会の研究」（2004～2006年度）のプロジェクトとして実施しました。その後、文部科学省・学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」（2004～2008年度）、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」（2009～2013年度）として、文字瓦研究は継続して行なってきました。

この間、研究成果を社会的に発信するため、韓国からも研究者を招聘し、

◇ 2006年10月7日（土）・8日（日）

「文字瓦国際シンポジウムー龍角寺を中心としてー」

報告者：山路直充、清地良太、中村友一、志賀崇、荒井秀規、犬飼隆、菱田哲郎、
山本孝文、沈相六

を開催しました。

そして、栄町の住民に研究成果を照会する目的で、ふれあいプラザさかえ大会議室において、

◇ 2007年11月3日（土）「印旛と古代国家」

報告者：山路直充、吉村武彦、大塚初重

を開きました。内心では、どれほどの人が集まるか心配でしたが、200名前後の人々が集まり、うれしい悲鳴でした。

また、これら一連の研究を学術書としてまとめようという気運が高まり、高志書院の協力を得て、吉村武彦・山路直充編『房総と古代王権ー東国と文字の世界ー』（2009年3月）を出版しました。つい最近でも、韓国の研究者から照会があるなど、研究は国際的になってきています。

学界においても、五斗蒔瓦窯出土文字瓦の以前・以後では、文字瓦・日本語表記史のうえで、研究状況は大きく違っているように思います。

ここに、その集大成として報告書を出すことができるの古代学研究所として大きな誇りです。実質的に調査を指導した山路直充さんと、暑い最中に調査に従事した清地良太さんと中村友一さんとにあらためて感謝し、巻頭言の言葉とします。

2014年3月

古代学研究所長 吉村武彦（文学部教授）

1. 調査に至る経緯

千葉県栄町に所在する龍角寺は、7 世紀に遡る古刹として知られ、創建期の瓦を生産した龍角寺瓦窯を含め、発掘調査がおこなわれてきた。しかし、その調査成果は概要の一部が紹介されるにのみで、龍角寺を学術的に評価する情報として乏しかった。その状況下にならって、1997 年に公刊された『龍角寺五斗時瓦窯跡』（以下『報告書』）は、龍角寺に関する初めてのまとまった発掘成果報告であった。

五斗時瓦窯で生産された瓦は、龍角寺で初めて瓦が葺かれた瓦のうちでも、最も古い時期の瓦であり、すでに発掘調査されていた龍角寺瓦窯で生産された瓦よりも古い時期の瓦であった。出土した瓦は、軒先瓦のみならず多くの文字瓦によって、7 世紀の評成立段階の地域相を具体的に再現できるようになった。また、その文字資料は関東地方にならって 5 世紀の稲荷山鉄剣以降のまとまった資料であり、文献史学・国語学の基礎資料としても貴重である。

『報告書』の刊行によって、新たな研究が可能になったが、『報告書』では、頁数の制約もあり、出土した文字瓦を網羅して掲載できなかった。また、文字の記銘者の扱いも課題となっており、今後に委ねられていた。

その課題を目的に明治大学古代学研究所は、2004 年 7 月に栄町教育委員会と「栄町龍角寺五斗時瓦窯跡出土品再整理事業計画書」を取り交わし、2004 年 8 月～2006 年 8 月まで同町の文化財整理室で同町教育委員会が保管している五斗時瓦窯出土の文字瓦の悉皆調査をおこなった。その調査組織は、

研究代表者 吉村武彦

分担研究者 山路直充 川尻秋生

調査員 中村友一 清地良太

調査補助員 澁川嶺 遠峯圭太郎 白石哲也 播摩尚子 喜多由記 新妻洋司

調査協力 荒井信司 新井信二 市大樹、犬飼隆 喜多裕明 小牧美知枝 高谷英一

印播郡市文化財センター 栄町教育委員会

であり、調査は

2004 年度 資料分類・整理 調書作成 撮影 注記

2005 年度 調査票入力 写真整理・加工 調書作成 資料精査 トレース 手拓 撮影 実測
接合（資料復元）重量測定 計測 分類

2006 年度 精査 実測 拓本 撮影 接合（資料復元）

という経過をたどり、調査終了後、

2007～2012 年度 内部検討 資料のデータベース化

を経て、平成 21～25 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」（研究代表者：吉村武彦）により、本年度に補足調査をおこない、報告書刊行に至った。

なお、報告書刊行に至る間、調査成果は、以下の出版物、講演会、シンポジウムで公開してきた。

2005 年 『明治大学古代学研究所紀要』1、

2006 年 「文字瓦国際シンポジウム—龍角寺を中心として—」（於：明治大学、主催：明治大学古代学研究所）

2007 年 講演会「印旛と古代国家」（於：ふれあいプラザさかえ、主催：明治大学古代学研究所）
『文字瓦・墨書土器のデータベース構築と地域社会の研究』（『平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費基盤研究（（B）（2））研究報告書』、研究代表者吉村武彦）

2009 年 吉村武彦・山路直充編『房総と古代王権―東国と文字の世界―』

(山路 直充)

II. 遺跡の紹介

平成元年度に財団法人印旛郡市文化財センターによって実施された発掘調査では、1基の登窯とそれに付属すると思われる排水施設・前庭部・土坑・ピット群等が検出された。それと同時に、窯体全面に広がる灰原および遺物分布域も確認された。ここでは本報告書で扱う瓦資料との関わりから、遺跡の概要を紹介する。

1. 窯体

窯体は暗褐色砂層（山砂層）をトンネル上に削り抜き、天井部のみ白色粘土層を利用した登窯である。単純な縦断面形態では、当初地下式有階無段の登窯であったものが、補修およびその後の使用を経て、最終的には地下式無階無段の登窯に変化したものである。平面形はほぼ短冊状を呈し、煙道部が鉤の手状に突出する特徴的な形態を有する。規模は焚口から煙道奥壁までの全長が約7.3m、中央部の最大幅が約1.7m、天井部の推定高が最大約1.9mを測る。窯体の主軸方向は等高線に対してほぼ直交する。焚口と窯尻の比高差は約1.1mで、窯体の傾斜は緩やかである。

当初の焚口については窯体前面の土坑に切られ位置の特定が困難であるが、床面および壁面の状態

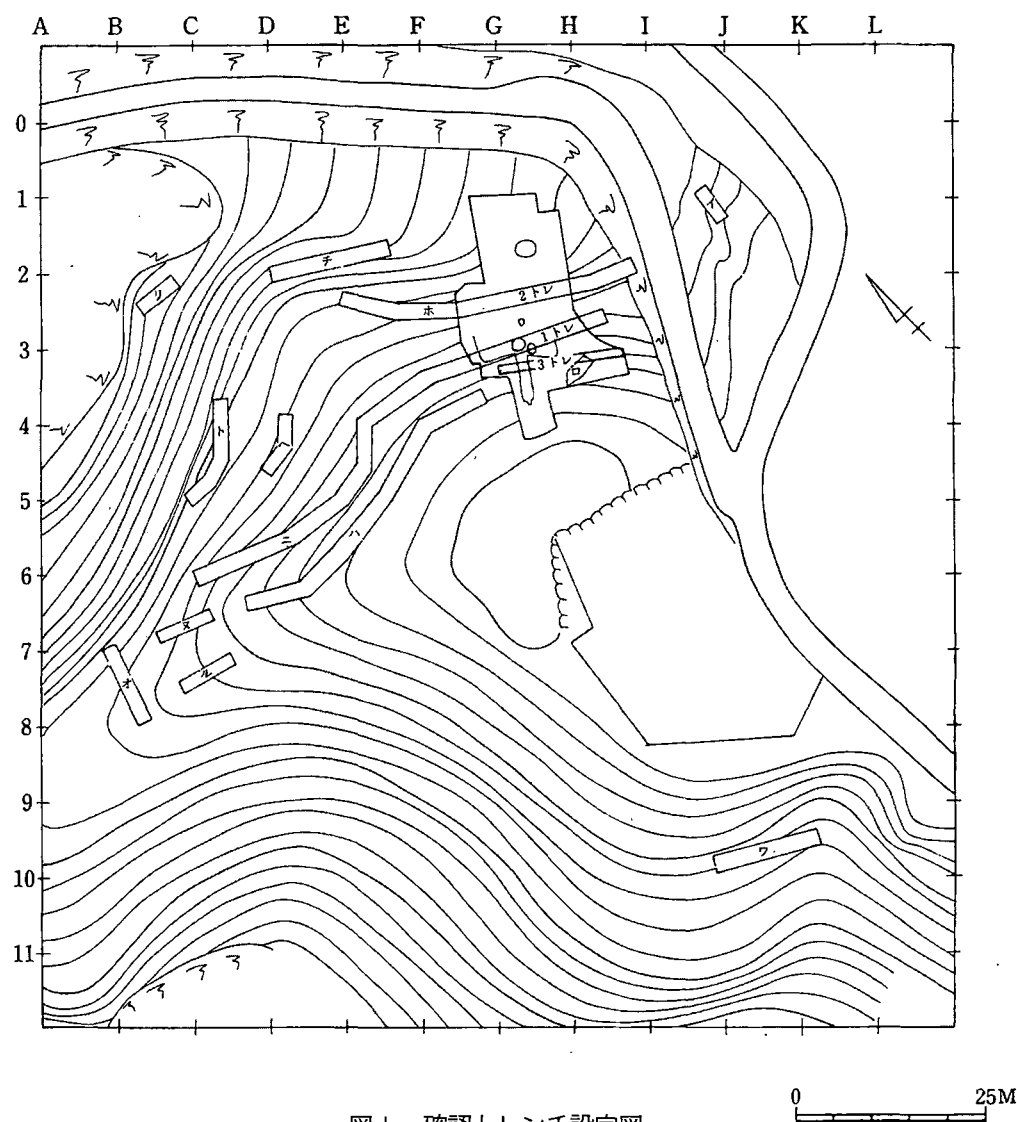


図1 確認トレンチ設定図

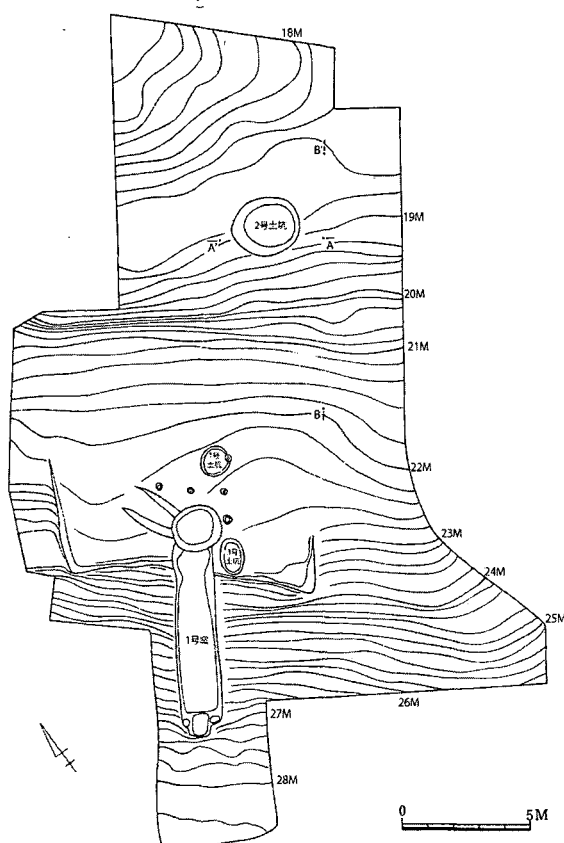


図2 遺構配置図および地形図

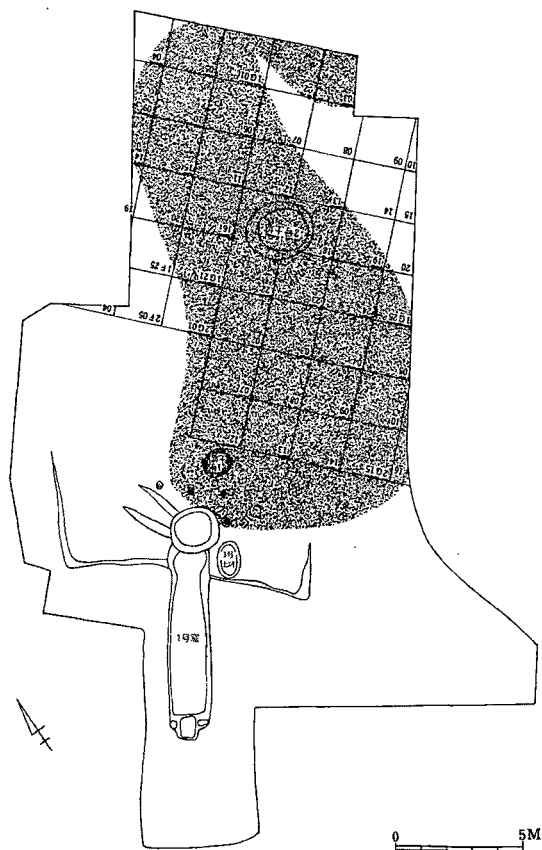


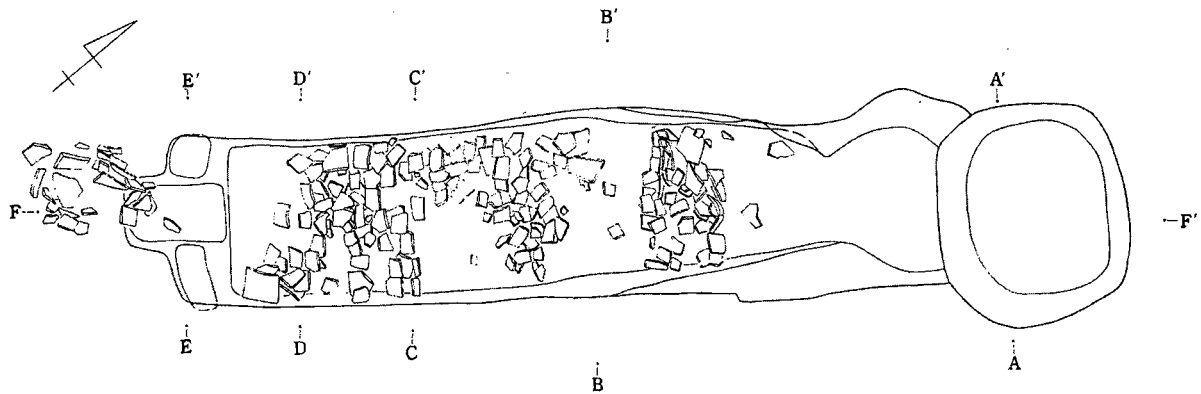
図3 グリッド設定および瓦分布状況図

から推測して、ポイント B—B' から土坑側に 3.3m ほど寄った地点と考えられる。床面の最大幅は約 1.1m であったが、最終的には約 0.8m と若干狭まり、初期の頃よりも約 1.4m 奥に入り込んでいる。床面は楕円形に薄く赤化している程度であったが、最終的には堅固に焼け締まり還元化していた。最終時の焚口より約 0.5m 土坑側に寄った地点では、左側の側面に一辺 30～40cm 前後の平瓦が数枚立て掛けられ、焚口の側面を補強しているのが観察された。瓦は凸面撫で調整が施された平瓦であった。同様に、右側の壁面付近にも大型の丸瓦が置かれていたのが遺存状態から推測された。これらの瓦はその付設された位置から、後の焚口改修に伴う補修材と考えられる。焚口の床面は標高 22.45m であったものが、最終時には 22.60m と 20cm 弱上昇した。

初期の燃焼部は、平瓦を上下に二分割し、それらを数枚横に並べることで焼成部との境に階を形成していた。当時の燃焼部は推定で長さ約 2.0m、幅約 1.3m を測り、最終時には長さ約 1.5m、幅約 1.1m の規模に若干縮小した。天井部は依存する箇所から推測して、その高さは約 1.2m であったものと思われる。窯壁は床面から 0.5m ほどしか残らず、その残存した湾曲からほぼ垂直に立ち上がるものと推測された。入口付近の壁面は内側が青色に硬く焼け、外側が赤色に変色していた。燃焼部の床面も硬く青色化し、その堆積状況から数回の重複が観察された。一部の断ち割り状況からしか判断できないが、最低でも 4 回以上の焼成が行われ、その間に最低 1 度の補修が行われていたものと考えられる。窯の補修材としては砂質粘土に少量の砂を混入したものが使用され、約 10～15cm の厚さで添付されているのが確認された。

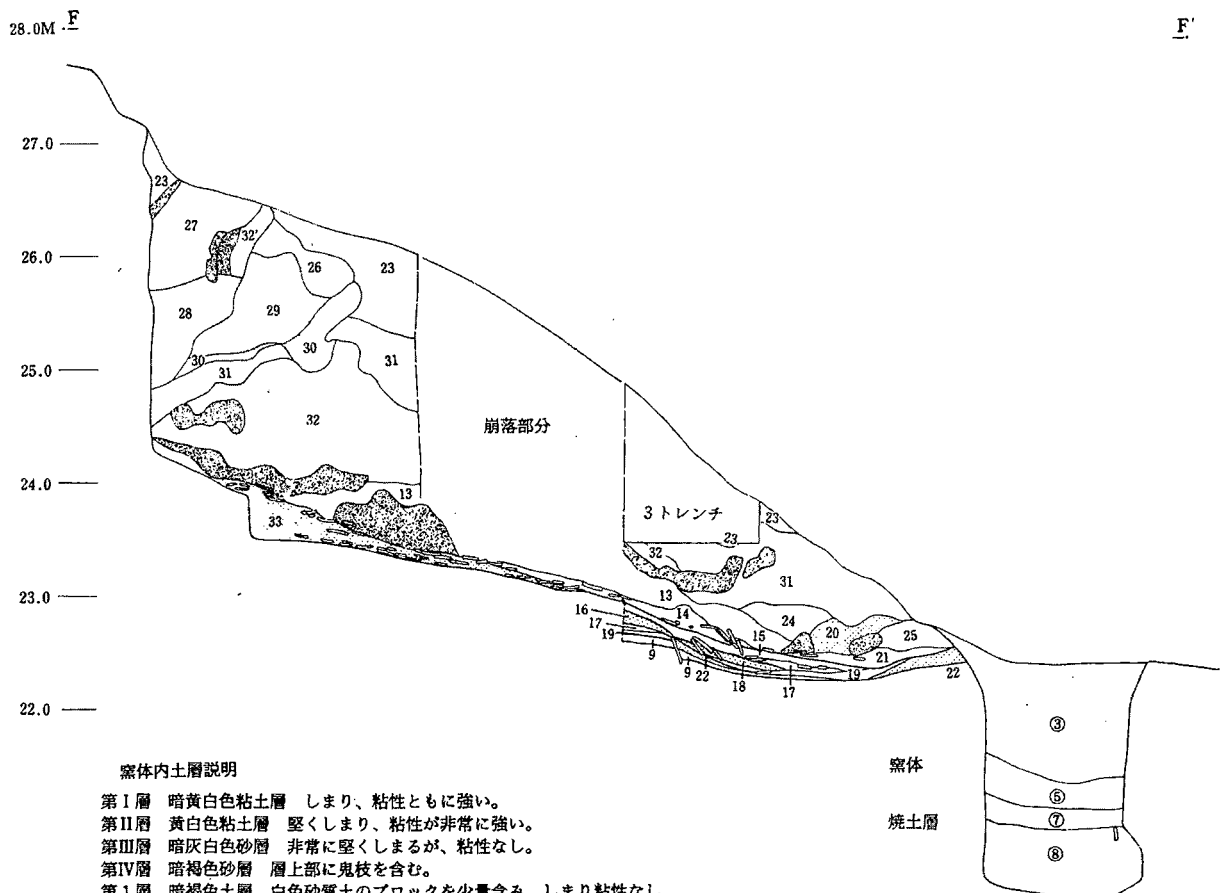
焼成部は長さ約 3.7m、最大幅約 1.7m を測り、入口付近の推定幅は約 1.2m、中央付近での推定高は約 1.5m を測る。天井部は入

図4 1号窯実測図



窯前ピット土層説明

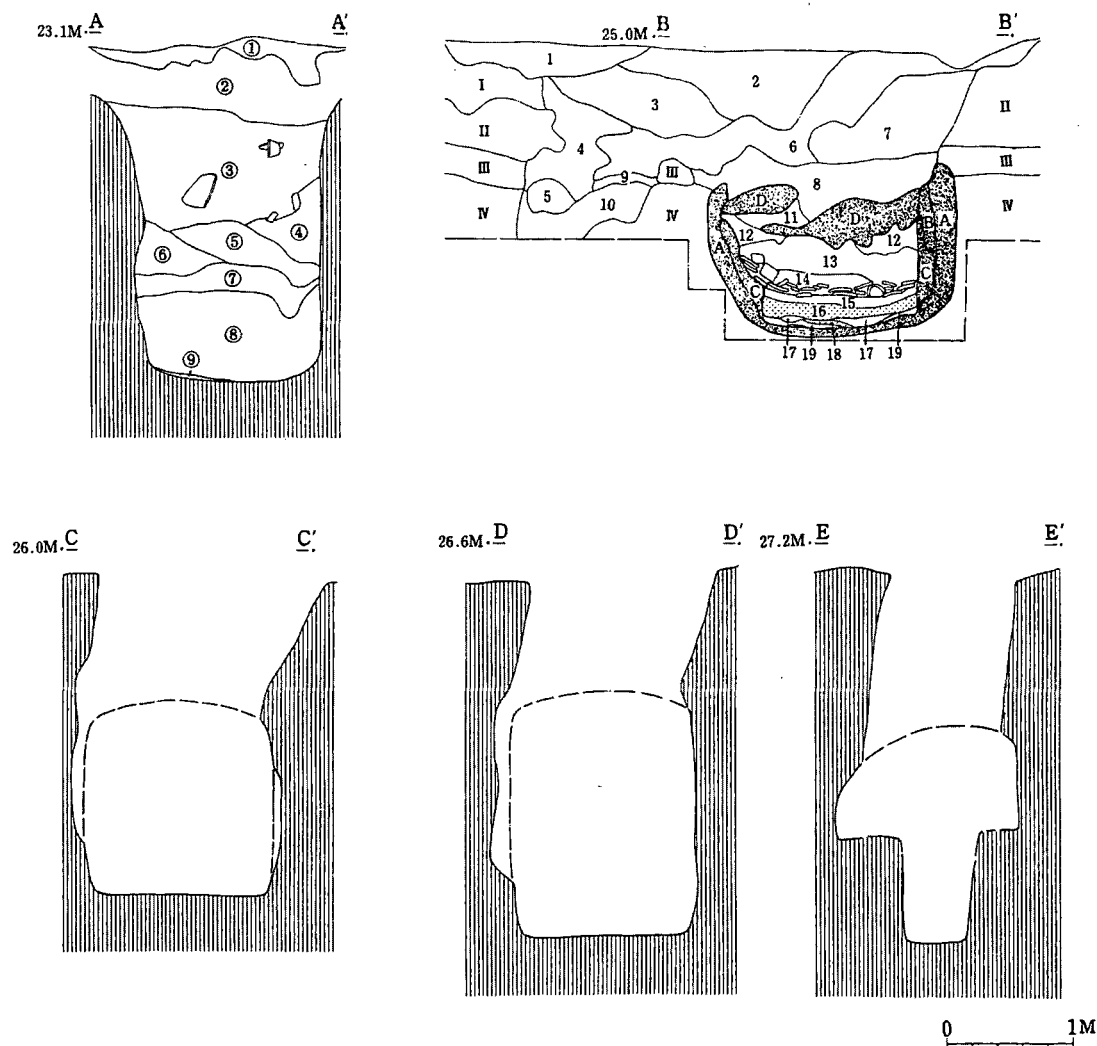
- 第①層 暗褐色土層 ローム粒を微量含み、しまり弱く粘性なし。
 第②層 茶褐色土層 黄白色砂質土・木炭粒を少量、0.5~2.0cm大の焼土ブロックを多く含み、堅くしまって粘性が強い。
 第③層 暗茶褐色土層 1.0~2.0cm大の木炭粒、焼土ブロックをやや多く含み、窯壁片が混入している。しまり・粘性ともに②層と同程度。瓦片が多く含まれる。
 第④層 暗褐色土層 焼土粒・木炭粒・黒色灰を少量含む。良くしまり、粘性がやや強い。
 第⑤層 暗赤褐色土層 焼土粒を多く、黒色灰・木炭粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
 第⑥層 暗褐色土層 黄白色砂質土・茶褐色砂質土をやや多く含み、焼土ブロック・黒色灰を少量含む。ややしまっているが、粘性は弱い。
 第⑦層 暗赤褐色土層 焼土粒を少量、黒色灰をやや多く、黄白色砂質土・木炭粒を少量含む。しまり、粘性なし。
 第⑧層 木炭層 焼土粒を少量混入するが、ほぼ2.0~3.0cm大の木炭と木炭粒で占められる。しまり、粘性なし。完形に近い瓦の混入が多い。
 第⑨層 焼土層 あまり焼けていない。



窯体内土層説明

- 第Ⅰ層 暗黄白色粘土層 しまり、粘性ともに強い。
 第Ⅱ層 黄白色粘土層 堅くしまり、粘性が非常に強い。
 第Ⅲ層 暗灰白色砂層 非常に堅くしまるが、粘性なし。
 第Ⅳ層 暗褐色砂層 層上部に鬼枝を含む。
 第Ⅰ層 暗褐色土層 白色砂質土のブロックを少量含み、しまり粘性なし。
 第Ⅱ層 暗黄白色土層 Ⅰ層をベースに焼土ブロックを微量、黒色土ブロックを少量含む。
 第Ⅲ層 暗黄白色土層 Ⅰ層をベースに焼土ブロックを微量、暗褐色土ブロックを少量含む。
 第Ⅳ層 暗褐色土層 粘土粒を多く含む。
 第Ⅴ層 暗褐色砂質土層 Ⅲ・Ⅳ層の崩壊土層
 第Ⅵ層 暗黄白色土層 Ⅱ・Ⅲ・暗褐色土ブロックの混合層
 第Ⅶ層 暗黄白色土層 Ⅱをベースに暗褐色土ブロックを若干含む。
 第Ⅷ層 黄白色土層 Ⅱ・Ⅲの混合層
 第Ⅸ層 赤褐色土層 白色粒子をベースに多量の焼土粒が含まれる。

- 第10層 暗褐色土層 粘土ブロックを多く、焼土ブロック・木炭粒を少量含む。
 第11層 焼土・粘土混合層 しまり・粘性ともに強い。
 第12層 暗赤色焼土層 焼土化した粘土ブロックを多く含む、しまり弱く、粘性なし。
 第13層 暗黄白色砂質土層 焼土粒を少量、粘土粒を多く含む、しまり粘性なし。
 第14層 白色砂質土層 雲母粒を含み良くしまっている。
 第15層 赤灰色土層 木炭粒・焼土粒を多く含む、堅固にしまっている。(最終火床面)
 第16層 焼土層 しまり、粘性なし。
 第17層 灰褐色土層 焼土・粘土ブロックをやや含む、堅くしまっている。
 第18層 焼土層 堅くしまっている。
 第19層 暗灰色灰層 しまり、粘性なし。
 第20層 焼土層 粘土粒を少量、硬化した焼土ブロックをやや多く含む。しまり弱く、粘性なし。
 第21層 黒色灰層 焼土粒を少量含む。しまり良く、粘性なし。
 第22層 焼土層 堅くしまり、粘性なし。
 第23層 褐暗色土層 白色粘土ブロックを多く含む。しまり良く、粘性やや強い。
 第24層 暗黄白色粘土層 焼土粒を多く、焼土ブロック・白色砂質土を含む。
 第25層 暗赤褐色土層 焼土粒と灰の混入土層で、焼土ブロックをやや多く含む。
 第26層 暗黄褐色土層 粘土粒・粘土ブロックを斑状に含む、堅くしまり、粘性強い。
 第27層 暗褐色土層 焼土粒をやや多く含む。しまりは弱く、粘性なし。
 第28層 暗赤褐色土層 焼土を多量に含む。しまり弱く粘性なし。
 第29層 暗黄褐色土層 焼土粒・黄白色砂質土・粘土ブロックをやや多く混入する。粘性は強い。
 第30層 黒褐色土層 黄白色砂質土を少量含む。しまり弱く、粘性なし。
 第31層 暗黄褐色土層 粘土ブロックを少量混入し、黄白色砂質土・木炭を微量含む。
 第32層 黄白色砂質土層 焼土粒を微量含む。良くしまっており、粘性なし。
 第32'層 黄白色砂質土層 (崩落のこった地山層)
 第33層 焼土層 焼土粒を多く、焼土ブロックを少量含む。
 第A層 暗赤色土層 地山の砂層が焼土化した部分で、当初の窯体と考えられる。
 第B層 赤色土層 砂質粘土が焼土化した部分で、補修された窯壁
 第C層 淡赤色土層 砂質粘土が焼土化した部分で、再補修された窯壁
 第D層 淡赤色土層 地山の黄白色粘土層が焼土化したもので、窯天井の崩落体



口付近から中央部にかけて蒲鉾形状をなし、奥壁付近ではアーチ状を呈していたものと思われる。焼成部は入口付近の傾斜が約 20°と若干つい良いものの、全体には 10°前後の緩やかな傾斜を保ちながら標高 23.50m の奥壁に至る。窯体内の最終面には多量の平瓦と若干の丸瓦、それに最終焼成後に煙道から流入したと考えられる多量の焼土が確認された。瓦の一部は焼台として利用され、さらに横に整然と配列された平瓦も認められた。これらの状況から、焼成部の床面は無段であるが、平瓦の破片を横に並べることにより階段状を呈していた可能性が考えられた。窯壁には幅 15 ～ 20cm、長さ数 10cm ほどのレンガ状ブロックにした粘土の特異な積み上げ痕が認められ、焼成部中程から窯尻にかけては、それらの壁面に工具の痕跡が顕著に確認された。工具痕は幅 15cm ほどで、天井部から床面にむけ斜位に壁面を削り取る様子が観察された。

煙道部は窯体内で一番特徴的な形態を示す箇所である。焼成部奥壁の床面から 35cm ほど垂直に立ち上がった位置から、傾斜 25°で約 80cm 上方へ伸び、再度垂直に立ち上がり煙突部に至る。平面形態は、幅 0.6m、奥行き 0.9m の長方形を呈し、床面から上端部までの高さは約 3.0m を測る。煙道部は焼成部奥壁との境に開口部を設け、その上部に粘土ブロック状の固まりで天井付近まで閉塞したことが、調査時の落下物から推測された。奥壁での煙道は推定で幅約 0.65m、高さ約 0.85m であったものと考えられる。地表面からは改稿する煙道部を被っていたと思われる平瓦が数十枚ほど検出されたが、それらの大半は凹凸面撫で調整の平瓦であった。

2. 前庭部

前庭部からは窯体に付属すると思われる 3 基の土坑と 5 本のピット、それに排水施設などが検出された。

瓦窯を構築すると同時に斜面部を大きく削平し、作業場としての平場を造り出している。その範囲は約 9m × 9m 四方の方形で、窯体に直交し、標高 21.0m 付近にまで及ぶ広範囲なものであった。平坦面の奥壁部は削り取りが大きく、底面からほぼ垂直に約 1m の高さをもって立ち上がる。平場の削出範囲は窯体を中心に東西に翼状に広がり、西側に約 4.0m 伸び、垂直に谷方向へ約 4.9m 折れ曲がる。同様に東側に約 3.8m 伸びた壁面も、谷に向かって約 2.5m 垂直に折れ曲がるが、西側より若干短い。平場は谷の落ち際付近までが作り出しの範囲となっていた。また、平場東側の隅からは壁面に立て掛けられた状態で焼成後の平瓦が数枚検出されたが、西側の壁面付近および北西側からの遺物の出土は極めて少量であった。このような遺物の出土状況から、窯体前面の平場は東側と西側とでは使用目的が異なり、東側は焼成後の瓦を集積・選別する場として、西側は燃料等の材木の保管場所として機能していたのではないかと想像された。

焚口の前面には長径約 2.0m、短径約 1.7m、深さ約 2.0m の楕円形を呈する土坑が付設されている。この土坑は地山の黄白色砂質土、茶褐色砂質土、そしてもっとも柔らかい灰白色砂層を掘り込んで構築されており、その壁面は調査時においてもすぐに崩落してしまう状態であった。覆土中からは多量の木炭や焼土ブロックとともに、窯壁片や凸面に平行叩きの施された平瓦などが出土した。これらの出土状況から当施設の使用目的は窯体から掻き出された灰等を落とすためのものと考えられた。この土坑が窯体に付設されたのは、焚口付近の堆積状況から判断してその後半段階と思われる。

灰落とし施設と同時期に排水溝も付設された。排水溝は窯体前面の土坑から北側の谷方向に向かい、緩やかに走行する。溝の長さは約 2.2m、最大幅約 1.3m、深さ約 17 ～ 20cm を測り、覆土中には褐色土混じりの砂層が堆積していた。

土坑は窯体前面より合計 2 基検出された。第 1 号土坑は灰落とし施設の前方向約 1.4m のところに位

置き、長径約 1.2m、短径約 1.0m、深さ約 0.2m を測る。覆土は焼土を若干混入する黒灰色の単一層で、土坑内より平瓦の破片が 3 点出土した。本土坑の東約 2.3m の地点から軒丸瓦が出土している。第 3 号土坑は窯体東側の壁面から約 40cm、当初の焚口の腋に付設されたものとおもわれる。長径約 1.4m、短径約 0.9m、深さ約 0.45m の楕円形を呈し、この土坑内からも灰層が確認された。両土坑ともに規模から見て多量の灰を処理できる施設とは考えられず、一時的なものであったと思われる。これらの土坑が使用されていた時期には、大量の灰は斜面部に投棄されていたものと推測される。

3. 灰原

第 1 号窯の当初の灰原層は 1G-17・18・22 グリッドの狭い範囲内で、第 2 号土坑に覆い被さるように堆積していた。この灰原中の一箇所、1G-17 グリッドより遺物の一括出土が確認された。出土した遺物は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・土師器等であった。軒丸瓦は三重圈文縁八葉単弁蓮華文で、中房の数が 1+5 のもの、平瓦は凸面を丁寧に撫で消したものであった。これらの遺物を含む灰原層を古期灰原層とした。

古期灰原層上に形成された灰原層も、ほぼ近接した東西・南北の断面から観察された。両者の間には黄白色砂層が堆積し、明確な間層の存在が確認された。しかも、その堆積状況から中期灰原層が形成されたのは古期灰原層後比較的早い段階であったことが推測された。その範囲については不明確だが、おおよそ 1G-13・18・23 グリッド付近から北西側へ、古期灰原層を大きく覆うように堆積していたものと思われる。

最終的に灰原層は縦断面 B-B' などから、2G-03・04・05 グリッド付近を基部として、北は 1F-15・1G-11 グリッド付近まで舌状に延びる広い範囲であった。新期灰原層は確認された灰原層中では一番広く、灰原中からは多数の文字瓦が出土した。特に 1G-18・23・24、2G-04・05 グリッドからは文字瓦が集中して出土した。このような遺物の分布状況から、瓦は窯体前面から直接投棄されたものではなく、窯体東側の作業場付近から投棄されたことが推測された。なお、この中・新期灰原層上に堆積する第 2 層（黒褐色土層）中から三重圈文縁八葉単弁蓮華文の軒丸瓦が出土した。軒丸瓦の

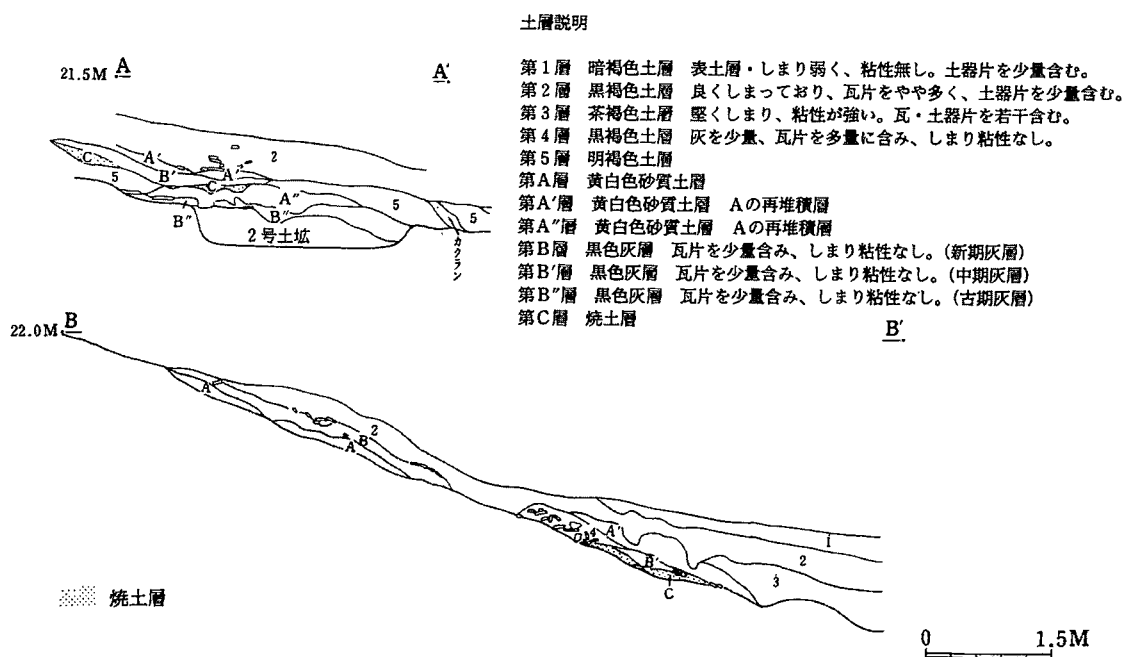


図 5 1 号窯灰原土層断面図

中房の数は 1+10 であった。

以上のように、最低 3 回層の灰原層が確認されたが、窯体前面に広がる灰原層のほかに、1G-01 から 1G-03 グリッドにかけて異なる瓦の分布域が確認された。瓦の分布から他に窯が存在する可能性も推測される。

(『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗時瓦窯跡—栄町病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』
印旛郡市文化財センター、同発掘調査報告書第 61 集、1997 年より抜粋)

Ⅲ．瓦の分類

本章では、五斗薪瓦窯で出土する軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の分類を行う。五斗薪瓦窯で面戸瓦【図版 5—4・5・6】と隅切瓦が出土しているがここでは取り上げない。なお、文字が記銘された瓦は 1 4 3 8 点出土しているが、種類ごとの出土点数は平瓦が 1 4 3 7 点、丸瓦が 1 点となっている。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は、三重圏文縁単弁八葉蓮華文（Ⅰ類）が出土する。内区は花卉の輪郭線はない。子葉は細長く、弁端がやや丸みを帯びている。間弁は中房まで達する。中房蓮子は 1 + 5 の配置のものと、その中心の蓮子を大きくし外側の蓮子間に 5 個の蓮子を追加した 1 + 5 の配置となるものの 2 段階が確認できる。なお、龍角寺において、1 + 5 の配置と 1 + 1 0 の配置の間に位置する 1 + 5 の配置で中心の蓮子が大きいものが確認されているので、五斗薪瓦窯で出土する 1 + 5 の配置を a 段階と 1 + 1 0 の配置を c 段階とする。a 段階と c 段階は異なる特徴が見られる。

a 段階【図 6-1】 瓦当面の厚さは 3.2 ~ 3.8 cm と薄い。色調は青灰色～黒灰色で、焼成は良好で堅緻である。瓦当部と丸瓦部の接続技法は、丸瓦部広端を未加工もしくは凸面側を削ったものを接続する。

c 段階【図 6-2】 瓦当面の厚さは 5.5 cm 前後と厚い。色調は黄褐色～赤褐色で、焼成は甘く軟質である。瓦当部と丸瓦部の接続技法は、「1 + 5」と同様のもののほかに、丸瓦広端を片ほぞ状に加工し瓦当側面に接合するものがある。片ほぞ状加工は、切りこみが浅く、瓦当部との噛み合わせ悪いものが多い。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は、三重弧文軒平瓦（Ⅰ類）が出土する。施文方法は型挽きで、施文は分割前におこなう。瓦当文様と顎長からⅠAとⅠBに分類した。

ⅠA【図 6-3】 弧線がほぼ同 1 のもので、顎長は 5.4 cm。顎の成形は、広端部付近にキザミを入れ粘土を継ぎ足す。平瓦部整形は、凹面はケズリ、凸面は全面ナデ。瓦当側面は、ナナメに切り落とすが角度が浅い。

ⅠB【図 6-4】 第 2 弧線が太くなるもので、顎長は 3.5 cm。顎部は瓦当方向に向かってやや斜めに広がる。顎の成形は、ナナメ方向のキザミを入れ粘土を継ぎ足す。平瓦部の整形は、凹面はケズリ、凸面は全面ナデものと粗くナデ、叩きが残るものがある。叩きは不明なものが多いが確認できたものは、平瓦Ⅰ類に使用されている正格子と斜格子であった。瓦当側面は、ナナメに切り落とすが、角度が浅い。

(3) 平瓦

平瓦は凸面の状態からⅠ～Ⅳ類に分類することができる。Ⅰ類は叩き目をナデ消すもの、Ⅱ類は斜格子もしくは正格子の叩き目を残すもの、Ⅲ類は平行叩きを残すもの、Ⅳ類は縄目叩きを残すものである。なお、石戸・小牧（1997）では、叩き目をナデ消すものをⅡ類とし、斜格子もしくは正格子の叩き目を残すものをⅡ類としてきたが、叩き目をナデ消すものが古いと考え、ここでは分類番号を逆転することとした。

平瓦全体の出土量のうち各分類が占める割合【表 1】は、Ⅰ類は 72.17%、Ⅱ類は 0.48%、Ⅲ類は 27.32%、Ⅳ類 0.03% である。

平瓦Ⅰ類【図 7,8,9,10-1・2】 成形の方法は粘土板桶巻き作りで、粘土円筒の分割は 5 分割である。

凸面は、叩きしめの後に叩きを全面ナデ消す。1部のなで残しの部分に斜格子叩きが残るものがあり、I類で使用されている斜格子叩きに酷似しており、同じ叩きを使用した可能性が高い。凹面の布目はヘラ削りで全面消されている。ヘラ削りの方向は、狭端から広端方向のものが最も多く、狭端及び広端付近のみ横方向に削るものもある。また、少数ではあるが、縦方向のヘラ削り後に、全面横方向に削るものがある。色調は黒灰色から褐色まで多種にわたり、焼成は良好で堅緻である。全長は、40cm以下(I1)【図7-1・2】と42cm以上(I2)【図8-1・2, 図9-1】のものの2種に分かれる。I1・2は狭・広端幅に違いがなく、曲率も同じため同じ桶で製作されたものと考えられる。

粘土板の合わせ目は、完形もしくは4隅が3箇所以上残存する22枚のうち9枚に確認できる。出現数からすると、桶に2枚の粘土を巻きつけ平瓦を製作したものと考えられる。

文字瓦が1407点ある。文字瓦の記銘位置は全て凸面で、ほとんどが広端中央付近に記銘されている。記銘された段階は、文字が瓦の中央付近に位置することから粘土円筒の分割後と考えられ、筆記具が深く粘土に入り込んでいるものがあることから、完全に乾燥する前と考えられる。つまり、粘土円筒を分割し凹面整形をおこなった直後に記銘していると思われる。文字の方向は狭端部に人が立ち、広端から狭端方向に文字を書くものが大多数である。1枚の瓦に書く文字の種類は1種類の文字(朝布など)を記銘するものがほとんどで、2種類の文字(朝布と神布)を併記する例が1点ある。全長の違いで文字の有無に違いがあり、40cm以下のI1は全長の判明する21点中1点も文字が記銘されていないのに対して、全長42cm以上のI2は、全長の判明する6点中全てに文字が記銘されている。

平瓦II類【図10-3・4・5・6】 破片資料のみのため、成形方法や粘土円筒の分割は不明である。凸面には格子叩きを残し、正格子・斜格子のものがある。凸面は1部を粗くなでるものと未整形のものがある。色調は茶褐色から暗褐色で、焼成は甘く、やや軟質である。文字瓦が1点ある。記名されている文字は「□□□(禾カ)」である。

平瓦III類【図11,12,13】 成形の方法は粘土紐桶巻き作りで、粘土円筒の分割は3分割である。叩き板は6種類が確認でき、それを使用した叩き目は13種類に細分できる。

①叩き板の種類

叩き板はA～Fの6種を抽出した。ここでは叩き目の突出した条線を凸線とし、凹んだ条線を凹線とする。

- A 凸線に対して凹線の木目が直交する。傷みの進行でa・bに分けられる。Aaは凸線が太く、角が残る。Abは凸線が細くなり、角がとれて丸くなっている。凹線の木目が目立つ。
- B 凸線に対して凹線の木目が直交する。傷みの進行でa・bに分けられる。Aよりも凹線の幅が狭くなり、木目が少ない。Baは凸線が太く、角が残る。Bbは凸線が細く、角がとれて丸い。
- C 凸線に対して凹線の木目が直交する。A・Bよりも凹線の幅が狭くなり、木目が少ない。
- D 凸線に対して凹線の木目が左上がりに斜交する。
- E 凸線に対して凹線の木目が右上がりに斜交する。Dよりも凹線の間隔が広い。
- F 凸線に対して凹線の木目が直交する。凹線の間隔が最も狭い。1点のみの出土で詳細については不明。

②叩き目による分類

A～Fの叩き板をもとに、その叩き方と叩き目からⅢ1～Ⅲ3に細分した。

Ⅲ1 叩き板Aの瓦。全長約43.5cm・狭端幅27.0～28.3cm・広端幅35.0cm。完形重量5.663g。

粘土紐桶巻き作り。分割は3分割。A a・A bで属性が異なる。

- Ⅲ 1 a【図 11-1】 叩き板 A a の瓦。叩きしめは、大きく2度おこなわれる【図 16】。1度目の叩きしめは2度目の叩きしめに重なる部分が多い。一度目は広端から一周ずつ狭端へ向けておこなわれ【図 15-2】、2度目は左上がり【図 15-1】におこなわれる。凸面に離れ砂が付着するものがある。凹面は全面を縦方向にケズリ整形するものが多いが、縦方向のケズリ整形の後に凹面広端部付近の5～8cm程度を横方向にケズリ整形するものが少量ある。側縁は凸面側を面取りし、凹面側は明確な面取りはしないが、凹面整形の縦方向のケズリ整形の際に若干角度をつけ面取り風に仕上がっているものがある。狭端縁・広端縁は凹面側のみ面取りするものと無加工のものがある。広端部の隅は切り落とさない。色調は灰色系統が多い。焼成は良好で硬質なものが多い。
- Ⅲ 1 b【図 11-2】 叩き板 A b の瓦。叩きしめは、左上がり【図 15-1】と右上がり【図 15-3】があり、左上がりが多い。狭端・広端の一部分に補足の叩きがおこなわれる。補足的な叩きに方向性はない。凸面に離れ砂が付着する。凹面は縦方向の粗いケズリ整形をするものが多く、無整形のものは少ない。粗いケズリ整形のため一部に布や桶の杵板痕跡を残す。縦方向のケズリ整形されるものは、一部をナデ整形するものや、縦方向のケズリ整形の後に、凹面広端部付近を横方向にケズリ整形するものもある。Ⅲ 1 bは広端の両隅を切り落とすものがある。色調は黄褐・橙系統のものが多い。焼成は悪く、軟質なものが多い。文字瓦が1点ある。記名されている文字は「生」である。
- Ⅲ 2 叩き板 B の瓦。全長42.4cm・狭端幅25.8～28.0cm・広端幅32.5～36.0cmを測る。完形品はない。粘土紐桶巻き作り。分割は3分割。A a・A bで属性が異なる。
- Ⅲ 2 a【図 11-3】 叩き板 B a の瓦。叩きしめは、大きく2度おこなわれる。1度目の叩きしめは2度目の叩きしめと重なる部分が多い。1度目は左上がり【図 15-1】に叩きしめをおこない、2度目に広端から一周ずつ狭端へ向けての叩きしめ【図 15-2】をおこなう。Ⅲ 1 と逆で、先に左上がり【図 15-1】と推定される叩きしめをおこない、後に右上がりをおこなう。凸面に離れ砂が付着する。凹面は全面を縦方向のケズリ整形したものと、縦方向のケズリ整形の後に広端部付近を横方向にケズリ整形するものがある。側縁は凸面側を面取りし、凹面側は面取りしないものが多い。なかには凹面整形の縦方向のケズリ整形の時に若干角度をつけ面取り風に仕上げるものがある。色調は灰色系統のものがほとんどである。焼成は良好なものが多く、硬質である。
- Ⅲ 2 b【図 12-1】 叩き板 B b の瓦。当初の叩きしめは、補足的な叩きしめが狭端と広端を中心におこなわれているので、明確に確認することができない。残る部分から推測される当初の叩きしめは、左上がり【図 15-1】と右上がり【図 15-3】がある。補足的な叩きは広端に関しては、図 10-2 のようなものが多く、狭端での方向性はわからない。凸面に離れ砂が付着するものが多い。凹面の整形はⅢ 1 b と同じ。側縁は凸面・凹面とも面取りするものが多い。Ⅲ 2 bは広端の両隅を切り落とすものがある。色調は、黄褐・橙色系統のものが多い。焼成は悪く、軟質なものが多い。
- Ⅲ 3【図 12-2】 叩き板 C の瓦。全長42.6cm・狭端部24.5～27.7cm・広端部32.0cm。粘土紐桶巻き作り。分割は3分割。叩きしめは、Ⅲ 2 a と同じで、1度目の叩きしめは2度目の叩きしめと重なる部分が多い。凸面に離れ砂が付着するものが多い。凹面の整形はⅢ 1 b・Ⅲ 2 b と同じ。色調は、様々であるが黄褐色や橙系統のものが多い。焼成は悪い。軟質なものが多い。
- Ⅲ 4【図 13-1】 叩き板 A a と B a の叩き目が重複する瓦。3分の2程度残存するものを1点のみ確認した。叩きしめは、2度おこなう。1度目は右上がり【図 15-3】、2度目は左上がり【図 15-1】である。右上がりの叩きしめはA aを使い、左上がりの叩きしめはB aを使う。側縁は凹面凸面とも面取りするものが多い。凹面の縦方向のケズリ整形の後、狭端付近は横方向にケズ

- り整形する。側縁は凸面のみ面取りする。焼成は良好で、硬質である。色調は褐灰色である。
- Ⅲ 5 【図 13-2】 叩き板Dの瓦。全長 38.8cm、狭端幅 22.0～25.0cm、広端部 27.5～30.0cm。分割について石戸・小牧（1997）では4分割としていたが、再検討の結果、3分割であることを確認した。確認できる叩きしめは左上がり【図 15-1】がほとんどである。凹面は縦方向のケズリ整形のものが多く、無整形のものは少ない。縦方向のケズリ整形の後に、凹面広端部付近を広く横方向にケズリ整形するものもある。Ⅲ 5は広端の両隅を切り落とすものがある。隅部として確認した資料の90%が切り落とされていた。焼成は特に悪く脆いものが多いが、Ⅲ 1 b・Ⅲ 2 bと類似するものもある。色調は、褐色や赤褐色系統である。文字瓦が23点ある。記名されている文字は「小加」・「加」・「皮尔□□」・「玉作」・「玉」である。
- Ⅲ 6 【図 13-3】 叩き板DとEの瓦。狭端部 26.6～29.4cm。叩き板Dが主体で使用される。Eは補足的な叩きに使用され、部分的にしか確認できない。叩き板Dの叩きしめは左上がり【図 15-1】である。Ⅲ 6は広端の両隅を切り落とすものがあり、確認した資料の71%が切り落とされていた。側縁の面取り・胎土・焼成はⅢ 5と類似する。文字瓦が4点ある。記名されている文字は「皮尔□」・「野」・「□月」・「玉」である。
- Ⅲ 7 【図 13-4】 叩き板B bとDとEの平瓦。叩き方は不明。叩き目の重複関係はB b→E→D。製作技法・焼成・色調はⅢ 5・Ⅲ 6と類似する。
- Ⅲ 8 叩き板Fの瓦。他の物とは胎土が大幅に異なる。小片のため詳細は不明。
- Ⅲ 9 叩き板A bとCの瓦。叩き方は不明。叩き目の重複関係はA b→C。凹面整形・面取り・焼成・色調はⅢ 1 b・Ⅲ 2 b・Ⅲ 3と類似する。
- Ⅲ 10 叩き板A bとDの瓦。叩き方は不明。叩き目の重複関係はA b→D。焼成・色調はⅢ 5と類似する。
- Ⅲ 11 段階不明BとCの瓦。全長 42.4cm、狭端部 27.1cm。叩き方は不明。叩き目の重複関係はC→B。側縁の面取り・焼成・色調はⅢ 1 b・Ⅲ 2 b・Ⅲ 3と類似する。
- Ⅲ 12 叩き板B bとDの瓦。叩き方・重複関係は不明。凹面は無整形で布目を残す。広端部隅は面取りされる。焼成・色調はⅢ 5と類似する。
- Ⅲ 13 叩き板CとDの瓦。叩き方・重複関係は不明。焼成・色調はⅢ 5と類似する。

③分類のまとめ

木目による分類 叩き板の使われ方で平瓦Ⅲ類をⅢ 1～Ⅲ 13に分類したが、これらは凸線に対する凹線の木目のあり方から、 $\alpha \sim \gamma$ に大きくまとめることができる。瓦の大きさはそれぞれのまとまりごとで同じになる。

α 凸線に対して木目が直行する叩き板A・B・Cを使用した瓦。叩き板分類Ⅲ 1・Ⅲ 2・Ⅲ 3・Ⅲ 4・Ⅲ 9・Ⅲ 11が該当する。そのうちⅢ 1・Ⅲ 2・Ⅲ 3は、全長が43cm前後である。瓦の大きさや曲率から考えると、同一の桶で製作された可能性が高い。 α は『報告書』の旧Ⅲ類とほぼ同じである。ただし、旧Ⅲ類ではⅢ 10・Ⅲ 12を含んでいたが、今回の分類でこれらは β に含まれる。

β 凸線に対して木目が斜交する叩き板D・Eを使用した瓦。Ⅲ 5・Ⅲ 6・Ⅲ 7・Ⅲ 10・Ⅲ 12・Ⅲ 13が該当する。そのうちⅢ 5・Ⅲ 6は瓦の大きさや曲率から考えると、同一の桶で製作された可能性が高い。Ⅲ 5の全長は38.8cm。曲率の違いから、 α と β では桶が異なることが考えられる。 β は『報告書』の旧Ⅳ類とほぼ同じである。旧Ⅲ類に含まれていたⅢ 10・Ⅲ 12を含む。

γ 叩き板Fを使用した瓦。Ⅲ 8が該当する。現在のところ1点のみのしか確認できず、詳細は不明である。今後の資料の増加を期待したい。

④ $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の前後関係

α の前後関係は叩き板の傷みの進行で $\alpha a \rightarrow \alpha b$ の2段階になる。 αa はⅢ 1 a・Ⅲ 2 a・Ⅲ 4が該当し、 αb はⅢ 1 b・Ⅲ 2 b・Ⅲ 9・Ⅲ 1 1が該当する。 αa から αb への変化で瓦の属性に変化があった。凹凸面の側縁の整形と、広端隅部の切り落としである。側縁の整形は、 αa の場合、凸面側はしっかり面取りするものが多く、凹面側は、凹面の縦方向のケズリ整形の時、若干角度をつける程度ではっきりしない。 αb になると、凹凸面ともしっかり面取りするものがほとんどである。広端隅部の切り落としは、 αa では確認されないが、 αb になるとほとんどに認められる。なお、Ⅲ 3は叩き板Cが使われ、傷みの進行が確認できないが、凹凸面の側縁の整形と広端隅部の切り落としの特徴から αb の段階と考えられる。

β は、 α と桶は異なるが、 αb の特徴が認められ、また、Ⅲ 7・1 0・1 2・1 3でみられるように叩き板A b・B b・Cと叩き板D・Eが重複して用いられている。 β の時期は αb と同時期か、 αb よりやや遅れると考えてよいだろう。前後関係は、 $\alpha a \rightarrow \alpha b \cdot \beta$ もしくは $\alpha a \rightarrow \alpha b \rightarrow \beta$ である。 γ は不明である。ただし、その 時期差は叩き板が共通するものがあることから、短期間が想定できる。平瓦Ⅴ類 破片資料のみのため、成形方法や粘土円筒の分割は不明である。凸面は縄目叩きを残し、凹面は布目が残る。色調は灰褐色～黄褐色で、焼成は良好であるがやや軟質である。

(4) 丸瓦

すべて無段式丸瓦である。成形方法の違いからⅠ・Ⅱ類に分類できる。丸瓦全体の出土量のうち各分類が占める割合【表2】は、Ⅰ類は38.17%、Ⅱ類は61.84%である。文字瓦はⅠ類で1点確認されている。

丸瓦Ⅰ類【図9-1】 粘土板成形で、凸面整形はヨコ方向のナデである。わずかなナデ残し部分に格子叩きが残るものがある。凹面は4周を削る。文字瓦の記銘位置は凸面の狭端部よりで、狭端側に人が立ち、広端方向から狭端方向に記銘されている。

丸瓦Ⅱ類【図9-2・3】 粘土紐成形のものである。凸面は円筒の分割後にヨコ方向に粗いナデ整形をおこなう。ナデの残し部分に平行叩きが残る。凹面は4周を削る。

(5) 軒先瓦と平瓦・丸瓦の対応関係

4種類に分類できる平瓦が、軒丸瓦より設定したどの時期に該当するのか問題となる。まず、平瓦Ⅰ類は凹凸面の整形の特徴の共通性から軒平瓦ⅠAと組み合わせと考えられる。次に平瓦Ⅱ類は叩き目を省略するといった共通性から軒平瓦ⅠBと組み合わせるものと想定できる。平瓦Ⅲ類は特徴から組み合わせる瓦をわからず時期は不明である。ただ、平瓦Ⅰ類および平瓦Ⅱ類とは径や曲率、凸面の整形が異なることから、平瓦Ⅲ類は平瓦Ⅰ類・Ⅱ類よりも後出するものと考えられる。丸瓦Ⅰ類は凸面整形と格子系叩きであること、粘土板成形であることから、平瓦Ⅱ類と組み合わせと考えられる。丸瓦Ⅱ類は平行系叩きで粘土紐成形であることから、平瓦Ⅲ類と組み合わせと考えられる。

【参考文献】

- 石戸 啓夫・小牧 美知枝 1997『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗葺瓦窯跡―栄町病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』印旛都市文化財センター、同発掘調査報告書第61集(『報告書』とする)
- 上原 真人他 1984『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』京都府教育委員会

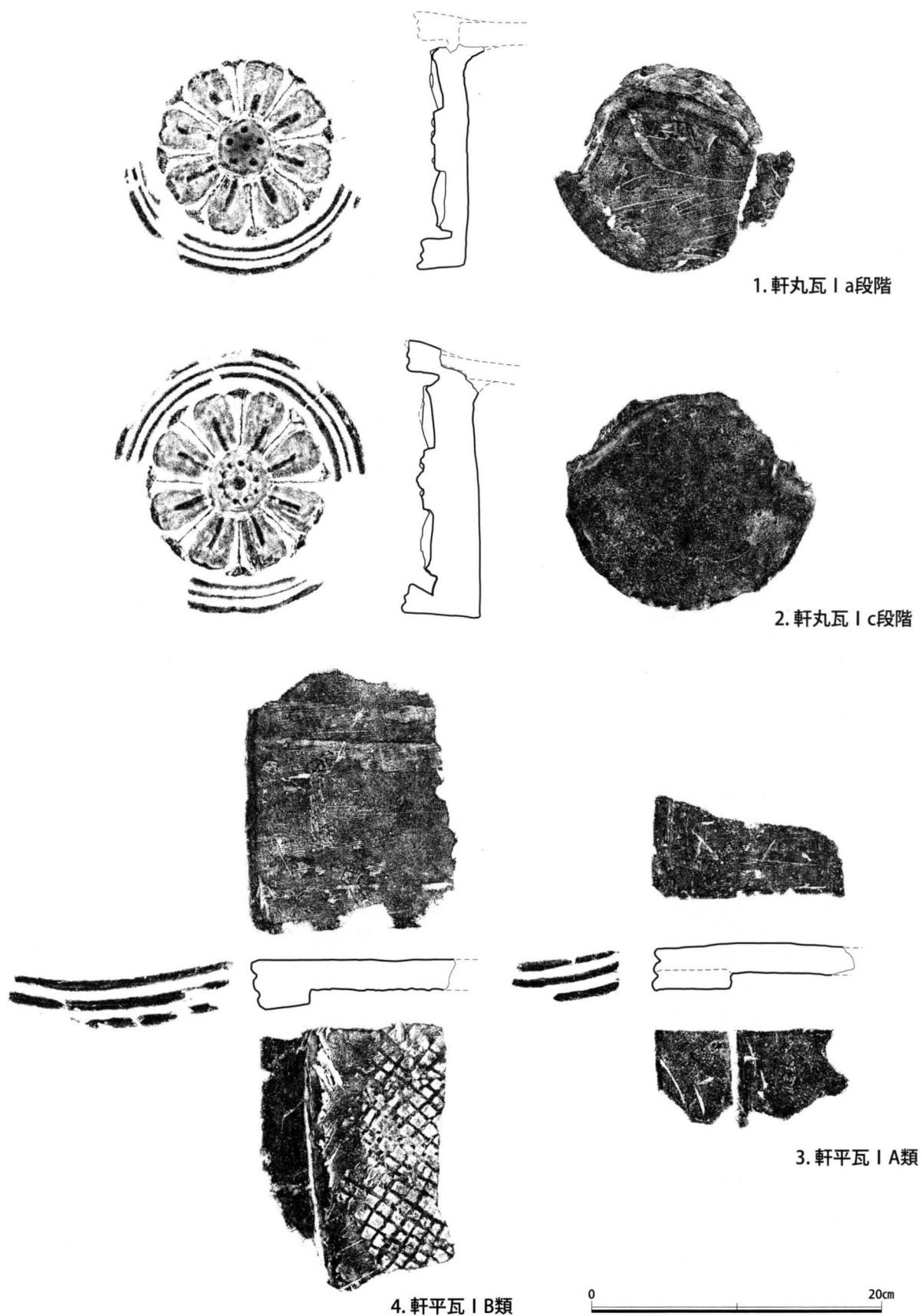


図6 軒丸瓦・軒平瓦実測図 (1/4)

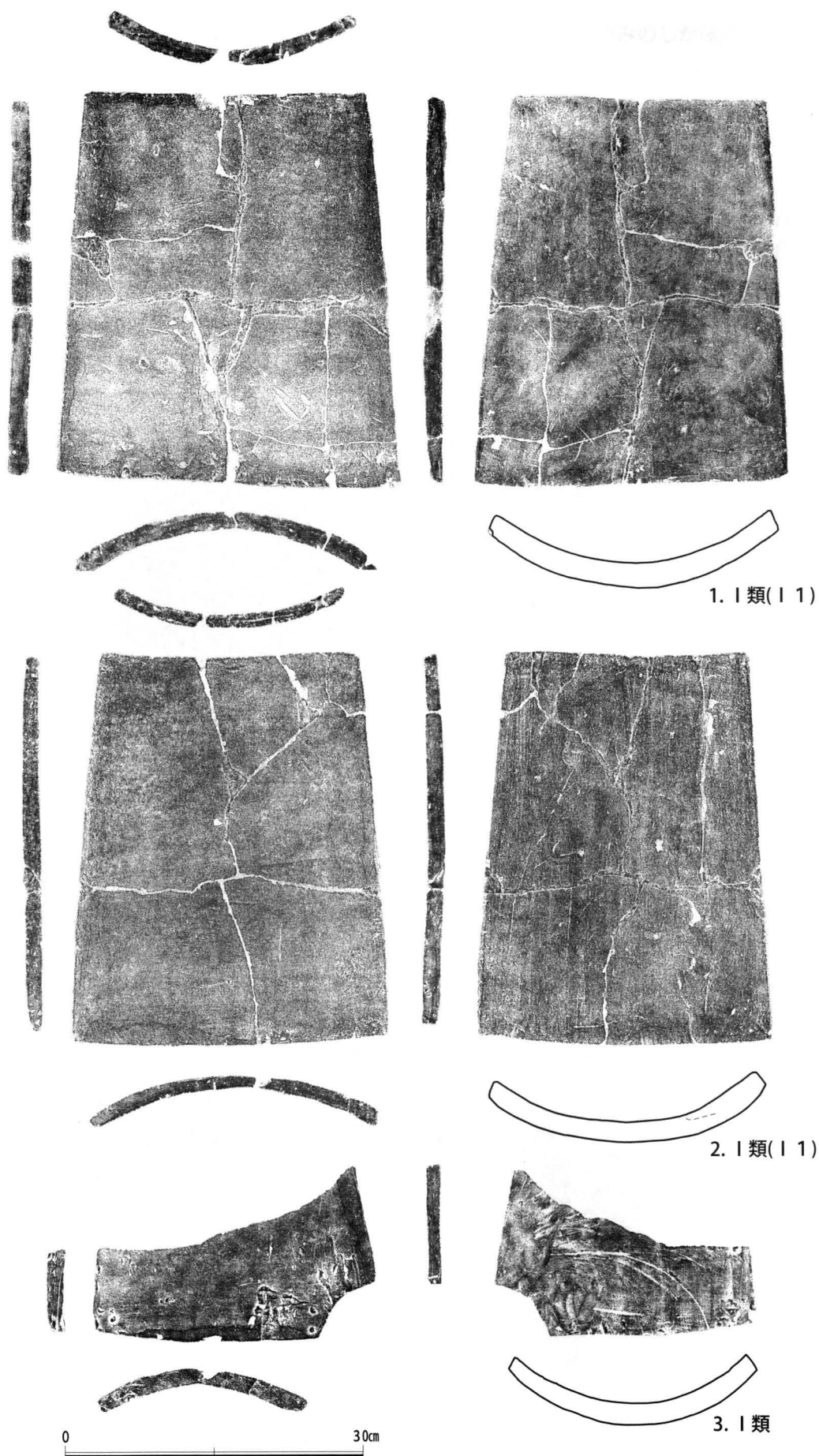


図7 平瓦 I類実測図 (1/6)

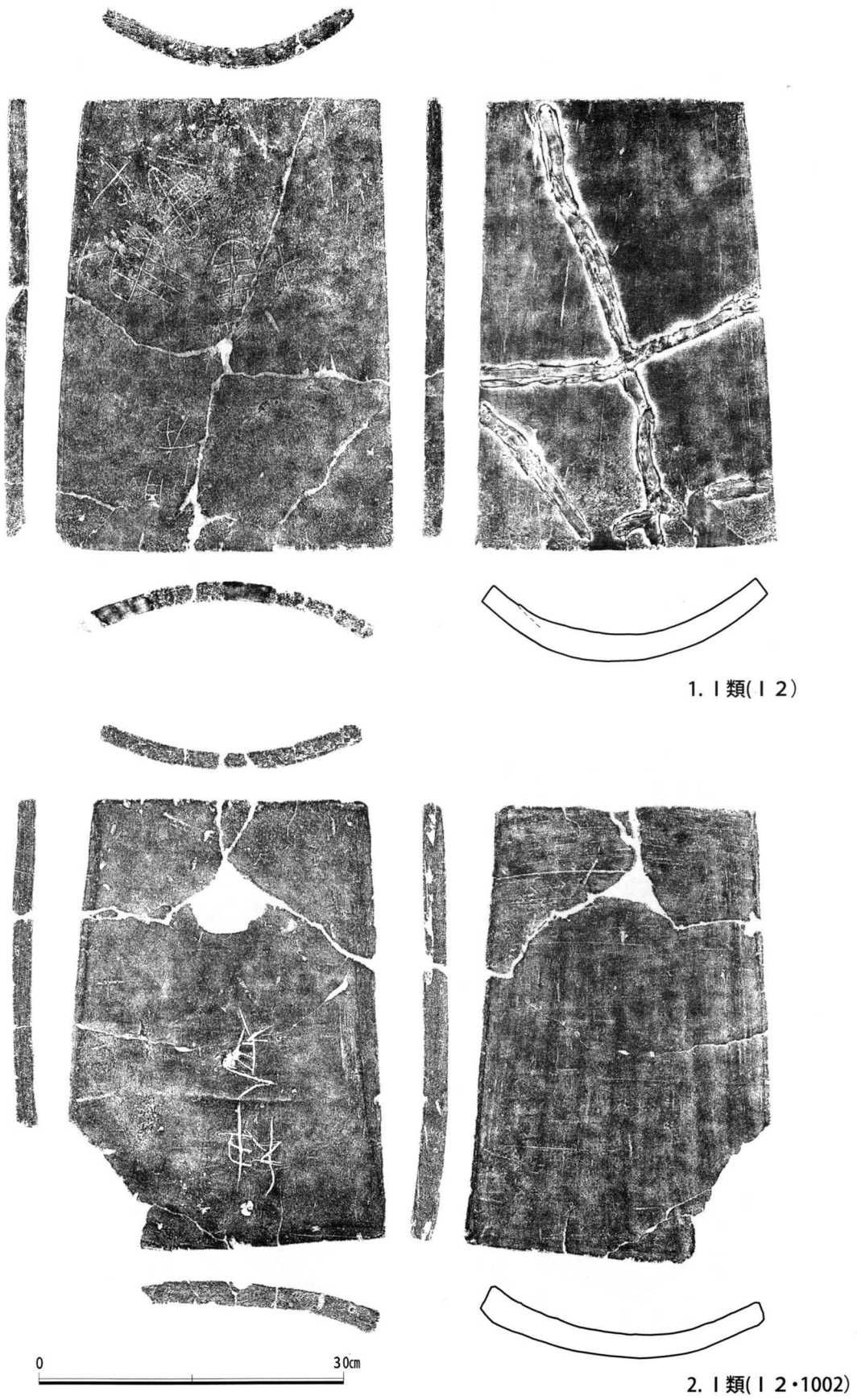


図 8 平瓦 I 類実測図 (1/6)

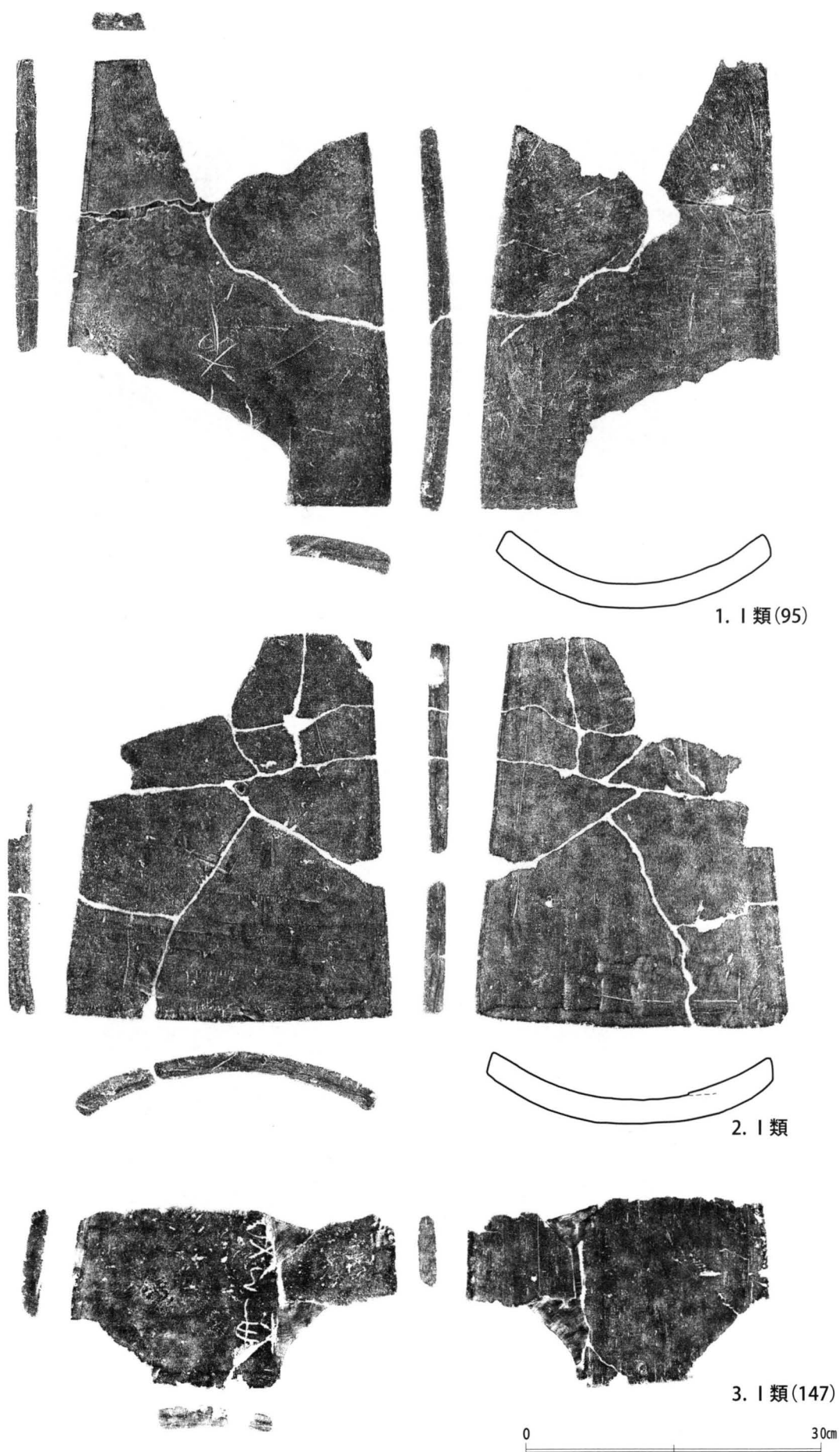


図9 平瓦 I 類実測図 (1/6)

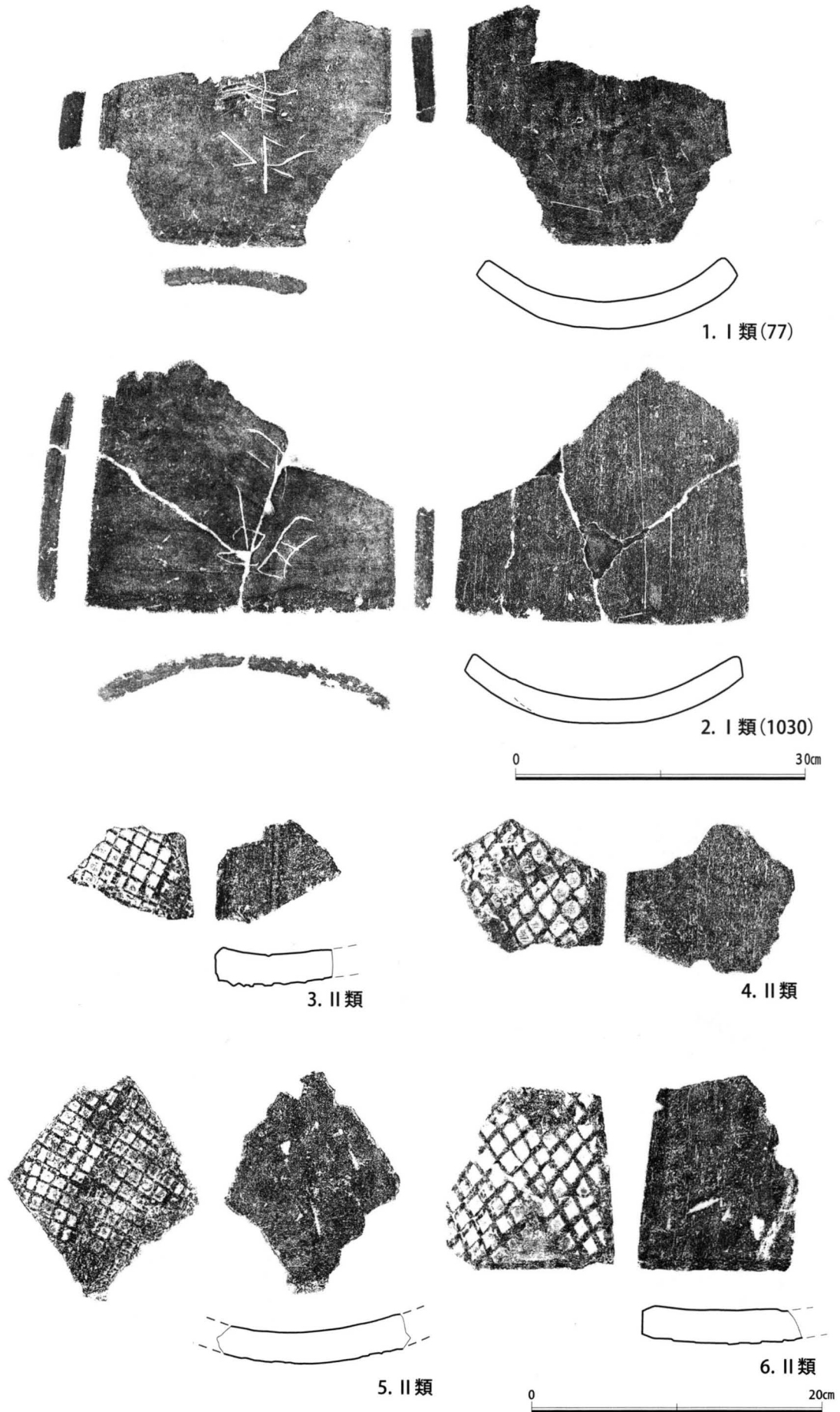


図10 平瓦I類・平瓦II類実測図 (1・2:1/6、3~6:1/4)

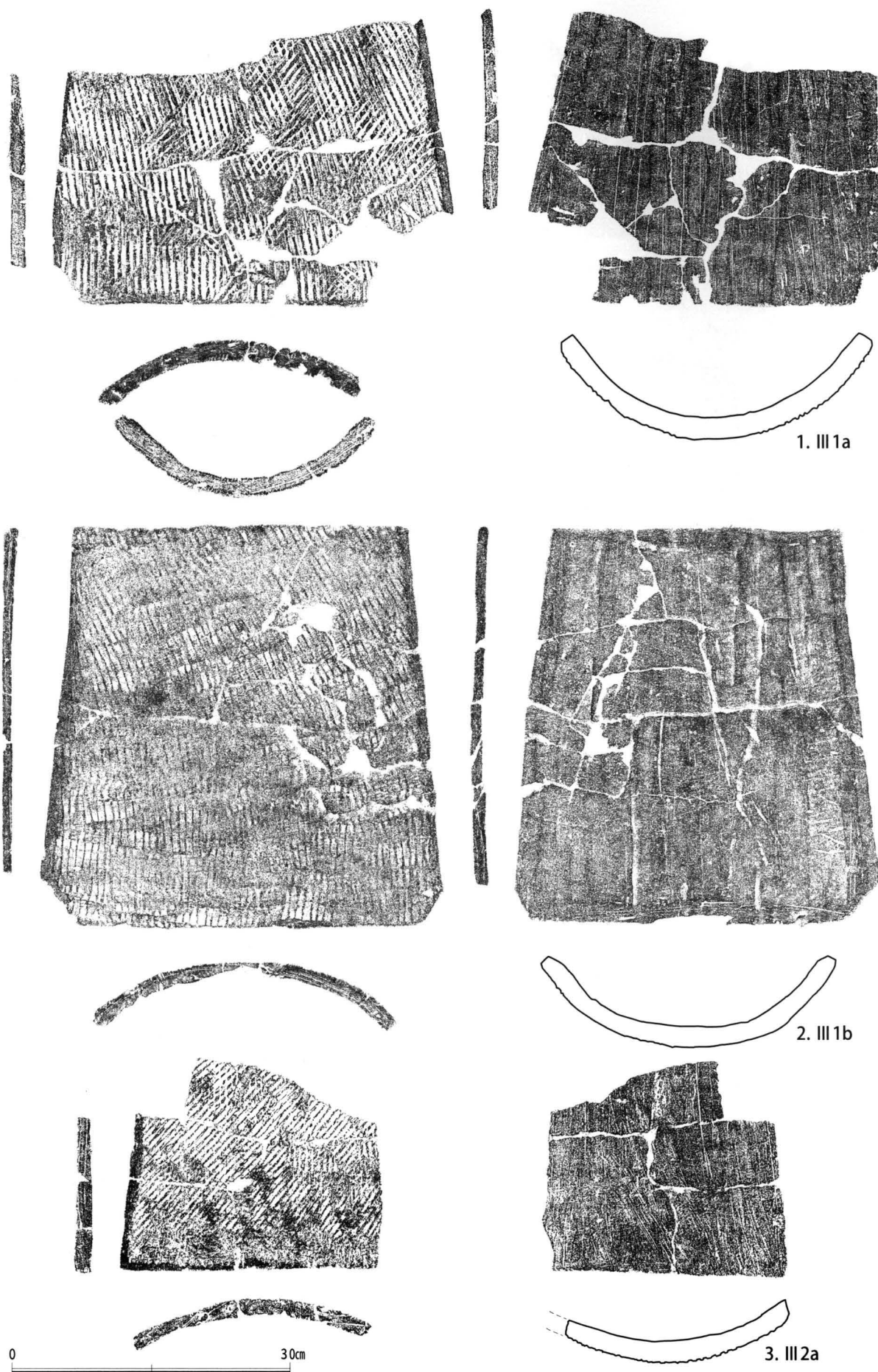


図 11 平瓦Ⅲ類実測図 (1/6)

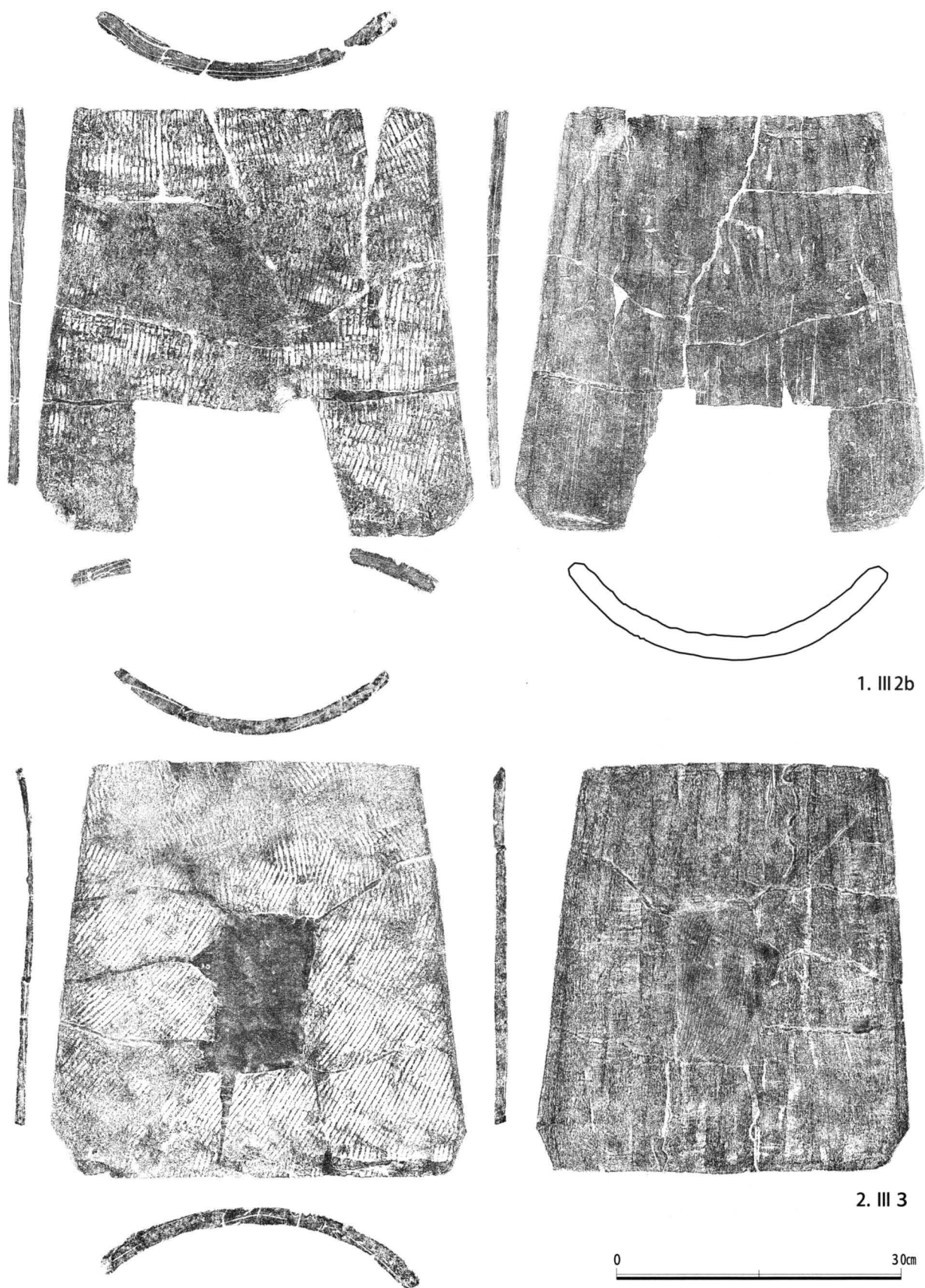


図 12 平瓦Ⅲ類実測図 (1/6)

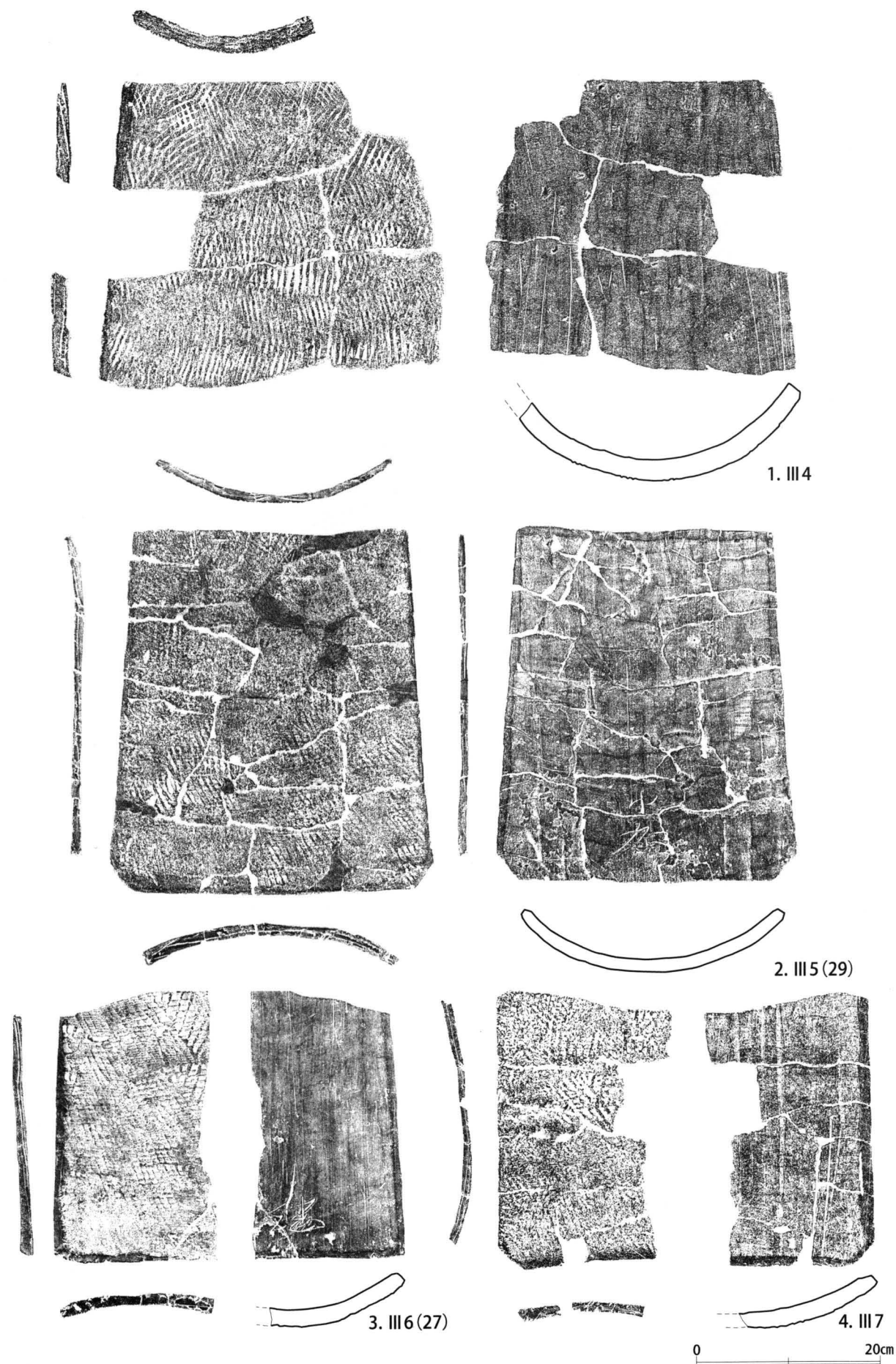


図 13 平瓦Ⅲ類実測図 (1/6)

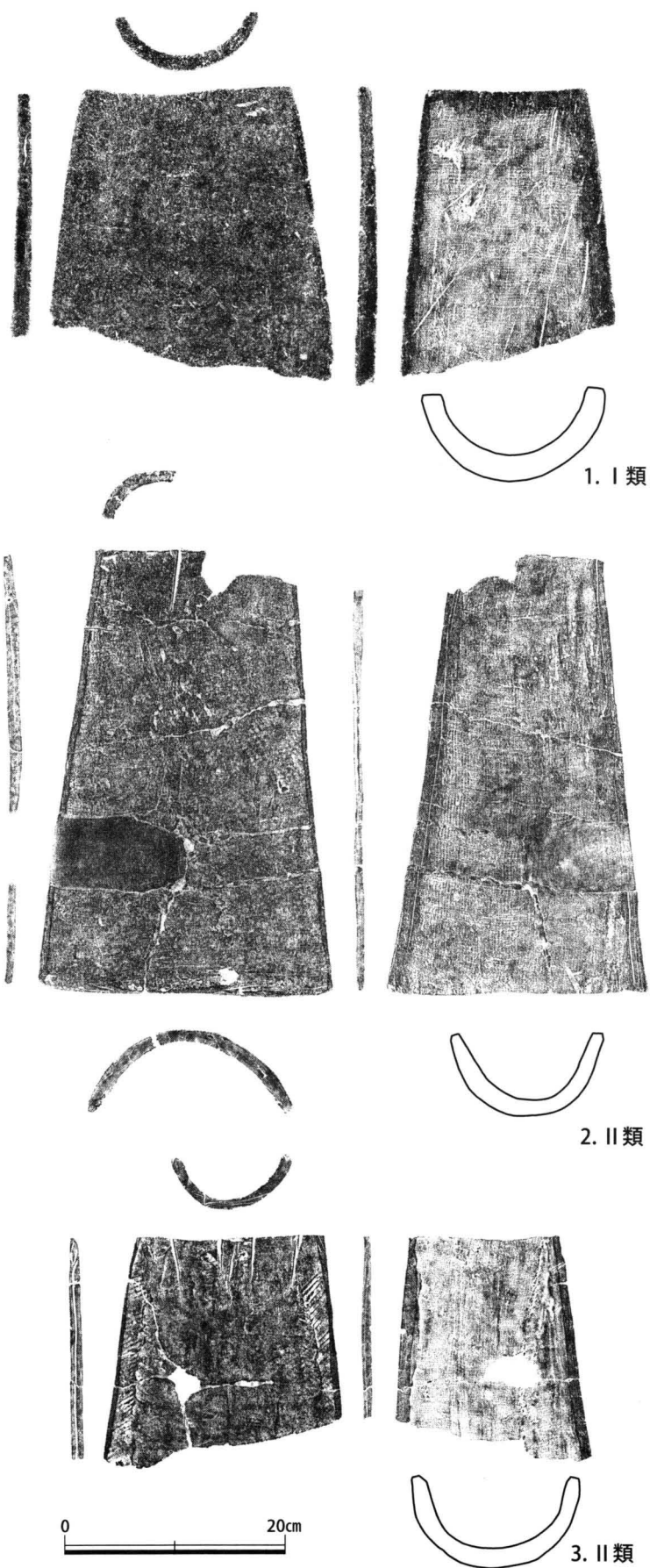


図 14 丸瓦 I 類・II 類実測図 (1/6)

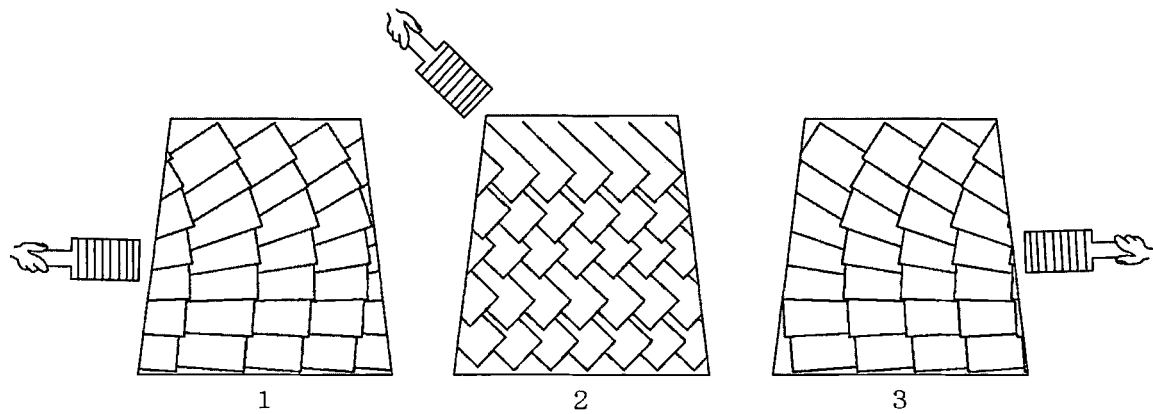


図 15 叩き方の模式図

Ⅲ 1	<div> 叩き板 A a</div> <div>重複 ⇒</div> <div> 叩き板 A a</div> <div>a段階</div>	<div> 叩き板 A b</div> <div> 叩き板 A b</div> <div>b段階</div>
Ⅲ 2	<div> 叩き板 B a</div> <div>重複 ⇒</div> <div> 叩き板 B a</div> <div>a段階</div>	<div> 叩き板 B b</div> <div> 叩き板 B b</div> <div>b段階</div>
Ⅲ 3		<div> 叩き板 C</div> <div>重複 ⇒</div> <div> 叩き板 C</div>
Ⅲ 4	<div> 叩き板 A a</div> <div>重複 ⇒</div> <div> 叩き板 B a</div> <div>a段階</div>	
Ⅲ 5・6	β	<div> 叩き板 D (Ⅲ 6 は叩き板 E が補足的に使用される)</div>

図 16 分類ごとの叩きしめ
(破線内は、補足叩き等で消されたもの)

	平瓦Ⅰ類	平瓦Ⅱ類	平瓦Ⅲ類	平瓦Ⅳ類	合計
重量 (g)	2,807,107	18,524	1,062,743	1,030	3,889,404
割合 (%)	72.17	0.48	27.32	0.03	100.00
偶数	2,119	15	827	2	2,963
割合 (%)	71.52	0.51	27.91	0.07	100.00

表1 平瓦の重量・偶数とその割合

	丸瓦Ⅰ類	丸瓦Ⅱ類	合計
重量 (g)	29,144	47,228	76,372
割合 (%)	38.16	61.84	100.00
偶数	46	65	111
割合 (%)	41.44	58.56	100.00

表2 丸瓦の重量・偶数とその割合

(清地 良太)

IV. 文字瓦

1. 文字瓦の分類

(1) はじめに

本章は、「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」と題したプロジェクトにおいて文部科学省科学技術研究費を基にし、一部を文部科学省学術フロンティア推進授業とも関わりながら龍角寺の文字瓦を中心とした文字瓦研究を行ってきた。とりわけ、龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦を再調査した。

この文字瓦班では2004年9月～2006年9月にかけて瓦自体の調査を行い、そのなかでも筆者は2005年4月以降を中心に文字瓦における文字を中心とした調査を行った。

これら調査の一部は先行して公表している。まず、平瓦Ⅲ（旧Ⅲ・Ⅳ）類における研究成果は『古代学研究所紀要』第一号¹に山路直充・清地良太・播摩尚子氏と共著という形で「龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土文字瓦の分析—平瓦Ⅲ類の中間報告—」と題した内の3章「平瓦Ⅲ類の文字」（以下「前々稿拙稿A」と略す）として公表している。

次いで、『古代学研究所紀要』第三号²において「龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦—平瓦Ⅱ類を中心に—」（以下「前稿拙稿B」と略す）として報告した。そこでは、第一に龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦の総数及び文字の種類を再調査の結果に基づいて提示した。第二に、もっとも出土点数が多い平瓦Ⅱ類の中でも最多数を占める「朝布」銘の文字を中心とした検討を行った。その結果、「朝布」という文字列を銘字した主な人は3人、その他に臨時の記銘者が3人は存在したと推定した。

さらに両者の成果をまとめ、五斗蒔瓦窯跡出土の事例以外の簡単な紹介も加えて総括報告したものが科研費の報告書における「龍角寺関連の文字瓦について³」（以下「拙稿C」と略す）である。

さらにこれらの成果を承けて、記銘された文字の内容を検討したものが「龍角寺関連文字瓦の釈読—文字から知られること展望—⁴」（拙稿D）である。そこで記銘された文字の多くは地名を示し、印旛沼東岸と根本名川流域に関係することを推測した。

上記に含まれる成果に加えて、本年度に新たに補足調査を行なったが、本稿は研究成果ということもあり、推測は避けることとする。拙稿A・Bを中心とした五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦調査の成果に基づき、瓦字体の編年差による類型の改編も考慮して再構成するものである。

このような龍角寺関係の文字瓦調査の射程は、下総龍角寺における造瓦組織究明のための礎を築くことにもなるし、地域史の重要な史料となると考えられる。今回は龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦に限って再編修正するものである。

(2) 五斗蒔瓦窯跡出土の文字瓦点数

五斗蒔瓦窯跡出土文字瓦については、はじめにで挙げた拙稿以前すでに石戸啓夫・小牧美知枝氏による『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗蒔瓦窯跡—栄町病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—⁵』（以下『報告書』と略す）かなり詳細に公表されている。この成果を踏まえつつ、出土点数（破片・完形とも1点と計数）の提示と一部釈文の訂正も行った。

『報告書』で取り上げられた文字瓦は計310点だが、平瓦Ⅱ類（現在Ⅰ類と分類）については定点による数量処理によって算出された枚数を提示している。本稿では文字の記銘率を問題とはしないので、基本的に提示する数値は枚数ではなく、実数としての破片点数であることを予めお断りしておく。

以下、前稿と重なることになるが、基本的なデータでもあるので表3として掲示しておく。表1の通り、千葉県印旛郡栄町教育委員会が所蔵する文字瓦総点数は1438点を数える。

形式		主な文字種	点数
平Ⅰ		朝布・神布・服止・水津・土・赤加真など	1407
平Ⅱ		□□□（禾カ）〈加刀利カ〉	1
平Ⅲ	旧平Ⅲ	生	1
	旧平Ⅳ	小加・玉作・玉・皮尔□・野	28
丸Ⅰ		皮止戸	1
*旧平Ⅴ類・丸Ⅱ類・軒丸平にはナシ			1438

表3 五斗時瓦窯出土文字瓦の文字種と点数

筆跡鑑定上の視点を採り入れた分析視角を中心に検討する。

さて、『報告書』で文字瓦として数えたのは「平瓦Ⅰ類（以下Ⅱ類）」1点・「平瓦Ⅱ類（以下Ⅰ類）」406点・「平瓦Ⅲ類」1点・「平瓦Ⅳ類（以下Ⅲ類に含む）」28点・「軒平瓦」1点・「丸瓦Ⅰ類」2点であるとする。

また、文字の分類・記載位置・記載率・出土割合・分類別組み合わせ頻度・各出土状況や、平瓦Ⅱ類に関しては文字と凸面調整の関係、厚さと凸面調整の関係、凹面の横位寛削りといった詳細なデータと考察が加えられている。

しかしながら『報告書』では、平瓦Ⅰ類については定点による数量処理の結果算定された枚数を呈示している。文字の記銘率を算出するために瓦としての枚数を推定しなければならない事情は理解できる。だが、文字の多様性からみてそれら1文字ずつの定点数は異なることや、残画が僅かな破片個体をどの定点へ当て嵌めてゆくかなどの問題も存しよう。本稿では、記銘率などに論及しないため、文字が完存する個体も破片個体も1点として計測することにする。その数には、計算による推定値という曖昧さを内包しないという客観的実数を呈示するという利点がある。

さて、以上のような点から文字瓦点数を呈示するにあたり再調査を行った概要を述べておこう。千葉県印旛郡栄町教育委員会が所蔵する平瓦Ⅰ類（旧Ⅱ類・文字瓦）の天箱には約1860点の瓦が保管されている。平瓦Ⅰ類以外の種類の瓦などと併せて約1900点を再調査した。もちろん、文字やそれと思しきものがない瓦を実見した点数は数倍に及ぶが、点数としては数えていない破片も含むので数を呈示することは出来ない。

文字瓦と分類されていた天箱内には、その他の種類の瓦や文字ではない傷などのみの瓦も多少混在している。なお『報告書』において、軒平瓦に「人（行人偏のような）」を挙げるが、傷と見なすべきなので文字瓦とは採らないことは拙稿Dで指摘したとおりである。

一方、拙稿Aでは平瓦Ⅲ類（『報告書』におけるⅢ類とⅣ類）の文字瓦点数を28点としたが、判読不詳の破片個体1点を追加し、計29点となった。さらに拙稿B・C・Dの後の再調査において「□〔神カ〕」を1点追加したので今回改めている。

結果、平瓦Ⅰ類の文字瓦点数は表3・4の通り1406点、全体の文字瓦の点数は表3に掲示したように1438点に上ることが明らかとなった。

現資料の調査項目としては以下のような項目をチェックした。

瓦の項目として、瓦の類型・凹凸面の調整・厚さ・色調・重量・残存しているものについては端字の項目として、字の残画の大きさ（縦×横）・字形や書体・筆順・筆圧筆圧（線の幅と深さ・粘土の動き）・想定される記銘工具の先端形状・筆勢や字面構成さらには運筆状況などである。

これらの項目を逐一掲示することは紙幅の都合もあり困難である。本稿では字形などの

(3) 平瓦Ⅰ類の文字瓦

形式・群		文字種	点数
平Ⅰ	朝グループ	朝布〈内「朝布・神布」1含む〉(完存8)	81
		朝□(布カ)・朝□・朝	236
		□(朝カ)布・□(朝カ)□カ)・□(朝カ)□・□(朝カ)	141
		月(朝カ)□(布カ)・月(朝カ)□・月(朝カ)	37
		月・□(月カ)布・□(月カ)□・□(月カ)	62
平Ⅰ	神グループ	神布・神□(布カ)・神□・神	34
		神戸布	2
		神負	1
		□(神カ)布・□(神カ)□・□(神カ)	13
		申(神カ)□(布カ)・申(神カ)□・□(申カ)	6
		ネ(神カ)・□(ネカ)布・□(ネカ)	8
平Ⅰ		布・□布・〈「布・□(加カ)」1含む〉	152
平Ⅰ		□□(布カ)・□(布カ)	127
平Ⅰ	服グループ	服止・〈「□(服カ)・服」1点含む〉	4
		服〈5点〉・月(服カ)・□(服カ)	11
		□(止カ)戸・□(戸カ)・〈□(止カ)1〉	8
平Ⅰ		入	1
平Ⅰ	赤グループ	赤久在・〈「赤久□(在カ)1点含む〉	2
		赤加真・〈「赤加□」1点含む〉	3
		赤加・〈「赤□(加カ)」2点含む〉	17
		赤・赤□・〈「赤・□」1点含む〉	18
		□(赤カ)加・□(赤カ)□(加カ)・□(赤カ)	7
平Ⅱ		□加・□□(加カ)・加〈5点〉・□(加カ)	9
平Ⅰ	阿グループ	阿加真	1
		加皮真・□(加カ)皮真・□(加カ)皮麻・加真・皮麻〈各1点〉	5
		□真・真〈5点〉・□(真カ)	9
		阿・〈「阿□・阿」1・「□□(阿カ)」1点含む〉	12
平Ⅰ		麻□〈1点〉・麻	10
平Ⅰ		□(麻カ)□(布カ)・〈「□(麻カ)」1点〉	3
平Ⅰ		水津・〈「水」1点含む〉	2
平Ⅰ		□□女瓦四百五十・〈「百」1点含む〉	2
平Ⅰ		土・〈「□(土カ)1・「土か主」1点含む〉	5
平Ⅰ		□(中カ)	1
平Ⅰ		記号のみのもの	13
平Ⅰ		判読不詳〈3字1・2字32・1字107〉	140
平Ⅰ		残画1のみ	224
平瓦Ⅰ総計			1407

表4 平瓦Ⅰ類の文字瓦

掲示した表4の通り、平瓦Ⅰ類の文字瓦は総数1407点に上るが、文字や記号として判別可能なのは1043点となる。前述のように瓦の破片点数であり、枚数としての数を勘定した数ではない。掲出した文字の中でも字形的に完存しているものはごく僅かで、例えば「朝布」の文字列として2字ともに完存する個体は8点のみである。その他の文字列でも「□(残画があるが判読不詳)」としたものが多いことから諒解されよう。

記銘位置については、「朝」の1点を除いてすべて凸面に銘字されている。また、数点を除くほとんどが広端縁付近に記されている。

銘字された内容は、表4に示したごとくいくつかのグルーピングが可能である。「朝布」を完存文字列とする〈朝グループ〉、「神(戸)布」を完存文字列とする〈神グループ〉、「服止(戸)」を示す〈服

グループ〉、「赤」を先頭に配する〈赤グループ〉、「阿」を先頭に配する〈阿グループ〉の5群である。

各グループや「朝布」「神布」の類型と記銘者の推定などの検討は章を改めて述べる。ここでは少数の事例やグルーピングする際に多少注意した例を見ておく。

まず、東野治之⁷氏が「阿真カ」と想定された個体について（図版は拙稿Bを参照）、明らかに文字の右側にある側縁を意識して文字を納めているが、「阿真」を記そうとはしていない。残画の字形などからは一字目は「若・左」など、2字目は「奈」などを想定したが、龍角寺関連文字瓦の例において類例を見ないこともあり、本稿においても、釈読は保留として判読不詳とした。

また、拙稿Bにおいて「神戸布」と釈読した「戸」字について、『報告書』では「乃」、その他の諸論考では「𠂔」として読まれてきた。しかしながら、市大樹氏の見解を踏まえて「戸」としたことは記述の通りである。

これにより、五斗蒔瓦窯跡出土丸瓦Ⅰ類の凸面に記銘され、「皮止𠂔」とされていた文字や、龍角寺所蔵と考えられる「服止𠂔」についても同前としてそれぞれ「皮止戸」「服止戸」と釈読するべきだとした。本稿でもその見解に則って釈読している。

また、『報告書』で「神真」とされている例は、これも拙稿Bにおいて「神負」と釈読すべきとし、本稿でも継承する。

『報告書』では採り上げられておらず、拙稿Bにおいて新たに「百」を追加している。これは、龍角寺関連文字瓦中では珍しく多数の文字が記名された「□□女瓦四百五十」と記銘者が同一であると想定した。一文字のみであるが、「百」字を記銘したときの方が、より書字行為の練達が見られるとの推測も行なった。

拙稿Bにおいて「久」が「文」の草体にも見えるとして留保した「赤久在」として釈読した個体については、依然として成案がない。

釈読における留意点は以上の通りであるが、五斗蒔瓦窯跡出土文字瓦の中でもこの平瓦Ⅰ類における事例は、同じ表示内容が異なる表記で記されており音訓表記資料としても重要な位置を占めよう。

しかしながら、文字種の多さと比べて異なる文字列間において相互に重複する文字は多くない。このことは、異なった文字列同士の比較を困難にしている。ただし、表している内容については、前述のようにいくつかのグループに纏められ、いずれも地名を表していると思われる。

（４）平瓦Ⅰ類の文字類型化の実践 1

①「朝布」銘の文字

平瓦Ⅰ類の文字瓦点数は、表3・4に掲示したように拙稿B・Cで検討した平瓦Ⅲ類のそれよりも大幅に多いことや、文字種も多様なことから、まず本節では最も代表的な「朝布」を例に採った文字の分析を再掲しておきたい。

すでに『報告書』やその他論考において類型化がなされているが、先行研究にはいくつかの問題点が見受けられた。

1点目として、文字の特徴の違いを分類指標としているが、指標数をそのまま示す類型法では数が多くなり過ぎる上に煩雑である。これは、記銘者数の想定にも結びつけられないという難点がある。

2点目として、類型が記銘者に置き換えられていないので、類型が単なる類型止まりである。このような類型法では同一人における筆跡の個人内変動までも別ものと捉えてしまう危険性を孕んでいる。記名者それぞれが顕示する特徴を掴み記名者＝類型となし得れば、1点目に挙げた類型の表示形式が煩雑な点については解消されるのではなかろうか。

3 点目として、類型化を字形に依存する部分は必要な見方ではあるが、形態的に首肯できない分け方も存することが挙げられる。特に「布」の指標は客観的根拠が乏しく、明確な指標たり得ていない。ただ、単純に字形的な分類を行った場合、記名者の文字認識の高まりや書字行為の練達による変化が考慮されなくなる恐れもある。

また、筆順を中心に文字の習熟度を検討した西崎亨氏の見解⁹⁾も、筆順という指標での類型化の一実践例だが、筆順の違いすべてをそれぞれの類型とすることに疑問が存する。なぜなら、現在の私たちのようにある程度個人的に筆順が固定化されている書き手であっても、時に筆順が異なることは多々あることは諒解されることではなかろうか。であるならば、その筆順が個人内変動の範囲内かどうかも見極めなければならないだろう。単純に、筆順の多様性や異体字の存在を以てして、文字の理解度の高低を論じることにも慎重である必要があろう。

以上のことから、やはり類型化を行う際には複数の分析視角とそれぞれの指標が必要とされることは明らかだろう。そして、欠損がある個体に関しても複数の共通性を有するならば分類可能ともなるだろう。

ここにおいて字形や運筆などに関する分析視角が有効となってくるが、ただ、筆跡鑑定の手法を採り入れ、字画形態や運筆状況などを詳細に検討するのは、字形が似ている・字が大きい小さいといった印象的・主観的な根拠ではなく、なるべく具体的・客観的に記録者を判断する工具としてである。そして、そのような分析手法が文字瓦に限らず出土文字史料全般に必要なと思われる。その視点から一部刪定した「朝布」の文字自体の特徴を抽出するための着眼点は以下のとおりである。

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 「朝」 1・2 画目の筆順 | →「一」・「×一」・「×ノ」・「ノ」型 |
| 2 「日」の形 | →特に「冂」部分により特徴が表出する |
| 3 「日」の形 2 | →「朝」の左旁「日」と「十」部分の位置関係 |
| 4 「日」の止め位置 | →通常・出るもの・「十」より下に伸びるもの |
| 5 「日」の画数 | →同数・1 画分の増減がある |
| 6 「十」の起筆位置 | →通常・短く「丁」・長くて「甲」などの型 |
| 7 「月」の形 | →「日」の「冂」に一部対応関係 |
| 8 「月」の撥ね | →撥ね・止め・払う・軽く抜く |
| 9 「朝」字の字体の大きさ | →面積により大・中・小〈練達度とも関連〉 |
| 10 「布」一・二画目の筆順 | →「朝」字とほとんど対応関係 |
| 11 「巾」の一画目の始筆 | →「ノ」から連続による「丨」の有無、「ノ」の終筆 |
| 12 「巾」の二画目の字画形態 | →右上りに切れ上がっていたり、「フ」型など特徴的 |
| 13 「布」字の字形 | →□・細く縦長・右側に傾く |
| 14 「布」字の字体の大きさ | →「朝」字と同じ基準で大・中・小 |
| 15 運筆 | →楷書・連続運筆あるものは「行書的」 |
| 16 筆法 | →篋の粘土を削る面の方向性 |
| 17 想定される記名工具 | →棒状や偏・中鋒で平刀・メス状など |
| 18 備考 | →記載位置、加えて端部からの距離 |

この他、「月」の画数を項目として挙げていたが、増画する例が 2 点程しかないので除外した。

以上をもとに分類したものを表 5 として提示する。

以下、4 類型に分類した基準と上記した分析視角の内、特徴的に記録者の個性が発露しており分類の指標となる点を解説する。〈括弧内の数字は、拙稿 B を改め、ウェブ上に公開するデータと同じ

類型	注記番号 (括弧内は推測による)
1 (一)	0030・0031・0033・0034・0035・0086・0087・0114・0209・0210・0211・ 0212・0213・0414・0415・0418・0419・0421・0422・0424・0660・0669・ 0680・0682・0683・0684・0718・0996・1037・1038・1043・1044・1046・ 1047・1050・1051・1054・1055・1061 / 0076・0083・0115・0221・0261・ 0423・0672・0673 (0043・0084・0167・0411・0413・0417・0429・0430・ 0436・0664・0668・0671・0674・0675・0676・0677・0685・0691・0758・ 0833・0835・0836・0841・0849・0993・0994・0997・0998・1045・1056・ 1057・1171)
2 (×ノ)	0036・0070・0071・0074・0075・0124・0125・0174・0201・0202・0205・ 0206・0239・0240・0244・0245・0268・0271・0279・0350・0351・0352・ 0355・0356・0360・0362・0650・0924・0925・0926・0927・0982・1031・ 1039・1048・1058・1067・1183 / 0037・0298 (0073・0096・0123・0139・ 0166・0168・0171・0176・0267・0275・0309・0334・0337・0347・0357・ 0358・0359・1062 / 0132・0303)
3 (ノ)	0039・0041・0042・0046・0047・0049・0072・0116・0262・0266・1060 (0265・ 0272・0273・0274・0329・0353・0354・0361)
4 (一)	0032・0038・0050・0085・0088・0089・0090・0092・0121・0216・0220・ 0416・0446・0487・0492・0663 / 0091・0093・0094・0107・0118・0119・ 0120・0122・0133・0134・0135・0137・0190・0191・0192・0228・0230・ 0247・0250・0251・0253・0254・0399・0437・0438・0439・0440・0444・ 0445・0447・0448・0482・0484・0485・0490・0491・0494・0495・0497・ 0500・0501・0507・0697・0698・0702・0703・0706・0710・0711・0715・ 0716・0719・0720・0721・0723・0724・0725・0728・0730・0929・0930・ 0934・0935・0938・1170・1172 / 0117・0140・0193・0194・0217・0222・ 0225・0248・0249・0252・0443・0483・0488・0493・0496・0498・0499・ 0559・0705・0713・0714・0773・0848・0928・0931・0932・0933・0936・ 1035・1036 / 0226・0704・0708・0729・1049・1052・1053・1059 (0051・ 0061・0246・0420・0442・0486・0626・0662・0665・0678・0709・0712・ 0717・0731・0782・0798・0818・0834・1173 / 0428・0670・0795)
その他	0048・0204・0466・0477 (0644) / 0207・0999 (0177)
欠損未詳	0163・0165・0169・0170・0172・0173・0263・0264・0290・0291・0292・ 0293・0301・0310・0340・0341・0344・0401・0403・0412・0431・0489・ 0520・0524・0532・0533・0534・0535・0536・0539・0540・0546・0548・ 0552・0557・0560・0562・0563・0590・0593・0624・0641・0659・0666・ 0681・0690・0701・0732・0733・0742・0743・0746・0750・0751・0752・ 0753・0755・0756・0757・0761・0762・0763・0767・0768・0770・0771・ 0779・0783・0786・0787・0799・0803・0804・0817・0837・0838・0839・1209

表5 「朝」字類型別一覧

〈調査票番号を示す〉

・第1類型 (1型)

：筆順が横画「一」から始まるものである。筆順が間違いなく判明する事例50点の内、斜画「ノ」から始まるのは1点〈0076〉のみなので、個人内変動の範囲内に収まると見なせる。したがって、

基本的筆順は「一ノ | ㄣ ——— | ・ | ㄣ ———」となる。スラッシュより前の個体が基本事例となるが、記銘者の特徴は前期後期の2点でやや異なる。ただし、同一記名者と推断できる両期に共通する特徴を挙げておこう。

- 1 「日」部分の横画数は基本的に通常通りである。判明する個体58点の内、56点が該当し、推測される4点を加えてみてもいずれも該当する。横画を1本増画する例〈0038〉、減画する例〈0209〉はそれぞれ1点のみであり、個人内変動の範囲内である。
- 2 書体は楷書である。連続運筆が見られるのは、推測した個体1点〈0167〉と連続運筆かと推測したが終筆部の乱れとも取れる1点〈0672〉のみである。この記銘者はある程度書字行為が慣れてきても続け字にはしないと言えよう。
- 3 通常7・8画目に当たる「十」の筆順が同一である。判明する58点中、縦画を最後に書くのは56点を占める。横画が最後になるのは2点のみ〈0115・0221〉であるが、ともに短い上に、筆勢が悪い。さらに「布」字の「ㄣ」が丸くなっており、0221に関しては余計な1画が加えられている。これらのことから、おそらく第一類型を模倣したものと捉え、表5においてスラッシュより後に区別して示した。
- 4 「月」の2画目「ㄣ」の終筆部は、判明する30点すべてが撥ねない。下方向に軽く払うもしくは止めている。

次に、前期から後期への変化を示す。ただしあくまでも目安であり、全く異なるものを結びつけたのではなく、過渡的段階も示しうるのが煩瑣なために両期に分類したまでである。

前期では、数は多くないがおおよそ他の文字を模倣したと考えられる点の特徴である。運筆状況としては、線がふらついたり筆勢が良くないといった特徴が現れている。字画構成上の特徴は、まず「日」の筆画がそれぞれ離れている点が挙げられる。このように模倣の特徴が現れ、字体も大きめである。具体的には残画縦×横が64cm²(基準8×8cm)以上の個体が多い。また、「日」の下の「十」はほぼ定位置から起筆されており、次第にやや日の真ん中の筆画に近づくように上に出てくるようになる。「日」の「ㄣ」の終筆部は、およそ定位置かやや下に出ている例が相半ばする。

この前期の模倣的な字形から、後期では次第に各筆画が連結して安定的となる。「日」の「ㄣ」の終筆部が、次第に下に出てくる特徴を有し、「十」の下にまで伸びる例が大半となる。また、3点ほど〈0038・0221・1051〉ではあるが、「十」の縦画が「日」の上にまで達し「甲」のようになる例もある。これらは、字形的に第4類型の祖形となるものと考えられる。この事例が後述する第4類型と異なると判別しうるのは、上述のような「十」の筆順に加え、縦画が上に伸びていようとなかろうと、いずれも横画の下にそれなりの長さをもって書かれている点にある。

・第2類型（2型）

：「朝」の1・2画目が「×」型で、「ノ」から書き始められる筆順が主たる特徴の類型である。記銘者はある程度高い識字率を有していたと考えられ、書字行為の初期段階と見られる個体も字形的にそれなりに整っている。

文字の大きさは中から大の範囲内で、こぢんまりと銘字する性格ではないことが窺われる。その上で、筆勢が伸びやかになってゆき、行書的な連続運筆が現れるようになる。この行書的な流麗な運筆が特徴であり、書字行為の練達もさることながら、文字をきちんと認識した上で記していると想定される。

字形的な特徴は、左右の傍のバランスが整っていることが挙げられる。次いで、「日」部分の「ㄣ」が曲線的、もしくは逆「く」字型で全体として菱形の形態を呈するものが大部分である。同じく転

折後の終筆部は、ほぼ横画の位置で止められており、やや下に伸びるものもあるが運筆の流れの中ではみ出たというものである。

また、下の「十」の縦画の起筆位置もほぼ正しい。1点のみ〈0037〉「甲」のようになるものがあるが、後述の画数などの視点を合わせても特殊な例と言える。

細かい筆画的な特徴として、まず「日」の横画数がほぼ正しいという点が挙げられる。画数が判明する41点の内、35点が正しく、推測される6点のいずれも正しいと見られる。

1画増画する個体は4点〈0036・0124・1031・1058〉、2画増画する個体が1点〈0037〉、1画減画される個体が1点〈0075〉である。この内、0036は「日」の「冫」部の横画が分離してしまった初期段階の銘字と見られる他、0075は下欠損により下の「十」の横画が欠損した可能性があり、だとすれば画数は正しいものとなる。

4型の筆画的特徴に数えられるもう一方は、「月」の「冫」の終筆部が撥ねる点である。

終筆部が残る21点いずれも撥ねている他、推測される5点の内3点が撥ねかと想定される。他の類型で、偶発的に撥ねるのは異なり、明確な運筆の意図のもとで撥ねていると言えるだろう。

対応する「布」字について。筆順は基本的に「ノ\フ|」となり、左払いと「巾」部へは連続運筆とならない。識字度合いが高まることにより、「巾」の左側縦画が見られるようになることも2型の刮目すべき特徴である。

・第3類型（3型）

：この3型に分類されるのは、数が少なく、いずれかの類型の字がそれぞれイレギュラーとなっている可能性も想定されよう。だが、特徴や字形がやや異なり、少なくとも2人の模倣を主とした記名者の存在が内包されている可能性もある。

1型の筆順が変動したと見られるものが0039・0042・0047などである。

ただし、「日」の下の「十」が「丁」字形になる個体が4点〈0041・0046・0262・1060〉あり、他にはその他としたものに2点〈0204・0207〉、2型に1点〈0362〉存す。「日」の横画を1画減画する例も2点〈0042・0046〉ある。1型や2型の書字行為が練達する以前、つまり字形が安定する前でイレギュラーを現出しやすい時期に書かれたものが多数を占める可能性が考えられる。

ただし、「月」の「冫」終筆部が撥ねる例があったり、連続運筆が存在する点、「日」が菱形を呈するものなど、特徴的には多くが2型の記名初期段階のものと考えられる。

以上のような特性から、3型は2型を模倣した一時的な記名者によるものと捉えられよう。だが、2型に含めてしまえるかといえ、そうとも言い切れない。表5に掲示した事例の内、0041・0046・0049・0116など何点かはやはり2型とは別人によると考えてよいものがある。0116は3型の中で唯一「布」字が残存するものでもあるが、やはり「ノ」から書き始められており、本事例がイレギュラーではないことを窺わせる。しかしながら、これを一つの類型とするか、その他とした分類の中での1区分程度にすべきかは数の多少の問題となるだけだろう。

・第4類型（4型）

：「朝」の1・2画目の「十」が1型と同じく「一」から始まるものである。筆順が判明する91点すべてが該当する。この他、推測される個体29点の内8点は「布」が「一」から始まっており該当例に推定される。字形的に見ても恐らく「一」と見られるものが大半を占めるが、3点のみ〈0428・0670・0795〉斜画により「×」の形を呈する事例があるが、完存していない推測例であることも含めて度外視できる。

書体については136点すべてが楷書である。残りの悪い3点の内1点のみ〈0559〉、連続運筆

の可能性を想定したが、「日」の横画が斜めとなっているだけで、行書的な例と言うことはできない。つまり、4型は行書的な運筆をしない記名者として大過ない。

字形的には、「月」の「冂」の終筆部が止めか軽く払うという事例が大半であることが共通的特徴である。終筆部が判明する50点の内、1点のみ〈0560〉が撥ねている。この事例は「月」部のみ残り、右側に残画がないことから「服」の可能性を排除して「朝カ」としたもので、積極的に取り上げられるものではない。

また、「日」の横画を増画することも基本的な特徴といえる。画数が判明する96点の内、横画数が正しいのは13点のみで、2画増画する例も〈0133〉のみである。ただし、1049・1052・1053の3点は、字形的に下の「十」を省画したものと捉えられるので、4型はほぼ増画する特徴を有すると言って良いだろう。

同様に、「日」の転折部「ㄣ」の終筆部の位置に特徴がある。下の横画とほぼ同じ位置で止まる例は残画の1点のみ〈0038〉である。以外の103点は、いずれも横画よりも下、もしくは下の「十」の位置で止まるかそれよりも下に伸びて止まる形をとる。

加えて、下の「十」の縦画が「日」の横画を突き抜けたり（抜型とする）、「ㄣ」部の横画に届くもの（甲型とする）も多い。「十」の起筆位置が判明するのは108点あるが、ほぼ「日」の下から書き始められるのはわずかに2点〈0032・0216〉に過ぎない。むしろ、「ㄣ」の上から起筆される個体も4点〈0705・0711・0928・1059〉存在する。また、起筆位置が欠損のため特定できないが、明らかに抜型か甲型になるものが11点である。

1型でも述べたが、下の部分の「十」の筆順も分類基準となる。筆順が判明する80点の内、最後が縦画になるのは8点のみである。この内、1049・1052・1053の3点は上述のように「十」の横画を省略したものとみられるので除外する。また、0032については縦画の位置から欠損しているので、慎重に扱うべきものである。さらに、0088・0416・0670は1型かもしくはその模倣の可能性が考えられるが、字形的に4型としたもので判定は微妙である。残る1点〈0216〉は、運筆状況も悪い上に字体が定まっていないことから、1型を4型の記名者が模倣した際に筆順もそれに倣っている（偶発的要因が強いと思われるが）事例と見なせる。

さて、表5においてはスラッシュにより4区分したが、前期・中期・後期・特殊事例というおおよその分類を示した。共通する特徴が時期によりやや変化するので、以下、時期毎に字形的特徴を簡単に説明する。

〔前期〕主に1型の後期と字形的に相似して分類しにくいものである。おおむね、上述のように1型の後期を模倣しているため、「日」は両縦画が「十」の横画と接する「且」字の形を示すのである。しかし、筆勢が強まり運筆状況が改善される、つまり書字行為の練達度が高まると、「日」の右側だけがやや長さを保ち、左側の縦画は横画のやや下までのびる程度の例が多くなる。「月」は「冂」がしっかり曲がるものが多く、それ程左右の傍の大小バランスに差はない。

また、「布」字が残存する例も参照するならば、1画目が「一」という対応関係は上記して注意した0216以外すべて対応する。おそらく字画構成を理解していないと思われるが、2画目の縦画と「巾」の1画目の縦画を省画して連続運筆で「冂」へとなる。行書的というよりも「Ⅱ」のような字形と認識していると看取される。

〔中期〕運筆状況はこなれて、文字の大きさも中くらい（縦残画×横残画が55～64cm未満）の事例が多数を占める。「日」は再び「且」字に近くなるが、1型の「且」字に近くなる後期段階のそれと比較すると、「十」の筆順と起筆位置、それに横画より下にほとんど縦画が伸びていな

いなどの特徴から差異を見出せる。

また、「月」がやや小ぶりになりつつあり、転折部も 2 段階に曲がったり曲線的に曲がるようになってくる。対応する「布」字については、2 画目の斜画が左に払われたり止められたりするが、いずれも「巾」への連続運筆ではなくなる。

[後期] 中期の特徴がそのまま進行するが、中期との特徴においては出入があり、個人内変動の範疇で括られるとも言える。ある程度後期に多く見られるようになる特徴は、「且」字型となった「日」の両縦画が下の「十」の横画よりも下に伸びるようになる。その「十」の起筆位置も甲型であり、上述のように一部さらに上から起筆される例も見えるようになる。

「月」は右側が丸みを帯び、半月のような形になる。その上小型化し上付き気味になり、左右のバランスも大きく異なるようになる。

「布」字については中期段階と同じで変化はない。

ただし、この時期と見られる字体ながら運筆状況が悪いものや字画構成の歪みのあるものが見られるようになる。これは、4 型の文字をさらに模倣して銘字したレアケースも存在した、つまり臨時の記銘者も存在したことを窺わせる。

このように、4 型は通常の「朝」の字体から大きくかけ離れている特徴を有するが、書字行為の練達が進むにつれて運筆がしっかりしてくる。4 型の記銘者にとっては、その字形こそが「朝」字と認識したものと考えられる。これは、古代人の文字認識における貴重なかつ興味深い事例であるが、本稿の趣旨から外れるので注意を喚起するのみとしたい。

・その他

：スラッシュよりも前の事例はいずれも特殊な字形で分類不能である。「朝」字と判明するものの完存していないことから評価しかねる。

加えて 0644 は、平瓦 I 類の中でも唯一凹面に記銘されるもので特例的である。

スラッシュより後の 3 点は、いずれも「朝」字の 1・2 画目の筆画が「×」となるが、恐らく 1 型か 2 型のイレギュラーと捉えられる。0207 は 2 型の（3 型の項で触れたように、下の「十」が「丁」字形を呈する）、0999 は 1 型の個人内変動による事例と考えられるが、保留としてその他に分類した。

②「朝布」を銘字した人々

前節において「朝」字の類型化を行なったが、表 5 から知られるように 1・2・4 型の記名者が中心的な記名者と言えるのではなかろうか。だが、3 型の項や各項でも言及したように、それぞれの種類の文字の模倣と見られる文字が存在する。そのことは、各記名者の書字行為が練達していった結果、ある程度字形が固まった頃の字形であるのに、細かな筆画・字画構成や筆勢といった点において異なっていることから看取できる。模倣者は複数人が考えられるが、それぞれの字形を習得する前に別の字形を模倣したという可能性を否定できない。しかしながら、それぞれ別個に模倣し、書字行為が練達することなく終わる、つまり臨時に記銘していると想定する方が穏当だろう。

以上のような想定に大過なければ、まず、3 型の記名者を 1 人として数えられる。また、1 型のやや特殊な事例、「朝」字下の「十」の横画が短く「布」字の「冫」の転折が不自然に丸いものなどが模倣者の 1 人として挙げられる。4 型においても、記銘後期段階での筆画や筆勢が乱れているものが存在することから 1 人は想定しうる。

前節での検討結果を踏まえて記銘者の変遷を推測してみる。

1 型は長い間記銘していたものと考えられ、文字も模倣していたレベルから、ある程度運筆状況が

改善されていくが、字形はあまり固定化されていないようである。各筆画がそれぞれ離れ気味でバランスも悪かったものが、次第にまとまってくるといった変化が窺える。それに伴い、「日」字の縦画と「十」との関係が変動しており、「且」字形になるいくつかの事例も見られるようになる。この字形を祖形として、4型の記名者が模倣したと考えられる。字形的にかなり似通っているが、それぞれが別の記銘者であることは前述の通りである。

このように4型は1型の字形に由来するが、残存点数からいって最多であり、恐らくその後最終段階まで記銘を続けていると考えられる。字形の変化の流れから見て、1型の文字を模倣しつつ4型の書字行為が行われ始めたものと見なせよう。

2型も数こそ多くはないが、前述のように「朝」字1・2画目の「十」の筆順が「ノ→一」となることが大きな特徴である。「月」部の撥ねが多く見られることや、次第に運筆が流麗となり連続運筆が現れてくるようになる特徴を有していることから窺われるように、文字を理解して模倣していると見なされる段階であり、書字行為のかかなりの練達を看取しうる。このことについて短期間で集中的に書いて熟達したものか、ある程度の期間をもって練達していったものかは判断しかねる。

ただし、端縁（ほとんど広端であると言ってよいが、1点のみ〈212〉狭端縁付近）から記銘位置の上端部までの距離がほぼ1.5～4cm以内である。具体的数値として、24点が端縁と文字上端が判明し、その内4cm以上の間隔が空くのは3点のみである。文字上端が欠損している例では、8点存する内の5点が4cm以上の間隔が認められるが、残画があれば、恐らくほぼ4cm以内に文字上端が入ってくるものと考えられる。

以上の記銘位置の近接性を鑑みるに、2型の記銘はある程度長い期間に亘って単発的に行われていたというよりも、短期間でそれ程間をおかずに書字行為がなされたと考えられるのではなかろうか。このような2型記銘の流れが、1型と4型の関係の中で時期的な前後関係は検証することはできない。だが、初期段階の文字もそれ程不整形ではなく、また字体も正しいものがほとんどであることから記銘者は2型の文字を銘字する前からの識字層であったと捉えられる。

また、「朝」字の1・2画目の筆順は9割以上の確率で「布」字の1・2画目の筆順とも対応していることから、「布」字のみ残存するケースでも若干の分類の可能性を示すことができることとなる。

3型については、前節でも述べたように主に2型の模倣に発すると考えられる。ただし、「朝」の1・2画目の「十」字が「×」ではなく「ナ」字形になることから、1型の文字も参照している可能性がある。いずれも単発的な書字行為と考えられるが、行書的で流麗な運筆も見せるようになることから、何らかの方法により書字行為が練達していったと考えられる。時期的には2型の記銘が行われている半ばから後半段階にかけて銘字されていると見なせるが、やはり瓦の性質との整合性が必要となってくるので本稿では措くことにしたい。

また、その他に分類した特殊な字形を示す個体については問題も残る。これらをそれぞれの書き手という視点から見たとき、類型に属さないという点を重視するか、いずれのタイプのイレギュラーとして見なせるのかどうか判断しかねる。文字自体も完存していないこともあり、主要な検討素材と成らない個体ではあるが、私は前者の可能性を想定しているものである。ただし、これは本稿での主旨ではなく、論旨にそれ程関わらないので割愛する。

以上のように、3人の中心的記銘者がそれなりの期間に亘って並行しながら（1部相前後する可能性もあるが）銘字していること、その間に臨時的記名者も少なくとも3人以上が想定できることとなった。このことから、平瓦Ⅰ類の特徴と「朝布」の記銘という関連性も相即不離の関係だとも指摘しうるが、さらなる瓦自体の検討と摺り合わせの必要性や、他種の文字が記銘される瓦との比較検討も必

要である点、注意喚起しておきたい。

この点を究明するためには、より多くの事例の集積と検討が不可欠である。そこで、五斗蒔瓦窯跡以外にも、龍角寺関連文字瓦の中には「朝布」と銘字されている文字瓦が知られるので、管見に入った事例を瞥見しておくことにする。

まず、大畑Ⅰ—3遺跡¹⁰で出土した「朝」の残画が挙げられる。

これは平瓦の破片で、凸面にⅢ（旧Ⅳ）類と思われる擬斜格子条の叩き板文様がかすかに残っている。凹面は縦方向（↑）に削られ、同じく縦向き（↑）に銘字される。文字自体の大きさは、残画から判断する限りやや小ぶりである。字形的には、完存しないが1・2画目の「十」を横画から書き始めること、下の「十」の縦画が「日」の上に届いており「甲」字型を呈していることから4型に分類しうるものと言える。

凹面に銘字される「朝」字としては五斗蒔瓦窯跡出土のもの（0477）と合わせて2点となる。平瓦Ⅲ類の文字瓦の特徴としてほとんどが凹面に記されることが挙げられるが、この特徴への過渡的段階と見なしうる。Ⅲ類の中でも古いと考えられる旧Ⅲ類の1点のみの文字「生」（0002）が凸面に銘字されることも示唆的であろう。

以下は、拓本もしくは写真のみで管見に入っものを挙げる。実見していないので、字形的な視点を中心として検討を加えることにする。

龍角寺確認調査¹¹におけるⅢ区出土遺物に文字瓦3点が存し、内2点が平瓦の凸面に銘字される「朝」の残画である。この『確認調査報告書』の第14図においては、拓本に不足分の字形を推定で補っているが誤っており、むしろ引載すべきではない¹²。

第14図の9は「朝」の左側の一部が残存するのみの個体である。筆順が「一→ノ」であること、「日」部が1画増画されていること、下の「十」の縦画が上に伸びて「甲」の形を呈すること、「日」の縦画が下まで伸びていないことからみて朝4型の中期頃のものと推定される。

第14図の10も同じく「朝」字で、瓦の端縁とそれに近い文字の上部のみ残存する。筆順の判断は推測となるが、「ノ」の終筆部が上に撥ねていることから「ノ→一」と見なして大過ない。『確認調査報告書』では、「大」の形をした下の横画を「日」部の「冂」に充てているが、これは「日」の真ん中の横画が連続運筆をしているからそのように見えたまでである。「大」のように見える「乚」部分が「日」の「冂」に相当しているのであって、朝2型の可能性も残るが3型である蓋然性が高くなる。前稿で掲示した各型の字形と比較していただければ頷首されよう。

篠崎四郎氏の論文には¹³、他と重複していない拓本として「朝」が2点掲載されている。一つは行書的な運筆で、「朝」「布」の1・2画目が「×」で「ノ」から書き始められていることが明らかであり、2型の後半段階に相当する。もう一つは同じく「一」から書き始められていて、「日」の部分が「甲」形ながら「且」にまでなっていないこと、「月」がまだそれ程小さくはないこと、「布」が左払いと「巾」とが連結していないことなどから、4型の後半段階に近い中期に相当する字形であるとみられる。

多宇邦雄氏論文¹⁴にも他に見えない拓本として「朝布」1点があるが、図版番号の枝番もあることと、入手しやすいと思われる文献であることから他に掲示されている事例についても言及しておく。

10は「朝布」で、完存する。1・2画目は「一」から始まり、増画もない。下の「十」の縦画は下方向に長く、「日」にまで抜けない。「月」は歪んで半円形を呈す。「布」が左払いだが、「巾」の縦画が無い。以上の点から、1型の後期段階、さらに言えば後期の中でも字体的に変化が少ないので前期に近い段階に相当すると思われる。

11は「朝布」だが欠損部が多い。「布」と残画から見て1・2画目は「一」から始まるグループである。左右のバランスが悪い点と下の「十」の縦画が下方向に伸び、「日」に抜けない点が看取しうる。「布」字について、「巾」部の「冫」の終筆部が縦画よりも左側に出ている。以上の点から見て、1型の後期段階に相当すると見なせよう。

12は「朝」の残画である。連続運筆と1・2画目が「ノ」から書き始められているらしいことが看取できる。また、「日」の横画が勢いよく1増画されていることから、2型に属すとみられる。記名時期は半ばから後期段階にかけてと思われる。

13は「朝布」で、「布」は下半分が欠損している。10・11と同じ特徴を持つことから1型と捉えられるが、「日」が「且」形を呈していることから、後期段階に相当していよう。

次に、成田山靈光館所蔵瓦¹⁵の中に、少なくとも「朝布」1点の存在が知られる。展示も閲覧しうるが、ここでは図録所収の写真図版によっても判断できることを述べることにする。

まず、「朝」字の左上部が欠損しているがなおむね残存する。「布」の筆順は「ノ」から書き始められており、3型に相当するように思われる。「月」の「冫」が山形に山形になっているのは、五斗蒔瓦窯跡出土例にも数点見られるが類型の特徴にはならない。同じく「月」が1画増画されているが、「日」の横画は増画されていない。また、「日」はやや連続運筆となっており、特徴から見ると2型か3型に該当する。

同じ成田山靈光館の別の図録¹⁶においても、別事例の「朝布」1点が掲載されている。この個体はおそらく龍角寺の所蔵と思われる。端部が残存するが、「朝」字の右上が少し欠損している。この字も「ノ」から書き始められているようだが、字形的には1型に属すると思われる。「布」字の「ノ」と「巾」とが連続運筆になっていないこと、「月」が小さく左右のバランスが悪いこと、「日」部が「且」形を呈するが下の「十」が上には抜けずに下に長いことなどから1型後期段階のものと見なせる。

また、宇野信四郎氏蒐集瓦¹⁷の中にも、龍角寺出土と見られる「朝」銘文字瓦が1点紹介されている。やや特殊な事例と言えるが、1・2画目は「一」から始まること、「日」が増画しないこと、下の「十」の縦画が「日」の上にまで達して「甲」形になるが下に伸びていること、その「十」の縦画が後に書かれることなどが字形的に看取できる。以上のことから、1型もしくはそれを模倣した記名者のもののいずれかの可能性が考えられる。写真図版ではあるが、おそらく縦方向の削りが認められるので、凹面に記銘されていると考えられる。実見していないことから今漸く1型と断定することを留保しておきたい。

次いで、住田正一のコレクション中に龍角寺関連文字瓦の存在が知られる。瓦本体は焼失してしまったとのことだが、拓本及び写真図版が近時刊行¹⁸され検討できることとなった。

それによれば、6点の文字瓦が知られる。内3点が「朝布」関連だが、「朝」とされた082019番の個体は「布」か「加」の残画と見なすべきだろう。また、082016は「□□〔朝布カ〕」と釈読できるが、「月」と左側のわずかな残画から4型と推測される。082018は「布」で間違いなく、連続運筆とそこから知られる筆順からみて、3型の可能性を残すが2型の蓋然性が高い。ちなみに3点とも平瓦凸面に銘字されており、五斗蒔瓦窯跡出土のそれと一致する。

以上のように、五斗蒔瓦窯跡出土以外の「朝布」銘文字瓦のいずれもが、前節で分類してきたものと同種・同分類に収まるものと見なせることがは明らかである。ただしこれ以外にも所蔵先が現在確かめられていない個体や、上記に挙げた事例でも実見していないものがほとんどなので、現段階での予察と捉えていただければ幸いである。

この「朝布」が、「アソフ」と読むであろうことは広く認知されたことで、『和名類聚抄』下総国埴

生郡に見える郷名「麻在」が「アソフ」を表そうとした、おそらく「在」字が誤写であるということも一般的な理解となっており、拙稿Dでも述べたとおりである。出土文字史料が既知の文献史料の補足訂正に益した好例として挙げられよう。

それでは次に、朝グループ以外の各グループについて節を改めて述べさせていただくことにする。

③神グループの文字について

次に、朝グループに次いで出土点数の多い「神」字を含む神グループを取り上げる。「神」字を類型化する際に指標となる分析視角を以下に掲げる。類型化したものは表6として掲示する。

まず、示偏の筆順から2種に大別できる。すなわち、主に「丨→フ→丶」というように「丨」から書き始めるものを1型の系統とする。次に「丶→フ→丨→丶」とのように最初に点を打ち、「フ」から書き始める種類も有り、これを2型とした。

次に、隣の「申」部分の1画目に縦画が有るかどうか指標となる。

1画目がなく、ヨに縦画で「尹」のような形となる事例のみなのが1型系統に属する例。2型の事例は有無相方が存するが、無し(0197)から有るもの(0146・0195・0198・0199・0200)へと変化したと考えられる。

類型	調査票番号注記番号(括弧内は推測による)
1	0103・0104・0147・0259 (0832・0856・0859)
1'	0100・0102・0256・0257・0258・0260・0820・0828・1002・1040・1041・1042・1168・1169 (0095・0105・0255・0821・0831・0853・0854・0858・0862)
1"	0823・0824・0826・0827・0829・0852 (1175)
2	0146・0197・0198・0199・0200・(0195)
その他	0106・0196・1035
欠損不詳	0822・0825・0830・0860・0861

表6 「神」字類型別一覧

さて、1型と2型との差異は上記の2点からも明瞭だと確信するが、1型の基本形と1'・1"との違いをここで検討しておこう。

まず1"とした類型は文字が完存するものが1点もない。しかしながら、「申」部分の転折「ㄣ」が変形して「>」のように逆く字形を呈しているものを1群と捉えた。

残画のみではあるが、筆勢は余り宜しくないことから、1型のイレギュラーという推断は下せないだろう。それよりも、1型・1'型の中でもやや逆く字形になった個体を模倣して、その字形に定着しつつあったものと見なせられる。

1型と1'型との差異はさらに曖昧で、分類するのは困難を伴う。要するに運筆状況と総合的な字形などから判断せざるを得ないわけである。

1型は小さく丁寧なもの(0103・0104・0147・0259)であるが、数はそれ程出土していない。字形的に、1型の隣の「申」の「ㄣ」は、右下がりの形状を呈すものが多い。また、各筆画の終筆部ははみ出したりせずに丁寧に止められている。これらのことから、1型の記銘者は識字層と考えられる上に、ある程度瓦への書字行為にも慣れていると想定される。

一方、1'型は楷書的な書体だがやや大きく雑で不整形な字形(0102・0257・0258・0820・0829・1002・1042・1169)から、次第に字形が整い(0100・0105・0256・1040・1041)、連続運筆が見られ行書的なものへという大枠の流れが窺われる。やや大きいというのは、1型に比較して、平均して1cm四方程度大きめだからである。また、雑というのは同じく1型に比較して、連続運筆の場合を除いた各筆画の終筆部(特に「申」部分における)が、横や下にはみ出る事例が多いことを指して言うのである。また、1'型の初期の段階での文字には図示したように不要な増画などが見られ、運筆上の歪みも散見することなどから識字率はそれ程高くなく、瓦への銘字にもそれ程慣れていない記銘者の存在が想定しうる。

ここで付言しておく、「中カ」と釈読した事例が1点(0855)見られる。これは「申」部の上の横画が摩滅してしまったものか、省画してしまったという可能性も考えられる。左側が欠損しているので、残存部の字形のみで釈読しているが、「神」字であった蓋然性が高いことを指摘しておく。

次に対応する「布」字に簡単に言及しておこう。

「神」字とともに記される事例は少なく、少なくとも1・2画目が残存するもので20点となっている(0095・0102・0103・0104・0105・0146・0147・0195・0196・0197・0199・0255・0822・0858・1035・1040・1041・1042・1168・1169)。

上記の点数の内4点を除き、基本的に1・2画目「ナ」部分の筆順が「ノ→丶」という形である。まれに「丶→ノ」という事例も存在するが(0095・0255(0102))、「ナ」か「×」かの程度の差であって個人内変動の範囲内と捉えられる。

また、2型の0146だけは「ノ」から連続して「巾」部の「冫」へと運筆することから筆順が「ノ→冫→丶→丨」となって特殊である。これは朝グループ4型の書字行為の前半段階に特徴的に見られる筆順であり、同一の記銘者であることを推測させるが、神グループ側の資料が1点のみなので可能性を指摘するに止めたい。

同じく筆順の異なる1点は1035である。「一→ノ(→フ→丨)」となると見られる。これは、「神」字をその他として分類したイレギュラーな字形の一つでもあり、図示したように唯一「朝布」と並行して銘字されている。「朝」は4型後期に属す字形だが、「神」はかなり不整形で模倣して記されたものと考えられることから、神グループにおける中心的な記銘者と同一人とは見なしがたい。であるならば、上述した0146と朝グループ4型の記銘者とは一致しない可能性が高まる。

次に、「巾」部分の1画目に正しく「丨」もしくは「丶」が入る事例があることについて。これも数は少ないが、1型に1点(0103)、1'型に3点(1168(0095・0105))見られる。朝グループの「布」字においても、連続運筆で「𠂔」となって省略されているものから、「ナ」と「巾」が分離するが「丨」はないもの、「丨・丶」の入るものという文字の正しい形への変化の流れはほぼ対応することを前稿で述べた。このことから、神グループの「布」字に関しても同様に識字意識と認識が高まったことが銘字された字形に反映されていったと想定して大過ないだろう。

以上のような「布」字における各型や朝グループとの共通的性格と字形的な類似性は、記銘者が相互に近しい関係にあって互いに文字を参照しあった可能性を示唆するものである。もしくは、文字列を手本として記した人物が共通していたという想定もまた可能だと考える。拙稿Aにおいて「小加」の「加」字について手本となる字体が存在したことを想定した。この事例の「小」や「加」字と同じく、「布」字もやや筆画数が少ないことが判別を困難ならしめているのである。筆画数が少なければ、比較しうる部分も少ないわけであり、字形的にも差異が生じにくいと言えるからである。究極的な例を挙げれば、「一」という漢字は横棒のみであって差異が生じず、同筆別筆を論じることは不可能に近いと言えば諒解されよう。

これらの諸点を踏まえて神グループの記銘者数を推定するならば、1・1'・2型のそれぞれ1人で計3人の主要記銘者の存在が確認できる。1"型の記銘者は1'型の個人内変動に収まるのか、模倣によるマイナー記銘者を想定すべきかは不詳とする他はない。加えて1035という朝グループに共通する記銘者と各類型に繋がらない記銘者を補助的もしくは臨時的記銘者と捉えて、それらが2・3人は存在したと推定しうる。

この他の事例では、五斗時瓦窯跡出土以外で唯一「神」の事例が知られるのが成田山霊光館図録¹⁹収載例が挙げられる。図版が小さく判別しきれないが、筆順は「丨→フ→丶」というように「丨」か

ら書き始められており、神1型の系統に属すると思われる。見た限りでは、運筆が雑で、字形もやや不整形なので1'型と推測される。

次いで、多宇邦雄氏の論文²⁰に判読不詳の1点知られる。拓本からは、3文字分ほどの残画が見えるが、多宇氏は「社本」と書いたのをナデ消し、その横に「布のような字」を書いたとする。文字列は縦ではなく横に並んでいるが、左側の文字はその左半分以上が欠損していると見られるが「神」字の「申」部の右上部分が見えていると考えられる。難解なのはその右側だが、「ネ（示偏）」と「布」から「ノ」を欠いたような字形が見える。ナデ消されていることからすれば、明確には判別できないだろうが、これも「神」字ではなかろうか。「申」部の1画目の縦画が無いのはむしろ五斗蒔瓦窯跡出土事例では普通であるし、「冂」の角部分が見えなくなっているとすれば字画構成上は問題ない。文字構成上においては偏と旁がやや離れていることが問題視されるが、字形的にも習書レベルに近いものと言えそうなので問題ないだろう。他にも無理をすれば類似の文字を想定しうるが、蓋然性が低いので敢えて述べることはしない。ただし、実見していないので、ここでも釈読は試案として止めておきたい。

④服グループの文字について

服グループと括った一群は、文字列が完存した場合には「服止戸」を示すと思われるが、23点いずれも残画で、残念ながら3文字揃って残る事例はない。

「服止」と記されるものは3点（0232・1027・1030）ある。「□〔止カ〕戸」と見られる事例も3点（0233・0237・1029）存するが、あまり良好に残るものがない。しかしながら、後述する丸瓦に銘字された「皮止戸」（1226）と表音が同じ「ハトリ（べ）」と見なせることから、文字列としては「服止戸」であったと見なして大過ないだろう。何よりも、龍角寺所蔵と思われる丸瓦凸面に「服止戸」と銘字された例²¹も存在していることから疑問を差し挟む余地はない。

さて、瓦の種類が異なることは別として、字形・筆画構成と運筆状況から見てこれらは同一人の手になるものと考えられる。また、書字行為の初期段階と思われる不整形な文字例（0231）や、残画のみだが2ヶ並べて書かれており習書していた可能性を思わせるもの（0235）もある。このことから、記銘者は1人で、個人内変動はやや大きめながらも次第に練達していったという過程を看取することができよう。

ただし、前述した「皮止戸」と本節で示した「止・戸」の字形は相似するが、運筆状況が異なることから別筆と見なすべきだろう。「皮止戸」は小ぶりだがかなり整った字形と、運筆もまとまっていることから、識字層で書字行為にも長けている人によると考えられるからである。

⑤その他の平瓦Ⅰ類の文字

本章の最後に、少数しか知られない文字種を簡単に見ておきたい。ただし、「赤」グループについては「加」字の検討とも密接に関わるので、平瓦Ⅱ類の検討の際に述べることにする。

前稿で述べたが、『報告書』では採り上げられておらず、新たに釈読した文字例として「百」と読める個体を追加した。龍角寺関連文字瓦中では珍しく多数の文字が記された「□□女瓦四百五十」と記銘者は同一であるとみられるが、「□□女瓦四百五十」（0180）のトレースと比較検討した拙稿Bによって明らかだと言えよう。

次に「水津」を検討する。

「水津」と銘字される例はわずかに1点（0077）に止まる。「水」字は筆勢・筆圧・運筆いずれも良好で、字形も右肩下がりが気味だが整っている。一方、「津」字はこの記銘者が知らざる文字であったのか、運筆に迷いが見られ、筆勢も弱く中心をなす縦画も歪んでいる。

しかしながら、字画構成を似せようとする意図は看取できるし、さんずいの3画目は縦に記銘工具を入筆してから右に撥ねるという運筆も見られることから、まったくの不識字層であったとは思われない。

記銘位置は、やや広端縁寄りながら凸面の中央付近に銘字される。「水」字は画数が少ないため、「津」字は逆に画数が多いが、字形的に類似する文字が出土していないために、他の文字を記した人との比較は困難である。

この他に、下部が欠損している「水」1字の例(0079)も知られる。おそらくは「水津」と銘字していたと想定されるが、この50の事例は模倣によるものと考えられる。根拠は、まず双方の文字の大きさがはっきりと異なっている点が挙げられる。「水津」の方は $6.5 \times 10\text{cm}$ と大きめなのに対し、本例は 3.4×2.6 とかなり小ぶりである。また、記銘位置が1つの隅部しか残存しないが、左寄りの狭端縁付近に銘字されていて異なっていることも参考として挙げられよう。字画構成的に見ると、筆画数が少ないのでそれ程形としてはかけ離れていないようにも見える。しかしながら、細かい運筆状況などを比較してみると違いが明瞭となる。

まず、中心の縦画が「水津」では終筆部でしっかりと撥ねているのに対し、本例ではやや弱く止めになっている。また、縦画自体にふらつきが読み取れる。次に、2画目以降の「フ・く」部分の運筆が異なる点が挙げられる。説明しにくい、本例では同じ筆圧で記銘工具を持ったままの方向で書いている、つまり形だけを追っていると見られる運筆状況と言える。「水津」の運筆は払いもしっかりとしており、筆圧の抑揚も見られ、記銘工具もそれに併せて柔軟に動いていると想定される点からすれば大きな差異と言えよう。

以上の諸点から、「水津」と「水」の記銘者は別人であると推断できる。中には同一人の熟練前・熟練後ではないかとする向きも有るかも知れない。しかし、2点の間をつなぐ過渡的な事例がないので証明できないだろうし、同一人と見なせる根拠の方がまったくないことに比較して、個人内変動の枠を越えた差異という実態を見る限り、やはり別筆と推定する方が蓋然性が高いだろう。

次に「土」と銘字されたものを取り上げる。

明瞭に残るのは1点(0082)のみだが、残画から2点(0179・0871)、さらに「□〔土カ〕」とした1点(1144)を数える。文字列として「土」1字のみであったのかは、いずれも字の下が欠損となっているために不詳である。下の横画がやや右上がりになる点を共通点と見なせるし、0082と0871では右側に点が打たれているので、同一人によるものと推定される。ただし、筆画が少ないので他の文字の記銘者との比較はできない。

また、1点のみだが「土」の増画と見なすべきか「主」と釈読すべきかという例(0179)が存す。右側の点が右上に打たれていると見なせば、「土」の増画とも見られる。しかし、下の横画についた傷と同じように見えるので、右上の点も傷と見なすべきかと思われる点や、下の横画が縦画の右側に伸びていないことから、別字・別筆の可能性が考えられる。平瓦Ⅲ類の「生・玉」との類似性も考慮すべきではあるが、0179の例からだけで想像を逞しくすることは控えさせていただく。

最後に、「入」字について。

軒丸・軒平の例は前述のように傷と見なして除外したが、本事例(0080)は「入」字と見なして大過ない。平瓦の長軸方向を横向きにして、側縁端が文字の下に残存するという、五斗時瓦窯跡出土文字瓦の中では特殊な記銘位置である。だが、文字種自体も事例1点のみということからすれば記銘者に対応しているとも考えられるだろうが、やはり他の文字との比較は行う術もない。ただし、運筆状況や筆勢はそれ程悪くない。

平瓦Ⅰ類における各文字種内における比較検討は以上の通りである。記録者については、各文字群ごとに1～3ないし4人という想定が一般的なようである。朝や神グループのようにグルーピングされるような多数の事例が残る例では、主要な記録者に加えて臨時的な記録者が複数人存在したと想定されることは前述した通りである。

また、朝グループの中心的な記録者と神グループの臨時的な記録者とが共通していることを勘案すると、ある程度文字が異なると記録者も異なるという可能性が想定される。記録者が数人であっても、それぞれの文字群ごとの記録者はあまり重複していないとも考えられる。

しかしながら、文字種の多さと比べて異なる文字列間において相互に重複する文字は多くない。また、筆画数が少なめの文字が多いことや、比較しうる共通の筆画なども見出せないことから、繰り返し述べてきたことではあるが、異なった文字列同士の比較検討は慎むべきだろう。よって、ここではこれ以上の言及は避けることとしたい。

(5) 平瓦Ⅲ類の文字

①出土した文字種と数

本章では、拙稿Aにおいて検討した平瓦Ⅲ類について再編して触れておくことにしたい（図版は拙稿Aを参照されたい）。

瓦自体の類型だが、『報告書』においては平瓦Ⅲ・Ⅳ類と区分されており、本稿ではⅢ類として呼称することは前述の通りである。また、『報告書』では計20点を数えているが、今回の調査において新たに8点を確認し、この分類に属する文字瓦は計28点にのぼったが、拙稿Cで指摘したことだが、Ⅱ類平瓦に混在した破片から、新たに1点の判読不詳個体を追加し、総点数を29点とした。

まず『報告書』で示された文字と数を示しておく。

「生」1点・「□月」1点・「野」2点・「小加」10点・「皮尔□」1点・「皮尔□□」1点・「玉作」1点・「玉」3点となっている（第27表出土文字一覧表より）。

だがⅢ類においても文字種と数に改めるべき点があるので次に示す。なお、瓦作成段階における文字の記載時期については、分割後の凹面調整における縦方向の削りの直後、もしくはやや後とみられ、記録方法はすべて簞書きである。また、()内は残画から想定した文字で、各点数の内数とする。

1 旧Ⅲ類は凸面調整の叩き板による再分類ではⅢ1bに相当し、平行条線と木目が直行する叩き板文様を特徴とする。

これには「生」1点のみが確認できる。これは『報告書』の成果と変更はない。

2 旧Ⅳ類に属する左上がりに斜行する平行条線による擬斜格子状の叩き板文様とする一群で、叩き板文様により細分されるが、ここでは旧Ⅳ類に属する一群と捉えて数を示しておくことにする。

「小加」6(2)点。「加」7(3)点。「玉作」1点。「玉」3(1)点。「野」1点。「□月」1点。「皮尔□」1点。「皮尔□□」1点。不明が7点である。

『報告書』では「小加」として一括して捉えているので計10点だが、新たに「小加」「加」では3点確認されたことになる。また、『報告書』で「野」2点とされるうち、残画から判断されている個体について、「野」とされているものを、釈文では「ヤ」(0005)としたが、文字自体としては判読不詳個体とした。5点の新たに確認されたものと合わせて計7点を不明として括っている。

②各文字の属性分析

本節では、総点数が29点と少ないこともあり、すべてを注記番号順に個別に検討して傾向を抽出

することにする。その際の、瓦ではなく文字のみの属性分析の主な指標は、後述する記名者の想定を行う際にも必要である。ここでは、『報告書』での主要分析視覚の筆順（『報告書』と異なる見解の場合は「*」を付す）以外にも、筆跡鑑定における各分析視角をもって観察した。墨書土器の記銘文字についての運筆にも注意を払うことを提言している研究も少ない中、文字瓦研究においてはなおさら進展していない領域ではある。しかしながら、記名の内容からだけではない、複合的な情報を引き出すことができるのではないかと考えられる。以下に、簡単にその判別基準を示し、後述する検討の指標とした。

文字の先頭に付したのは通し番号で、右に調査票番号を示し、一点ごとに検討を加えることにする。順番は、現在はⅢ類として一括りとするが、旧Ⅲ類から旧Ⅳ類へと、さらに旧Ⅳ類は文字種ごとの順にする。

1 「生」 0002

「生」は前述のように、『報告書』ではⅢ類と分類された平行条線の叩き板紋様を有する個体の分類中ではただ1点の出土事例となる。凸面に記名されるが、破片につき記名位置・方向は不明。筆順は通常一画目の「ノ」は上の横画を切っただけで、縦線と切り合っていないので二通り想定できる。「一→一→一→ノ→|」もしくは「一→一→一→|→ノ」となるが、通常の運筆通りならば左から右へと手が動く可能性が高いので、前者の蓋然性が高いだろう。

2 「□□〔小加カ〕」 0003

『報告書』の文字瓦拓影図及び観察表には取り上げられていない個体である。図のように「小」と見られる撥ねの部分と、旁「カ」がほぼ残存しているところより、ほぼ間違いなく「加」と推定できることから「小加カ」として大過ない。

「カ」は「ノ→フ」の筆順となっている。「ノ」の始筆は横棒を引いてからそのままの工具の向きを保って下に引き下ろすという、後述するように他の事例と共通した特徴的な筆法であり、本字が「加」である蓋然性を高めている。残画は約(7.0)×(6.0)cm〔縦画×横画。括弧は残画によることを示す。以下、これに準拠する。〕となっており、二画目は一画目から続けられずにしっかりした始筆となっている。

また、拙稿Aにおいて赤線で図示したように刻線の左側・上側が深くなっている。偏鋒のメス状の先端を持つか、あるいは数mmの幅を有する平刀状工具を傾けて使用していると思われる。

3 「小加」 0012

筆順は「(小) 丨→-→-」, 「(加) ノ→フ→丨→フ→_」。彫り込みは浅く、線幅は広め、特に「加」の「口」部は筆圧が弱い。また、「加」の一画目「ノ」の入筆は横線を軽く引いた後、記銘工具をそのままの向きで方向のみ下向きにして始筆とする点は他例と共通している。ただし、「小」の一画目の撥ね、二画目・三画目が点ではなく水平方向に線引きされているという運筆の違いが問題となる。字の大きさは普通、もしくはやや大きめ。広端部と見られる端部に、狭端部方向に向かって記銘されているが、広端縁から字の最下部まで約6cm離れている。

4 「小加」 0013

凹面広端部、面取りされた少し上の中央やや左寄りに、狭端部方向に向かって記銘される。筆順は「(小) 丨→ノ→フ」, 「(加) ノ→フ→丨→フ→_」で前掲11と同じ。ただし、「小」と「加」の「カ」部ともに連続運筆となっている。しかし、雑と言うわけではなく流麗な筆致であり、筆勢も良い。彫り込みも悪くなく、特に「加」の「口」部の「丨」は彫り込みが深い。文字のバランスや字形も整い、記銘者の練達度の高さが窺える。

5 「小加」 0014

筆順は「(小)」→ノ→丶、「(加)」ノ→フ→丨→ㄣ→┘で前掲3・4と同じ。凹面広端部の面取りより少し上、中央より若干左寄りに広端部から狭端部に向かって記名される。彫り込みは深いが線幅は細め。始筆は弱めに細く入っているが、払い・止めは確実に運筆・筆勢とも悪くない。「加」に比べると「小」字が小さくアンバランスと感じられるが、4の事例よりやや小さい程度である。転折は、横線から縦線に折れる際に記銘工具の先端(線中の最深部)が半分返されており。赤線で示した最深部の経路は二種類あることが想定される。字体は楷書的性格を保って整っているが、やや右上がりの特徴を示す。

6 「小□〔加カ〕」 0022

筆順は「(小)」→ノ→丶、「加カ」は残画が切り合っていないため不詳としておく。凹面広端部面取り部の少し上、左右には振れずに中央部に記名される。細めの線幅で筆勢はやや弱い、「小」の字形は整っている。また、「カ」部の一画目の撥ねから二画目へは連続性が窺えないが、「小」の二画目から三画目はやや連続性のある運筆である。始筆・終筆は悪くはない。

7 「小加」 0029

ほぼ完形の凹面、面取りされていない広端部の少し上に、狭端部方向に向かって記名されている。筆順は「(小)」→ノ→丶、「(加)」ノ→フ→丨→ㄣ→┘で両字とも前掲3・4・5と同じ。全体的には細目線幅で、1～1.5mmの彫り込みで小さめの字体。「小」字の二・三画目の続け方、「加」の一画目「ノ」の入り方、字形・バランスなど前掲12・13と相似する。運筆も良く、バランスも整っており、「小加」の事例が大型化する過渡期のものかとも考えられる。

「加」字の彫り込みの鋭角さ(「レ」状)や転折部の半返し・撥ね部の線などから、偏鋒で角度が鋭いメス状の記銘工具が想定される。

8 「加」 0008

筆順は「ノ→フ→丨→ㄣ→┘」だが、図示したように字形を整えるために二箇所を重ね書きされている。一画目「ノ」から二画目「フ」に流線的に繋がる運筆で、線も深く力強く刻まれている。凹面広端部の中央付近の面取りされた少し上に、狭端部方向に向かって記名される。狭端部方向3分の2程度が欠落しているが、「小」字の残画はなく「加」1字のみの記名と考えて大過ない。「□」の「丨」が下に抜けるほど長いなどの、他の「加」字とはやや異なる形態を見せるが、この点については後述することにする。

9 「□〔加カ〕」 0011

筆順は「ノ→フ」と想定され、「加」の左側の旁部分の残画と見て間違いない。「ノ」の跳ね上がり方や筆勢など弱めであり、彫り込みもやや浅いことから筆圧も弱めであったと推測される。一画目と二画目「フ」との間もやや狭く、字の大きさ自体もやや小さめだったと想定される。

10 「□〔加カ〕」 0017

『報告書』では拾われていない個体である。凹面広端部と見られる面取りされた部分よりやや上に離れた位置に記名される。釈読不詳の1文字目は残画「一」のみであり□とした。2文字目は「□」だが、記名位置の特徴が共通性を持つことに加え、その字形からみて欠落している左側に「カ」があった可能性が高いものと考え、「加カ」として判定した。「□」部の筆順は「丨→ㄣ→┘」で、とりたてて他例と変わりはない。

1文字目の残画からは、他に組み合わせ例がある「小」とは見なせない。「□」に比べて線が細く弱いので、調整痕ではないかという疑いもあるだろうが、本個体の凹面の調整技法は縦方向に篋削りが施されており、方向が一致しない。

「口」について、線はやや太めで運筆はしっかりとして楷書的である。転折も記名工具の先端が半分返され、鋭角気味に折れており、5の事例に近い。

11「加」 0018

筆順は「ノ→フ→丨→ㄣ→┘」で、前掲3・4・5と同じ。記銘工具の入り加減、一画目「ノ」の始筆部など13の事例とほぼ同じと見なせる。「口」の一画目の縦線は、縦幅があっても横幅のない記銘工具の薄い方で深く鋭く彫り込まれている。最終画の止めも、強めなのが特徴。

12「口(加カ)」 0019

破片のうえに、残存部の中央部も欠損しており釈読不明だが、残画は「ナ・て」の形をしている。「ナ」の個所は「ノ→一」の順で彫られる。残画から「加カ」と想定したが、旧IV類に見られる「小加・加」の字体とはまるで異なっている。

13「加」 0021

筆順は「ノ→フ→丨→ㄣ→┘」で前掲3・4・5・8・11と同じ。凹面広端部の、面取りされた部分の少し上に、広端部から狭端部方向へ向いて記名される。一画目の「ノ」の始筆部が欠落により不明で、字体もやや小ぶりではあるが他の「加」字と相似する。彫り込みは2～3mmとやや深めで、各入筆時は力なく入るが、記名工具の作用点の通過する側の反対側を深く抉って彫られており、筆圧は悪くはない。しかし、全体的に筆勢・運筆については力感がやや欠けていると見られる。また「口」の転折部は、記銘工具の作用点为上向きから左向きへと半返しされている。

14「加」 0028

破片が残る個体の凹面に記銘される。『報告書』では接合した個体に側縁が残るが、実際には同じような焼成だが接合関係にはない。

筆順は「フ→ノ→丨→ㄣ→┘」で、他の「加」(前掲3・4・5・8・11・13)とは筆順が異なる。「カ」部のそれぞれ終筆近くからは、彫り込みもやや普通程度になるが、全体的に、特に「口」部分は摩擦を差し引いても筆圧・筆勢ともに弱い。

15「玉作」 0006

文字は「玉作」で相違ない。字体は整っているが、記名後にやや押圧されて線の一部が埋まる、もしくは歪んでいる。文字の大きさは『報告書』に従うと「玉」は1.3×(2.3)cm、「作」は(1.7)×(1.7)cmであり、小さめと言える。線は細いが、押圧後も残るように深めに刻まれている。

「玉」字について、筆順は「一→一→一→丨→丶」。本字は旧IV類の中にも3点認められ、筆圧や運筆の違いが想定されるうえに、字体と大きさが異なっていることから別筆であると考えられるが、次節で検討することとしたい。

「作」字について、筆順は「ノ→丨→ム→丨→C」だが、縦画は押圧されて途切れている。本字の運筆は、通常の旁「𠂔」の部分では横棒二画が並ぶが、本事例では「し」を斜めにしたような形状(「C」と表現した)で続けて運筆されている。特徴的な字体と考えられなくもないが、最後の短い横画が縦画の下から右へと入る運筆は中国では多数事例がある。例えば、漢から唐にかけて幅広く事例が見られるが、行書的になりきっていない本字のような字形は、北魏に多々見られる事例である。

16「玉」 0007

広端部方向に向かって記銘されている本字は、中央部から狭端部にかけてが欠落しているため前項と同じく「玉作」と記されていた可能性も残るが、「玉」1字と見なししておくしかない。

筆順は「一→一→一→丨→丶」。字体は整い、筆勢も良い。恐らく識字者が記名したと思われる。運筆はやや右上がり、記名工具の最深部は赤線で図示したように横線は上部、縦線は左側を通り、

起筆・終筆のなどからも右利きの記名者を想定しうる。字の大きさが 2.7×5.0 とやや大きめであるが、最終画の「丶」の離れ具合を勘案すると同筆の可能性がなきにしもあらずである。なお後述する。

17「玉」 0010

筆順は「一一→一→丨→一→丨→丨→丶」＊。線は3mmの幅があり平たく、彫り込みも浅い。横画・縦画とも何度か刻み直しているのは、浅く弱いためであろう。字形はそれなりに整っているが、やや右上がりとなっている。篋を傾けて腹の部分で刻んだと見るよりは、幅と深さがほぼ一定のことから、平刀状の工具で運筆方向に対して同一の面を用いて記名したと考えるべきであろう。入筆・終筆も整っており、終筆の形状からも前述の工具の形が現れている。

なお、本事例は凸面に左上がり・右上がりの擬斜格子に受け取れる平行条線の叩き板文様を残している。Ⅲ6に分類されるが、凸面などの調整技法と文字種が対応するかはさらに検討が必要である。

18「□〔玉カ〕」 0016

凹面広端部の中央付近の面取りより少し上、広端部から狭端部方向に向かって記銘される。しかし左側が欠落しており、右側にある残画は「二丶」となっている。文字のトレース図からは分らないが、『報告書』の拓本図版(44図308)からは、残画の上部も欠けていることも窺われることから、「玉」の一画目の横線があった可能性が高い。旧Ⅳ類には現在事例が見られないが、「土」に点がある例が平瓦Ⅱ類に有り、そちらの可能性も考えられるので「玉」と断定はしない方が穏当と考える。残画の彫りは深い線幅は細め、終筆の止めは力がない。また、最終画の点は右に払われていることは、前記した15・16の事例とは異なっている。

19「皮尔□〔負カ〕」 0009

「皮」の筆順は「丨→ㄣ→Ⅱ→丶」。「尔」の筆順は「ノ了→ㄣ」。「□〔負カ〕」の筆順は「ノ→ク」で、一画目を二重になぞろうとしたと捉えて「負」の一・二画目の「ク」に相当すると考えられる。ただし、「負」の上部は「刀」であるので、本来の行書では本字のような形にはならないので断案とは言えない。

大きさは、それ程一字ずつでは大きくないが、筆勢は良く、次の画に向かって連続的に流れるなどやや行書的な趣もあるが、悪く言えばやや雑か。彫り込みには浅深のメリハリがあり、やはり運筆が達者の方と見なしてもよいのではないかと判断される。

20「皮尔□□」 0015

『報告書』の図版や観察表(表23)を一瞥していただければ明らかなように、瓦自体が脆く、かろうじて接合しているものの、剥離もまた激しい。線幅は細く、深くもない。

筆順も捉えにくい、「皮」に関しては「Ⅱ→丶」の前後関係のみ確認され、通常通りの「丨→ㄣ→Ⅱ→丶」と見なせよう。「尔」の筆順は「ノ→丨→ノ→丶」。

残画について、『報告書』は2文字文と見なしているが、上の2字との割付から考えると2～3文字分の残画とみられるが、2文字としておく。一つめの□は、「丶」のみが残画で想定される文字も不詳である。二つめの□は「廿」に類似する残画である。本来は、残画通りのトンボ字か「冊」のような文字だったかと想定される。だが、4文字で意味を通るように釈読することは困難であり、3文字と捉えて3文字目を「負」と捉えることも字形からいって難しい。やはり3文字目と4文字目は□としておくべきだろう。

21「□〔朝カ〕」 0004

凹面の面取りされた端部(広端カ)のやや離れた上方に、反対側の端部に向かって記名されている。

図に示されるように「月」の左側に残画があり、「朝」と想定しうる。字体が整っており、正確にして筆勢や運筆も良い。筆順は「?二画分残画→丨→ㄣ→一→一」だが、四画目の転折は一度横線を

引いて止めてから、新たに下へ向かって引いており、やや「丁」字に近い運筆となっている。入筆の形から判断すると、先端が尖った横幅と厚みの少ないメス状工具が想定される。線幅が広めに見えるのは鋭く深く刻まれているからである。

なお、平瓦Ⅰ類で大量に出土している「朝」字とは色々な点で異なっている。

22「野」 0027

広端部中央やや左よりの凹面に記名される。凸面の調整には左上がり・右上がりの両擬斜格子の文様を持つ叩き板が用いられ、Ⅲ 6 に再分類されている。

筆順は「丨→フ→玄(の崩しのような運筆)→丨→丨→3」。『報告書』では「里」部の二画目を「一」、三画目を「フ」としているが一連の運筆で二画目に相当する。三画目の起筆横線が二画目の横線を切るように右斜め上方に向かってから、左斜め下へと転折してゆくのである。

線幅は2～3mmで彫り込みは深め。行書的な運筆ながら、半返しされる転折・始筆・終筆や筆勢とも明確であり良好と言える。「里」の縦線が下に突き抜けているが、しっかりと「3」と彫る「𠂔」などから判断すると字形もまずまずで、練達の度合いの高い人の手によるものとみて大過ないだろう。

23「ヤ」 0005

筆順は「丨→フ」。文字不詳と判断したが、『報告書』では「野」と釈読している。図を見れば明らかなように、縦線が上に突き抜けており、残画は「ヤ」の形であって旁のおおざととして判断するのは困難である。彫り込みも平たく(3mm前後)浅いもの(1mm)で行われており、前述の22「野」(0027)のおおざとは似通っていない。字体は平瓦Ⅰ類に見られる「布」の「巾」の部分にも似るが、一・二画目の残画が無いことから退けられる。すでに知られている文字では、「土」や「生」の右端と取れなくもないが、二画目の横線から左斜め下方向への斜線は、単純に終筆を払ったというものではない。明確に他の線と同じであり、やはり「ヤ」と判断して文字未詳としておくのが穏当だろう。

24「□」 0020

残画は「ナ」に近く、「ノ→一」の順で彫られているが、釈読未詳としておく。彫り込みはやや深いので、調整などでの傷ではないことは間違いない。記銘工具の作用点が横線の下側、斜線の右下を通過していることから、破片であるこの個体は逆から見るべきかもしれない。

25「□」 0023

残画が「ノ」とあるのみだが、傷ではない。始筆に力が込められ、左下に抜くように払われている。「土」や「玉」の点とも見られるが、「玉」の残存史料は「丶」もしくは「㇏」という運筆の点が記されており、適合しない。

26「□」 0024

『報告書』文字瓦観察表などには数えられていない個体である。破片が残るのみだが、凹面に記銘されており、残画は「一・フ」の二画有るが、切り合っていないため前後関係は不詳。線幅は細めだが、彫り込みはそれ程浅いものではなく傷とは考えられない。始・終筆とも欠損しているので判断できない。運筆は普通、「フ」部の転折は鋭角に記名工具の作用点が半返しされている。

わずかな残画なので推断することは控えるが、字形からは平瓦Ⅰ類に見られる「布」の一類型と同一系統の「布」字と考えられる。

27「□」 0025

『報告書』文字瓦観察表などには数えられていない個体である。破片の凹面に銘字されており、残画は「ナ」に近い。筆順は「ノ→一」である。残画から文字を推断することは控えるが、五斗時瓦窯出土の文字からは「布」に近いと考えられる。

しかし前掲26とは異なり、傾斜画の幅は狭いが横画の幅は4～5mmと幅広く浅いことから記銘工具が違うと言える。横画は前掲4・9に近いが、傾斜画も含めて考えれば、焼き締まりを考慮に入れて横幅が5mm以上程度はあるものの薄い平刀状ではないかと想定できる。

28「□」 0026

『報告書』文字瓦観察表などには数えられていない個体である。破片が残るのみだが凹面に銘字され、上下逆にした「フ」のような残画がある。左上方にも残画が存するが、輪郭線の片側から欠落しているので詳細は不明である。残画からは本来記名された文字を推測することも困難である。

線幅はやや細く、横線はそれなりだが斜線の筆勢が弱い。「フ」の横線が右に抜ける可能性もあるほか、「力」の転折部では角度が鋭角過ぎるので当てはまらないので不詳としておくべきである。

③記銘者数の推定

記銘者については、何人くらいが文字を記したのかが問題となる。この場合、別字を比較するよりも同字においてそれぞれの特徴を抽出し、他字に敷衍すべきである。同字を記していて別人であると判断されれば、まず複数人の記銘者が想定でき、他字をそのうちの一方が記したのか、おのおのが記したのか、あるいはさらに別人が記したのかという推定も可能となるからである。

まず、結論的にⅢ類の記銘者は少なくとも二人は確実に存在したと言える。最初に、少ない事例の中でそれが簡明に知られる例である「玉」の検討から述べる。

16は17に比して、縦画の右側に余り横画が伸びずに、やや右に重心が置かれる。それを、右側に離れ気味に点を打つことにより、縦画が字全体の中心に位置するようにバランスを取っている。また、17は全体的に右上がりがかっているが、16は水平に近く横画が引かれている違いがある。さらに、最終画の点の終筆が6ではしっかりと止まり、17では送筆方向のまま軽く払われていることも大きな違いである。

さらに推測になるが、前述のように17の筆数は重ね書きされているために多くなっている。これは、彫り込みが浅く、彫り直したということもさることながら、各個所のはみ出した残画などからすると、字形を似せようとしたために起こった現象と見なせる。であるならば、17の記銘者は識字の質があまり高くない、もしくは記銘名の練達度が低いといった可能性が考えられるのではなからうか。いずれにしても両者は筆法の性格と字形の傾斜などから別人の手になることは疑いない。

次に、15「玉作」の記銘者と「玉」のみの記銘者とを比較してみる。

15の「玉」と16を重ねると、字形はほぼ同じで、16の方の大きさが倍程度になっているということが一目瞭然である。筆順・一画目の横画と縦画との角度・真ん中の横画が特に右半分が短めなこと・最終画の点の角度と終筆の止め方などが一致しており、間違いなく同一人の記名によるものと言える。

さらに、五斗時瓦窯跡出土ではなく大畑Ⅰ—2遺跡のZ—10グリッドから出土している「玉作」銘文字瓦を参照²²してみる。

16と大畑出土「玉作」では筆順が一致し、横画は縦画の右側部が短めな傾向、下の横画がやや右上がりになること、最終画の点を打つ角度などが一致し、字はやや小さめながら同筆によると断定できる。16を媒介にすることで、15の「玉作」とも同筆、もしくは元の手本を同じくする記名者と推定して大過ない(32として掲示。15を塗りつぶし、比較のために字間を離している)。15は押圧されて歪んでいるが、「玉」字の点画の角度や止め、「作」字とも相似している。「作」字は人偏側は二画により構成されていて連続運筆ではないこと、逆に隣の「乍」は連続運筆により始まること、下側の横画が縦画より下に位置することなどで共通性が見られる。「作」字については、中国にすでに似

た字体があり、影響も考えられる。字の大きさは、30・31・32 から 15 <大畑玉作< 16 と位置づけられる。文字の大きさは、記名者の習熟・練達度と関係すると思われるが、他の例を鑑みて後述する。

なお、蛇足ではあるが大畑の報告書においては、凸面は縄叩き調整が施されているとする。しかしながら、実見はしていないが写真図版や拓影図によれば、五斗蒔瓦窯跡出土平瓦Ⅳ類の叩き板文様と酷似している。凹面が狭端・広端の縦方向という点、記銘が凹面になされ、側縁が面取りされている点などから、ほぼⅣ類(β)と同様の瓦と想定されるので、凸面に関しても恐らく同じ叩き板と見なせるだろう。

また、別の憶測を重ねると、23「ヤ」について、字は異なるが前述のように彫り込みが浅く平たい工具で記名されている。このことから、17の「玉」と記銘工具と記載名時期(乾燥段階)の同一性が窺え、同一人による可能性がある。ただし23「ヤ」は二画のみの残画で運筆や筆法による比較が行えないので、あくまでも可能性の指摘にとどめておく。

このように拙稿A・Cでも比較したように、五斗蒔瓦窯跡出土平瓦Ⅲ類の「生」(0002)と「玉」(0007)などにおいては、字画形態と字形がここまで近似することから同筆と見なして間違いない。また、字画形態と運筆状況からみてほぼ同筆と見なして大過ないだろうが、大畑「玉作」の方がバランスと筆勢からみてやや先行するものと考えられる。次いで、五斗蒔瓦窯跡出土の平瓦Ⅳ類の「玉作」(0006)と比較したものが図62である。0006は小ぶりなため、2倍し、つまり図はほぼ実寸大として重ねている。大きさは個人内変動や書字状況の影響もあるので問題とせず、「玉」字は字画形態・字形ともほぼ一致する。北魏様を示す「作」字の最終画の横画の角度が大きく異なる点がやや問題となろう。これについては、0006は銘字後に押圧されていること、大きさと筆勢から書字行為が練達途上と見なせること、いずれも右上がりなので個人内変動の範囲に収まると考えられることから同筆と見なして大過ないものと言えよう。これにより、拙稿Aや前述のとおり、これらは玉グループを銘字した一人の記銘者であると推定できる。

次の事例、「皮尔～」を取り上げる。19の「皮尔□」と20の「皮尔□□」を重ねたものが33である。「皮」字の縦画から「又」部へ、「尔」字の「ノ」から「一」への連続運筆は類似する特徴と言える。

だが、異なる点を挙げれば、字の大きさが全く異なるという点が第一だが、加えて20の文字列の傾きが目につく。また、20とは異なり「尔」の二画目に当たる横画から三画目に当たる縦画へ、さらに左払い「ノ」から右の点画「丶」にかけてが、19ではそれぞれ完全に連続運筆である。さらに細かい字画形態を比較すると、「皮」二画目の横画終筆部は左下へ向かって撥ねる部分について、19では曲線的に折り返して上方に撥ねるのに対し、20は横画の送筆方向に鋭角に折り返して止められている。他に「尔」について、8が二画目相当の横画が直線的だが縦画は右に湾曲し、最終画の点画も右から左下への逆運筆で、次の3字目への連続性中に含まれてしまっている。20はこれとはまったく逆の運筆により字画形態を現している。すなわち、横画はやや上に湾曲し、縦画は左下へ傾斜する直線、最終画の点画も終筆部が欠けているが「丶」の形をとっている。

以上の諸点から、19と20は「皮尔」部分の記銘文字が共通するものの別人の手によると見なせることが明らかとなった。

最後に、平瓦Ⅲ類中で最も事例の多い「加(小加)」字について検討する。

まず「加」字の中では最も小さく記された14と、次いで小さい7を重ねたものを34として掲示する。7は他の文字例と同じ特徴を示しており、文字の小ささや連続運筆が未見であることから同記銘者の熟練段階以前の記名と考えられる。そこに見られる字画形態の特徴は、いずれも一画目「ノ」の入筆部がセリフといわれる短い横画で、始筆部が下方向への転折により始まる。この一画目の入筆部は、次に検討する14以外はすべて現出している特徴的な字画形態である。基本的な字形例に範を採った

ようではなさそうである。だが、この共通性を考慮すると、恐らく記名に際して範とした文字例が同じであったと考えて大過ないだろう。運筆から推測するに毛筆書体が手本と考えられ、だとすれば、一画目の入筆から始筆部にかけて力が入ったところから下に送筆した筆画だったと想定できよう。

さて、話が逸れたので7の字画形態の説明に戻す。二画目「フ」は直線的に横画を引き、記銘工具においてはそれまで削っていた面とは反対側の面が粘土を削る面になるようにして、鋭角に転折する。「ノ」と「フ」の傾斜画の間隔はほぼ平行か終筆部に向かって狭まる傾向があり、撥ねは運筆方向より直角に近い鈍角である。「口」はいずれも三画目に当たる縦画が力強く深く彫り込まれ、四画目の転折は前述同様で、五画目の横画も比較的強い筆勢と四画目の終筆部よりも右にはみ出るようにしっかりと止められている。

では14の事例はどうだろうか。瓦の遺存状態が悪く、記銘されている凹面の剥離も著しいが、セリフが無い、あったとしても残画として認めがたいということは、セリフの筆圧が他の例に比べて弱く見られる。また、二画目の転折部と送筆部が欠損しているが、始筆から横画が上方に湾曲していることから、曲線的に折れていると考えられる。撥ねの部分もかなり鈍角に、長めに運筆されている。ちなみに、ここでは比較のために二画目としたが、前節で指摘したように14は実際のところ「フ→ノ」という逆の筆順であることも注意される。また右側隣の「口」がかなり小さいという左右のバランスの問題、左右の底辺部がほぼ揃うのに比して二画目の転折部のすぐ右方に位置しており、「口」が上付きになっているという構成も異なっている。

以上のことから、14は個人内変動による筆跡の違いとは捉えられず、両者は別の記銘者によるものと考えられる。

この他、3と5を比較してみると、「加」字の運筆状態やセリフがあることはほぼ他の例と同じである。また2字の大きさもともにほぼ同じである。

しかしながら、3はやや字形的にやや横に潰れている感がある。また、二画目の転折部が横画を止めた後、記銘工具の幅の下分に下げてからかなり鋭角に折り返して、「ノ」と「フ」の間の狭まりが目立つことが異例である。

さらに問題は「小」字で、二画目から三画目の連続運筆がやや行書的に正しく運筆される5に比較して、3では二画目から三画目の送筆部分を左から右へと一直線に線描して、三画目をその流れで真横に引いている。三画目の点画を、逆運筆気味に上から左下方向への曲線的運筆を示す他の4点(4・5・6・7)とは著しい字形相違である。加えて3は、一画目の縦画の終筆部に当たる撥ねの方向が、微かな違いではあるがやや下向きである。横、もしくはやや左斜め上に撥ねる他例(2・4・5・7)とは字画形態が異なる。

また、3の記銘位置は、他の例に比べて広端部より文字列底辺が約6cm離れており、2～3cmに収まる他例と、この点においても相違している。

以上のように、3の記銘者もかなりイレギュラーであり、別筆と強く推測される。ただし、個人内変動か習熟度と記名の練達度の差に帰するものなのかは、検討例が少ないので判じ得ない。34からすれば、両者は同じ程度の大きさで記名されており、ほぼ同じ段階で記名されていると考えられる。であるならば、上述のような程度の問題と捉えるよりは、やはり筆跡の個人差と捉えるべきだろう。だが、3の記名者が前述した14の記銘者の練達度がやや進行した段階のものなのかどうかという判定しきれない可能性も残る。双方を比較してみたが、練達前後と見なすことは困難と思われる。

さて、本節における同字間の検討をまとめれば、記銘者は少なくとも二人、もしくは別筆とした記名者がそれぞれ別人と捉えられれば三人が記銘した可能性があると考えておきたい。

④総記銘者数の推定

前節で述べた各字を記名したそれぞれ二名、もしくは三人が別字の記銘者として共通しているのか、あるいは各字で異なり、おのおのに記銘者が複数人が存在していたのかが次に問われることになる。

まず、別字ではあるが間違いなく同一の記銘者と考えられるのが旧Ⅲ類の1「生」と15・16の「玉作・玉」を記銘した人だろう。1と16を重ねたものが37である。「生」の字は多少記名後に押圧されて歪んでいるが、中心部の「王」部を比較するとほぼ同一であることが明らかである。ともに縦画が垂直ではなく蛇行している点、横画の入筆部、真中の横画の終筆部の止め方といった字画形態や右側に重心が置かれた横画とそれぞれの字画間隔による字画構成からいって疑いなかろう。

両者の字の大きさもほぼ等しい。このことは、1「生」が15の「玉作」よりも16の「玉」字の記銘時期に近いものと推測させる。筆勢は16の例ほど強くはないが、15よりは強い。よって記名時期は、玉作→生≒玉となると考えられる。

この場合問題となるのは、1は旧Ⅲ類で、そのうえ凸面に記名されていることである。これを整合的に解釈すると、旧Ⅲ類と旧Ⅳ類という叩き板の使用時期に大差が無く、むしろ重なっていると想定される。さらに憶測すれば、凸面と凹面の記銘部位の違いは、瓦工と記銘者が別人であり、瓦工が主体的になって記名者に書いてもらっている状況が考えられる。

さて、別字間の記名者の同一性に関する推測に戻す。文字そのものの構成要素がかなり重なる「玉・生」に比して、部分ごとの運筆状態や字画構成を比較しても本来の筆跡の鑑定にはつながらない。ここでの推測は、筆跡鑑定からいえば無効で、証拠能力はないが、記銘者の推定として有効と考えられる点については述べておく必要がある。

まず、運筆により明確に書体異なる例から見てみよう。かなり楷書的でしっかりとした銘字をする21「□〔朝カ〕」や、行書的(厳正に行書ではなく、連続運筆がみられるものを指すことにする)で筆勢などからも間違いなく識字層が記銘したと考えられる22「野」などの記銘者は特徴的である。平瓦凸面の叩き板による分類上ではそれほど多数の工人の存在が推定されていないので、文字の記銘者に関してもおよそ大人数ではないと考えるのが穏当だろう。

そうではあるが、21「□〔朝カ〕」は別筆として見ておく他はない。だが22「野」については行書的な書きぶりが「小加」や「皮尔□」を記名した人と同一かどうかを推測できないだろうか。

結論から言えば、運筆状況や書き癖など、個々の筆跡個性がいくつか重なっていることを条件として考えたとき、22「野」と4・5・6の「小加」(以下「野グループ」)は同一の記名者と考えられる。しかし、同じように行書的な19「皮尔□」の記銘者については別人ではないかと推測される。以下、簡単にその理由を述べる。

「野グループ」と19「皮尔□」記銘者との決定的な違いは入筆部にある。入筆の筆法が異なるのである。「野グループ」では、記銘工具の厚み(横幅)がない方を縦軸として持っており、そのままの角度で縦画を引く。横画に関しては、厚みがないが縦幅があるので、縦幅そのままに横画にそのまま幅が現れる。一方、19では「皮」の二画目や三画目、「□」の二画目に特徴的に現れるように、縦画を引く際に一度記銘工具を入れてから方向転換して総筆部へ向かっている。この入筆から始筆部にかけては、「野グループ」とは異なる筆跡個性として捉えられる。

また、転折部にも違いが見られる。「野グループ」の「加」や「野」字の転折はいずれも鋭角に折れている。「野」は特に鋭い。それに対して、19「皮尔□」の転折は、連続運筆の流れの中で鋭角に折り返す箇所はあるが、「皮」の二画目「ㄣ」の部分や縦画から又字につながる「Ⅱ」部分に関しては、曲線的に折れており対照的である。

次に、記銘位置に相違がある。22「野」は広端縁から2.8cmの位置、「小加」は前述のように2～3cmが標準的だが、最大で3.1cmであり、ほぼ同筆と考えられる「加」一字のみの例も3cm以内に文字の末端部が掛かっている。これに対し、19では書き出しが広端縁からわずかに0.8cmの位置にあり、数cmではあるが記名者によってより広端寄りに彫り込む人とやや離れる人との差異を見いだせる。

だが、22「野」は広端縁に向かって記名しており、記銘方向としては19「皮尔□」と同じであって、むしろ同一人かと推測させる特徴も示している。この問題については、1点のみなので、特に逆向きに記名した可能性も考えられるが、「野」字の銘字された瓦の凸面は、旧IV類に分類される凸面調整の中でも、左上がりの叩き板のみではなく右上がりに擬斜格子文が現れる叩き板が一部で用いられており、新たにⅢ6と分類されている。これは、Ⅲ5に属する「小加」の記銘者が、Ⅲ6段階で記銘したものと考えられる。19「皮尔□」もⅢ6の特徴を持つことから、同一時期に二人は併存し、瓦工もしくは叩き板との変化に対応して記銘方向が変化したものと捉えられる。右上がり擬斜格子文の叩き板は補足的な使用がなされており、Ⅲ5段階よりやや時期が降と考えられることと、書体がより行書的になっていること、つまりは書字行為の練達度が高まっていることとも対応していると考えられるのである。

このように、練達度が高い段階での記銘の特徴は、より一層筆跡個性による個人差が現出するので、前述のような「野グループ」と19「皮尔□」との記名者が相違するという推定は妥当と考えられるのではなかろうか。

以上の文字を中心とした検討によれば、記銘者は常時一人以上、多いときには三人が携わったと想定される。また、通時的に存在したと考えられる「生」や「玉」の記銘者と「野グループ」の記銘者がⅢ5段階では併存している。反対に、マイナーな記銘者がそれぞれの段階に存在するようであり、そのような記銘者は通時的に存在したが記銘行為が希であったのか、あるいはそのつど記銘の補助として別人が記銘したものかは残存事例からだけでは推断できない。仮にそれぞれ別人と捉えたと、四～五人が想定されるが、あくまでも補助的な立場で記銘したものと思われる。

⑤小結

本章では、Ⅲ類（旧Ⅲ・Ⅳ類）の文字瓦について『報告書』に取り上げられなかった個体も含めて1点ずつ検討した。これは、記銘者の人数や習熟・練達度を推量するためでもあり、史料の主観的取捨を意識的に回避するためでもあった。

習熟・練達度に関しては、三例以上の出土数があるのは「小加（加）」のみであることから厳密さを欠く。しかし、各文字を比較した拙稿Aの図版からは文字の大小がはっきりしていることが特徴といえる。これらは、別筆の場合と同筆における変化もあろう。中でも同筆として想定される「小加（残画による推定も含む）」（2・4・5・6・7）は、傾向として、練達してゆくに従って大きくなり、やや行書的な連続運筆が見られるようになる。とりわけ「小加」（0013・0014・0022）と「野」（0027）というやや行書的な連続運筆で書字したと見られる記銘者を同一人として捉え、野グループとした。別筆による「加」字や先の玉グループの記銘者とも異なる、もう一方の中心的な記銘者であると見なせる。

ただし、この点に関して、旧平瓦Ⅲ類の「生」字は唯一瓦の凸面に銘字され、旧平瓦Ⅳ類の文字がすべて凹面に銘字されていることと差異をなしている点に留意する必要がある。造瓦体制と記銘者の関係を窺う上でも重要な問題を孕んでいるが、本稿では措くこととする。

また、「皮尔□〔負カ〕」（0009）と「皮尔□□」（0015）の記銘者は別人であると推断した。さらに、やや行書的な連続運筆が見られる「皮尔□〔負カ〕」銘の記銘者に関連して、入筆部の違いが特に明

瞭に異なる点などから、同じく連続運筆が見られる野グループのそれとは別人であると想定した。

以上のような検討結果から、平瓦Ⅲ類造瓦期間において野グループと玉グループという2人の通時的な記銘者が存在したと言える。加えて、連続運筆が見られる「皮尔□〔負カ〕」やしっかりとした楷書で銘字される「□〔朝カ〕」(0004)、さらに不整形で運筆状況も宜しくない「皮尔□□」や「加」(0012・0028など)を銘字した人物はそれぞれ異なると考えられる。

記銘工具については数種類想定されるうえに、筆圧なども書字条件、つまりは粘土の乾燥度合いや記銘時における瓦の置き位置の違いなどが考慮されなければならないこと、記銘者一人につき一つの記銘工具ではないようであることなどから、ここでは検討素材から外さざるを得なかった。逆に言えば、記銘者個人が専用の記銘工具というものを常備している可能性があまり高くはないという想定にも繋がるが、今後の課題としておきたい。

ところで、銘名内容の異なる29例を検討することは、筆跡鑑定の点から言えば厳正ではないだろう。また、書き手も現代とは異なる社会的状況も加味しなければならない。本章は、それらを踏まえた上で、なお言及しうる書字行為のみを提示したつもりである。

そのことを踏まえていただいたうえでではあるが、記銘者の人数については(3)(4)節で述べたように、通時的に二人(「野」グループと「玉」を中心にしたグループ)存在したと見られる。また、通時的に存在している二人については、習熟・練達度も上昇していることが窺われた。一方、事例の少ないマイナーな記銘者は、それぞれの字形が特徴的ではあるが共通性が低く、書字行為が希であったのか、あるいは記銘の補助としてそれぞれ別人が記銘したのかは不詳とせざるを得ないが、さらに数名の補助的な記銘者の存在も推測させられた。多いときには「玉」グループと「野」グループ、「小加」のイレギュラーを記名した三～四人が補助的に記銘者として存在したと想定された。

であるならば、平瓦Ⅲ類への記銘者数として少なくとも三人、多ければ六人程度が存在したと想定できる。

(6) その他の文字瓦

①平瓦Ⅱ類の文字

表3に示したように1点のみである。釈文は「□□□〔禾カ〕」(0001)としたが、拙稿Cにトレース図版を掲げたように残画の形が龍角寺瓦窯跡出土の「利」字の禾偏と類似していることから、「加刀利カ」とされているものである。釈文としては厳密に言うべきであり、五斗葺瓦窯跡出土文字瓦にも「カトリ」が存在すると早急に考えることはできないだろう。

だが、龍角寺関連文字瓦という大枠で判断した場合は、銘字されている内容がおそらく「加刀利」であると見なすことには頷首するものである。そうではあっても、本事例は正しい禾偏ではない上に龍角寺瓦窯跡出土の禾偏は「未」に横画が1増画されたものとも異なり縦画が無い。加えて、字形も不整形であることから識字層ではない人による模倣的な文字と推定される。ただし運筆状況や筆勢は悪くはないので、瓦に銘字する行為自体はやや練達しているものと考えられる。

ここで、平瓦Ⅰ類の「赤加」などを銘字した「赤・阿」グループの検討をするためにも「加」字を検討する。この文字列は、古くは「赤丸」や「森加」とも読まれ、人名の可能性も想定された残画²⁴は、その後より良い事例から指摘されている²⁵ように「赤加」として間違いはない。

行論の関係上、龍角寺瓦窯跡の文字瓦との比較した上で検討したい。

②「加」字の類型化と記銘者

龍角寺瓦窯跡出土の瓦は、現在ほぼ窯業史研究所に所蔵されており、その中において27点の文字

瓦が確認される（1点は喪失し、拓本のみが残存）。12点がすでに『調査報告』により報告されている。

文字種としては次のようなものが見られる。

「加刀利」4点・「□□□〔加刀利カ〕」1点・「加刀入」4点・「加刀□〔利カ〕」1点・「加刀」4点・「刀□〔利カ〕」2点・「□〔刀カ〕入」1点・「□入」1点・「加」5点・「□〔加カ〕」1点・「加の習書か（複数）」1点・「加刀（複数・習書か）」1点・「□（渦巻き記号・両面）」1点。

一見して諒解していただけるように、五斗時瓦窯跡出土文字瓦の文字種と比較すると、龍角寺瓦窯跡出土の文字は種類が少ない。これらが文字列として表している内容も、渦巻き記号を除くと「カトリ」という1種類のみである。

ここにおいて、Ⅲ章で描いていた五斗時瓦窯跡出土平瓦Ⅱ類の赤グループ・阿グループの文字について、「加」字を媒介にして比較検討することとしたい。「加」字が双方の瓦窯跡出土文字に共通していることが、両者の媒体という前提となっているからである。また後述するが、結果的には記録者が相通じている可能性が考えられる点も重要な視角となると考えるからである。

なお、先に断っておくと、Ⅴ章で瞥見した平瓦Ⅲ類に銘字される「小加」「加」の「加」字については検討から除外している。なぜなら、平瓦Ⅱ類とⅢ類の時期差という点も別事例と想定されるからである。だが何よりも、拙稿Aにおいても詳細に解説したように平瓦Ⅲ類の「加」字（例えば0013）にはセリフと言われる運筆方向とは無関係な入筆部を持つという特徴を有しており、明らかに別記録者として判断しうるからである。

以上の点を踏まえて「加」字を通覧すると、大きく分けて2種類のグルーピングが可能と言える。当然、この2群には少なくとも二人は存在するであろう記録者の違いが現れていると捉えられる。解説は後述するが、この主要なグループを便宜的にそれぞれ1型・2型として呼称することにする。

それでは、まず「加」1型とした一群の特徴を挙げることにしよう。残画による推測も含めて、五斗時瓦窯跡出土点数は21、龍角寺瓦窯跡出土点数は2点となっている。

文字列としてみると、「加」字の上に「赤」が位置するのは21点中14点（1000・1001・1024）、「加」字の下に「真」字が置かれるのは3点（0113・1016・1017）存し、内2点は「赤」字も確認しうる。このことから、五斗時瓦窯跡出土の赤グループ記録者は「赤加真（アカ（ハ）マ）」を表示するために銘字したと考えて間違いない。

しかしながら、龍角寺瓦窯跡出土の2点はいずれも「加刀」と銘字されており、「カトリ」を表示することが目的であったと考えられる。その上、当該例は2点とも無段式丸瓦凸面の狭端縁部分に銘字されるので、瓦の種類が異なる。また、2点それぞれの記録方向が異なる点も何らかの事情を示唆しているものとするが、ここではひとまず措くこととしたい。

1型と分類した特徴の中で、もっとも2型との差異が顕示しているのは字形であり、傍の「口」部を「乙」字のように記しているという点である。これは、「口」の連続運筆を見ながらも、最初の縦画を脱落して模倣したことに起因する字形と思われる。

次に、筆順が挙げられる。主に「ノ→フ」という順で記され、筆順が判明する14点のうち11点（0897・1000・1001・1024）を占める。ただし、3点（0113・1017・1022）ほど「フ→ノ」となるものがある。さらに、龍角寺瓦窯跡出土の2点は、それぞれ「ノ→フ」・「フ→ノ」となっており、必ずしも、明白な記録者特有の特徴とは言いがたい。この75%という一致率を高いとみるか低いとみるかは主観的になるので、個人内変動の範囲とも捉えられるが判断を留保しておきたい。

一方、2型の「加」字群は数としてはそれ程多くない。五斗時瓦窯跡出土は3点（0983・1001・1014）で、龍角寺瓦窯跡出土のものでは6点を数えるのみである。

2型の字形的特徴は、1型とは「口」の旁を「フ・ノ」のように書く点が大きな相違点となっている。1型と2型とで数の多寡が見られるが、2型が1型の個人内変動や練達前段階などと片付けられないほどの違いと言ってよい。

左側「力」部の筆順も、筆順が判明する7点中6点（約86%）までが「フ→ノ」となっており、1型の傾向とは異なっている。

このように1型と2型が分類されるとするならば、1型の箇所ですべての記銘者と書字される文字列との関係も対応関係にあったと推測することができる。2型の「加」字は「(前欠)加皮真」・「阿加皮(後欠)」・「赤加口〔真カ〕(後欠)」となっており、文字列としては「阿加皮真(アカハマ)」が基本と考えられる。この使用文字は同じアカハマを表示していると思われるが、「赤加(真がない例の方が多い)」と銘字されることがほとんどの1型と対比されよう。

また、龍角寺瓦窯跡出土の「加」の文字列例は「加刀利」・「加刀末り(利)」・「加刀〈軒平〉」・「加刀木り(利)」・「加(後欠)」・「加刀入」となっている。2点のみだが丸瓦凸面に「加刀」とのみ銘字される龍角寺瓦窯跡出土「加」字1型とは、瓦の種類文字列とも異なることが看取される。

さらに、判別する根拠とまではいかないが、2型の「加」字の運筆状況はあまり芳しくない。強弱のメリハリが不適當で、線がよれている。字形的にも不整形であり、文字の理解・習熟度ならびに書字行為の練達度がそれ程高くないことが想定される。

上述の分類には含めていないが、龍角寺瓦窯跡出土「加」字2型に分類すべき記銘者における書字行為の初期段階、いわゆる習書と思われるものも存在している(『調査報告』図版11—8)。1枚の軒平瓦に5点の「加」を記しているが、隣の「口」部が「フ・▽・」とバリエーションに富んでいる。この他、同様な「口」の字形を持つものが6点存在しており、合わせて7点のいずれもが2型として字形が固まってゆく過渡的段階のものと考えられる。個人内変動を云々する以前のものなので、特徴を抽出することをかえって困難とするので類型に含めなかったが、2型の記銘者の銘字と見なして大過ないだろう。

また、1'型とでも呼称すべき字形のものがわずかながら存在する。五斗時瓦窯跡出土のものが1点(1021)、龍角寺瓦窯跡出土のものが2点(No. 5・6)を数えるのみである。いずれも「力」部の筆順は「フ→ノ」となっており、2型の傾向と一致する。しかしながら、「口」部の字形が「ㄣ」(乙字の最後に下方向に縦画を向けるもの)に作り、1型を模倣した、もしくは字形的な影響を受けたものと思われるのである。この折衷的な字形は、やはり1分類に準じて扱う必要があると考える。

文字列としてみても、五斗時瓦窯跡出土のものは「赤加(後欠)」、龍角寺瓦窯跡出土のそれは「加刀×・人(ともに「入」のことか)」となっている。それぞれ「アカハマ」・「カトリ」を銘字したと見なして間違いはないが、文字列の傾向としても1・2型いずれとも異なることから、やはり少数派の別記銘者を想定するのが穏当だろう。

この1'型の「加」字は、五斗時のものは欠損していて不明だが、龍角寺瓦窯跡出土の2点はいずれも「フ」部の終筆部の撥ねが「ノ」よりも左に延びている。むしろ横画を引き、「コ」字状を呈してから撥ねており、「加」字の字形認識という点でも特徴的である。

さて、最後に龍角寺瓦窯跡出土の1点のみではあるが、見本を書いた、もしくはそれと同等の識字者が書いたと見なせる例(No. 1)に言及しておこう。

拙稿C掲載図をご覧頂ければ直ちに諒解されるだろうが、字形が群を抜いて整っており、連続運筆も見せかけではなく筆勢が良いことが最たる特徴である。「加」の「フ」部の終筆部及び「利」の「リ」部の終筆部の撥ねが、それぞれ流れて左斜め下方向への払いとなっ

撥ねはしっかりとしている。「口」部の連続運筆が「く」となっていることは、他の、とりわけ2型の「加」字を記銘した人の模倣の対象となっている可能性が高い。また、「利」字の禾偏は後世の行・草書とは異なる連続運筆を示しており、本字の記銘者が独自に崩したものと考えられ、このことも文字の理解度が高かったことを裏付けていると言える。

以上のような字形的な特徴もさることながら、文字の記銘位置も異なっている。これらのことから、本字の記銘者は、やはり1・1'・2型のうちのいずれかの記銘者が練達した後の字体であると見なすことは難しい。当該文字列は平瓦凹面右側広端縁に沿って瓦の短軸方向で左側側縁と広端縁に向かって斜めに銘字しており、長軸方向に上下を取る他のどの文字列の記銘位置とも異なっていることを、例外と見なす方が恣意的に過ぎるだろう。

これらのことから、「加」字は五斗時・龍角寺瓦窯跡を通して3類型存在し、四人の記銘者の存在を推定することとなった。

③「加」字の文字列と類型化の検証

前節において「加」字を3類型化したのが、その前後に記された文字を対応させて文字列としても言及した。表示している内容は「アカハマ」・「カトリ」であっても、使用している文字が異なっていることについてである。

単純に使用文字の違いは記銘者の違いと見なせるだけの字形などの根拠も提示したが、なお、類似や偶然による差異の範疇と捉えられるというような異見も出されるかも知れない。

本節では、前節で対応関係としてあげた文字の中で、他類型と重複する文字を検討してその違いを明らかにしておきたい。

まず、もっとも明瞭な事例として「利」の字には記銘者の個人差が顕示していることが挙げられる。

前節で解説した、整った連続運筆のNo. 1に見える「利」字はどうか。本事例については、崩れており、禾偏の縦画が横画より下から始まっているが基本的に正しい字形と言えよう。

一方、2型に3点ほど見られる「利」字は、これも前述したようにNo. 2「未リ」・No. 4「利」・No. 7「木リ」となっており、禾偏に対する認識の揺れが認められる。字形から見てNo. 2もしくは7が前後し、4へと繋がるものと考えられる。特に、1字の構成としてもNo. 2・7は「リ」が2字目の「刀」の横にあり、かなり位置がかけ離れている。文字の理解度が高まったとみられるNo. 4では、ほぼ禾偏の横に位置しているが間隔はやはり広い。

この他にも、現在拓本のみしか残存していないNo. 27について、「未」の右半分と「リ」が残画として認められ、No. 2と同時期の銘字と想定される。また、No. 15は左側のみ残存する個体だが「羊」に近い残画であることから、ほぼ同じ扱いをしてよいものと思われる。

さらに五斗時瓦窯跡出土平瓦Ⅱ類の「□□□〔禾カ〕」(0001)も、残画から判断すると2型、中でもやや習熟したNo. 4に近いものと思われるが、完存しない「利」字の禾偏の、さらに1減画された字形を比較対象とするのは不可能で、それを「加刀利」と釈読することも恣意的なので、可能性を指摘するに止めておきたい。

この2型の「加」に対応するものの中で1点、No. 12のみ「加刀入」という文字列で、「入」字を用いている。「入」字は1'型の「×・人」とは異なり正しい字形をしている。また、これのみが2型の中で「力」部の筆順が「ノ→フ」となっている点はやや異例ともとれる。しかしながら、類型化しなかった過渡期段階としたものの中で筆順が判明する5点の内3点が同様の筆順となっていることからすれば、過渡期的段階における書字行為では筆順は定まっていなかったと捉えられよう。「力」部は欠けているが、「口」を「リ」と記し、「入」と対応するものも2型への過渡期的段階の個体と見なせ

よう。これを敷衍すれば、他の正しい「入」字が残る No. 13 についても、残存していれば 2 型だった可能性が指摘できよう。

次に、五斗葺瓦窯跡出土 2 型「加」字は文字列として「(前欠) 加皮真」・「阿加皮 (後欠)」・「赤加 □〔真カ〕 (後欠)」となっており、「阿加皮真 (アカハマ)」を基本的に表示していたと考えられることは前述した。

ここで銘字される「阿」字についてを取り上げる。まず、五斗葺瓦窯跡出土の「阿」字 (阿グループ) 13 点の内 12 点までもが、字の構成と字形という視点から「加」2 型の記銘者と同一と見なしてよいだろう。例外とした 1 点 (0126) は「阿□・阿」と記されるもので、構成・字形が整っていること、連続運筆も筆勢良く模倣ではないと見られることからみて別筆と見なして大過ない。同一系統の字形が他に見られないことや、少なくとも 2 列にわたって銘字されていることから鑑みると、識字層による臨時的な記銘、憶測を逞しくすれば「阿□」字の手本として銘字したものと推測される。

2 型の「加」字は、上述のような例外 1 点を除く「阿」グループの主要記銘者でもあったと考えられる。しかしながら、「赤」も 1 点存在することや、龍角寺瓦窯跡出土事例の文字列も一定していないところから、「朝布」のようにほとんど固定的に銘字することはなかったものと思われる。

これに対して 1 型は、「加」字の上に結びつくのはすべて「赤」字であり、下に 3 点ほど「真」字と結びついて「アカ (ハ) マ」を表示している。

ここに銘字される「真」字は、点がなく「直」に近い字形を示しているが、1016 は下に点がある「真」という字形になっている。2 型において「真」字が残存する 0983 は「目」部が丸めに潰れていることと、横画の連続運筆の存在から別筆と判断して大過ないだろう。

また、1 型の龍角寺瓦窯跡出土の文字列も前節で述べたように「加刀」であり、瓦の種別も異なることなどから各類型の記銘者は別人であると考えられる。

④その他の「加」字事例の検討

まず、成田山靈光館所蔵瓦の一つとして、前述した「朝布」に加えて加 2 型の「加刀利」1 点の存在が知られる²⁶⁾。「加」字は、「口」部が「つ」型を呈しているが筆順は「ノ→フ」で特徴に合致していない。「利」字は正しい禾偏で記されているほか、偏と旁の文字構成のバランスが良い。以上のことから、本事例は加 2 型に属し、文字の理解と書字行為の練達度からみて後期段階における銘字と見なせよう。

次に、篠崎論文²⁷⁾には前述の「朝」のほか「加刀利」2・「加刀」1・「赤加」2 点が掲載される。この内、他に所見がないものに「加刀利」2 点と「赤加」1 点がある。「赤加」の「加」字は「口」部の形状から 1 型に属すると思われるが、両字共に字形的には崩れていることから模倣段階の銘字と考えられる。「加刀利」の 2 点は、ともに加 2 型に属すると思われるが、一方は禾偏を正しく記し、他方は「木リ」という字画形態の上に、文字構成としても左右が上下左右に離れて龍角寺瓦窯跡出土 No. 7 のそれとほぼ一致する。

また、当事例を媒介とすると「リ」部分が「入」の形を呈する場合も有ることが看取でき、龍角寺瓦窯跡出土 No. 14 の残画や、『確認調査報告書』14 図の 11 は「赤加」と推測しているが、これも「刀(フ部分が欠損) 入」の残画と見なせることになるのである。このように複数点の事例が存在するとなると、V 章における検討において、加 2 型の上記のような違いは個人内変動と総合的な習熟度の差異として捉えたが、「リ」部分を離して「入」のように書く癖のある記銘者が別人として存在した可能性も残しておく方が穏当と言えよう。

多宇氏論文²⁸⁾にも他に見えない拓本として「加刀利」2・「加刀入」1・「加刀」2 点・「赤」1 点

を載せる。第2図の枝番に従って重複するものもここで瞥見しておく。

2・3は「加刀」で加1型に属するものである。筆順が「ノ→フ」となる点、丸瓦凸面に銘字されていることも含めて、龍角寺瓦窯跡出土の事例と一致する。

4の「加刀」は加2型に属し、筆順も「フ→ノ」となっているが、字形的に習書に近いものと言える。また、丸瓦凸面に銘字されているとのことなので、先に2型の特徴としてあげた瓦の種類という点では明確な基準はなかったという可能性が指摘されるものである。

5の「加刀利」、6の「利」も共に丸瓦かもしくはそれに近い種の凸面に銘字されている。多字氏は「利」字の禾偏を示偏と捉えられているが、龍角寺瓦窯跡出土の見本と見なした事例と同じ字形と筆順である。ここでの「加」字の「口」部は連続運筆になっておらず、しっかりと「口」を書いている。いずれにしても、識字率が高く書字行為に練達した人物の存在を推測して誤りない。

7は「加刀（後欠）」だが、平瓦凹面に銘字されている。「加」の筆順は「フ→ノ」で、運筆状況からみて2型の半ばから後半にかけての段階と思われる。

8は「口〔加カ〕刀利」で平瓦凹面に銘字されるが、5・6と同一記録者であることは字形・筆順からして間違いない。

9は平瓦凹面に銘字された「加刀入」で、加2型に属するものである。龍角寺瓦窯跡出土No. 12よりは字形が整い、運筆状況も良好で筆勢も悪くないことから、本事例の書字行為の方が後であると考えられる。

15の「赤加」は完形する平瓦凸面広端縁付近に銘字されたものである。他書でも取り上げられることが多いもので、両字ともその文字の代表例というものである。「加」字について言えば、筆順は拓本の関係上不詳だが、「口」部が「乙」形を呈する1型の基本形と言える。文字列のバランスと字形が比較的整っていることから、1型でも半ば以降における銘字と見なせよう。

16は平瓦凸面に「赤（後欠）」字が残るものだが、字形的には不整形である。「赤」字の記名期間中の初期段階、もしくは瓦の整形などを考慮すると記名期間の後半段階での模倣による銘字と推測される。

さらに、宇野信四郎蒐集瓦の中にも「加刀」・「加」各1点が紹介²⁹されている。

23「加口〔刀カ〕」は「口」部を一見したところ加2型に見える。しかし、わずかに残画が見えて「2」のようでもある。「カ」の字形と「ノ→フ」という筆順や丸瓦凸面に記名されることを参看すると、龍角寺瓦窯跡出土のNo. 25・26に近く、加1型に属するものと言えよう。「刀」字の「ノ」が見られないことや、「加」字の上下が潰れている字形からして、1型記録者における書字行為の早い段階でのものと見なしうる。

24「加」も丸瓦凸面に銘字される。「口」部は加2型に見える。しかし、「フ」部分が不自然に2段階に折れることからすると、2型を模倣したものと考えられる。

さらに、住田正一コレクション瓦中にも3点（前節で推定した082019番も加えると4点）の「加」字の存在³⁰を知ることができる。

082014番は平瓦凹面に「加刀入」と銘字される。「加」字は、「口」部が「つ」形を呈していることから加2型と見なせる。「カ」部の筆順が「ノ→フ」という点は個人内変動の範囲内である。文字列の中心軸に対して右に傾いているのは、記録者が平瓦の長軸方向から左にずれた位置で書字行為を行ったからと見なせる。V章で前述したように、「入」と続く文字列は2型の特徴とも合致し、正しい字形であることや筆勢がまずまずであることから、書字行為を行っている期間中における半ば以降の銘字と考えられる。凸面側に、平瓦Ⅱ類に後続すると考えられる平瓦Ⅱ類の正格子の叩き板文様が

残されていることも傍証の一つとなるだろう。

次に 082015 番について。「加刀」と銘字され、「加」字「口」部が「乙」形を呈する加 1 型である。「カ」部の筆順は「ノ→フ」となり、1 型の特徴と一致する。また、丸瓦凸面に銘字されることと「リ」音部を省略する点も加 1 型を含む文字列の共通性を再認識させる。

082017 番は平瓦凸面に「口〔赤カ〕加」と銘字されるものである。口は右側 3 分の 1 程の残画だが、「赤」と見なしてよからう。「加」字は「口」部が典型的な「乙」形を呈しており、加 1 型に分類される。「カ」部の筆順も「ノ→フ」となり、下に文字列が続かず「赤加」で完結するという傾向も、1 型のそれと一致している。

最後に宇野信四郎蒐集瓦に上述していない 1 点が掲載されている。この 24 は釈読未詳とされている。また、出土地或は採集地に「？」が付されているが、前述した 23「加刀」・24「加」とは異なり、類似の文字列が知られないことも加えて鑑みると混入した可能性も想定される。ここでは検討の対象外とする。

以上、簡単にではあるが検討した結果、管見に入った限りの龍角寺関連文字瓦の赤グループを始めとした「加」字を含む文字列は、すべて V 章で類型化した 1 型か 2 型に属するものであることが明らかになった。

⑤小結

以上、各節の検討結果から、龍角寺瓦窯跡出土文字瓦出土文字瓦は三人の記銘者と一人の臨時（見本と思われる）の記銘者の計 4 人により銘字されたと推定される。併せて、龍角寺瓦窯跡出土平瓦 I 類の文字瓦における赤・阿グループ記銘者も少なくとも三人が中心的に存在したと見なされる。また、見本を銘字した人は「阿」字の部分で述べた通りだが、その他の模倣者の存在も推測されることから、臨時記銘者も少数だが存在したと考えられる。

しかし、見本が 1 点に限りなく近い数しかなかったかということ、そうとは言い切れないだろう。類型化した「加」字と対応する文字列が複数存在することとその混在化からすれば、見本とした文字列例が複数存在したのと考えられる。

また、見本は 1 類型に対して 1 種類とも言えないだろう。見本は複数存在する上、各記銘者がそれぞれ参照した可能性も想定できる。その実態も、「赤」字の同質性（筆順はほぼすべて同じ）から鑑みると、「赤加真」を手本として銘字する際に筆順までも擬えて記したものと思われる。推測が過ぎるが、単純な字形は見たままで似せ、筆順に個性が反映していると考えられたが、やや字画の多い字については書いているところまでしっかりと見倣った、それにより筆順も均一化したと考えられなくはないだろうか。

最後に「赤」グループの中で特殊と見なされる「赤久在」として釈読した個体について述べておきたい。

文字自体の釈読をまず確認しておく必要がある。「赤」と「在」についてはほぼ問題ない。問題は『報告書』以下で「久」とされてきた文字についてである。拙稿 C において「文」の草体にも見えるのではないかと想定した。だが、現在も類例や表記された内容を推測しうる傍証を見ない。本稿でも『報告書』などに従い、今しばらく「赤久在」としておく。

本章での検討結果から、少なくとも三～四人程度の記銘者が認められた。その中でも中心的に記銘している 3 人については龍角寺・五斗時瓦窯双方で記名を行っていたが、同一人においても各瓦窯により銘字する内容が異なっていた。このことからすれば、各瓦窯により分担や請負といった契機はともあれ発注レベルでの差異が存在していたが、造瓦従事者の一部は両瓦窯に関係を持っていたことを推測せしめるものであることを述べた。これが文字の記名に止まるものなのか、瓦についても同様な

のかどうかは別に検討する必要がある、瓦側の再調査の結果を待つことにしたい。

⑥丸瓦Ⅰ類の文字

最後に、丸瓦に銘字された事例について述べておく。『報告書』において「人（報告書番号293）」と釈読されている個体については、傷と判定して採らないことは記述の通りである。

すると、表1に示したように「皮止戸」（1226）1点を数えるのみとなる。釈文・図版に関しては前稿Ⅲ章で触れたとおりであるのでここでは繰り返さない。文字は3文字とも2cm四方に収まるように、かなり小ぶりなものである。筆致は流麗で、運筆状況もスムーズに転折を行っていることから、識字層である上に書字行為に慣れた人物によるものと見なされる。

（7）おわりに

本稿では、五斗葺瓦窯跡出土文字瓦の再調査成果を中心にし、関連して龍角寺瓦窯跡も含めた龍角寺関連文字瓦を総体的に検討した。まず、前稿での文字釈読の結果ををふまえて、1438点の文字・記号もしくは文字の残画が見られる点数を基とした。

文字の釈読については、平瓦Ⅰ類を拙稿B・Cで、平瓦Ⅲ類（旧Ⅲ・Ⅳ類）を拙稿Aにおいて検討したものを、再編成している。中でも、瓦種別で最多数の平瓦Ⅰ類の文字瓦について、従来の類型化とは異なる分析結果を得たが、他の文字列に関しても同様に筆跡鑑定における分析視角を用いて検討を行った。これにより、文字の類型化と記銘者とが対応し、造瓦の一端に（書字行為を行う人という狭義の意味で）関わった人員と人物像の大枠を想定することが可能となると考える。しかし、本稿は私見を述べる場ではないので、類型化と対応する人員のみを推定した。具体的には、各章末もしくは「小結」としてまとめているのでここでは繰り返さないが、考察の射程はそうように広がるものである。

また、文字列が示す内容についても検討を加えたいが、紙幅もかなり費やしていることと私見が多分に入ってしまうことを考慮するに本稿では述べるべきではないと考えるのでここで締め括りたい。

註

- 1 山路直充・中村友一・清地良太・播摩尚子「龍角寺五斗葺瓦窯跡出土文字瓦の分析—平瓦Ⅲ類の中間報告—」『古代学研究所研究紀要』第一号、2006。
- 2 拙稿「龍角寺五斗葺瓦窯跡出土の文字瓦—平瓦Ⅱ類を中心に—」『古代学研究所紀要』第三号、2007。
- 3 拙稿「龍角寺関連の文字瓦について」『文字瓦・墨書土器のデータベース構築と地域社会の研究』2007。

ここでいう「龍角寺関連文字瓦」とは次のような概念で使用する。すなわち、龍角寺出土のもの・五斗葺瓦窯跡出土のもの・龍角寺瓦窯跡出土のもの、加えて近辺の遺跡から出土する二次利用されたものも含めた総称とする。

- 4 拙稿「龍角寺関連文字瓦の釈読—文字から知られることと展望—」『房総と古代王権』高志書院、2009。
- 5 石戸啓夫・小牧美知枝『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗葺瓦窯跡—栄町病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』印旛郡市文化財センター、同発掘調査報告書第61集、1997。
- 6 字画構成や運筆状況に関しては、拙稿A・B・Cと同じく現在の筆跡鑑定の分析視角を採り入れている。吉田公一『ポイント解説 筆跡・印章鑑定の実務』東京法令出版、2004。その他、各弁護士事務所のホームページも参照。

*筆跡鑑定の視点を採り入れた文字瓦分析視角はおおよそ以下の通りである。

- ・前提 {書体・字体（筆跡）} → 文字列からみて配字、個別に字画構成・字画形態・運筆状態へ。
- ・各分析視角

①筆順：主要分析視点とはなるが、個人内変動による例外も考慮すべき。〈正誤とは言わない。順序による分類。〉

- ②字体（形・大きさ）：形は総合的に記銘者の癖により図形的な差異が表れる。大きさは、模倣しながら、もしくは筆勢が翼伸びやかな場合に大きくなる。小さいものでも不整形の時は書字行為に自信がない場合がある。
 - ③工具の筆法（運筆・筆法）：運筆は、記銘工具が各筆画最初に粘土に触れる際の動きを入筆、そこから字画の始まりを始筆、途中を送筆、最後を終筆とする各部。この各部をそれぞれ比較する。
 - ④筆勢（線のゆがみや粘土の動き）：線の歪みやぶれで筆勢の強弱を判定。練達度の違いなどが表れる。
 - ⑤筆圧（彫り込みの浅深）：記銘工具の形状、粘土の乾燥度にも影響されるが、おおよそ書字行為の練達度合いを示している。同一筆画内に強弱がある場合、練達度が低いための筆圧のブレ、もしくは毛筆による書字行為の経験者という二通りの想定が可能。筆勢・字形などにより判別可能。
 - ⑥想定される記銘工具の形態：記名工具先端の形状や粘土に対する角度など、記銘者ごとに差異があることも考えられる。
- *この他、記銘位置や造瓦技法との対応関係など、瓦側の情報（鑑定資料の原体として）をも加味することも必要で参考にしうるものである。相互に補完すべきであるが、本稿は主に文字情報のみを扱う。
- 7 東野治之「龍角寺瓦窯の文字瓦と金石文」『官営工房研究会会報』6、1999。
 - 8 小牧美知枝「龍角寺（五斗時）瓦窯と文字瓦」『官営工房研究会会報』6、1999。同「質疑応答（司会 金子裕之）」『官営工房研究会会報』6、1999。
 - 9 西崎亨「龍角寺五斗時瓦窯出土文字瓦に見る文字生活―筆順・字形と文字の習熟度―」『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』51、2004。
 - 10 米田幸雄・小牧美知枝『大畑Ⅰ―3遺跡―米町ガソリンスタンド建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』印旛都市文化財センター、同発掘調査報告書第84集、1994。
 - 11 大原正義『米町龍角寺確認調査報告書』千葉県教育委員会、1989。以下『確認調査報告書』と略す。
 - 12 すでに『出土文字資料集成（「千葉県の歴史資料編 古代」別冊）』（千葉県、1996）でも引載されている。しかしながら、前稿で類型化した字形とは異なる字形で復原していること（第14図のいずれも）、誤った文字を推測していること（図14の11）、字画の対応箇所を誤っていること（図14の10）などの難点により用いるべきではない。
 - 13 篠崎四郎「龍角寺文字瓦攷」『考古学雑誌』30―4、1940。
 - 14 多宇邦雄「下総龍角寺文字瓦考」『古代探叢Ⅱ』滝口宏編、早稲田大学出版会、1985、第2図。同「下総龍角寺の一考察」『研究紀要（早稲田実業学校）』22、1988、第1図。
 - 15 小倉博・三門準編『北総の原始古代』資料図録第3集、成田山靈光館、1982。
 - 16 成田山靈光館編『一考古遺物にみる一祈りとまつり』成田山靈光館、1989。
 - 17 田熊信之・天野茂編『宇野信四郎蒐集 古瓦集成』東京堂出版、1994。
 - 18 大川清編『住田正一蒐集古瓦図録』六一書房、2006。
 - 19 成田山靈光館、註15書。
 - 20 多宇邦雄、「下総龍角寺の一考察」（『研究紀要』22、早稲田実業学校、1988）第6図9。
 - 21 『昭和四十六年度 下総龍角寺調査報告』（千葉県教育委員会、1972・以下『調査報告』と略す）を始め、『企画展 房総の古瓦』（千葉県立房総風土記の丘、1978）・多宇邦雄「下総龍角寺について」（『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集編纂委員会編、早稲田大学出版会、1980）・『出土文字資料集成（「千葉県の歴史資料編 古代」別冊）』（千葉県、1996）などに写真や拓本が掲載されている。
 - 22 『米町大畑Ⅰ―2遺跡―県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書―』（財）千葉県文化財センター、1985。
 - 23 註21『調査報告』所収。他にも拓本2点（図31・58）に文字瓦が存するが、窯業史研究所蔵ではない。前掲『千葉県の歴史 資料編』などにも拓本が採録されているので、そちらを参照されたい。
 - 24 篠崎四郎「龍角寺文字瓦攷」（『考古学雑誌』30―4、1940）川戸彰「古代・中世の龍角寺二」『千葉県の歴史』6、1973。多宇邦雄「下総龍角寺について」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集

編纂委員会編、早稲田大学出版会、1980 などがある。

25 早くに見学会記ではあるが「赤加」と読まれることもあった。(奥山市松「松濤雑話(其二) 安食八生方面見学の一日」『房総郷土研究』1-3、1933)。また「赤加・森加」と推測もされた。(服部勝吉「龍角寺塔心礎と古瓦」『寶雲』4、1932)。近年の研究において、主要なものを掲示すれば、多字邦雄「下総龍角寺考」(『研究紀要』19、早稲田実業学校、1985)・同「下総龍角寺の一考察」(『研究紀要』22、早稲田実業学校、1988)・同「下総龍角寺の調査概」(『研究紀要』25、早稲田実業学校、1991)・同「下総龍角寺の建立について」(『研究紀要』27、早稲田実業学校、1993)・杉山晋作「古代印波の分割」(『王朝の考古学』大川清先生古稀記念会編、雄山閣出版、1995)や東野治之「龍角寺瓦窯の文字瓦と金石文」(『官営工房研究会会報』6、1999)などがあり、とりわけ『報告書』以降は、「赤加」と釈読することは共通認識になっている。

26 小倉・三門、註15書所収。

27 篠崎、註24論文第三図。

28 多字邦雄「下総龍角寺文字瓦考」『古代探叢Ⅱ』滝口宏編、早稲田大学出版会、1985、第2図。同「下総龍角寺の一考察」『研究紀要(早稲田実業学校)』22、1988、第1図。図版は共に同じ。一部は多字、註20・21論文掲載図と重複する。

29 田熊・天野編、註17書所収。

30 大川編、註18書。

(中村 友一)

2. 記録率

平瓦の推定枚数の算出 記録率の算出に当たり、母数となる平瓦の推定枚数の算出する必要がある。算出方法は隅総数算出法と重量算出法の2種類の手法を用いた。隅総数算出法は残存する隅の総数を4で割った数を平瓦の推定枚数とする手法である。重量計算法は、瓦の総重量を完形瓦の重量で割った数を平瓦の推定枚数とする手法である。

平瓦Ⅰ類の推定枚数 重量計算法に用いる平瓦一枚あたりの想定重量は表7のとおり算出した。平瓦Ⅰ類の完形品は8点確認されており、これらの平均となる4,590.00gを平均重量とした(表7)。ただし、平瓦Ⅰ類は全長の異なるⅠ1とⅠ2では重量が最大で2,000g近く異なることから、参考値としてⅡ1とⅡ2それぞれの平均重量を求め、さらにその数値から平均を求めた5,040.17gを想定重量とした算定も行った(表7)。その結果平瓦Ⅰ類の推定枚数は約557~612枚となっ

分類	完形品重量(g)
Ⅰ1	3,711
Ⅰ1	4,450
Ⅰ1	4,028
Ⅰ1	3,593
Ⅰ1	4,630
Ⅰ1	4,427
Ⅰ1 平均値(①)	4,140
Ⅰ2	5,945
Ⅰ2	5,936
Ⅰ2 平均値(②)	5,941
Ⅱ類の平均値	4,590.00
(①+②)/2	5,040.17

表7 平瓦Ⅰ類の完形品重量

	Ⅰ類の平均重量の場合	Ⅰ1・Ⅰ2の平均重量から求めた場合
総重量(g)	2,807,107	2,807,107
1枚の想定重量(g)	4,590.00	5040.17
推定枚数	611.57	556.95
文字瓦数	406	406
文字瓦の割合(%)	66.39	72.90

表8 平瓦Ⅰ類の推定枚数と文字瓦の割合(重量計算法)

	平瓦Ⅰ類
隅数	2,119
推定枚数	529.75
文字瓦数	406
文字瓦の割合(%)	76.64

表9 平瓦Ⅰ類の推定枚数と文字瓦の割合(隅総数算出法)

た(表8)。次に隅総数算出法では、隅の総数が2119点となり、それを4で割った530枚が想定枚数となった(表9)。

平瓦Ⅱ類記銘率の算定(表7・8) 文字瓦数は文字に基準点を設定し、定点ごとにその数を数え、その最大値を個体数とする数量処理をおこない算出する(上原1984)。この方法を用いることによって、1文字が数破片となっている際のダブルカウントを防ぐことができる。今回、文字点数は石戸・小牧1997の基準点による算出結果を引用し406点として計算した。この枚数を文字瓦点数で割った割合は、重量計算法では66.39%~72.90%となり、隅総数算出法では76.64%となった。

平瓦Ⅲ類記銘率の算定(表10) 平瓦Ⅲ類は、木目分類・叩き分類ごとに記銘率を算出した。重量計算法に用いる平瓦一枚あたりの想定重量は、木目分類が α に該当するものは完形品の平均重量である5,877.00gを、木目分類が β に該当するものは唯一の完形品の重量である3,404.00gを用いた。

木目分類では、まず α は、推定枚数が重量算出法で111.67枚、隅総数算出法で126.50枚となる。文字瓦は1点のみであり、文字瓦の割合は重量算出法で0.90%、隅総数算出法で0.79%となる。 β は、推定枚数は重量算出法で80.16枚、隅総数算出法で80.25枚となる。文字瓦は28点であり、文字瓦の割合は重量算出法で34.93%、隅総数算出法で34.89%となる。

叩き分類では、Ⅲ1b類は、推定枚数が重量算出法で28.24枚、隅総数算出法で31.00枚となる。文字瓦は1点のみであり、文字瓦の割合は重量算出法で3.54%、隅総数算出法で3.23%となる。Ⅲ5は、推定枚数が重量算出法で68.94枚、隅総数算出法で66.75枚となる。文字瓦は24点であり、文字瓦の割合は重量算出法で34.18%、隅総数算出法で35.96%となる。Ⅲ6は、推定枚数が重量算出法で8.61枚、隅総数算出法で10.75枚となる。文字瓦は4点であり、文字瓦の割合は重量算出法で46.45%、隅総数算出法で37.21%となる。Ⅲ7は、推定枚数が重量算出法で0.36枚、隅総数算出法で0.50枚となる。文字瓦は1点であり、文字瓦の割合は重量算出法で0.45%、隅総数算出法で0.62%となる。

叩き板 ・分類	叩き具	木目 分類	補足叩き	広端隅 切り落し	完形品 重量	文字瓦 点数	重量計算法				隅数計算出法				出土文字		
							重量 (g)	個体数	出土率 (%)	記名率 (%)	木目分類内で の記名率(%)	隅数 (個)	個体数	出土率 (%)		記名率 (%)	木目分類内で の記名率(%)
Ⅲ 1 a	Aa	α	なし	0 / 7	5877	0	15068	2.56	2.29	0.00	0.00	10	2.5	1.98	0.00	0.00	「生」1
Ⅲ 1 b	Ab		端部中心	46 / 61	5877	1	166259	28.24	25.29	3.54	0.90	124	31.00	24.51	3.23	0.79	
Ⅲ 2 a	Ba		なし	1 / 5	5877	0	17941	3.05	2.73	0.00	0.00	13	3.25	2.57	0.00	0.00	
Ⅲ 2 b	Bb		端部中心	34 / 45	5877	0	128115	21.76	19.49	0.00	0.00	84	21.00	16.60	0.00	0.00	
Ⅲ 3	C		端部中心	21 / 26	5877	0	147592	25.11	22.49	0.00	0.00	115	28.75	22.73	0.00	0.00	
Ⅲ 4	A a → B a		なし	—	5877	0	3707	0.63	0.56	0.00	0.00	1	0.25	0.20	0.00	0.00	
Ⅲ 9	Ab + C		—	—	5877	0	401	0.07	0.06	0.00	0.00	1	0.25	0.20	0.00	0.00	
Ⅲ 1 1	Bb + C		—	—	5877	0	3915	0.67	0.60	0.00	0.00	3	0.75	0.59	0.00	0.00	
—	A段階不明		—	—	5877	0	88315	15.00	13.43	0.00	0.00	76	19.00	15.02	0.00	0.00	
—	B段階不明		—	—	5877	0	85834	14.58	13.06	0.00	0.00	79	19.75	15.61	0.00	0.00	
α類 平瓦			—	—	5877	1	657147	111.67	100.00	—	0.90	506	126.50	100.00	—	0.79	
Ⅲ 5	D	β	あり	113 / 126	3404	24	234676	68.94	86.00	34.81	29.94	267	66.75	83.18	35.96	29.91	「小加」、「加」、「皮尔□□」
Ⅲ 6	D → E		Eで補足	17 / 24 (3404)	4	29311	8.61	10.74	46.45	4.99	43	10.75	13.40	37.21	4.98	「玉作」、「玉」、不明	
Ⅲ 7	Bb → D → E		—	1 / 1 (3404)	0	1235	0.36	0.45	0.00	0.00	2	0.50	0.62	0.00	0.00	「皮尔□□」、「野」、「□月」、「玉」	
Ⅲ 1 0	Ab + D		—	— (3404)	0	6815	2.00	2.50	0.00	0.00	8	2.00	2.49	0.00	0.00		
Ⅲ 1 2	Bb + D		—	— (3404)	0	572	0.17	0.21	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0.00	0.00		
Ⅲ 1 3	C + D		—	— (3404)	0	264	0.08	0.10	0.00	0.00	1	0.25	0.31	0.00	0.00		
β類 平瓦			—	— (3404)	28	272873	80.16	100.00	34.93	34.93	321	80.25	100.00	34.89	34.89		
Ⅲ 8	F	θ	—	—	0	153	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
—	不明	不明	—	—	0	132570	—	—	—	—	—	19.5	—	—	—		

表10 Ⅲ類の分類

(清地 良太)

3. 文字瓦一覧

調査を行った文字瓦の一覧は以下の通りである。

No.	図版番号	釈文・戯画の内容	瓦の状態	遺物対象番号
0001	図版 45	□□□〔加刀利カ〕	破片	I***
0002	図版 45	生	破片	Ⅲ381
0003	図版 45	カ〔加カ〕	破片	Ⅳ71
0004	図版 45	月〔朝カ〕	破片	Ⅳ93
0005	図版 45	ヤ	破片	Ⅳ159
0006	図版 45	玉作	破片	Ⅳ251
0007	図版 45	玉（後欠カ）	破片（1／4）	Ⅳ252
0008	図版 45	加	破片（1／3）	Ⅳ298
0009	図版 45	皮尔□〔負カ〕	破片（1／4）	Ⅳ324
0010	図版 45	玉	破片（2／3）	Ⅳ486
0011	図版 45	リ〔加カ〕	破片	Ⅳ512
0012	図版 45	小加	破片	Ⅳ513
0013	図版 45	小加	破片（1／2）	Ⅳ538
0014	図版 45	小加	破片（2／3）	Ⅳ539
0015	図版 45	皮尔□□	破片	Ⅳ670
0016	図版 45	□〔玉カ〕	破片（1／2）	Ⅳ673
0017	図版 45	□□〔加カ〕	破片	Ⅳ674
0018	図版 45	加	破片	Ⅳ675
0019	図版 45	ナリ〔加カ〕	破片	Ⅳ677
0020	図版 45	カ〔加カ〕	破片	Ⅳ681
0021	図版 45	加	破片（1／4）	Ⅳ682
0022	図版 45	小カ〔加カ〕	破片（1／3）	Ⅳ684
0023	図版 45	、（釈読不明）	破片	Ⅳ686
0024	図版 45	一フ（釈読不明）	破片	Ⅳ687
0025	図版 45	ナ（釈読不明）	破片	Ⅳ688
0026	図版 45	フ（釈読不明）	破片	Ⅳ689
0027	図版 45	野	破片（2／3）	Ⅳ692
0028	図版 45	加	破片	Ⅳ694
0029	図版 45	小加	ほぼ完形	Ⅳ697
0030	図版 13	朝□	破片	文1
0031	図版 13	朝	破片	文2
0032	図版 20	朝	破片（1／7）	文3
0033	図版 13	朝カ	破片	文4
0034	図版 13	朝□〔布カ〕	破片（1／6）	文5
0035	図版 12	朝布	破片（1／3）	文6
0036	図版 15	朝布	破片（1／2）	文7
0037	図版 16	朝布	破片	文8
0038	図版 20	朝	破片	文9
0039	図版 17	朝	破片	文10
0040	図版 26	□□〔朝布カ〕	破片	文11
0041	図版 17	朝	破片	文12
0042	図版 17	朝	破片（1／4）	文13
0043	図版 14	□□〔朝布カ〕	破片	文14
0044	図版 39	□〔布カ〕	破片	文15
0045	図版 23	□□〔朝布カ〕	破片	文16
0046	図版 17	朝布	破片（1／6）	文17
0047	図版 17	朝	破片	文18
0048	図版 24	朝	破片	文19
0049	図版 17	朝	破片（1／8）	文20
0050	図版 20	□〔朝カ〕 布	破片	文21
0051	図版 21	□〔朝カ〕 布	破片	文22
0052	図版 39	布	破片	文23
0053	図版 39	布	破片	文24
0054	図版 39	布	破片	文25
0055	図版 39	□〔布カ〕	破片	文26

0056	図版 39	□〔布力〕	破片 (1/9)	文 2 7
0057	図版 39	布	破片	文 2 8
0058	図版 39	布	破片	文 2 9
0059	図版 39	□〔布力〕	破片	文 3 0
0060	図版 38	布	破片	文 3 1
0061	図版 21	□〔朝力〕 布	破片 (1/8)	文 3 2
0062	図版 38	布	破片	文 3 3
0063	図版 38	□〔布力〕	破片	文 3 4
0064	図版 38	布	破片	文 3 5
0065	図版 38	□〔布力〕	破片	文 3 6
0066	図版 38	布	破片	文 3 7
0067	図版 38	布	破片 (1/6)	文 3 8
0068	図版 38	布	破片 (1/8)	文 3 9
0069	図版 39	□〔布力〕	破片	文 4 0
0070	図版 15	朝□〔布力〕	破片 (1/4)	文 4 1
0071	図版 15	朝布	破片 (1/6)	文 4 2
0072	図版 17	朝	破片 (1/9)	文 4 3
0073	図版 17	朝	破片	文 4 4
0074	図版 15	朝布	破片 (1/5)	文 4 5
0075	図版 17	朝	破片	文 4 6
0076	図版 13	朝	破片	文 4 7
0077	図版 34	水津	破片 (1/4)	文 4 8
0078	図版 35	□布	破片	文 4 9
0079	図版 34	水	破片 (1/6)	文 5 0
0080	図版 34	入	破片 (1/7)	文 5 1
0081	図版 41	□	破片	文 5 2
0082	図版 34	土	破片 (1/5)	文 5 3
0083	図版 12	朝布	破片 (1/6)	文 5 4
0084	図版 14	朝	破片	文 5 5
0085	図版 18	□〔朝力〕 布	破片	文 5 6
0086	図版 12	朝力布	破片 (1/5)	文 5 7
0087	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文 5 8
0088	図版 20	朝	破片	文 5 9
0089	図版 18	朝布	破片 (1/4)	文 6 0
0090	図版 18	朝布	破片 (1/5)	文 6 1
0091	図版 18	朝布	破片 (1/6)	文 6 2
0092	図版 18	朝布	破片 (1/5)	文 6 3
0093	図版 18	朝布	破片 (1/6)	文 6 4
0094	図版 18	朝布	破片 (1/7)	文 6 5
0095	図版 30	□〔神力〕 布	破片 (2/3)	文 6 6
0096	図版 16	□□〔朝布力〕	破片	文 6 7
0097	図版 30	□〔神力〕	破片	文 6 8
0098	図版 32	□〔加力〕	破片	文 6 9
0099	図版 38	□〔布力〕	破片	文 7 0
0100	図版 29	神	破片 (1/7)	文 7 1
0101	図版 36	□〔布力〕	破片 (1/3)	文 7 2
0102	図版 29	神布	破片 (1/2)	文 7 3
0103	図版 29	神乃布	破片 (1/4)	文 7 4
0104	図版 29	神布	破片 (1/6)	文 7 5
0105	図版 29	神布	破片 (1/7)	文 7 6
0106	図版 30	神	破片	文 7 7
0107	図版 18	朝布	破片 (1/4)	文 7 8
0108	図版 32	麻	破片	文 8 0
0109	図版 32	皮麻	破片 (1/6)	文 8 1
0110	図版 32	麻	破片 (1/9)	文 8 2
0111	図版 31	阿	破片	文 8 3

0112	図版 31	□、阿	破片	文 8 4
0113	図版 33	赤加真	破片 (1/5)	文 8 5
0114	図版 12	朝布	破片 (3/4)	文 8 6
0115	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文 8 7
0116	図版 17	朝布	破片 (1/3)	文 8 8
0117	図版 19	朝布	破片 (1/5)	文 8 9
0118	図版 18	朝布	破片 (1/4)	文 9 0
0119	図版 19	朝布	破片 (1/8)	文 9 1
0120	図版 18	朝布	破片 (1/7)	文 9 2
0121	図版 18	朝布	破片 (1/6)	文 9 3
0122	図版 18	朝布	破片 (1/5)	文 9 4
0123	図版 16	□〔朝力〕布	破片 (1/4)	文 9 5
0124	図版 15	朝布	破片 (1/8)	文 9 6
0125	図版 15	朝布	破片 (1/7)	文 9 7
0126	図版 31	阿阿□	破片	文 9 8
0127	図版 33	赤久在	破片 (1/6)	#N/A
0128	図版 31	阿	破片 (1/6)	文 1 0 0
0129	図版 32	麻□〔布力〕	破片	文 1 0 1
0130	図版 32	麻□〔布力〕	破片 (1/7)	文 1 0 2
0131	図版 41	□□	破片	文 1 0 3
0132	図版 17	□〔朝力〕	破片	文 1 0 4
0133	図版 19	朝布	破片 (1/6)	文 1 0 5
0134	図版 20	朝□〔布力〕	破片	文 1 0 6
0135	図版 20	□□〔朝布力〕	破片 (1/8)	文 1 0 7
0136	図版 32	□〔布力〕	破片	文 1 0 8
0137	図版 20	朝□〔布力〕	破片 (1/9)	文 1 0 9
0138	図版 44	□	破片	文 1 1 0
0139	図版 17	□〔朝力〕	破片	文 1 1 1
0140	図版 19	朝□〔布力〕	破片 (1/5)	文 1 1 2
0141	図版 39	□〔布力〕	破片	文 1 1 3
0142	図版 23	□〔朝力〕布	破片	文 1 1 4
0143	図版 23	□〔直・朝力〕□	破片 (1/7)	文 1 1 5
0144	図版 35	□布	破片	文 1 1 6
0145	図版 30	神	破片 (1/8)	文 1 1 7
0146	図版 29	神布	破片 (1/5)	文 1 1 8
0147	図版 29	神乃布	破片 (2/5)	文 1 1 9
0148	図版 35	□布	破片	文 1 2 0
0149	図版 35	□布	破片 (1/8)	文 1 2 1
0150	図版 35	□布	破片	文 1 2 2
0151	図版 36	布	破片 (1/8)	文 1 2 3
0152	図版 36	布	破片	文 1 2 4
0153	図版 38	布	破片	文 1 2 5
0154	図版 38	布	破片	文 1 2 6
0155	図版 36	布	破片 (1/8)	文 1 2 7
0156	図版 35	□布	破片	文 1 2 8
0157	図版 35	□布	破片	文 1 2 9
0158	図版 38	布	破片	文 1 3 0
0159	図版 38	布	破片	文 1 3 1
0160	図版 38	布	破片	文 1 3 2
0161	図版 38	布	破片	文 1 3 3
0162	図版 39	□布	破片 (1/6)	文 1 3 4
0163	図版 26	□〔朝力〕	破片	文 1 3 5
0164	図版 30	□〔神力〕布	破片	文 1 3 6
0165	図版 25	□〔朝力〕	破片 (1/8)	文 1 3 7
0166	図版 17	□〔朝力〕	破片	文 1 3 8
0167	図版 14	朝	破片	文 1 3 9

0168	図版 17	朝	破片	文140
0169	図版 24	朝	破片(1/9)	文141
0170	図版 23	□〔朝力〕布	破片(1/9)	文142
0171	図版 17	□〔朝力〕	破片	文143
0172	図版 24	月〔朝力〕布	破片	文144
0173	図版 28	月〔朝力〕	破片(1/7)	文145
0174	図版 16	□〔朝力〕	破片	文146
0175	図版 39	□〔布力〕	破片(1/9)	文147
0176	図版 17	□〔朝力〕	破片(1/8)	文148
0177	図版 25	朝	破片(1/9)	文149
0178	図版 34	□〔土力〕	破片(1/7)	文150
0179	図版 34	□〔土力〕	破片(1/7)	文151
0180	図版 34	□□女瓦四百五十	破片(1/6)	文152
0181	図版 32	□□〔麻布力〕	破片(1/5)	文153
0182	図版 32	□〔麻力〕	破片	文154
0183	図版 32	麻	破片(1/9)	文155
0184	図版 33	赤久□〔在力〕	破片(1/9)	文156
0185	図版 32	□□〔麻布力〕	破片(1/8)	文157
0186	図版 32	麻	破片	文158
0187	図版 32	麻	破片	文159
0188	図版 32	麻	破片	文160
0189	図版 32	麻	破片(1/8)	文161
0190	図版 19	朝布	破片(1/6)	文162
0191	図版 18	朝布	破片(1/5)	文163
0192	図版 19	朝布	破片(1/6)	文164
0193	図版 19	朝布	破片(1/5)	文165
0194	図版 19	朝布	破片(1/4)	文166
0195	図版 29	神布	破片(1/7)	文167
0196	図版 29	神布	破片(1/6)	文168
0197	図版 29	神布	破片(1/7)	文169
0198	図版 30	神	破片(1/9)	文170
0199	図版 29	神□〔布力〕	破片(1/5)	文171
0200	図版 30	神	破片	文172
0201	図版 16	朝布	破片(1/8)	文173
0202	図版 16	朝布	破片(1/9)	文174・175
0203	図版 30	尹(神力)	破片	文176
0204	図版 25	□〔朝力〕	破片	文177
0205	図版 16	朝布	破片(1/9)	文178
0206	図版 15	朝布	破片(1/4)	文179
0207	図版 23	朝布	破片(1/7)	文180
0208	図版 23	□〔朝力〕布	破片(1/9)	文181
0209	図版 12	□〔朝力〕布	破片(1/9)	文182
0210	図版 13	朝□〔布力〕	破片(1/8)	文183
0211	図版 13	朝□〔布力〕	破片(1/6)	文184
0212	図版 12	朝布	破片(1/8)	文185
0213	図版 13	朝□〔布力〕	破片(1/7)	文186
0214	図版 38	布	破片	文187
0215	図版 38	布	破片	文188
0216	図版 18	朝布	破片(1/5)	文189
0217	図版 21	朝布	破片	文190
0218	図版 38	布	破片	文191
0219	図版 38	布	破片	文192
0220	図版 18	朝□〔布力〕	破片	文193
0221	図版 12	朝布	破片(1/5)	文194
0222	図版 19	朝布	破片(1/7)	文195
0223	図版 38	布	破片	文196

0224	図版 38	布	破片	文197
0225	図版 19	朝布	破片(1/6)	文198
0226	図版 20	朝布	破片(1/6)	文199
0227	図版 35	布	破片	文200
0228	図版 18	朝布	破片(1/5)	文201
0229	図版 38	布	破片	文202
0230	図版 18	朝布	破片(1/4)	文203
0231	図版 31	服	破片(1/5)	文204
0232	図版 31	服止	破片(1/6)	文205
0233	図版 31	□卩	破片(1/8)	文206
0234	図版 31	服	破片(1/8)	文207
0235	図版 31	服服	破片(1/9)	文208
0236	図版 31	服カ	破片	文209
0237	図版 31	□□〔止卩カ〕	破片(1/8)	文210
0238	図版 31	服	破片(1/9)	文211
0239	図版 16	朝□〔布カ〕	破片(1/5)	文212
0240	図版 16	朝	破片(1/7)	文213
0241	図版 38	布	破片	文214
0242	図版 38	布	破片	文215
0243	図版 38	□布	破片	文216
0244	図版 16	朝	破片(1/5)	文217
0245	図版 16	朝	破片(1/5)	文218
0246	図版 21	朝□〔布カ〕	破片(1/5)	文219
0247	図版 18	朝□〔布カ〕	破片(1/7)	文220
0248	図版 19	朝布	破片(1/7)	文221
0249	図版 19	朝布	破片(1/7)	文222
0250	図版 20	朝	破片	文223
0251	図版 20	朝	破片(1/8)	文224
0252	図版 21	朝□〔布カ〕	破片(1/9)	文225
0253	図版 20	朝	破片	文226
0254	図版 19	朝	破片(1/8)	文227
0255	図版 29	神布	破片(1/4)	文228
0256	図版 29	神	破片(1/7)	文229
0257	図版 29	神	破片(1/7)	文230
0258	図版 29	神	破片(1/6)	文231
0259	図版 30	神□〔布カ〕	破片(1/3)	文232
0260	図版 29	神	破片(1/8)	文233
0261	図版 12	朝布	ほぼ完形	文234
0262	図版 17	朝布	破片(1/6)	文235
0263	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文236
0264	図版 25	朝	破片(1/8)	文237
0265	図版 17	朝	破片(1/7)	文238
0266	図版 17	朝	破片	文239
0267	図版 16	朝□〔布カ〕	破片	文240
0268	図版 16	朝□〔布カ〕	破片(1/6)	文241
0269	図版 23	□□〔朝布カ〕	破片(1/7)	文242
0270	図版 41	□〔布カ〕	破片(1/9)	文243
0271	図版 16	□〔朝カ〕	破片	文244
0272	図版 17	□〔朝カ〕	破片	文245
0273	図版 17	□〔朝カ〕	破片	文246
0274	図版 17	□〔朝カ〕	破片(1/9)	文247
0275	図版 17	□〔朝カ〕	破片	文248
0276	図版 38	布	破片(1/9)	文249
0277	図版 25	□〔朝カ〕	破片(1/9)	文250
0278	図版 38	布	破片	文251
0279	図版 17	朝	破片	文252

0280	図版 38	布	破片	文 2 5 3
0281	図版 38	布	破片	文 2 5 4
0282	図版 36	布	破片 (1/8)	文 2 5 5
0283	図版 38	布	破片	文 2 5 6
0284	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文 2 5 8
0285	図版 38	布	破片	文 2 6 0
0286	図版 26	□〔朝力〕 布	破片	文 2 6 1
0287	図版 38	布	破片	文 2 6 2
0288	図版 39	□〔布力〕	破片	文 2 6 3
0289	図版 39	□〔布力〕	破片	文 2 6 4
0290	図版 28	月〔朝力〕	破片	文 2 6 5
0291	図版 24	月□〔朝布力〕	破片	文 2 6 6
0292	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文 2 6 7
0293	図版 25	□〔朝力〕	破片	文 2 6 8
0294	図版 28	□〔月力〕	破片	文 2 6 9
0295	図版 25	□〔朝力〕	破片	文 2 7 0
0296	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 2 7 1
0297	図版 28	□〔月力〕	破片	文 2 7 2
0298	図版 16	朝□〔布力〕	破片	文 2 7 3
0299	図版 27	月〔朝力〕	破片	文 2 7 5
0300	図版 24	月〔朝力〕 □	破片 (1/7)	文 2 7 6
0301	図版 28	月〔朝力〕	破片	文 2 7 7
0302	図版 28	月	破片	文 2 7 8
0303	図版 28	月〔朝力〕	破片	文 2 7 9
0304	図版 30	□〔神・朝力〕	破片	文 2 8 0
0305	図版 26	□〔朝力〕	破片	文 2 8 1
0306	図版 25	□〔朝力〕	破片	文 2 8 2
0307	図版 27	□〔月力〕	破片	文 2 8 3
0308	図版 26	□〔朝力〕	破片	文 2 8 4
0309	図版 17	□〔朝・直・真力〕	破片	文 2 8 5
0310	図版 24	朝	破片	文 2 8 6
0311	図版 28	月〔朝力〕	破片 (1/9)	文 2 8 7
0312	図版 28	月〔朝力〕	破片 (1/8)	文 2 8 8
0313	図版 24	朝	破片	文 2 8 9
0314	図版 36	布	破片 (1/7)	文 2 9 0
0315	図版 38	布	破片	文 2 9 1
0316	図版 38	布	破片	文 2 9 2
0317	図版 38	布	破片	文 2 9 3
0318	図版 38	布	破片 (1/9)	文 2 9 4
0319	図版 36	布	破片 (1/8)	文 2 9 5
0320	図版 36	布	破片	文 2 9 6
0321	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文 2 9 7
0322	図版 35	□布	破片	文 2 9 8
0323	図版 36	□布	破片	文 2 9 9
0324	図版 39	□〔布力〕	破片	文 3 0 0
0325	図版 38	布	破片	文 3 0 1
0326	図版 35	□□〔布力〕	破片	文 3 0 2
0327	図版 23	朝□〔布力〕	破片	文 3 0 3
0328	図版 39	□〔布力〕	破片	文 3 0 4
0329	図版 17	□〔朝力〕 布	破片 (1/9)	文 3 0 5
0330	図版 38	布	破片	文 3 0 6
0331	図版 36	布	破片 (1/7)	文 3 0 7
0332	図版 38	布	破片 (1/8)	文 3 0 8
0333	図版 35	□布	破片	文 3 0 9
0334	図版 16	□〔朝力〕 □〔朝布力〕	破片	文 3 1 0
0335	図版 35	□布	破片	文 3 1 1

0336	図版 38	布	破片	文312
0337	図版 17	□〔朝力〕布	破片	文313
0338	図版 23	□〔朝力〕□	破片(1/8)	文314
0339	図版 35	□布	破片	文315
0340	図版 24	朝布	破片	文316
0341	図版 23	□〔朝力〕布	破片(1/9)	文317
0342	図版 36	布	破片(1/9)	文318
0343	図版 36	□布	破片(1/7)	文319
0344	図版 23	□〔朝力〕布	破片	文320
0345	図版 39	□〔布力〕	破片	文321
0346	図版 36	布	破片(1/8)	文322
0347	図版 17	□〔朝力〕布	破片	文323
0348	図版 23	□〔朝力〕□	破片(1/9)	文324
0349	図版 35	□布	破片	文325
0350	図版 16	朝	破片(1/4)	文326
0351	図版 16	朝	破片	文327
0352	図版 16	朝	破片(1/9)	文328
0353	図版 17	朝	破片	文329
0354	図版 17	朝	破片(1/7)	文330
0355	図版 16	朝	破片(1/8)	文331
0356	図版 17	朝	破片	文332
0357	図版 17	朝	破片	文333
0358	図版 17	朝	破片	文334
0359	図版 17	朝	破片	文335
0360	図版 16	朝	破片(1/9)	文336
0361	図版 17	朝	破片	文337
0362	図版 16	朝	破片(1/7)	文338
0363	図版 41	□	破片	文339
0364	図版 41	□□	破片	文343
0365	図版 30	□〔神力〕	破片	文344
0366	図版 39	□〔布力〕	破片	文346
0367	図版 41	□□(2字力)	破片	文348
0368	図版 41	□	破片	文349
0369	図版 41	□	破片	文350
0370	図版 41	□	破片	文351
0371	図版 36	□□〔布力〕	破片	文352
0372	図版 26	□〔朝力〕	破片	文353
0373	図版 36	□□〔布力〕	破片	文354
0374	図版 39	□〔布力〕	破片(1/9)	文355
0375	図版 39	□	破片(1/9)	文356
0376	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文359
0377	図版 26	□〔朝力〕	破片	文360
0378	図版 39	□〔布力〕	破片	文362
0379	図版 39	□〔布力〕	破片	文363
0380	図版 39	□〔布力〕	破片	文365
0381	図版 41	□〔布力〕	破片	文366
0382	図版 41	□	破片	文367
0383	図版 41	□	破片	文368
0384	図版 39	□〔布力〕	破片	文369
0385	図版 39	□〔布力〕	破片	文370
0386	図版 39	□〔布力〕	破片	文371
0387	図版 39	□〔布力〕	破片	文372
0388	図版 36	□□〔布力〕	破片	文373
0389	図版 39	□〔布力〕	破片	文374
0390	図版 39	□〔布力〕	破片	文375
0391	図版 39	□〔布力〕	破片	文376

0392	図版 39	布	破片	文 377
0393	図版 30	□〔布力〕 □	破片	文 378
0394	図版 39	□〔布力〕	破片 (1/9)	文 379
0395	図版 39	□〔布力〕	破片	文 380
0396	図版 39	□〔布力〕	破片	文 381
0397	図版 39	□〔布力〕	破片	文 383
0398	図版 38	布	破片 (1/9)	文 384
0399	図版 22	□〔朝力〕	破片	文 385
0400	図版 39	□	破片	文 386
0401	図版 24	□□〔朝布力〕	破片 (1/3)	文 387
0402	図版 28	□〔月力〕	破片 (1/7)	文 388
0403	図版 25	□〔朝力〕	破片 (1/6)	文 389
0404	図版 39	□〔布力〕	破片	文 390
0405	図版 39	布	破片	文 391
0406	図版 39	□〔布力〕	破片	文 392
0407	図版 41	□〔布力〕	破片 (1/6)	文 393
0408	図版 41	□〔布力〕	破片 (1/8)	文 394
0409	図版 41	□〔布力〕	破片	文 395
0410	図版 41	□〔布力〕	破片	文 396
0411	図版 14	朝	破片 (1/9)	文 397
0412	図版 30	□〔朝力〕 布	破片 (1/4)	文 398
0413	図版 14	朝	破片 (1/9)	文 399
0414	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文 400
0415	図版 14	朝	破片 (1/9)	文 401
0416	図版 20	朝□〔布力〕	破片 (1/7)	文 402
0417	図版 14	朝□	破片 (1/9)	文 403
0418	図版 13	朝	破片 (1/6)	文 404
0419	図版 13	朝	破片	文 405
0420	図版 22	朝	破片 (1/9)	文 406
0421	図版 13	朝	破片 (1/9)	文 407
0422	図版 13	朝	破片 (1/8)	文 408
0423	図版 13	朝	破片 (1/9)	文 409
0424	図版 13	朝	破片 (1/9)	文 410
0425	図版 35	□布	破片	文 411
0426	図版 41	□〔布力〕	破片	文 412
0427	図版 24	朝	破片	文 413
0428	図版 22	朝	破片	文 414
0429	図版 14	□〔朝・直力〕	破片	文 415
0430	図版 14	朝	破片 (1/9)	文 416
0431	図版 24	朝	破片	文 417
0432	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 418
0433	図版 26	□〔朝力〕	破片 (1/9)	文 419
0434	図版 35	□布	破片 (1/9)	文 420
0435	図版 26	□〔朝力〕	破片 (1/9)	文 421
0436	図版 12	朝布	破片 (1/4)	文 422
0437	図版 20	朝	破片 (1/9)	文 423
0438	図版 19	朝□〔布力〕	破片 (1/7)	文 424
0439	図版 21	朝	破片	文 425
0440	図版 20	朝□〔布力〕	破片 (1/6)	文 426
0441	図版 28	月〔朝力〕	破片	文 427
0442	図版 22	朝	破片	文 428
0443	図版 21	朝	破片	文 429
0444	図版 20	朝	破片	文 430
0445	図版 18	朝□〔布力〕	破片 (1/8)	文 431
0446	図版 20	朝	破片 (1/7)	文 432
0447	図版 21	□〔朝・直力〕	破片	文 433

0448	図版 22	□〔朝・直力〕	破片	文434
0449	図版 23	□〔朝・直力〕 □	破片	文435
0450	図版 31	□〔β力〕	破片	文437
0451	図版 41	□	破片	文438
0452	図版 41	□〔布力〕	破片	文441
0453	図版 26	□〔朝力〕	破片	文444
0454	図版 41	□〔布力〕	破片	文446
0455	図版 41	□〔2字力〕	破片	文447
0456	図版 41	□〔2字力〕	破片	文449
0457	図版 38	□〔布力〕	破片	文450
0458	図版 27	月〔朝力〕	破片(1/9)	文451
0459	図版 41	□	破片	文452
0460	図版 28	□〔月力〕	破片	文453
0461	図版 30	ネ〔神力〕	破片	文455
0462	図版 36	□布	破片	文456
0463	図版 38	□□〔布力〕	破片	文457
0464	図版 26	□〔朝力〕	破片	文458
0465	図版 26	□〔朝力〕	破片	文459
0466	図版 24	朝	破片	文460
0467	図版 44	□	破片	文461
0468	図版 44	□□	破片	文463
0469	図版 41	□〔布力〕	破片	文464
0470	図版 26	□〔朝力〕	破片	文465
0471	図版 26	□〔朝力〕	破片	文466
0472	図版 44	□	破片	文467
0473	図版 41	□□	破片	文468
0474	図版 44	□	破片	文471
0475	図版 41	□	破片	文472
0476	図版 41	□〔布力〕	破片	文473
0477	図版 26	□〔朝力〕	破片	文475
0478	図版 41	□□	破片	文480
0479	図版 44	□	破片	文481
0480	図版 37	□〔布力〕	破片	文482
0481	図版 36	□□〔布力〕	破片	文484
0482	図版 20	朝□	破片(1/9)	文485
0483	図版 21	朝□	破片(1/7)	文486
0484	図版 20	朝	破片	文487
0485	図版 20	朝	破片	文488
0486	図版 22	朝	破片(1/7)	文489
0487	図版 20	朝	破片	文490
0488	図版 22	朝	破片	文491
0489	図版 26	□〔朝力〕	破片	文492
0490	図版 20	朝	破片	文493
0491	図版 20	朝	破片(1/9)	文494
0492	図版 20	朝	破片	文495
0493	図版 19	朝布	破片	文496
0494	図版 21	朝	破片	文497
0495	図版 21	朝	破片	文498
0496	図版 21	朝	破片	文499
0497	図版 20	朝	破片	文500
0498	図版 21	朝	破片	文501
0499	図版 21	朝	破片	文502
0500	図版 20	朝	破片(1/8)	文503
0501	図版 20	朝	破片	文504
0502	図版 26	□〔朝力〕	破片(1/6)	文505
0503	図版 36	□□〔布力〕	破片	文506

0504	図版 26	□〔朝力〕	破片	文508
0505	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文509
0506	図版 36	□□〔布力〕	破片	文512
0507	図版 22	□〔朝力〕	破片	文515
0508	図版 28	□〔月力〕	破片	文518
0509	図版 41	□	破片	文519
0510	図版 44	□	破片	文520
0511	図版 44	□□	破片	文522
0512	図版 44	□	破片	文525
0513	図版 44	□□	破片	文526
0514	図版 37	□〔布力〕	破片	文527
0515	図版 44	□	破片	文528
0516	図版 28	□〔月力〕	破片	文529
0517	図版 44	□	破片	文530
0518	図版 44	□	破片	文531
0519	図版 44	□	破片	文532
0520	図版 24	朝	破片	文533
0521	図版 28	□〔月力〕	破片(1/9)	文534
0522	図版 28	□〔月力〕	破片(1/9)	文535
0523	図版 27	□〔月力〕	破片	文536
0524	図版 25	朝	破片	文537
0525	図版 24	朝	破片(1/9)	文538
0526	図版 27	月〔朝力〕	破片	文539
0527	図版 27	□〔月力〕	破片	文540
0528	図版 24	朝	破片	文541
0529	図版 27	月	破片	文542
0530	図版 27	月	破片(1/9)	文543
0531	図版 28	月〔朝力〕	破片	文544
0532	図版 24	朝	破片	文545
0533	図版 28	月	破片(1/9)	文546
0534	図版 27	月	破片(1/8)	文547
0535	図版 23	月〔朝力〕布	破片	文548
0536	図版 28	月	破片	文550
0537	図版 27	月	破片	文551
0538	図版 44	□	破片	文552
0539	図版 27	□	破片	文553
0540	図版 24	朝	破片	文554
0541	図版 27	月	破片	文555
0542	図版 44	□	破片	文556
0543	図版 28	□〔月力〕	破片	文557
0544	図版 28	□〔月力〕	破片(1/9)	文558
0545	図版 28	月	破片(1/9)	文559
0546	図版 25	朝	破片	文560
0547	図版 27	月	破片	文561
0548	図版 25	朝	破片	文562
0549	図版 28	□〔月力〕	破片	文563
0550	図版 28	□〔月力〕	破片	文564
0551	図版 27	月	破片	文565
0552	図版 23	月□	破片	文566
0553	図版 27	月	破片	文567
0554	図版 27	月	破片	文568
0555	図版 27	月	破片	文569
0556	図版 27	月	破片	文570
0557	図版 24	朝	破片(1/9)	文571
0558	図版 28	□〔月力〕	破片	文572
0559	図版 19	朝布	破片	文573

0560	図版 28	月	破片 (1/9)	文 574
0561	図版 44	□	破片	文 575
0562	図版 24	□〔朝・直力〕	破片 (1/8)	文 576
0563	図版 28	月〔朝力〕	破片 (1/9)	文 577
0564	図版 44	□	破片	文 579
0565	図版 44	□	破片	文 580
0566	図版 37	□	破片	文 582
0567	図版 28	□〔月力〕	破片	文 583
0568	図版 44	□	破片	文 584
0569	図版 28	□〔月力〕	破片	文 585
0570	図版 38	布	破片	文 586
0571	図版 28	□〔月力〕	破片	文 587
0572	図版 37	□〔布力〕	破片	文 588
0573	図版 28	□〔月力〕	破片	文 589
0574	図版 37	□〔布力〕	破片	文 590
0575	図版 38	布	破片	文 591
0576	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 592
0577	図版 25	□〔朝力〕	破片	文 593
0578	図版 40	□〔布力〕	破片	文 594
0579	図版 35	□布	破片	文 595
0580	図版 44	□	破片 (1/8)	文 596
0581	図版 35	□布	破片	文 597
0582	図版 38	布	破片	文 598
0583	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 599
0584	図版 40	□〔布力〕	破片	文 600
0585	図版 35	□□〔布力〕	破片	文 601
0586	図版 40	□〔布力〕	破片	文 602
0587	図版 38	布	破片	文 603
0588	図版 40	□□〔布力〕	破片	文 604
0589	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 605
0590	図版 23	□□〔朝布力〕	破片 (1/8)	文 608
0591	図版 44	□	破片	文 609
0592	図版 40	□〔布力〕	破片 (1/9)	文 610
0593	図版 23	□□〔月布力〕	破片	文 611
0594	図版 36	□□〔布力〕	破片	文 612
0595	図版 38	布	破片	文 613
0596	図版 37	布	破片	文 614
0597	図版 44	□	破片	文 617
0598	図版 36	□布	破片	文 618
0599	図版 40	□〔布力〕	破片	文 619
0600	図版 37	布	破片	文 621
0601	図版 36	布	破片 (1/7)	文 622
0602	図版 36	布	破片	文 623
0603	図版 36	布	破片 (1/9)	文 624
0604	図版 44	□	破片	文 625
0605	図版 37	布	破片 (1/9)	文 626
0606	図版 37	布	破片 (1/6)	文 627
0607	図版 37	布	破片 (1/6)	文 628
0608	図版 35	□□〔布力〕	破片 (1/9)	文 629
0609	図版 40	□〔布力〕	破片 (1/9)	文 630
0610	図版 40	□〔布力〕	破片	文 631
0611	図版 37	布	破片	文 632
0612	図版 37	布	破片	文 633
0613	図版 37	布	破片	文 634
0614	図版 40	□〔布力〕	破片	文 635
0615	図版 35	□布	破片 (1/9)	文 636

0616	図版 35	布	破片	文 6 3 7
0617	図版 37	布	破片	文 6 3 8
0618	図版 35	□布	破片 (1/5)	文 6 4 0
0619	図版 30	□〔ネカ〕	破片	文 6 4 1
0620	図版 37	布	破片	文 6 4 2
0621	図版 37	布	破片 (1/9)	文 6 4 3
0622	図版 37	布	破片	文 6 4 4
0623	図版 37	布	破片	文 6 4 5
0624	図版 41	□布	破片	文 6 4 6
0625	図版 36	布	破片 (1/7)	文 6 4 7
0626	図版 21	□〔朝カ〕 布	破片 (1/7)	文 6 4 8
0627	図版 28	□〔月カ〕	破片	文 6 4 9
0628	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 5 0
0629	図版 40	□〔布・ネカ〕	破片	文 6 5 1
0630	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 5 2
0631	図版 36	□〔布カ〕	破片	文 6 5 3
0632	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 5 4
0633	図版 44	□〔布カ〕	破片	文 6 5 5
0634	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 5 6
0635	図版 37	布	破片	文 6 5 7
0636	図版 23	□□〔朝布カ〕	破片	文 6 5 8
0637	図版 37	布	破片	文 6 5 9
0638	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文 6 6 0
0639	図版 26	□〔朝カ〕	破片 (1/6)	文 6 6 1
0640	図版 36	□□〔布カ〕	破片 (1/7)	文 6 6 3
0641	図版 28	□□〔布カ〕	破片 (1/7)	文 6 6 5
0642	図版 44	□	破片	文 6 6 6
0643	図版 43	□	破片 (1/9)	文 6 6 7
0644	図版 25	□〔朝カ〕	破片 (1/8)	文 6 7 0
0645	図版 37	布	破片	文 6 7 1
0646	図版 37	布	破片	文 6 7 2
0647	図版 26	□〔朝カ〕	破片 (1/9)	文 6 7 3
0648	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 7 4
0649	図版 25	□〔朝カ〕	破片 (1/9)	文 6 7 5
0650	図版 17	朝	破片 (1/5)	文 6 7 6
0651	図版 25	□〔朝カ〕	破片	文 6 7 7
0652	図版 40	□〔布カ〕	破片	文 6 7 8
0653	図版 25	□〔朝カ〕	破片	文 6 7 9
0654	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文 6 8 0
0655	図版 37	布	破片	文 6 8 1
0656	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文 6 8 2
0657	図版 23	□〔朝カ〕 □	破片	文 6 8 3
0658	図版 30	□〔神カ〕	破片	文 6 8 4
0659	図版 24	朝布	破片	文 6 8 5
0660	図版 13	朝	破片 (1/5)	文 6 8 6
0661	図版 37	布	破片	文 6 8 7
0662	図版 21	朝	破片	文 6 8 8
0663	図版 20	朝	破片	文 6 8 9
0664	図版 13	朝□	破片 (1/9)	文 6 9 0
0665	図版 22	朝□	破片	文 6 9 1
0666	図版 23	□〔朝カ〕 布	破片 (1/8)	文 6 9 2
0667	図版 35	□布	破片	文 6 9 3
0668	図版 13	朝布	破片 (1/9)	文 6 9 4
0669	図版 13	朝	破片	文 6 9 5
0670	図版 21	朝	破片	文 6 9 6
0671	図版 13	朝□	破片 (1/8)	文 6 9 7

0672	図版 13	朝□	破片 (1/8)	文698
0673	図版 13	朝	破片	文699
0674	図版 13	朝□〔布カ〕	破片 (1/9)	文700
0675	図版 14	朝	破片 (1/5)	文701
0676	図版 14	朝	破片	文702
0677	図版 13	朝□	破片 (1/7)	文703
0678	図版 22	朝□	破片	文704
0679	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文705
0680	図版 13	朝	破片 (1/8)	文706
0681	図版 24	朝	破片	文707
0682	図版 13	朝	破片	文708
0683	図版 13	朝	破片	文709
0684	図版 13	朝	破片	文710
0685	図版 14	朝	破片	文711
0686	図版 24	朝	破片	文712
0687	図版 24	朝	破片	文713
0688	図版 23	□〔朝カ〕 □	破片	文714
0689	図版 27	月	破片	文715
0690	図版 24	朝	破片	文716
0691	図版 14	朝	破片	文717
0692	図版 25	朝	破片	文718
0693	図版 27	月〔朝カ〕	破片	文719
0694	図版 40	□〔布カ〕	破片	文720
0695	図版 40	□〔布カ〕	破片	文721
0696	図版 40	□〔布カ〕	破片	文722
0697	図版 21	朝	破片	文723
0698	図版 20	朝□	破片	文724
0699	図版 40	□〔布カ〕	破片 (1/8)	文725
0700	図版 37	布	破片	文726
0701	図版 24	布	破片	文727
0702	図版 19	朝□〔布カ〕	破片	文728
0703	図版 21	朝	破片	文729
0704	図版 21	朝	破片	文730
0705	図版 21	朝	破片	文731
0706	図版 20	朝	破片	文732
0707	図版 40	□〔布カ〕	破片	文733
0708	図版 21	朝布	破片	文734
0709	図版 22	朝	破片	文735
0710	図版 19	朝□〔布カ〕	破片	文737
0711	図版 20	朝	破片	文738
0712	図版 21	朝	破片	文739
0713	図版 21	朝	破片	文740
0714	図版 21	朝	破片	文741
0715	図版 20	朝	破片	文742
0716	図版 21	朝	破片	文743
0717	図版 21	朝	破片	文744
0718	図版 13	朝	破片	文745
0719	図版 21	朝	破片	文746
0720	図版 20	朝	破片	文747
0721	図版 22	朝	破片	文748
0722	図版 24	朝	破片	文749
0723	図版 19	朝布	破片	文750
0724	図版 21	朝	破片	文751
0725	図版 19	朝布	破片	文752
0726	図版 40	□〔布カ〕	破片	文753
0727	図版 40	□〔布カ〕	破片	文754

0728	図版 21	朝	破片	文755
0729	図版 21	朝	破片	文756
0730	図版 21	□〔朝力〕	破片	文757
0731	図版 21	朝□〔布力〕	破片 (1/7)	文758
0732	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/6)	文759
0733	図版 22	朝	破片 (1/6)	文760
0734	図版 27	月	破片	文761
0735	図版 28	□〔月力〕	破片	文762
0736	図版 23	朝□〔布力〕	破片	文763
0737	図版 28	□〔月力〕	破片 (1/8)	文764
0738	図版 24	朝	破片	文765
0739	図版 27	月	破片	文767
0740	図版 27	月	破片	文768
0741	図版 27	月	破片	文769
0742	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/7)	文770
0743	図版 27	月〔朝力〕	破片	文771
0744	図版 24	朝	破片	文772
0745	図版 27	月	破片	文773
0746	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/9)	文774
0747	図版 27	月	破片	文775
0748	図版 27	月	破片	文776
0749	図版 27	月	破片	文777
0750	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/6)	文778
0751	図版 27	月〔朝力〕	破片	文779
0752	図版 25	朝	破片	文780
0753	図版 25	朝	破片 (1/6)	文781
0754	図版 28	□〔月力〕	破片	文782
0755	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/8)	文783
0756	図版 24	朝	破片	文784
0757	図版 24	朝	破片	文785
0758	図版 14	朝	破片 (1/8)	文786
0759	図版 27	月	破片	文787
0760	図版 24	朝	破片 (1/7)	文788
0761	図版 24	朝□	破片 (1/7)	文789
0762	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/5)	文790
0763	図版 25	朝	破片 (1/9)	文791
0764	図版 27	月	破片 (1/9)	文792
0765	図版 27	月	破片	文793
0766	図版 25	□〔朝力〕	破片	文794
0767	図版 27	月〔朝力〕	破片	文795
0768	図版 27	月〔朝力〕	破片	文796
0769	図版 31	月〔服力〕	破片	文797
0770	図版 28	月〔朝力〕	破片	文798
0771	図版 28	月〔朝力〕	破片	文799
0772	図版 27	□	破片	文800
0773	図版 21	朝	破片 (1/8)	文801
0774	図版 35	□□〔布力〕	破片	文802
0775	図版 25	□〔朝力〕	破片	文803
0776	図版 31	朝〔服力〕	破片	文804
0777	図版 25	□〔朝力〕	破片	文805
0778	図版 23	□□〔朝布力〕	破片	文806
0779	図版 25	朝	破片	文807
0780	図版 25	□〔朝力〕	破片	文808
0781	図版 27	月	破片	文809
0782	図版 22	朝	破片	文810
0783	図版 25	□〔朝力〕	破片	文811

0784	図版 25	□〔朝力〕	破片	文812
0785	図版 25	□〔朝力〕	破片	文813
0786	図版 25	朝	破片	文814
0787	図版 25	朝	破片	文815
0788	図版 27	月	破片	文816
0789	図版 25	□〔朝力〕	破片	文817
0790	図版 23	朝□	破片	文818
0791	図版 43	□	破片	文819
0792	図版 25	□〔朝力〕	破片	文820
0793	図版 26	□〔朝力〕	破片	文821
0794	図版 26	□〔朝力〕	破片	文822
0795	図版 22	朝	破片	文823
0796	図版 25	□〔朝力〕	破片	文824
0797	図版 25	□〔朝力〕	破片 (1/7)	文825
0798	図版 22	□□〔朝布力〕	破片	文826
0799	図版 25	□〔朝力〕	破片	文827
0800	図版 27	月〔朝力〕	破片	文828
0801	図版 43	□	破片	文829
0802	図版 28	□〔月力〕	破片	文831
0803	図版 24	朝	破片	文832
0804	図版 25	朝	破片	文833
0805	図版 25	□〔朝力〕	破片	文834
0806	図版 25	□〔朝力〕	破片	文835
0807	図版 25	□〔朝力〕	破片	文836
0808	図版 24	朝	破片	文837
0809	図版 26	□〔朝力〕	破片	文838
0810	図版 25	□〔朝力〕	破片	文839
0811	図版 24	朝	破片	文840
0812	図版 43	□	破片	文841
0813	図版 25	□〔朝力〕	破片 (1/9)	文842
0814	図版 27	月〔朝力〕	破片 (1/9)	文843
0815	図版 43	□	破片	文844
0816	図版 43	□	破片	文845
0817	図版 24	朝	破片	文846
0818	図版 22	朝□〔布力〕	破片	文847
0819	図版 43	□	破片	文848
0820	図版 30	神	破片 (1/3)	文849
0821	図版 30	申〔神力〕	破片 (1/3)	文850
0822	図版 30	□〔神力〕	破片 (1/9)	文852
0823	図版 30	神	破片	文853
0824	図版 30	神	破片	文854
0825	図版 30	神	破片 (1/9)	文856
0826	図版 30	申〔神力〕	破片 (1/9)	文857
0827	図版 30	申〔神力〕	破片	文858
0828	図版 30	神	破片 (1/9)	文859
0829	図版 30	神	破片 (1/9)	文860
0830	図版 30	□〔ネ力〕	破片	文861
0831	図版 30	神	破片 (1/9)	文862
0832	図版 30	神	破片 (1/9)	文863
0833	図版 14	朝	破片 (1/9)	文864
0834	図版 21	朝布	破片 (1/8)	文865
0835	図版 14	朝	破片	文866
0836	図版 14	□〔朝力〕	破片	文867
0837	図版 25	□〔朝力〕	破片	文868
0838	図版 25	朝	破片	文869
0839	図版 25	□〔朝力〕	破片 (1/9)	文870

0840	図版 35	□布	破片 (1/6)	文871
0841	図版 14	□〔朝カ〕	破片	文872
0842	図版 36	□布	破片 (1/9)	文873
0843	図版 37	布	破片	文874
0844	図版 30	□〔ネカ〕	破片	文875
0845	図版 30	□〔ネカ〕布	破片	文876
0846	図版 30	□〔ネカ〕布	破片	文877
0847	図版 37	布	破片	文878
0848	図版 19	布	破片	文879
0849	図版 14	布	破片	文890
0850	図版 36	□〔布〕	破片 (1/9)	文891
0851	図版 35	□〔布〕	破片 (1/7)	文892
0852	図版 30	神	破片 (1/4)	文893
0853	図版 30	神	破片 (1/4)	文894
0854	図版 30	申〔神カ〕	破片	文895
0855	図版 34	□〔中カ〕	破片 (1/7)	文896
0856	図版 30	申〔神カ〕□〔布カ〕	破片	文897
0857	図版 36	□□〔布カ〕	破片	文898
0858	図版 30	神□〔布カ〕	破片 (1/9)	文899
0859	図版 30	ネ〔神カ〕	破片 (1/7)	文900
0860	図版 30	申〔神カ〕	破片 (1/8)	文901
0861	図版 30	□〔神カ〕	破片 (1/7)	文902
0862	図版 30	ネ〔神カ〕	破片 (1/7)	文903
0863	図版 30	□〔赤カ〕	破片	文903
0864	図版 33	赤□〔加カ〕	破片 (1/5)	文904
0865	図版 33	□〔赤カ〕□〔加カ〕	破片	文906
0866	図版 33	赤	破片 (1/9)	文907
0867	図版 34	百	破片	文908
0868	図版 32	□□〔加カ〕	破片	文909
0869	図版 33	赤	破片 (1/9)	文910
0870	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文911
0871	図版 34	□〔土カ〕	破片	文912
0872	図版 33	赤□	破片 (1/9)	文913
0873	図版 33	赤	破片	文914
0874	図版 33	赤	破片 (1/9)	文915
0875	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文916
0876	図版 33	赤加	破片	文917
0877	図版 33	赤□	破片	文918
0878	図版 43	□	破片	文919
0879	図版 33	赤□〔加カ〕	破片	文920
0880	図版 32	加	破片	文921
0881	図版 43	□□	破片	文923
0882	図版 33	赤	破片	文924
0883	図版 43	□□	破片	文925
0884	図版 33	赤□	破片	文926
0885	図版 30	□〔ネカ〕	破片	文927
0886	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文928
0887	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文929
0888	図版 37	布	破片	文930
0889	図版 32	□〔真カ〕	破片	文931
0890	図版 32	□〔真カ〕	破片	文932
0891	図版 33	赤	破片	文933
0892	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文934
0893	図版 32	□加	破片	文936
0894	図版 32	加	破片	文937
0895	図版 33	□〔赤カ〕	破片	文938

0896	図版 33	赤	破片	文939
0897	図版 32	加	破片	文940
0898	図版 43	口口	破片	文941
0899	図版 33	赤	破片	文942
0900	図版 33	赤	破片	文943
0901	図版 32	□〔真カ〕	破片	文944
0902	図版 23	朝□	破片	文945
0903	図版 26	口〔朝カ〕	破片	文946
0904	図版 43	口	破片	文947
0905	図版 32	口〔加カ〕	破片	文948
0906	図版 32	カ〔加カ〕	破片	文949
0907	図版 37	布口	破片	文950
0908	図版 32	真	破片	文951
0909	図版 36	□□〔布カ〕	破片	文952
0910	図版 31	月〔服カ〕	破片	文953
0911	図版 31	服	破片	文954
0912	図版 31	口〔戸カ〕	破片	文955
0913	図版 31	口〔戸カ〕	破片	文956
0914	図版 31	服	破片	文957
0915	図版 31	口〔服カ〕	破片	文959
0916	図版 43	口	破片	文960
0917	図版 31	月〔服カ〕	破片 (1/8)	文961
0918	図版 32	麻	破片	文962
0919	図版 32	口〔戸カ〕	破片	文963
0920	図版 32	麻	破片 (1/8)	文964
0921	図版 31	口〔止カ〕	破片	文965
0922	図版 43	口	破片	文966
0923	図版 34	口〔習書カ〕	破片	文967
0924	図版 15	朝布	破片 (3/4)	文968
0925	図版 16	朝布	破片 (1/7)	文969
0926	図版 15	朝布	破片 (1/6)	文970
0927	図版 16	朝口〔布カ〕	破片 (1/6)	文972
0928	図版 19	朝口〔布カ〕	破片 (1/7)	文973
0929	図版 19	朝布	破片 (1/9)	文974
0930	図版 20	朝	破片 (1/9)	文975
0931	図版 21	朝	破片 (1/9)	文976
0932	図版 19	朝布	破片 (1/6)	文977
0933	図版 19	朝口〔布カ〕	破片 (1/9)	文978
0934	図版 18	朝布	破片 (1/8)	文979
0935	図版 19	朝布	破片	文980
0936	図版 21	朝	破片 (1/8)	文981
0937	図版 23	□〔朝カ〕 布	破片 (1/8)	文982
0938	図版 20	朝	破片 (1/9)	文983
0939	図版 35	□布	破片	文984
0940	図版 40	□〔布カ〕	破片 (1/8)	文985
0941	図版 39	□〔布カ〕	破片 (1/8)	文986
0942	図版 40	□〔布カ〕	破片	文987
0943	図版 43	口口	破片	文988
0944	図版 40	□〔布カ〕	破片	文989
0945	図版 43	□	破片	文990
0946	図版 40	□〔布カ〕	破片	文991
0947	図版 40	□〔布カ〕	破片	文992
0948	図版 43	□	破片	文993
0949	図版 40	□〔布カ〕	破片	文995
0950	図版 43	□□	破片	文1005
0951	図版 43	□	破片	文1008

0952	図版 43	□□	破片	文1010
0953	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1013
0954	図版 28	□(月カ)	破片	文1015
0955	図版 43	□	破片	文1026
0956	図版 43	□	破片	文1027
0957	図版 43	□	破片	文1032
0958	図版 25	□〔朝カ〕	破片 (1/8)	文1035
0959	図版 43	□	破片	文1036
0960	図版 43	□〔2字カ〕	破片	文1037
0961	図版 41	布□〔加カ〕	破片	文1038
0962	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1039
0963	図版 43	□	破片	文1040
0964	図版 43	□□	破片	文1041
0965	図版 43	□	破片	文1042
0966	図版 26	□〔朝カ〕〕	破片	文1043
0967	図版 25	□〔朝カ〕	破片	文1044
0968		□〔布カ〕	破片	文1046
0969	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1049
0970	図版 28	□〔月カ〕	破片	文1051
0971	図版 41	□□	破片	文1052
0972	図版 43	□□	破片	文1054
0973	図版 43	□	破片	文1055
0974	図版 37	布	破片	文1061
0975	図版 43	□	破片	文1067
0976	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1070
0977	図版 43	□	破片	文1074
0978	図版 43	□	破片	文1078
0979	図版 43	□	破片	文1083
0980		□(丸にトンボ字記号カ)	破片	文1084
0981	図版 34	□(丸にトンボ字記号)	破片 (1/8)	文1085
0982	図版 15	朝布□(丸にトンボ字記号)	破片 (3/4)	文1086
0983	図版 32	加皮真	破片 (1/7)	文1087
0984	図版 32	□〔加カ〕皮麻	破片 (1/8)	文1089
0985	図版 31	阿	破片	文1090
0986	図版 32	□〔加カ〕皮真	破片 (1/6)	文1091
0987	図版 31	阿	破片 (1/8)	文1092
0988	図版 31	阿	破片	文1093
0989	図版 31	阿	破片 (1/8)	文1094
0990	図版 31	阿	破片 (1/9)	文1095
0991	図版 31	阿	破片 (1/9)	文1096
0992	図版 31	阿	破片	文1097
0993	図版 14	朝布	破片 (3/5)	文1098
0994	図版 24	朝布	破片 (1/9)	文1099
0995	図版 23	□〔朝カ〕布	破片 (1/9)	文1100
0996	図版 13	朝	破片 (1/9)	文1101
0997	図版 14	朝	破片	文1102
0998	図版 14	朝□	破片	文1103
0999	図版 23	朝□〔布カ〕	破片 (1/5)	文1104
1000	図版 33	赤加	破片 (1/9)	文1105
1001	図版 32	阿加皮	破片 (1/5)	文1106
1002	図版 29	神負	破片	文1107
1003	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1108
1004	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1109
1005	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1110
1006	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1111
1007	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1112

1008	図版 33	赤加	破片	文1113
1009	図版 33	赤	破片	文1114
1010	図版 33	赤	破片 (1/9)	文1115
1011	図版 33	赤□	破片 (1/9)	文1116
1012	図版 33	赤	破片 (1/9)	文1117
1013	図版 33	赤	破片 (1/9)	文1118
1014	図版 33	赤加□	破片 (1/7)	文1119
1015	図版 32	真	破片	文1120
1016	図版 32	加真	破片 (1/5)	文1121
1017	図版 33	赤加真	破片 (1/8)	文1122
1018	図版 32	真	破片	文1124
1019	図版 32	□真	破片	文1125
1020	図版 32	真	破片	文1126
1021	図版 33	赤加	破片	文1127
1022	図版 33	赤加	破片	文1128
1023	図版 33	赤加	破片	文1129
1024	図版 33	赤加	破片 (1/8)	文1130
1025	図版 33	赤加	破片 (1/7)	文1131
1026	図版 33	赤加	破片 (1/9)	文1132
1027	図版 31	服止	破片 (1/7)	文1133
1028	図版 43	□□□	破片 (1/9)	文1134
1029	図版 31	□〔止カ〕戸	破片	文1135
1030	図版 31	服止	破片 (3/5)	文1136
1031	図版 15	朝布	破片 (1/2)	文1137
1032	図版 37	布	破片	文1138
1033	図版 36	布	破片	文1139
1034	図版 32	真	破片	文1123
1035	図版 19	朝布・神布	破片 (1/4)	文1140
1036	図版 21	朝□、□ (丸にトンボ字)	破片 (1/8)	文1141
1037	図版 13	朝	破片 (1/9)	文1142
1038	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文1143
1039	図版 15	朝布	破片 (1/4)	文1144
1040	図版 29	神布	破片 (1/3)	文1145
1041	図版 29	神布	破片 (1/5)	文1146
1042	図版 29	神布	破片 (3/5)	文1147
1043	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文1148
1044	図版 12	朝布	破片 (1/4)	文1149
1045	図版 12	朝布	破片 (1/8)	文1150
1046	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文1151
1047	図版 12	朝布	破片 (2/3)	文1152
1048	図版 15	朝布	破片 (3/5)	文1153
1049	図版 21	朝□	破片 (1/8)	文1154
1050	図版 12	朝布	破片 (1/5)	文1155
1051	図版 13	朝□	破片 (1/5)	文1156
1052	図版 20	朝布	破片 (1/8)	文1157
1053	図版 21	朝	破片 (1/9)	文1158
1054	図版 13	朝	破片 (1/8)	文1159
1055	図版 13	朝□	破片 (1/9)	文1160
1056	図版 14	朝布	破片 (1/9)	文1161
1057	図版 14	朝	破片 (1/9)	文1162
1058	図版 15	朝布	破片 (1/6)	文1163
1059	図版 20	朝布	破片 (1/9)	文1164
1060	図版 17	朝	破片 (1/9)	文1165
1061	図版 12	朝布	破片 (1/8)	文1166
1062	図版 16	□〔月カ〕布	破片	文1167
1063	図版 33	赤加	破片 (1/7)	文1168

1064	図版 35	□布	破片 (2/3)	文1169
1065	図版 35	□布	破片 (1/9)	文1170
1066	図版 24	□〔月カ〕布	破片 (1/9)	文1171
1067	図版 15	朝布	破片 (1/5)	文1172
1068	図版 37	布	破片	文1173
1069	図版 37	布	破片	文1174
1070	図版 35	□布	破片	文1175
1071	図版 37	布	破片	文1176
1072	図版 23	朝布	破片 (1/3)	文1177
1073	図版 24	月〔朝カ〕□・□ (記号)	破片 (1/7)	文1178
1074	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文1179
1075	図版 34	□〔記号カ〕	破片	文1180
1076	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文1181
1077	図版 43	□□	破片	文1182
1078	図版 28	□〔月カ〕	破片 (1/9)	文1183
1079	図版 24	朝	破片	文1184
1080	図版 30	□〔神カ〕	破片	文1185
1081	図版 34	□〔丸にトンボ字〕	破片	文1186
1082	図版 37	布	破片 (1/9)	文1187
1083	図版 34	□〔丸にトンボ字〕	破片 (1/9)	文1188
1084	図版 34	□〔丸にトンボ字〕	破片	文1189
1085	図版 36	□□〔布カ〕	破片	文1190
1086	図版 42	□	破片	文1691
1087	図版 34	□ (記号3ヶ)	破片	文1192
1088	図版 34	□〔丸にトンボ字〕	破片	文1193
1089	図版 37	布	破片	文1194
1090	図版 37	布	破片	文1195
1091	図版 36	布	破片	文1196
1092	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1197
1093	図版 37	布	破片	文1198
1094	図版 37	布	破片	文1199
1095	図版 37	布	破片	文1200
1096	図版 37	布	破片	文1201
1097	図版 37	布	破片 (1/9)	文1202
1098	図版 43	□	破片 (1/9)	文1203
1099	図版 37	布	破片	文1204
1100	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1205
1101	図版 37	布	破片	文1206
1102	図版 37	布	破片	文1207
1103	図版 37	布	破片 (1/9)	文1208
1104	図版 36	布	破片	文1209
1105	図版 36	布	破片	文1210
1106	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1211
1107	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1212
1108	図版 35	布	破片	文1213
1109	図版 35	布	破片	文1214
1110	図版 36	□布	破片	文1215
1111	図版 37	布	破片	文1216
1112	図版 37	布	破片	文1217
1113	図版 43	□	破片	文1219
1114	図版 43	□	破片	文1222
1115	図版 43	□	破片	文1226
1116	図版 30	□〔ネカ〕	破片	文1227
1117	図版 43	□	破片 (1/8)	文1232
1118	図版 34	□〔丸にトンボ字カ〕	破片	文1233
1119	図版 40	□〔布カ〕	破片 (1/9)	文1234

1120	図版 23	□〔朝力〕布	破片	文1235
1121	図版 43	□□	破片	文1254
1122	図版 43	□□	破片	文1255
1123	図版 43	□	破片	文1256
1124	図版 43	□	破片	文1258
1125	図版 43	□□	破片	文1259
1126	図版 43	□	破片	文1260
1127	図版 43	□	破片	文1262
1128	図版 42	□	破片	文1263
1129	図版 41	□	破片	文1264
1130	図版 42	□	破片	文1265
1131	図版 40	□〔布力〕	破片	文1266
1132	図版 40	□〔布力〕	破片	文1268
1133	図版 42	□	破片(1/8)	文1271
1134	図版 34	□(記号力)	破片(1/8)	文1273
1135	図版 42	□□	破片	文1275
1136	図版 44	□	破片	文1276
1137	図版 31	阿	破片(1/9)	文1088
1138	図版 25	□〔朝力〕	破片(1/8)	文1278
1139	図版 42	□	破片(1/9)	文1279
1140	図版 42	□	破片(1/9)	文1281
1141	図版 42	□	破片	文1285
1142	図版 42	□□	破片	文1286
1143	図版 42	□□	破片	文1287
1144	図版 34	□〔土力〕	破片	文1290
1145	図版 42	□	破片(1/7)	文1292
1146	図版 42	□	破片	文1294
1147	図版 41	□	破片	文1295
1148	図版 34	□(記号力)	破片	文1296
1149		月〔朝力〕	破片(1/5)	文1304
1150	図版 42	□	破片	文1306
1151	図版 42	□	破片	文1307
1152	図版 40	□〔布力〕	破片	文1316
1153	図版 40	□〔布力〕	破片	文1318
1154	図版 41	□	破片	文1319
1155	図版 36	布	破片	文1320
1156	図版 40	□〔布力〕	破片	文1322
1157	図版 40	□〔布力〕	破片	文1323
1158	図版 40	□〔布力〕	破片	文1324
1159	図版 42	□	破片	文1326
1160	図版 42	□	破片	文1327
1161	図版 34	□(文字力)	破片	文1328
1162	図版 42	□	破片	文1329
1163	図版 42	□□	破片	文1335
1164	図版 28	□〔月力〕	破片	文1343
1165	図版 42	□□	破片	文1346
1166	図版 42	□	破片	文1347
1167	図版 42	□	破片	文1353
1168	図版 29	神布	破片(2/3)	文1360
1169	図版 29	神布	破片(2/5)	文1361
1170	図版 19	朝布	破片(1/9)	文1362
1171	図版 14	朝	破片	文1363
1172	図版 22	朝□〔布力〕	破片	文1366
1173	図版 21	朝	破片	文1367
1174	図版 30	□〔神力〕□	破片	文1368
1175	図版 30	□〔申力〕	破片(1/9)	文1369

1176	図版 42	□	破片	文1370
1177	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1378
1178	図版 42	□	破片	文1380
1179	図版 42	□	破片	文1381
1180	図版 42	□	破片	文1382
1181	図版 42	□□	破片	文1384
1182	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1385
1183	図版 16	朝□	破片	文971
1184	図版 26	□〔朝カ〕	破片	文1429
1185	図版 36	布	破片	文1431
1186	図版 40	□〔布カ〕	破片	文1435
1187	図版 42	□□	破片	文1436
1188	図版 24	朝	破片	文1438
1189	図版 34	□（記号）	破片	文1441
1190	図版 42	□□	破片	文1449
1191	図版 42	□	破片	文1493
1192	図版 34	□（記号）	破片	文1499
1193	図版 39	□〔布カ〕	破片	文1504
1194	図版 30	□〔申カ〕	破片	文1610
1195	図版 42	□	破片	文1597
1196	図版 42	□	破片	文1635
1197	図版 28	□〔月カ〕	破片	文1667
1198	図版 42	□	破片	文1668
1199	図版 42	□	破片	文1670
1200	図版 24	朝	破片	文1674
1201	図版 42	□	破片	文1679
1202	図版 42	□	破片	文1681
1203	図版 42	□	破片	文1682
1204	図版 39	□〔布カ〕	破片	文1694
1205	図版 39	□〔布カ〕	破片	文1700
1206	図版 42	□□	破片	文1701
1207	図版 42	□□	破片	文1705
1208	図版 42	□	破片（1／9）	文1760
1209	図版 24	朝	破片	文1764
1210	図版 42	□□	破片	文1765
1211	図版 42	□	破片	文1767
1212	図版 42	□	破片（1／7）	文1773
1213	図版 42	□	破片	文1789
1214	図版 42	□	破片	文1790
1215	図版 42	□	破片	文1791
1216	図版 28	□〔月カ〕	破片	文1796
1217	図版 42	□□	破片	文1797
1218	図版 39	□〔布カ〕	破片	文1798
1219	図版 42	□□	破片	文1805
1220	図版 42	□	破片（1／9）	文1810
1221	図版 27	月	破片	文1665
1222	図版 44	□	破片	文1788
1223		□（残画1画・直線）	破片	文・多数
1224		□（残画1画・曲線）	破片	文・多数
1225		□（残画1画・転折有り）	破片	文・多数
1226	図版 34	皮止卩〔部〕	破片（2／3）	文79

V. 瓦の編年

龍角寺に葺かれた瓦を龍角寺の瓦とすると、瓦は龍角寺、五斗時瓦窯、龍角寺瓦窯、北羽鳥瓦作瓦窯、その他龍角寺周辺の遺跡から出土している。このうち、古代の瓦は、現状では大きくⅠ～Ⅲ期に分けられ、このうち五斗時瓦窯出土の瓦はⅠ・Ⅱ期、龍角寺瓦窯はⅠ期後半とⅡ期、北羽鳥瓦作瓦窯Ⅲ期に相当するので、今回はⅠ・Ⅱ期の瓦について概要を述べる。

相対編年は、三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦（Ⅰ類A、以下、軒丸瓦ⅠA）の瓦当文様の変化（範の改変と傷の進行）と平瓦の製作技法（Ⅰ・Ⅱ期：桶巻き作り、Ⅲ期：一枚作り）を、Ⅰ・Ⅱ期の分類は軒丸瓦ⅠAの分類と平瓦の分類（本報告平瓦Ⅰ～Ⅲ類）を基準にした。

Ⅰ・Ⅱ期の時期の相対編年には、軒丸瓦ⅠAの瓦当文様の分類が有効で、蓮子の改変によるⅠAa～ⅠAcと、ⅠAc段階の花弁端の範傷の進行によるⅠAc1～ⅠAc4が編年の基準となる。この変遷は表11、図17に示すとおりで、蓮子の改変は以下のとおりである。

ⅠAa：中心1顆＋外周5顆

ⅠAb：中心1顆（大きくなる）＋外周5顆

ⅠAc：中心1顆（ⅠAbと同じ）＋外周10顆（ⅠAbの蓮子の間に5顆追加）

時 期	五斗時瓦窯				文字瓦
	軒 丸 瓦	軒 平 瓦	丸 瓦	平 瓦	
Ⅰ 期 前 半	a	出土	ⅠA	Ⅰ	朝布、朝、神布、神、 神戸布、布、朝布・神布 神真、服止、服、水津、土 □〔止カ〕戸、土カ主、入、 赤久在、赤加真、赤加、赤 加、阿加真、加真、加皮真 真、□皮麻、皮麻、阿、麻 麻□、□□女瓦四百五十 皮止ア
	b				
Ⅰ 期 後 半	c1	出土	ⅠB・ ⅠC	Ⅰ	□□□〔加刀利カ〕
	c2				
	c3				
Ⅱ 期	c4		Ⅱ	Ⅱ	生、小加、加、□〔加カ〕 □□〔加カ〕、玉作、玉 □〔玉カ〕、皮尔□〔負カ〕 皮尔□〔負カ〕、野 □〔朝カ〕

表11 五斗時瓦窯出土瓦の変遷

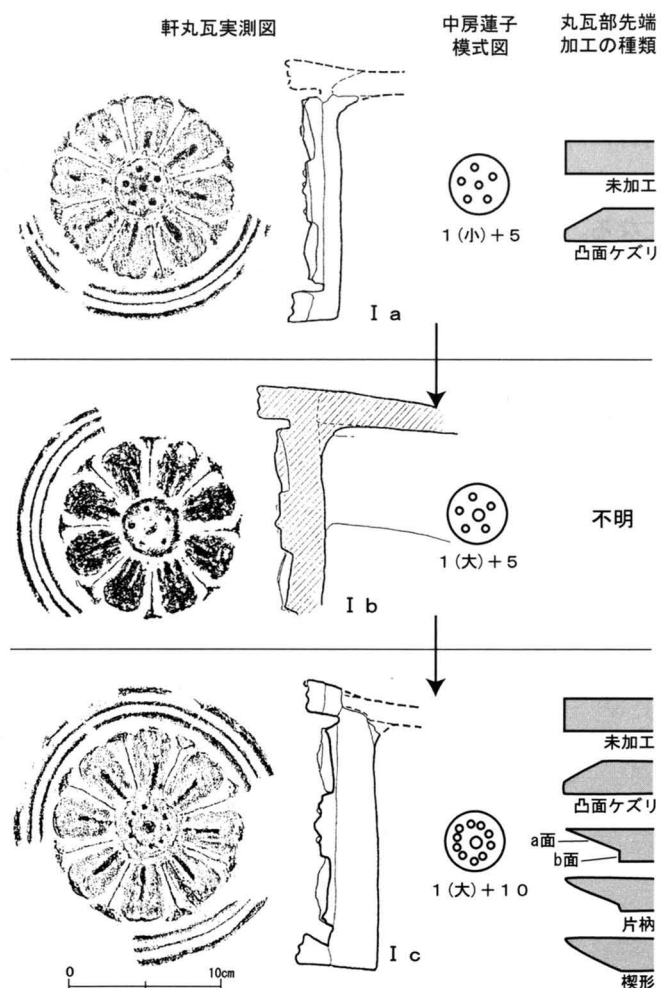


図17 軒丸瓦の変遷の変遷（清地2009、I b図多字1980）

とくにⅠ期前半と後半は、Ⅰ期前半がおもに五斗蒔瓦窯、後半がおもに龍角寺瓦窯で生産されたことが窯からの瓦の出土量でわかる。その時間差は、瓦の分類でも示したとおり、平瓦Ⅱ類は凹凸面を削って、凸面の叩き痕跡、凹面の布目を消すが、凸面の削りの粗い部分に残る斜格子の叩きがⅠ類の凸面に残る叩き斜格子と酷似すること（叩き板の傷などで同一であることは未確認）や、桶巻きの粘土円筒の分割がⅠ・Ⅱ類とも5枚分割と同じになること、五斗蒔瓦窯出土の「赤加」文字瓦と龍角寺瓦窯出土の「加刀利」文字瓦の「加」が同筆の可能性の指摘（中村報告）から、小さいと考えている。Ⅰ期のうち、軒丸瓦ⅠA bは現在確認されている資料が1点のみで、窯での出土が確認されていないため、前半・後半の判断ができない。

Ⅱ期の軒丸瓦ⅠA c 3と平瓦Ⅲ類の対応関係は、胎土の相似を根拠とした。

Ⅰ期の暦年代は、周辺の遺跡、軒丸瓦の瓦当文様と製作技法、文字瓦を根拠に、650～660年代を想定している（山路2013）。

Ⅱ期の暦年代は、軒丸瓦ⅠA c 4や平瓦Ⅲ類と葡萄唐草文軒平瓦（図18）の胎土が、相似することから、葡萄唐草文軒平瓦の年代を定点とする。暦年代は、ほとんどが龍角寺境内で表面採集された資料なので、共伴資料がないことから、年代の根拠は、瓦当文様を一応の目安とする。

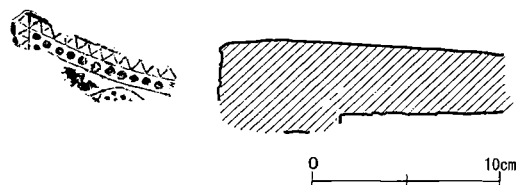


図18 葡萄唐草文軒平瓦（多宇1980）

瓦当文様は、内区に葡萄唐草文が施文されるがあるが（唐草文が均整になるか偏行になるかは出土が小片のため不明）、上下外区・脇区とも軒丸瓦における外区外縁と内縁のように、外縁にあたる部分は線鋸歯文、内縁にあたる部分は珠文が施文される。軒丸瓦の外区内縁の成立と、外縁に線鋸歯文、内縁に珠文の施文は、宮都では680年代に成立した藤原宮式軒丸瓦以降の軒丸瓦に認められ、平城遷都当初の740年代まで続く。しかし、平城遷都後の施文は、線鋸歯文、珠文とも間隔があく傾向になる。龍角寺の葡萄唐草文軒丸瓦の、線鋸歯文と珠文は間隔が密で藤原京段階の文様構成に似る。上下外区、脇区の文様に着目すれば、680年代から710年ぐらいとなる。今後、顎のあり方も踏まえて検討の必要があるが、今回は一応の目安として提示しておく。

参考文献

- 清地良太 2009「龍角寺の文字瓦の造瓦技法」『房総と古代王権』 高志書院
 奈良文化財研究所編 2010『古代瓦研究』Ⅴ
 多宇邦雄 1980「下総龍角寺について」『古代探叢』 早稲田大学出版部
 山路直充 2103「龍角寺の創建」『古墳から寺院へ』 六一書房

（山路 直充）

VI. おわりに―五斗時瓦窯 1 期の瓦生産―

本報告では、五斗時瓦窯出土の文字瓦を紹介し、記銘された文字の分類をおこなった。瓦への記銘には諸説あるが、文字瓦の多くが瓦の生産工程のなかで記銘されることから、六何の原則に従って文字瓦の成立を捉えることは肝要である。「おわりに」にあたり、今回の成果を踏まえ文字が最も多く記銘される I 期前半の平瓦 I 類（以下平瓦 I）の文字瓦を取り上げ、五斗時瓦窯における瓦生産における記銘者を取り上げたい。

1. 平瓦 I 類の特徴と分類

平瓦 I 類の特徴は瓦の分類ですでに触れられているが、その最たる特徴は、凹・凸面が篋状工具で整形され、凹面の布目・桶の杵板痕跡、凸面の叩きがかき消されたことである。ただ一部の凸面の整形が粗い資料では、叩き板の痕跡が格子もしくは斜格子と捉えられ、その他の叩き板は龍角寺瓦窯の平瓦の叩き板と酷似する。平瓦の製作技法は桶巻作りで、粘土円筒は 5 分割である。

凹・凸面が整形されることから、瓦の全長、凹凸面の整形のあり方から分類をおこなった。

全長 I 1：短いもの (37.7-39.9cm)

I 2：長いもの (42.2-44.5cm)

凸面の整形 甲：広端縁を横方向に面取りするもの。

乙：面取りしないもの。

凹面の整形 イ：広端→狭場の縦方向に削るもの。

ロ：狭端→広端の縦方向に削るもの。

ハ：側縁→側縁の横方向に削るもの。

凹面広端縁の整形 1：広端縁を横方向に削るもの。

2：削らないもの。

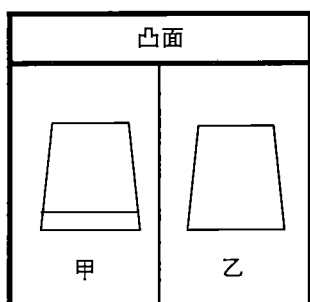


図 19 凸面整形の分類

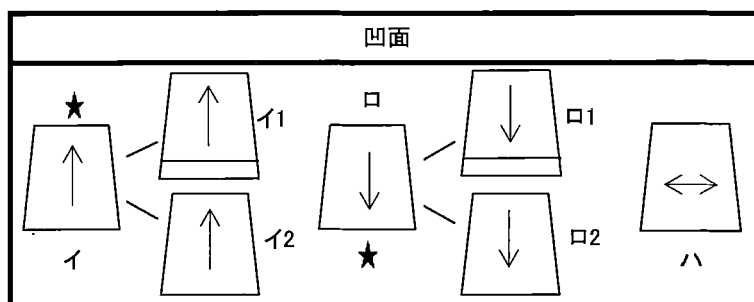


図 20 凹面整形の分類（★は工人の立ち位置）

これらの特徴が残る平瓦を抽出し、I 1・I 2と凹凸面の整形の関係を表 19、文字と凹凸面の整形と関係を表 20 に示した。

以上の属性から、平瓦 I 類を分類すると以下の結果となる。

① I 1 は甲のみで、I 2 は甲・乙がある。

② 五斗時瓦窯より後出する龍角寺瓦窯の平瓦は五斗時瓦窯 I と同じ粘土円筒を 5 分割にし、全長は I 1 と同じである。なかには五斗時瓦窯の I 1 乙と同じ整形の平瓦が含まれる。

③ ハの属性をもつ平瓦が甲のみに認められ、乙に認められない。

これにより、瓦生産の前後関係は、Ⅰ2→Ⅰ1が認められる。Ⅰ1の凸面の整形は甲（Ⅰ1甲）のみであるが、龍角寺瓦窯にⅠ1乙が認められることから、五斗時瓦窯でもⅠ1乙は存在が推定できる。これは凹面広端を削る整形（1）が、Ⅰ1に認められることから想定できる。瓦の全長は短く変化するが、広端の整形は常におこなわれていた。

瓦の整形と記銘は、分割した生瓦を凹型台に載せて凹面を整形→瓦を反転させて凸型台に載せて凸面を整形→記銘、の順でおこなわれる。

表19で取り上げた平瓦Ⅰで文字が記銘されているのはⅠ2のみなのだが、表20では表19で数が少ない乙の整形も多く認められるので、五斗時瓦窯でⅠ1乙を想定のように想定したように、Ⅱ1段階でも文字瓦は生産されたとする。平瓦Ⅰの平瓦の記載率は70%前後とされるので、ほぼ同時期にさまざまな文字が記銘されたことがわかる。

	甲イ1	甲イ2	甲ロ1	甲ロ2	甲ハ	甲不明	乙イ1	乙イ2	乙ロ1	乙ロ2	乙ハ	乙不明	不明
Ⅰ1	6	2	2	1	1	7							2
Ⅰ2	1		1		2		3						

表19 平瓦Ⅰ1・2と凹・凸面整形の関係（平瓦は全長のわかるものを抽出）

	甲イ1	甲イ2	甲ロ1	甲ロ2	甲ハ	計	乙イ1	乙イ2	乙ロ1	乙ロ2	乙ハ	計	総計
朝1	3		1			4	13	1	1	1		16	20
朝2	5	1	6	3		15	1	1				2	17
朝3	2	3	3			8			1			1	9
朝4	4	1				5	22	2	3	1		28	33
計	14	5	10	3		32	36	4	5	2		47	79
加1	3					3	5	2				7	10
加2	1			1		2	3					3	5
計	4			1		5	8					8	13
神1			2		2	4							4
神1'		1	1		1	3	1					1	4
神2							1					1	1
神分類不明		1				1		1				1	2
計		2	3		3	8	2	1				3	11
総計	18	7	13	4	3	45	46	5	5	2		58	103

表20 記銘と凹・凸面整形の関係

2. 工人と記銘

凹面の整形であるイ・ロ（凹面縦方向の削りの向き）と1・2（凹面広端縁の削りの有無）は、Ⅰ1・Ⅰ2段階とも組み合せて認められることから、この4種類の整形はⅠ2・Ⅰ1段階を通じて存在した整形であり、工人の属性とみなすことができる。Ⅰ2甲に認められるハの整形（凹面横方向の削り）も工人の属性とみなせば、整形に関わった工人はⅠ2段階で5人、Ⅰ1段階で4人となる。

本報告の中村報告によれば、文字の記銘者は「朝」「加」「神」それぞれ 3 人とされる。この 3 人が同一人物かは中村報告では触れていないが、記銘者が異なっても、文字は凸面中央で広端から狭端に向かって記銘される。ここに記銘者個人の属性は見いだせず、規制されて記銘がおこなわれたことがわかる。規制という意味では、瓦の全長が I 2 から I 1 に変化することも、工人の属性を無視しておこなわれていて同じである。記銘者は、瓦生産のなかにあつて規制を受ける立場の人物、つまり瓦屋側の人物を想定したい。しかし、文字と工人の属性との対応関係は見いだせない。とくに凸面の整形と文字の記銘との関係がないことは、記銘者を工人と判断する根拠を欠く。今後は、「朝」「加」「神」の 3 人の記銘者が同じ人物なのか、中村報告では「朝布」と「神布」の「布」が似ることを指摘するので、今後の重要な課題としておこう。

おわりに

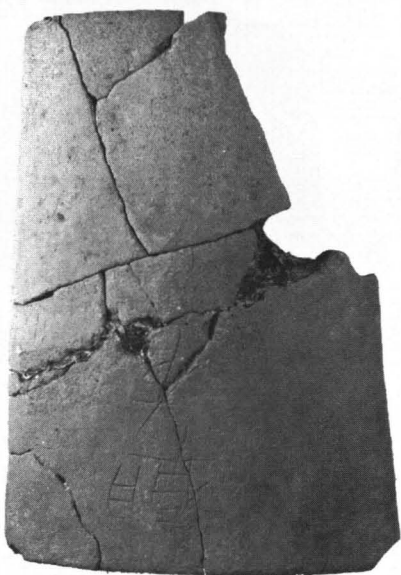
記銘者が瓦屋側の人物とすれば、記銘は瓦屋側の必要に応じておこなわれたことになる。これは、武蔵・上野・下野国分寺などにみられる発注者名の記銘と同じで、瓦屋で発注者ごとに瓦を識別・仕分をおこなうための行為であり、それは瓦の生産経費清算と関わる。問題は龍角寺と同じような意味をもった文字瓦が同時期に存在しないことである。

ただし、製作工人の識別という意味では、古墳時代の須恵器や埴輪への記号記銘と通じるものがあり、今後の検討課題としたい。

(山路 直充)



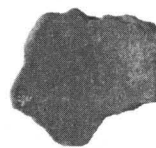
1. 平瓦Ⅰ類(Ⅰ 1)



2. 平瓦Ⅰ類(114・Ⅰ 2)

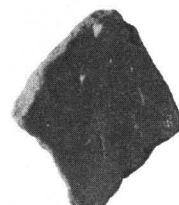
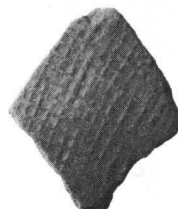


3. 平瓦Ⅰ類(1002・Ⅰ 2)



1. 平瓦Ⅱ類(斜格子)

2. 平瓦Ⅱ類(斜格子)

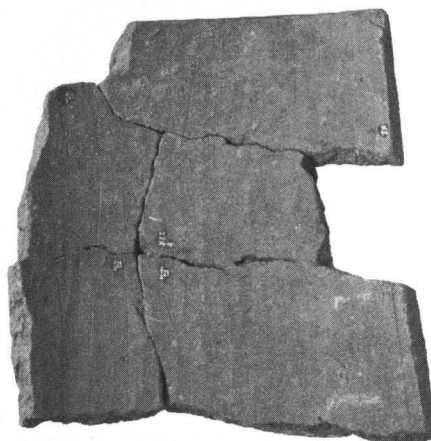


3. 平瓦Ⅱ類(正格子)

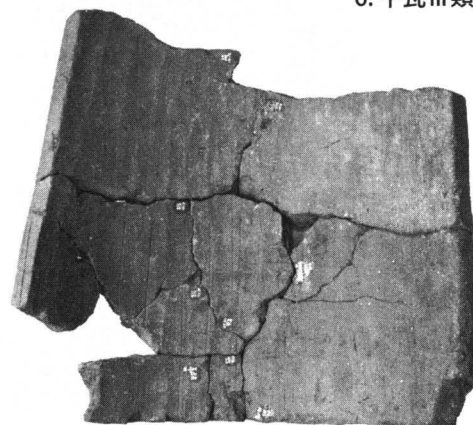
4. 平瓦Ⅱ類(正格子)



5. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 2 a)



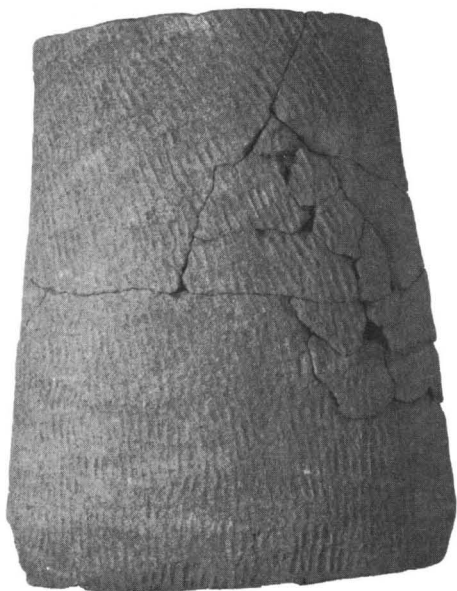
6. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 4)



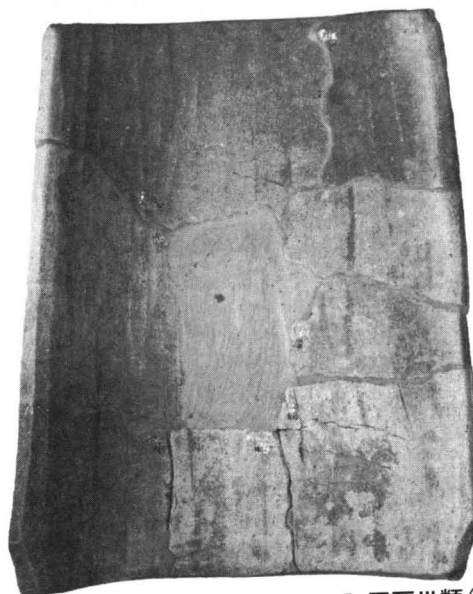
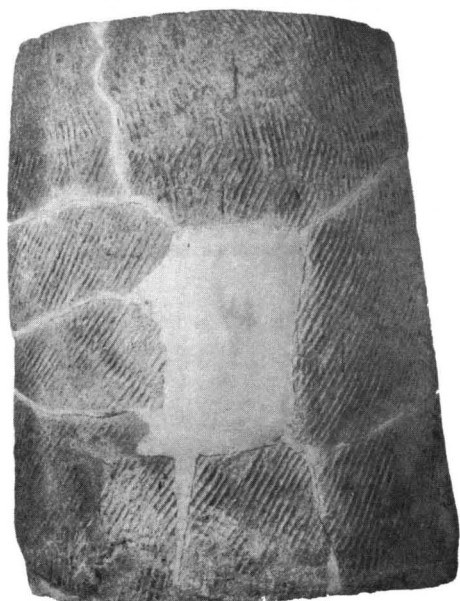
7. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 1 a)



1. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 1 b)



2. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 1 b)



3. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 3)



1. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 5)



2. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 5)



3. 平瓦Ⅲ類(Ⅲ 5)



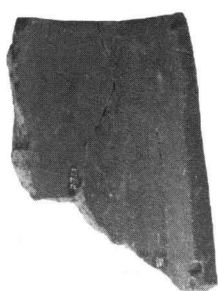
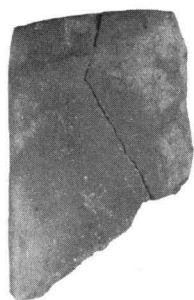
4. 平瓦Ⅳ類



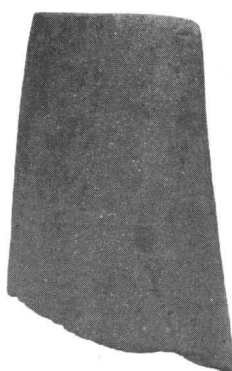
5. 平瓦Ⅳ類



6. 平瓦Ⅳ類



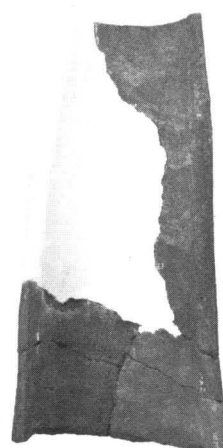
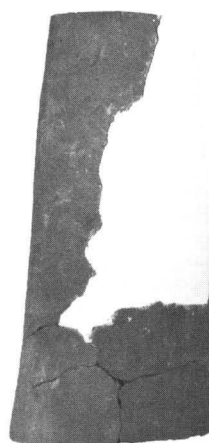
1. 丸瓦Ⅰ類



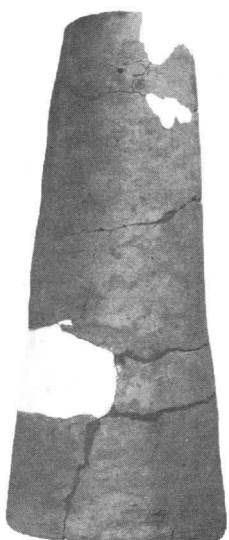
3. 丸瓦Ⅰ類



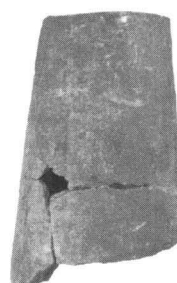
2. 丸瓦Ⅰ類



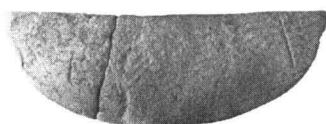
5. 平瓦Ⅱ類



4. 丸瓦Ⅱ類



6. 平瓦Ⅱ類



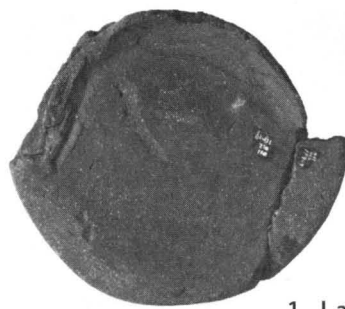
4. 面戸瓦



6. 面戸瓦



5. 面戸瓦



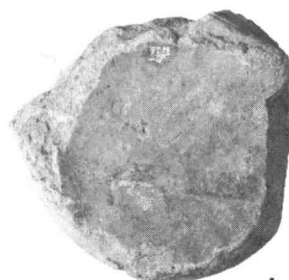
1. I a段階



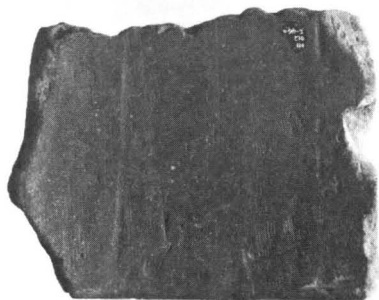
2. I a段階



3. I c段階



4. I c段階



5. I B





「神戸布」(103)



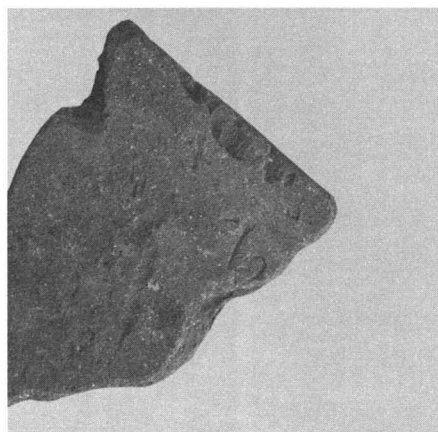
「神負」(1002)



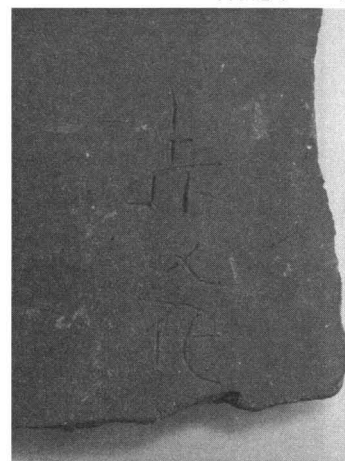
「□□女瓦四百五十」(180)



「□□」(131)



「百」(867)



「赤久□〔在カ〕」(184)



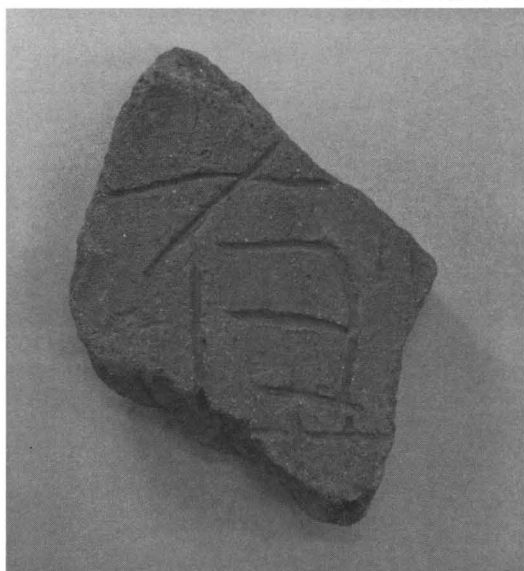
「皮止 卩〔部〕」(1226)



朝布第 1 類型 (34)



朝布第 1 類型 (35)



朝布第 1 類型 (683)



朝布第 1 類型 (87)



朝布第 1 類型 (114)



朝布第 2 類型 (244)



朝布第 2 類型 (1039)



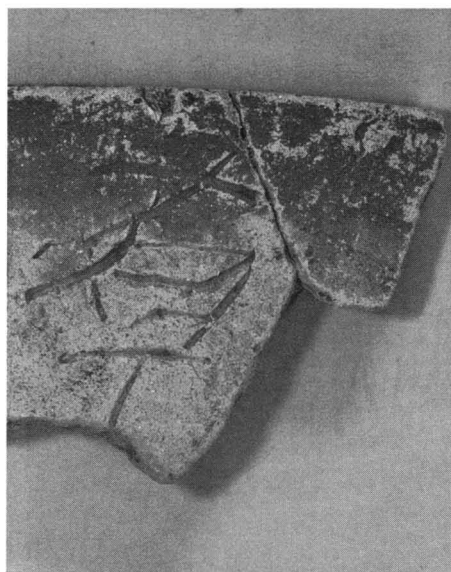
朝布第 2 類型 (350)



朝布第 2 類型 (1067)



朝布第 2 類型 (1216)



朝布第3類型 (41)



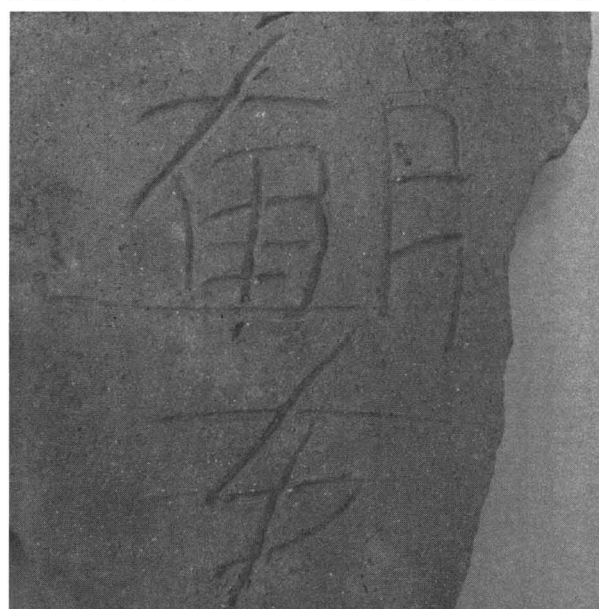
朝布第3類型 (46)



朝布第3類型 (116)



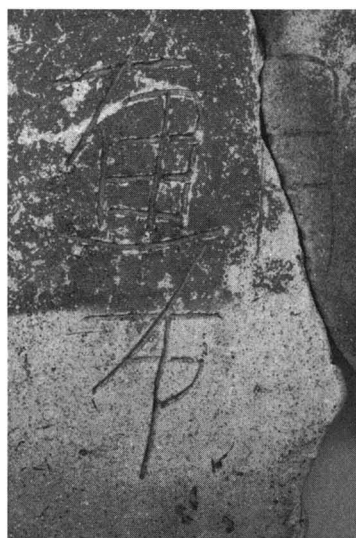
朝布第4類型 (92)



朝布第4類型 (89)



朝布第4類型 (193)



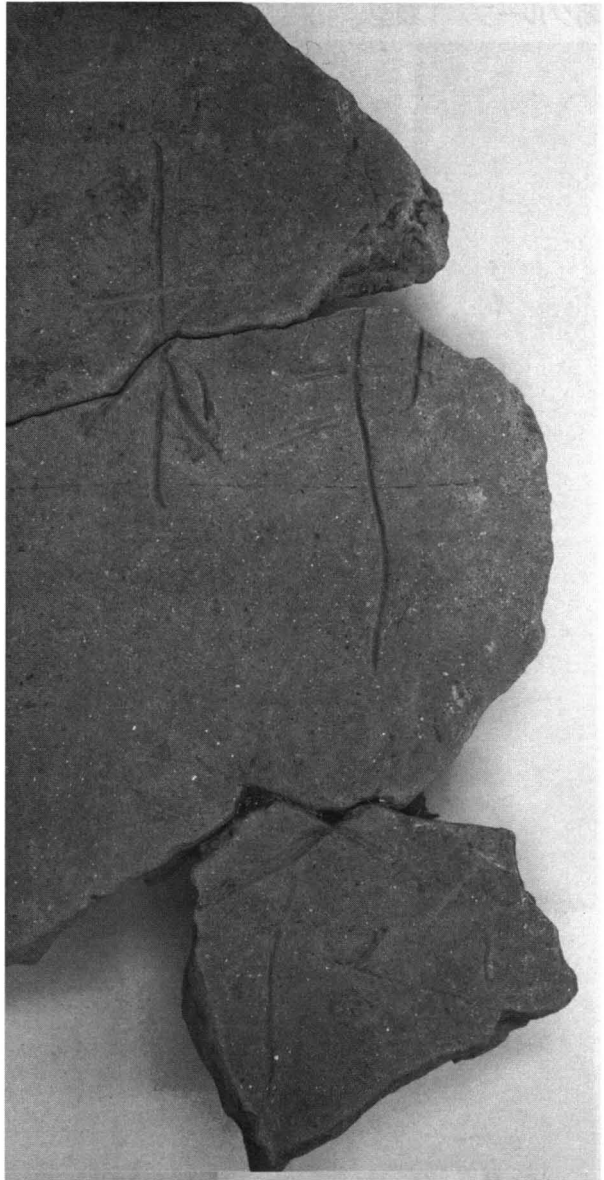
朝布第4類型 (191)



朝布第4類型 (222)



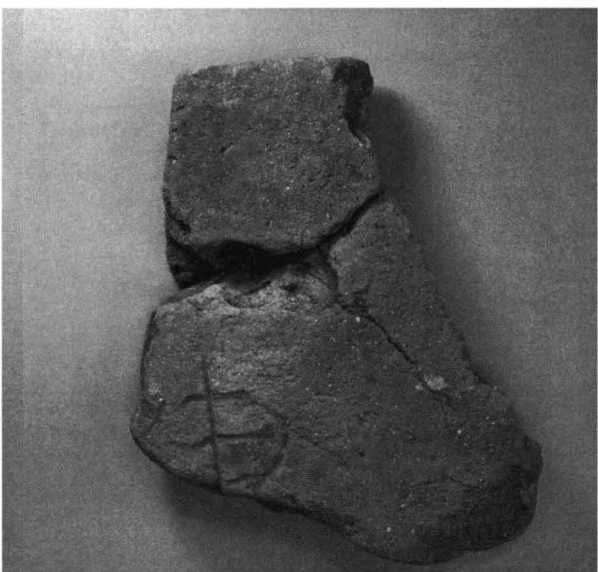
神 1 類型 (104)



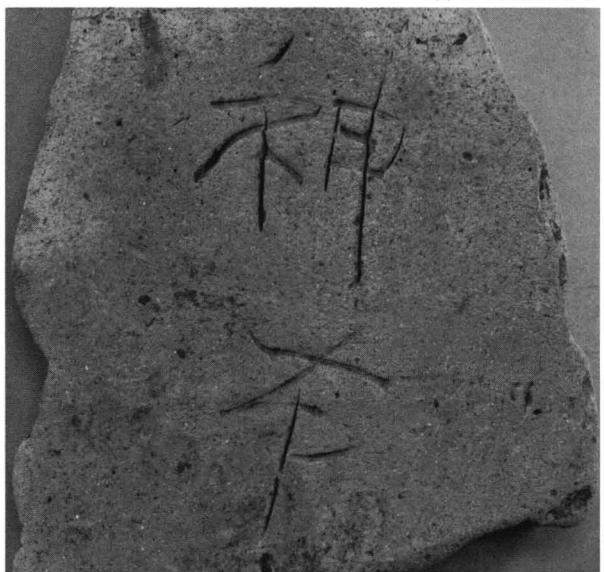
神 1' 類型 (102)



神 1 類型 (259)

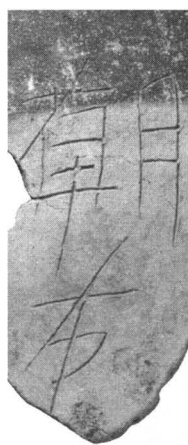


神 1'' 類型 (829)

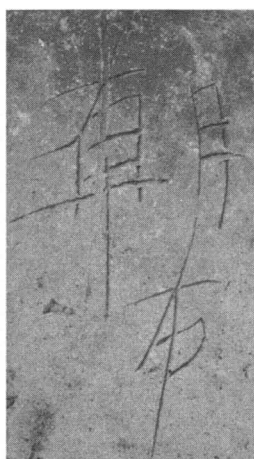


神 2 類型 (146)

朝グループ 1 類型



414



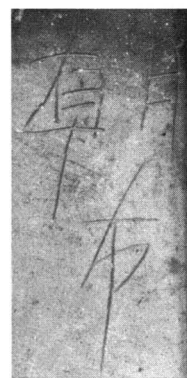
1048



1044



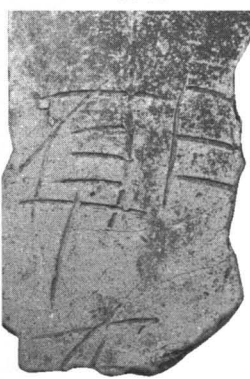
114



87



1050



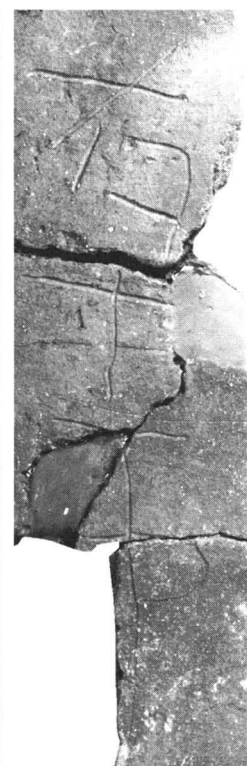
212



1061



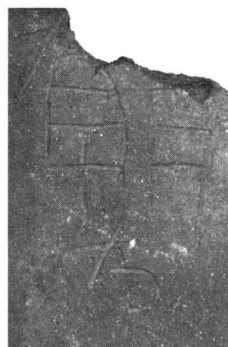
1046



35



1038



115



221



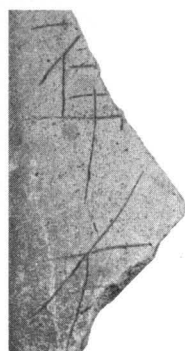
83



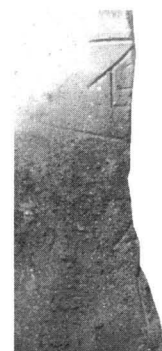
1047



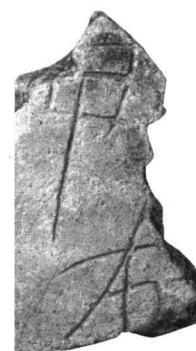
261



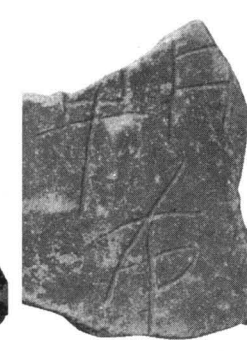
86



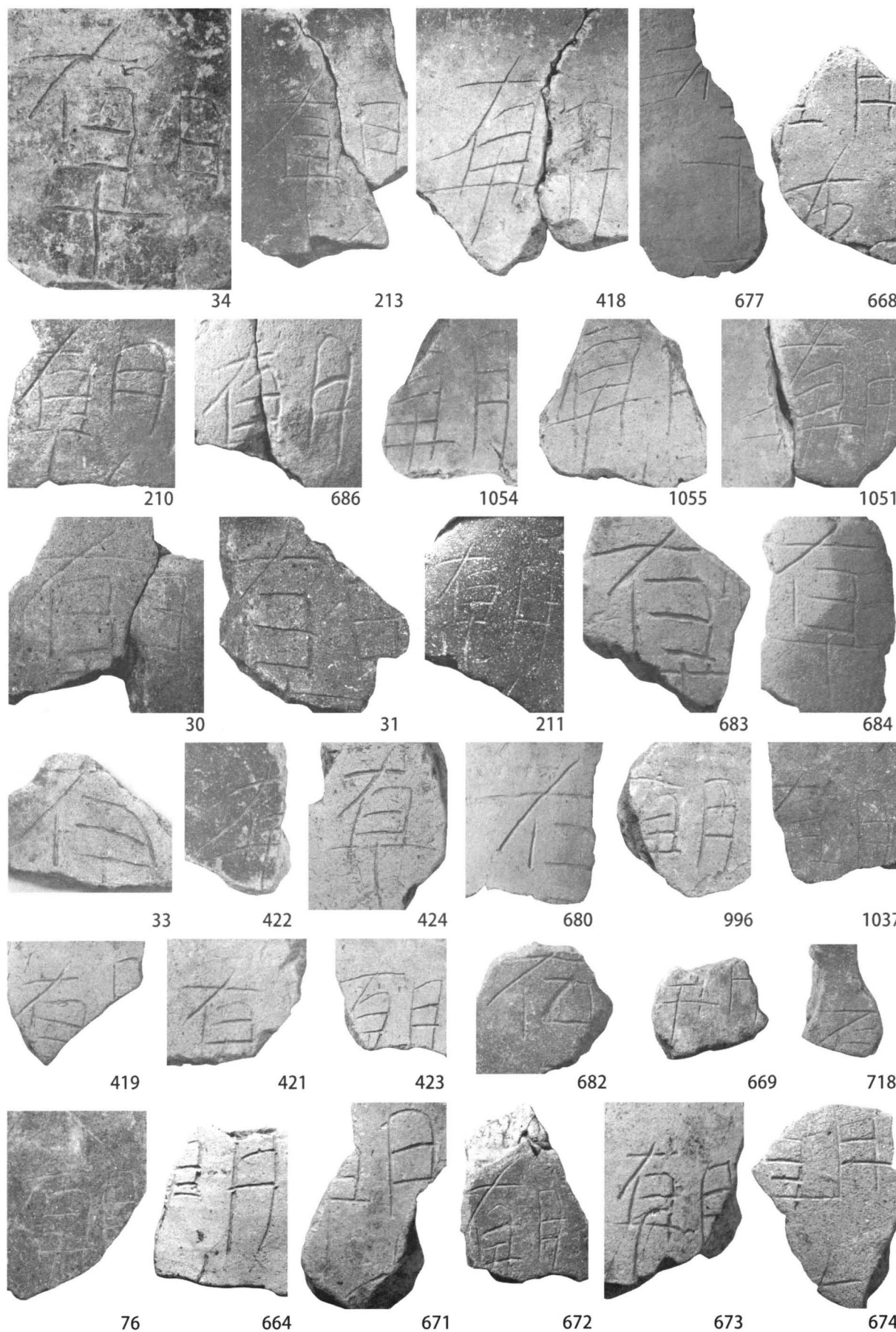
436

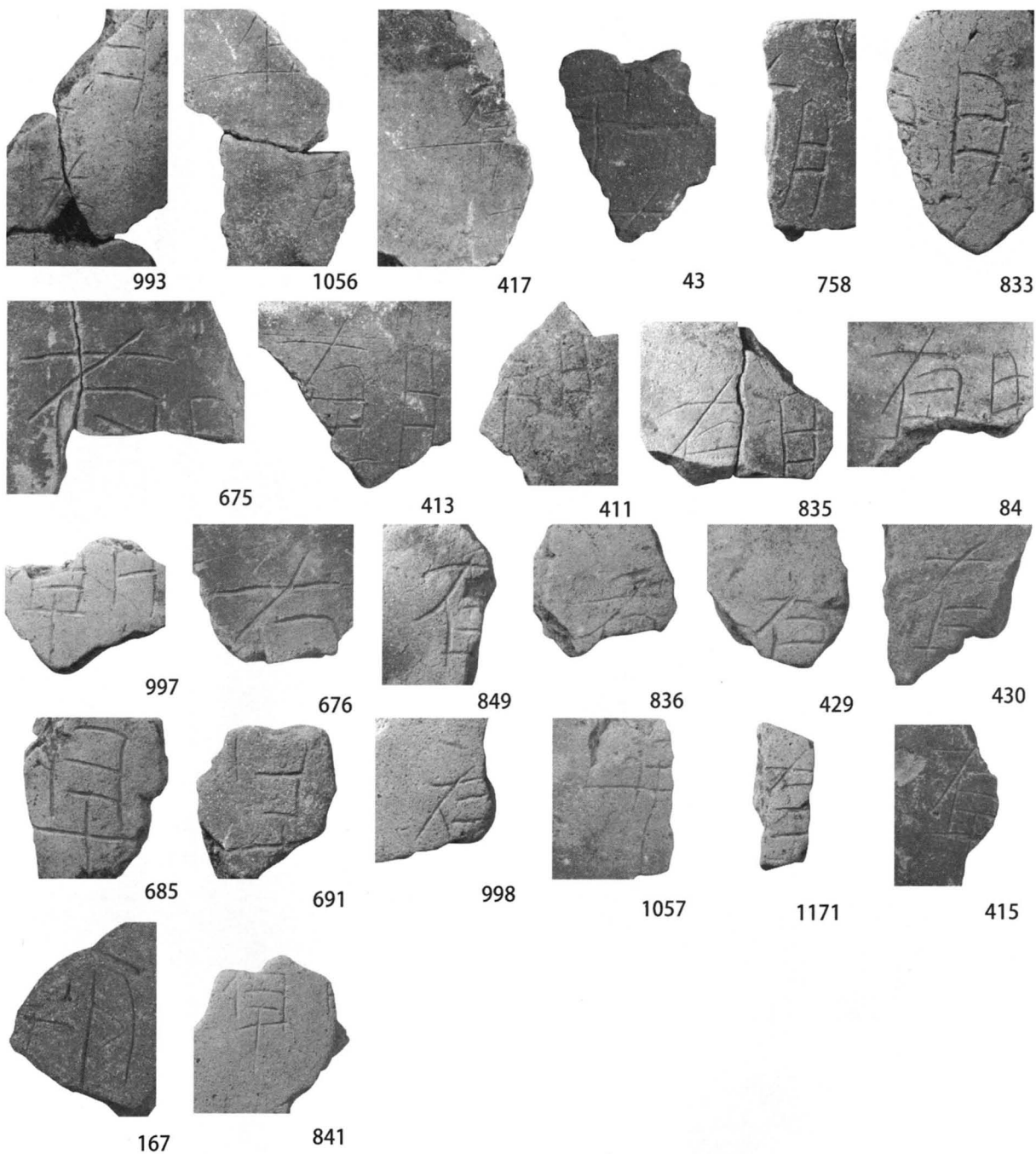


209



1045

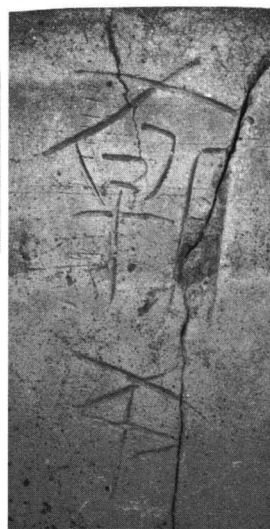




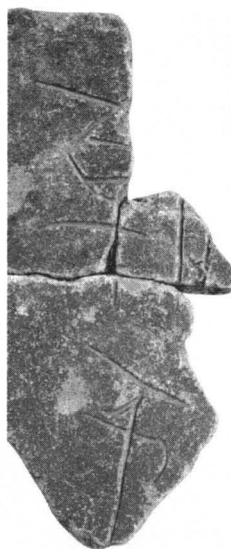
朝グループ 2 類型



125



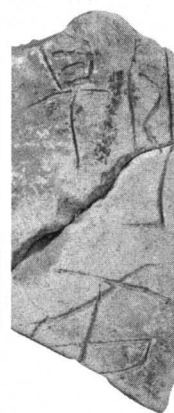
982



206



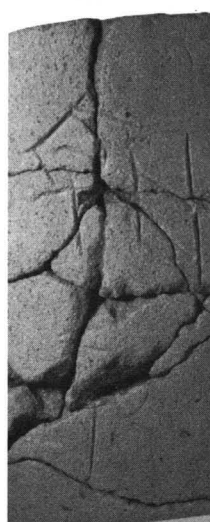
1067



1058



70



924



74



1048



36



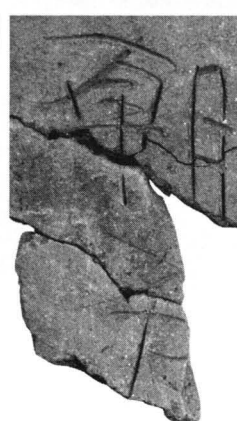
1039



1031



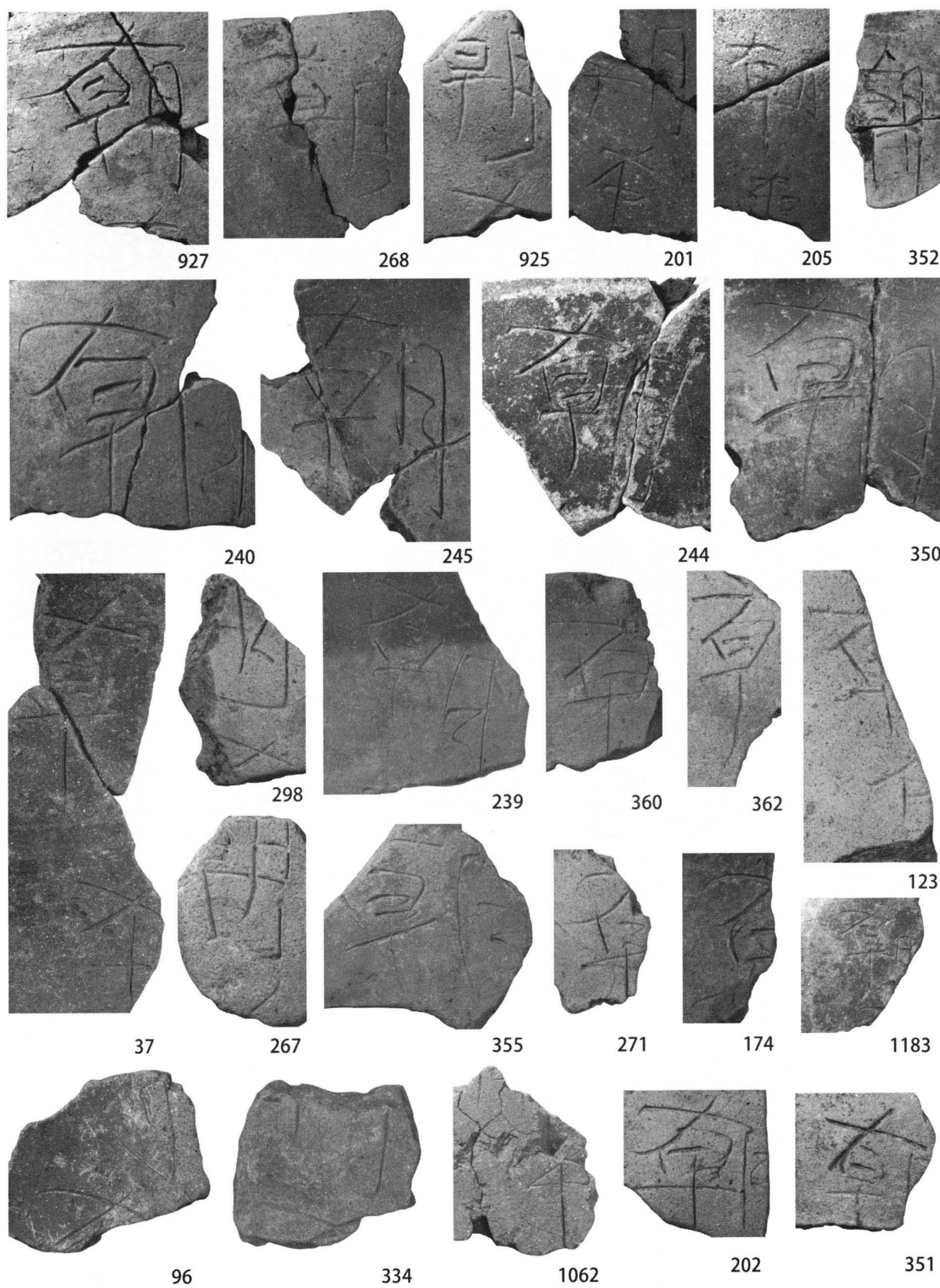
71

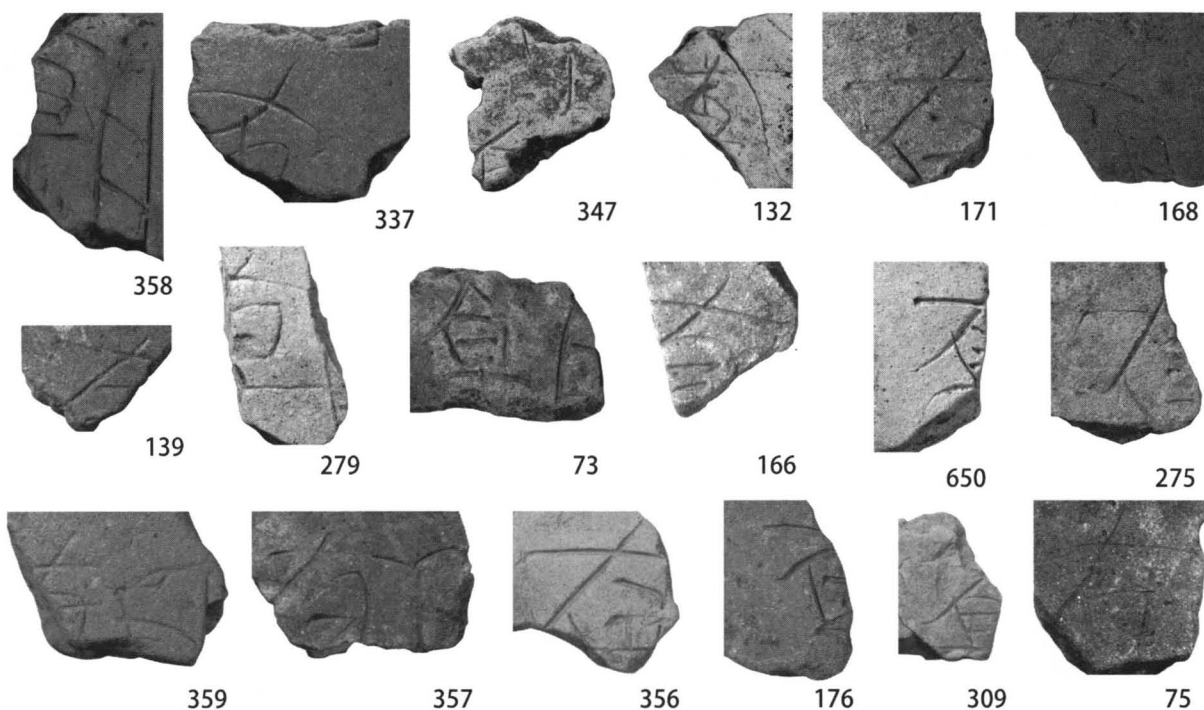


124

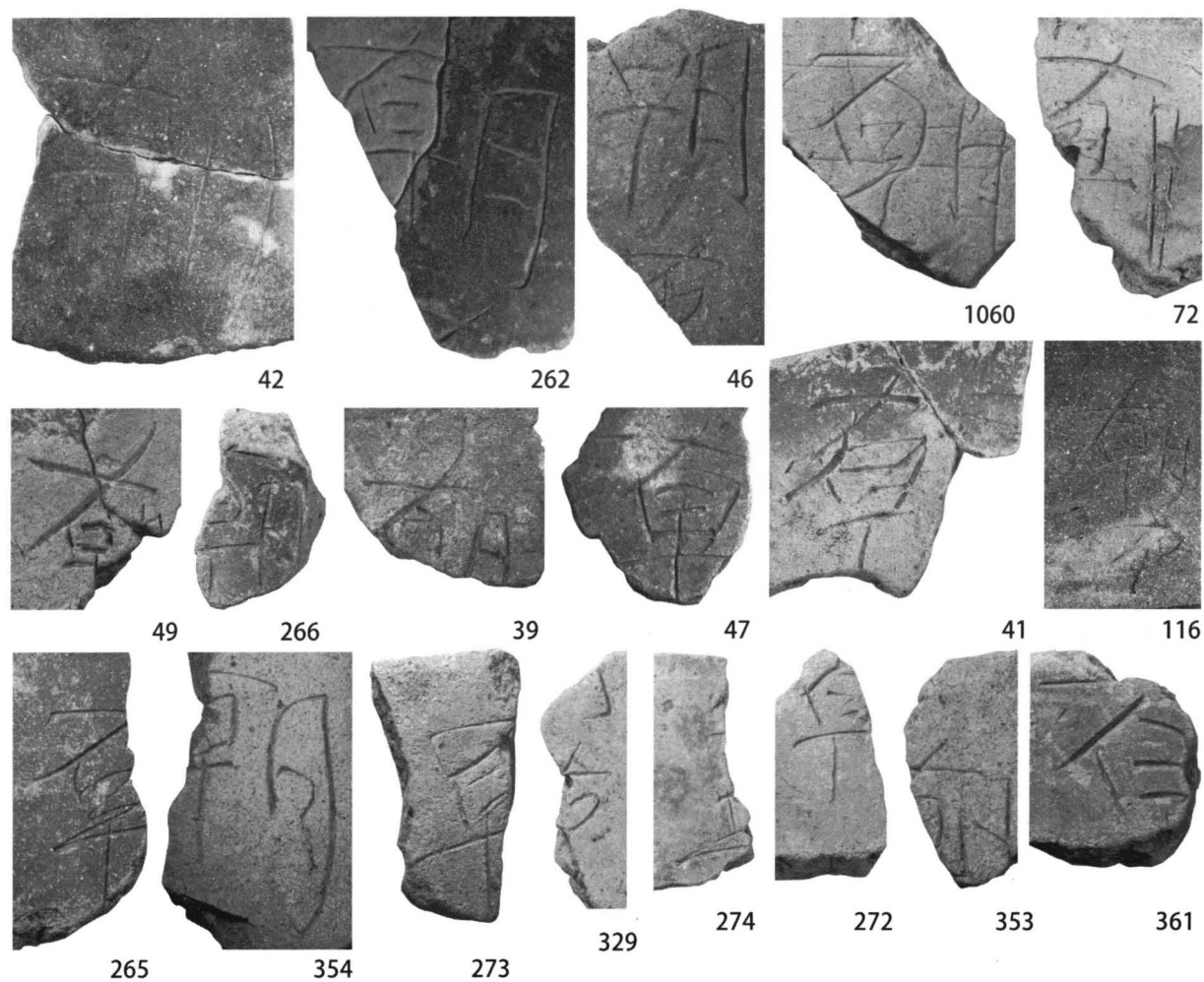


926

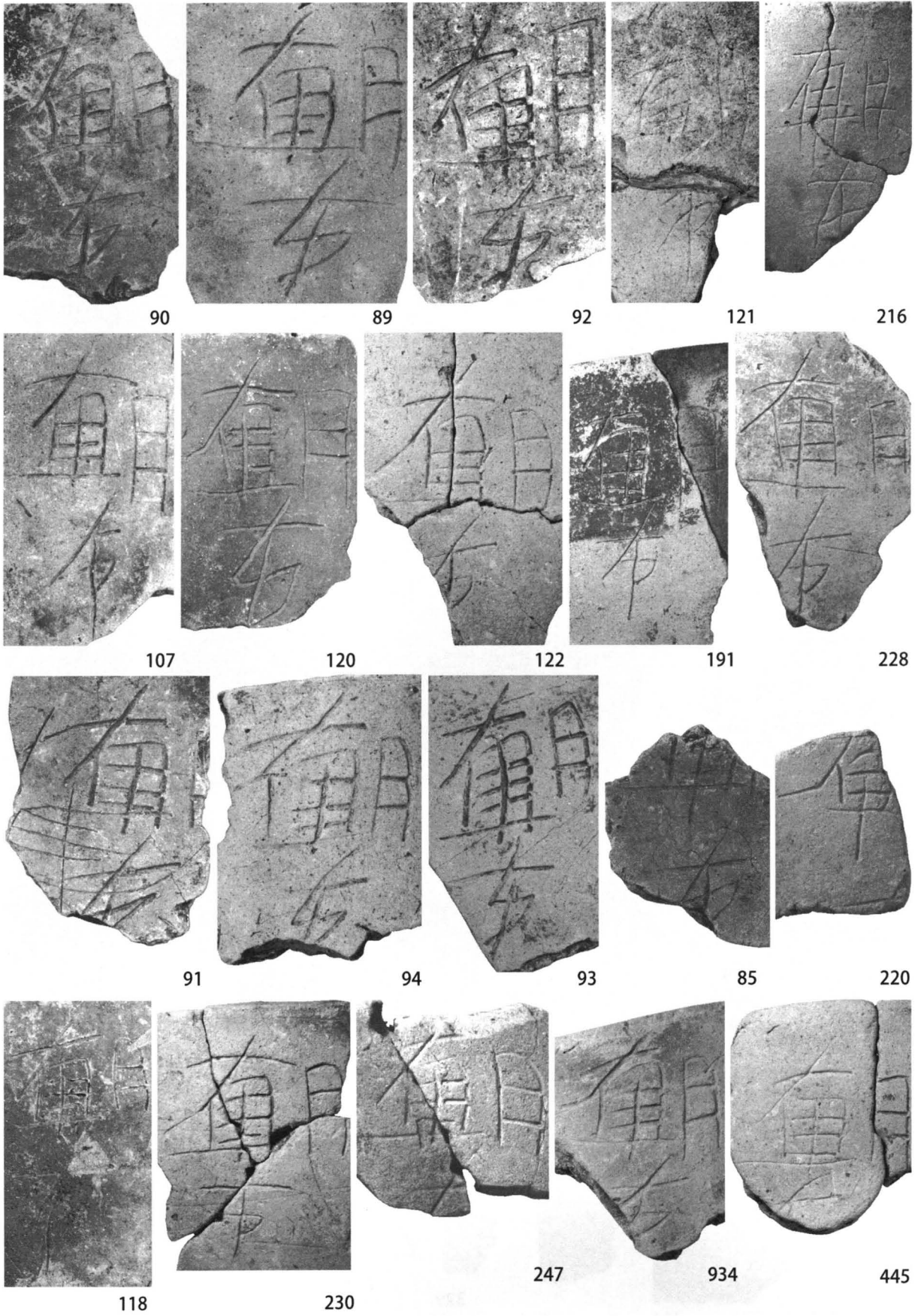




朝グループ 3 類型



朝グループ 4 類型

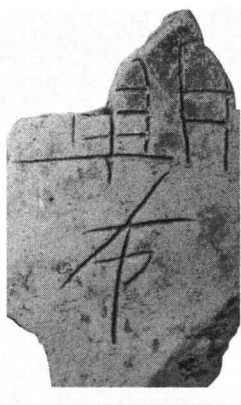




193



932



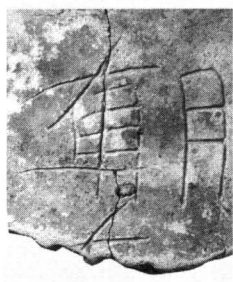
225



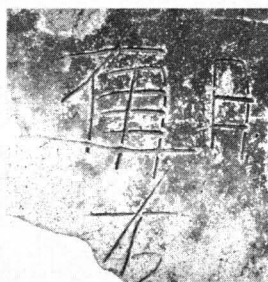
117



140



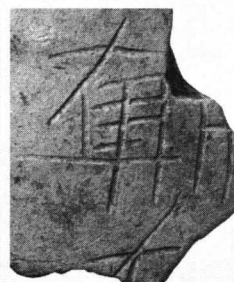
928



222



249



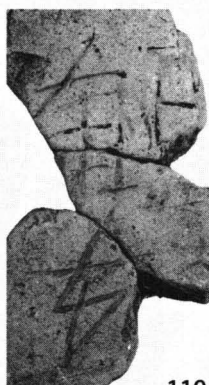
248



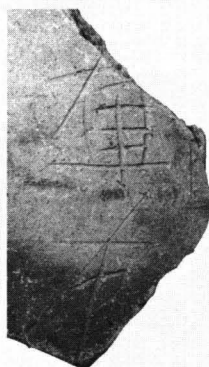
493



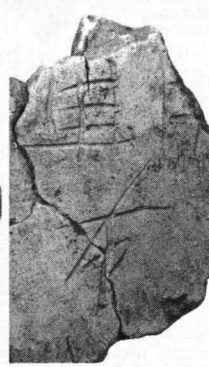
133



119



190



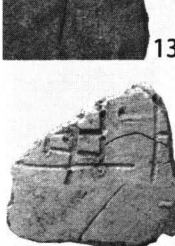
192



929



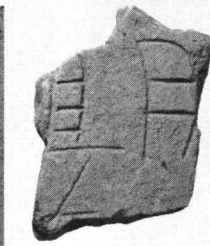
254



710



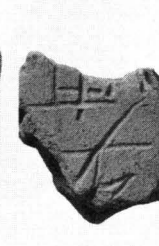
438



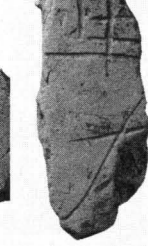
702



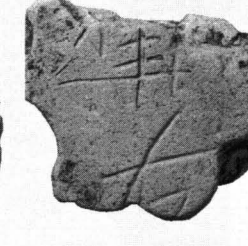
723



725



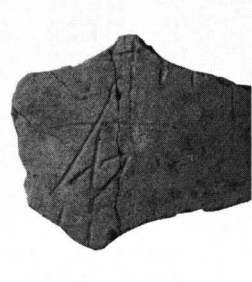
935



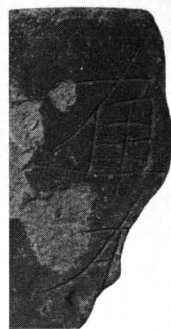
1170



933



559



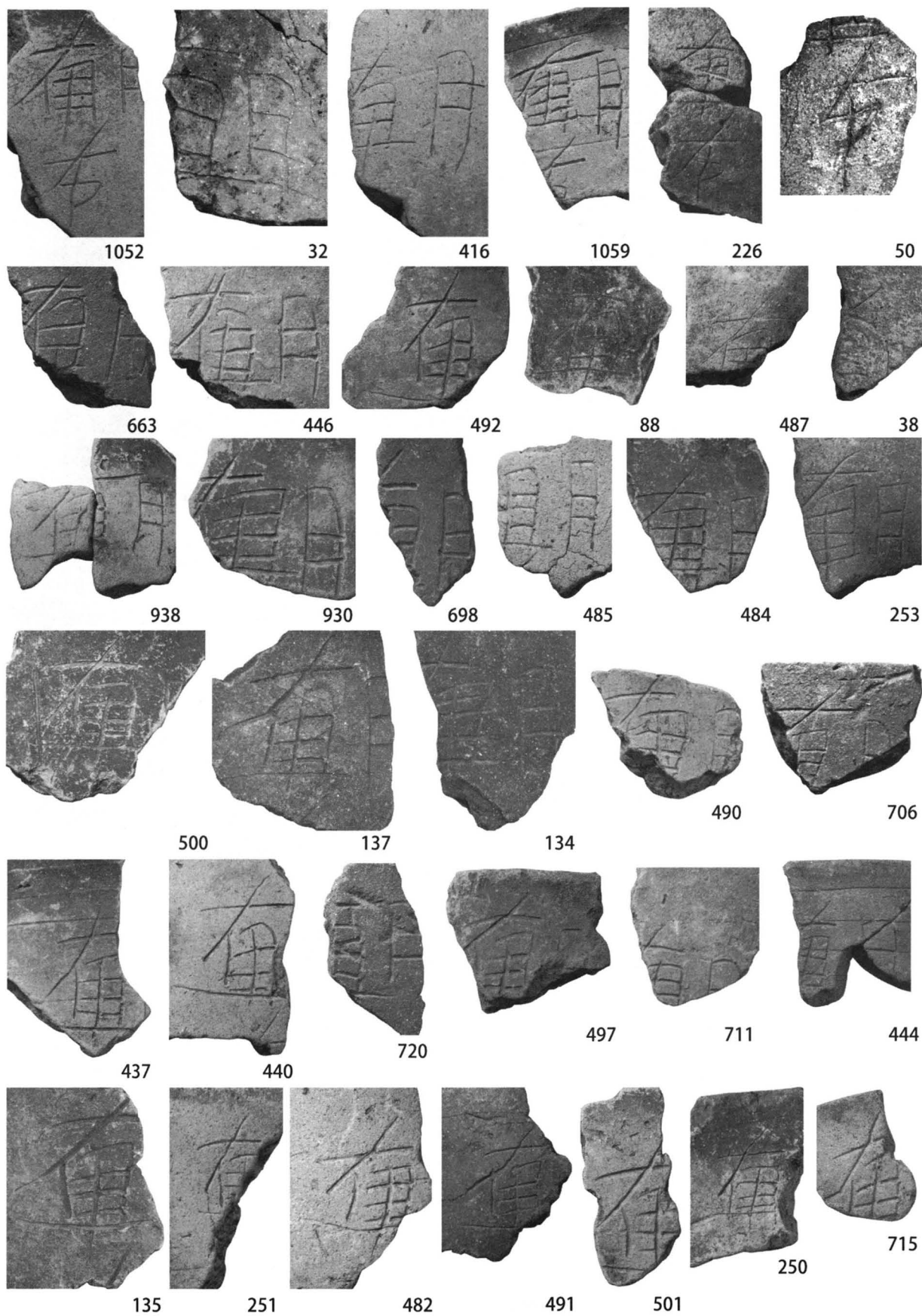
194

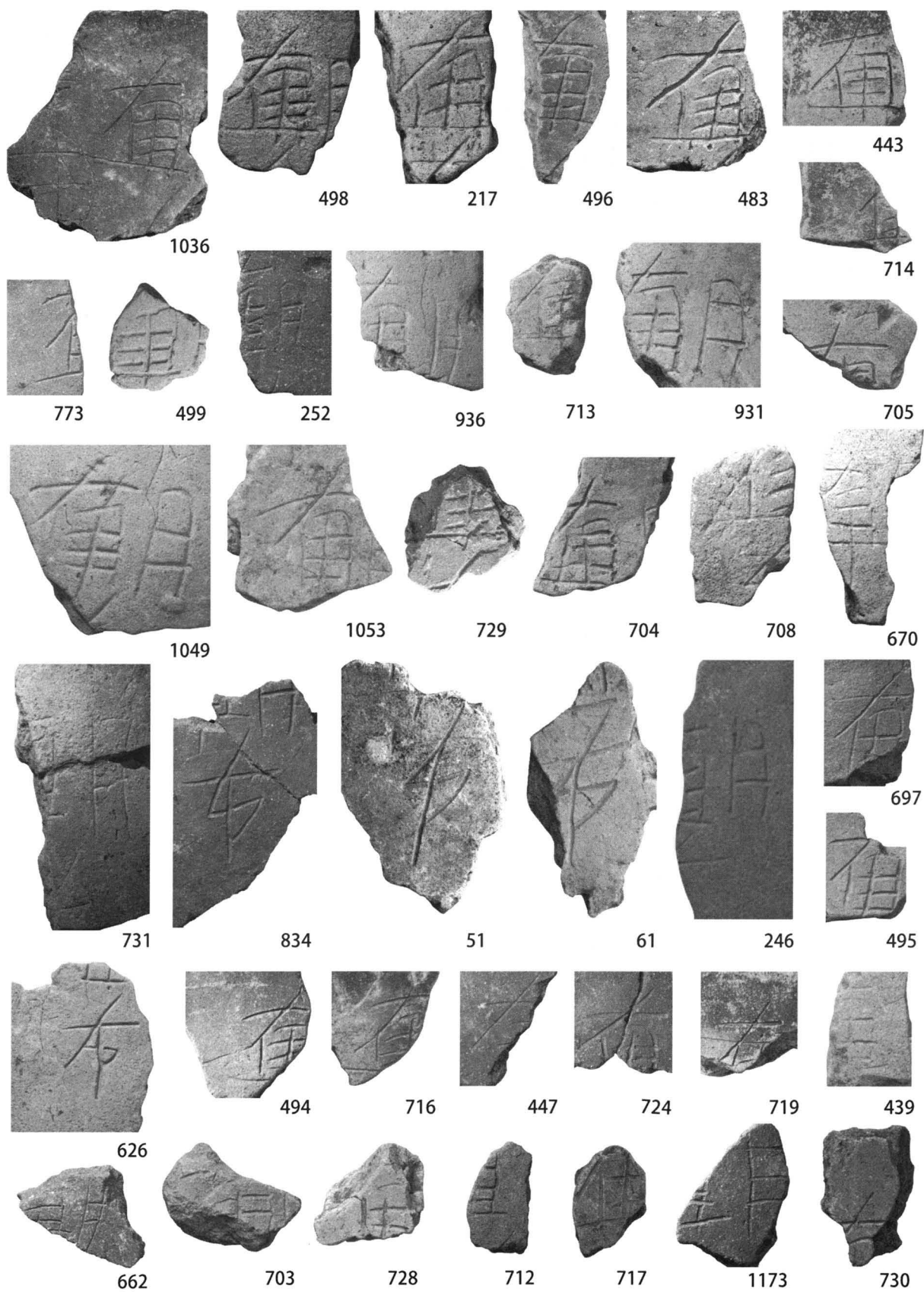


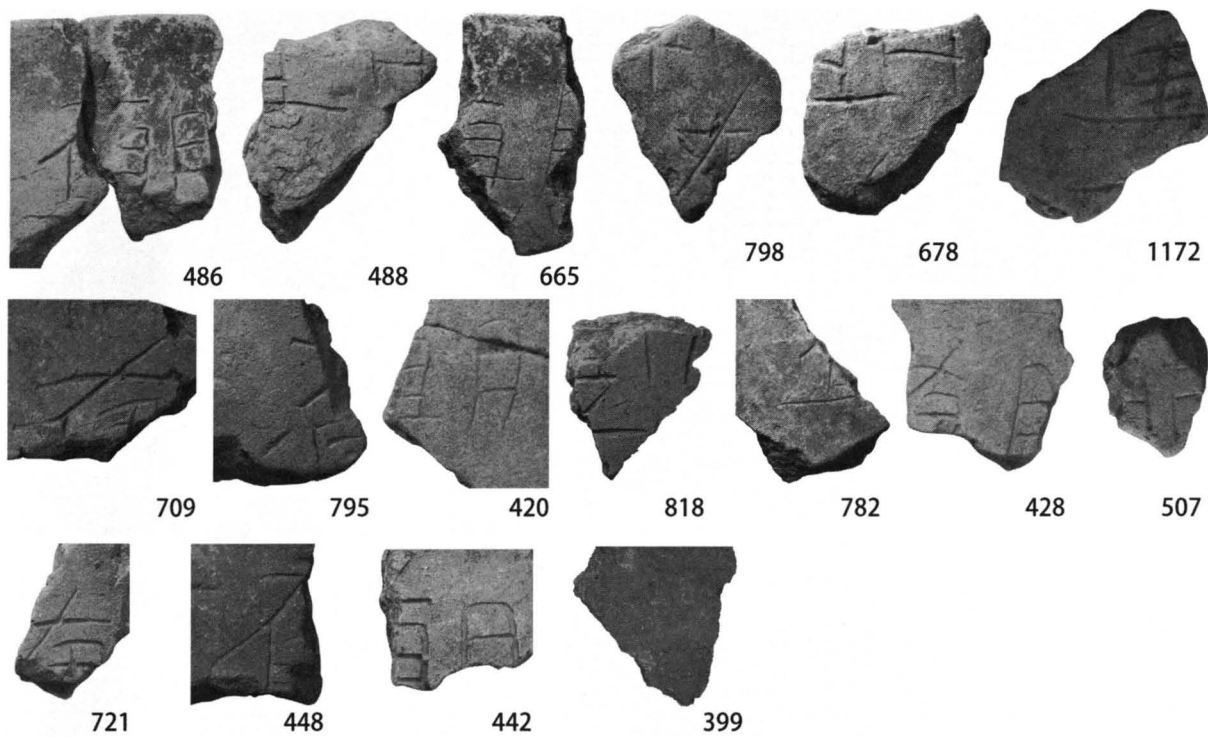
848



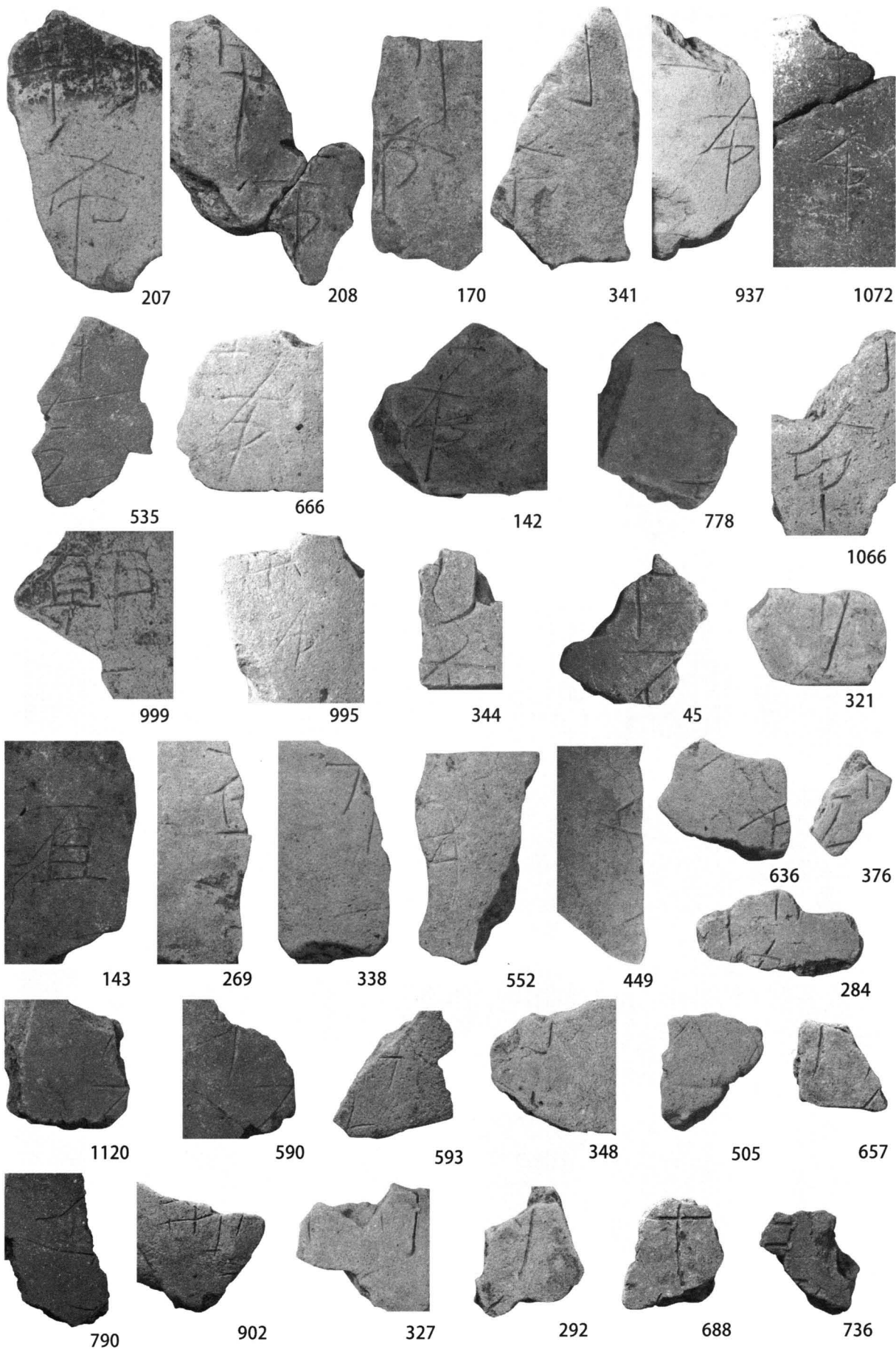
1035

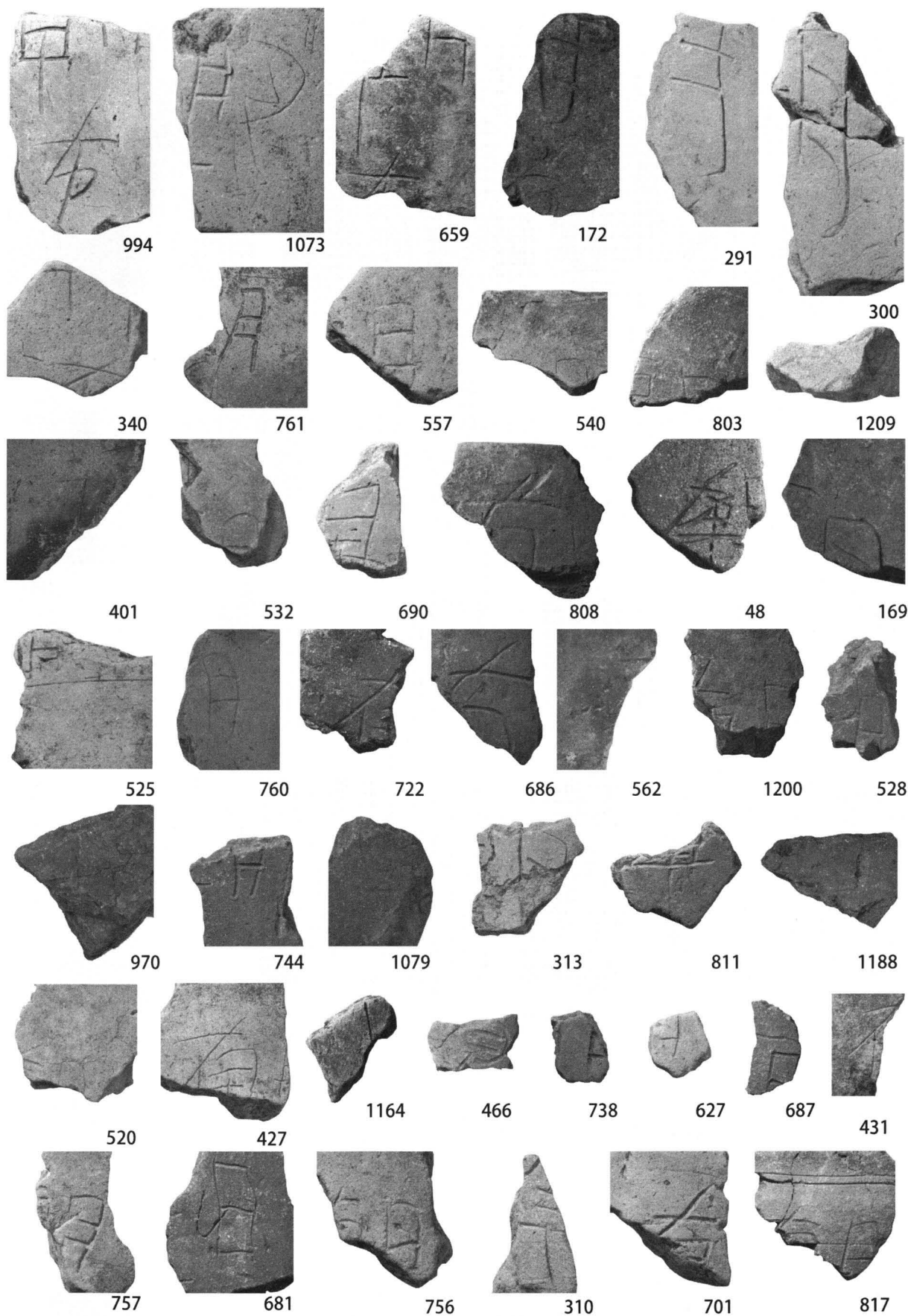


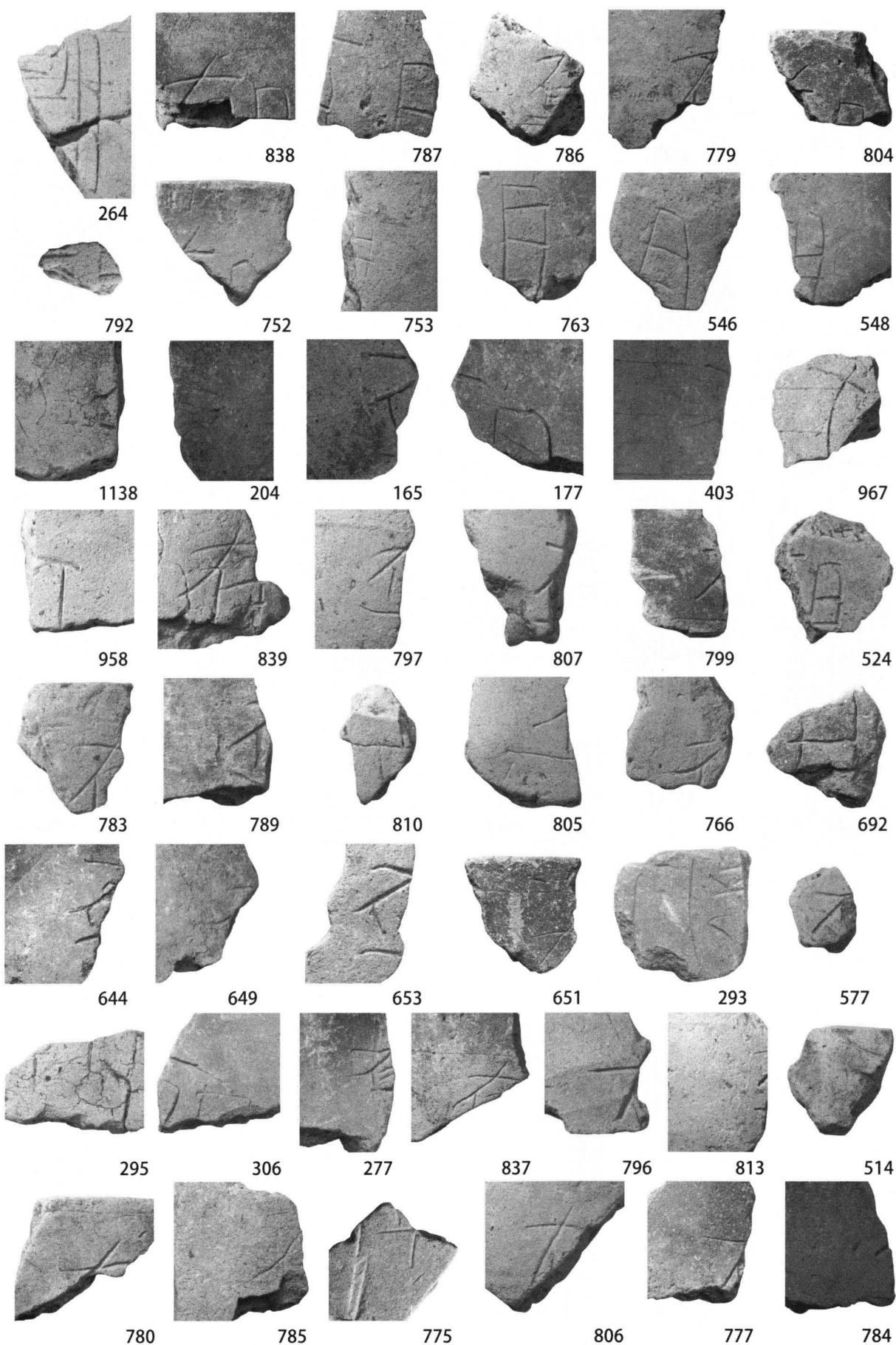


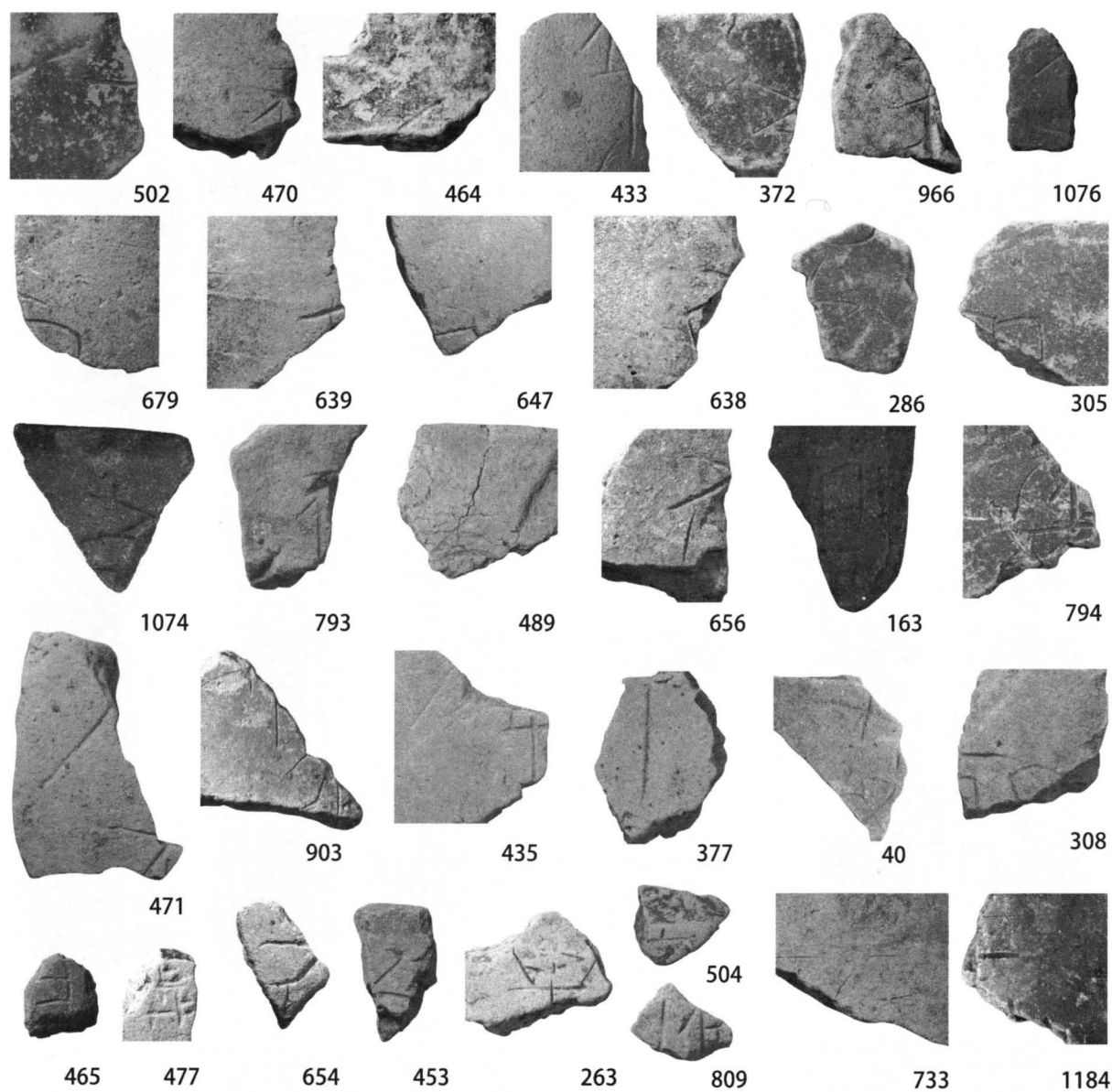


その他 朝系グループ











781



800



762



1221



814



788



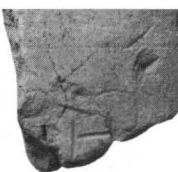
764



755



750



749



740



739



743



765



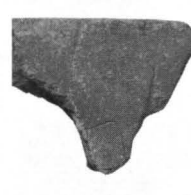
768



689



553



537



747



759



745



529



527



523



555



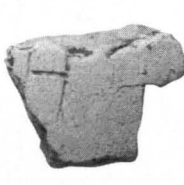
693



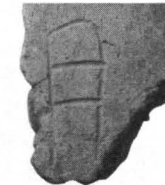
748



551



556



547



526



539



541



458



307



299



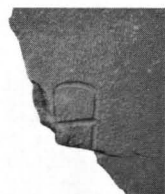
742



732



767



746



751



741



734



772



554



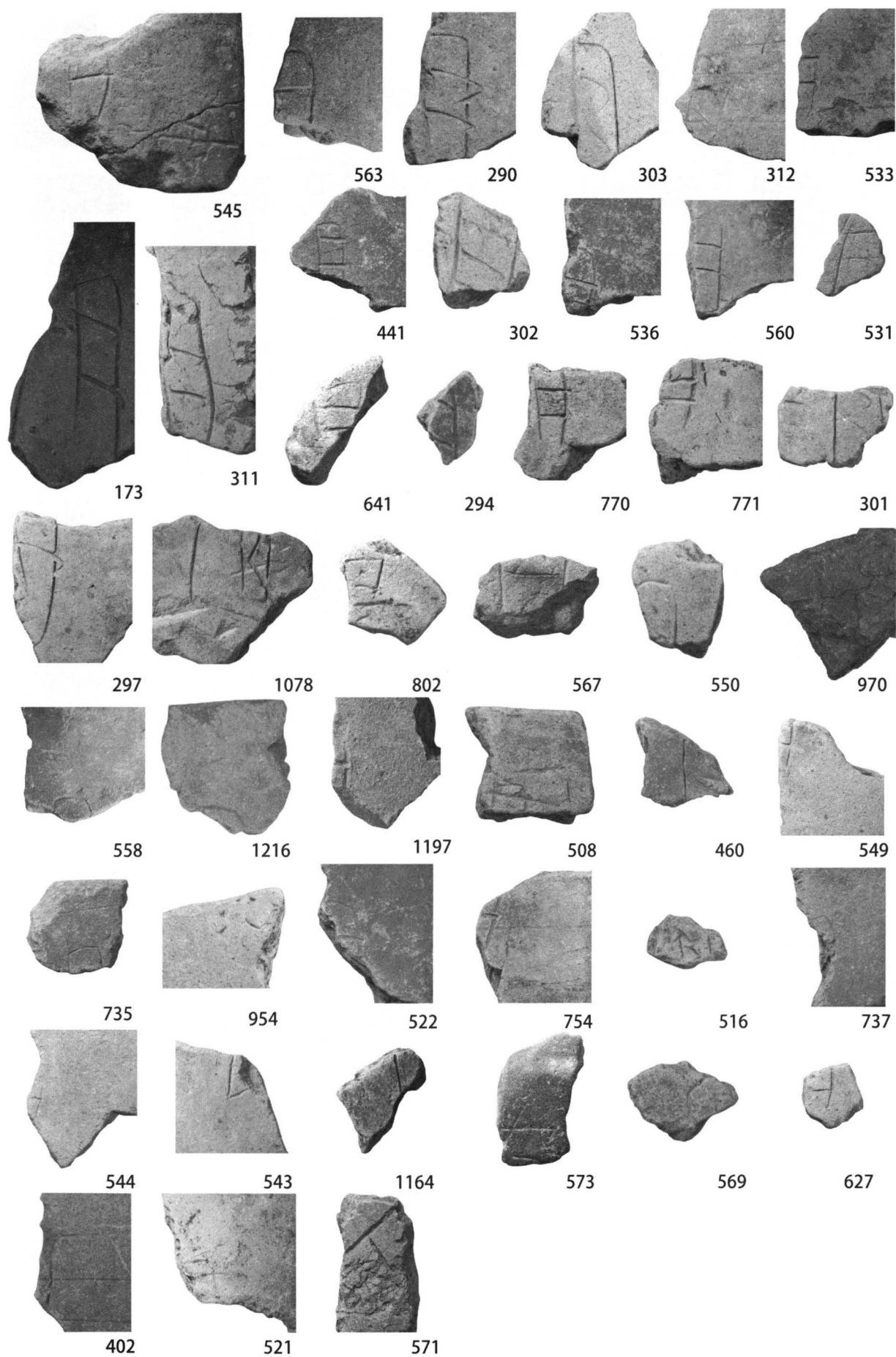
578



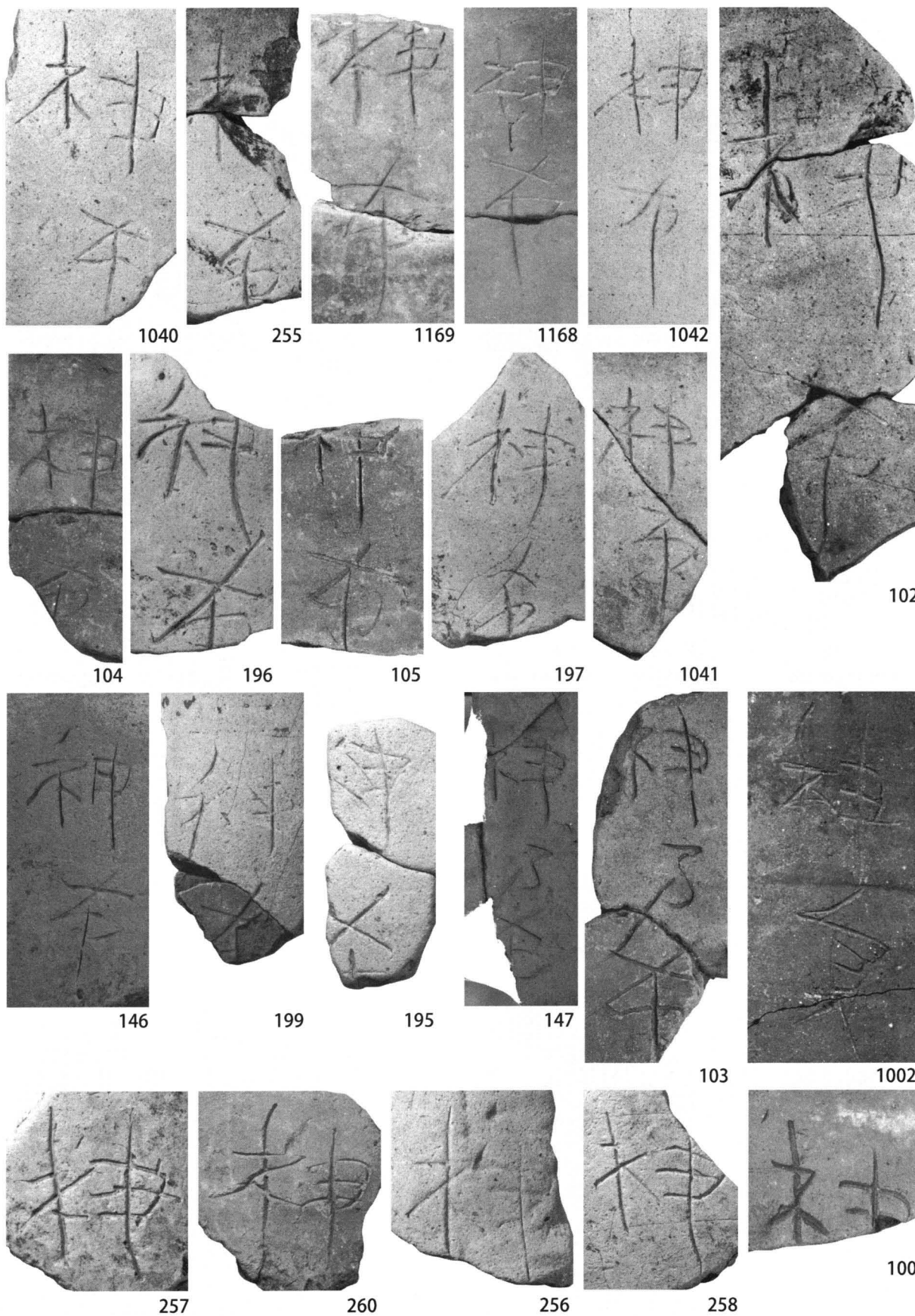
534

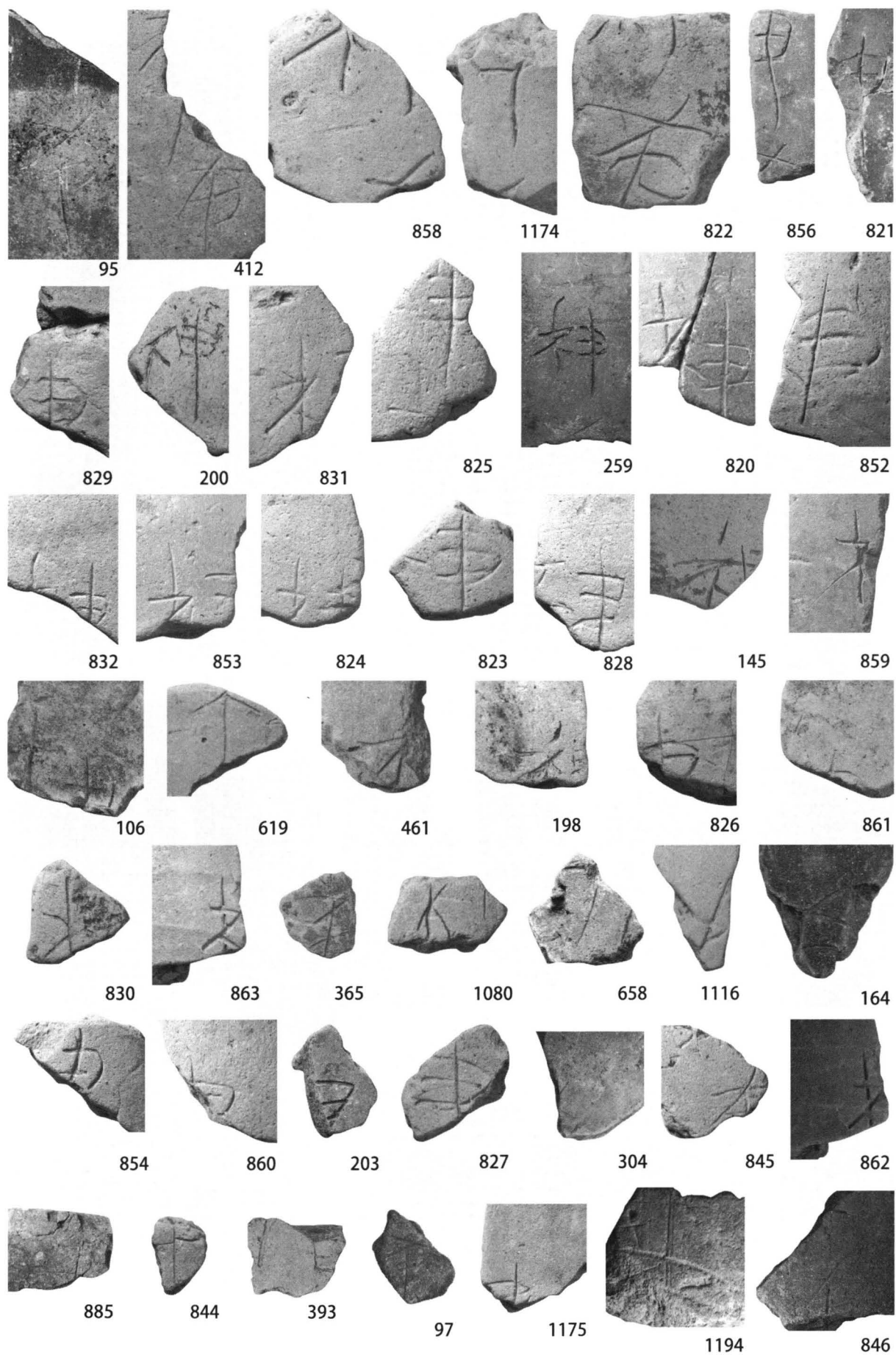


530

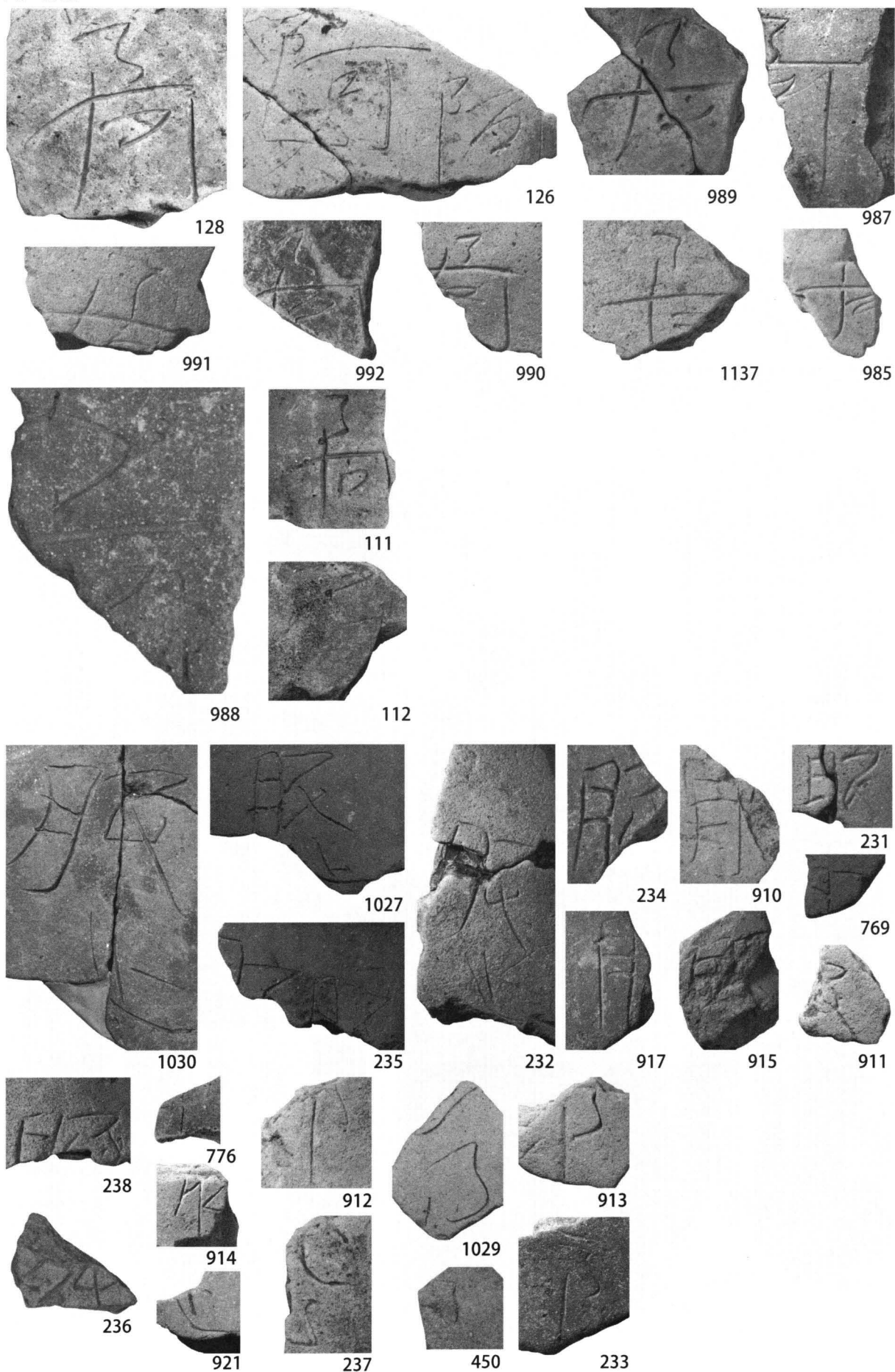


神布

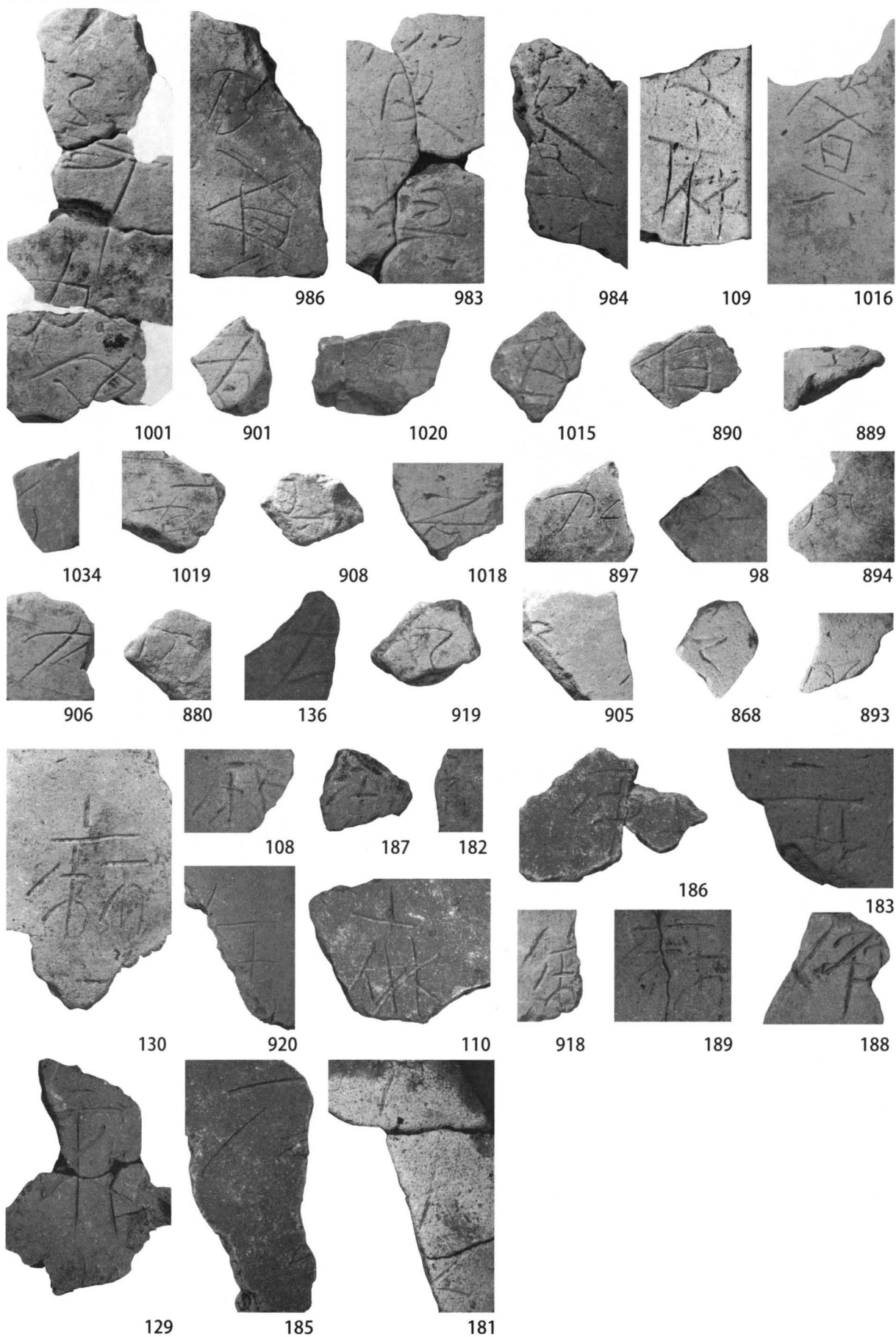




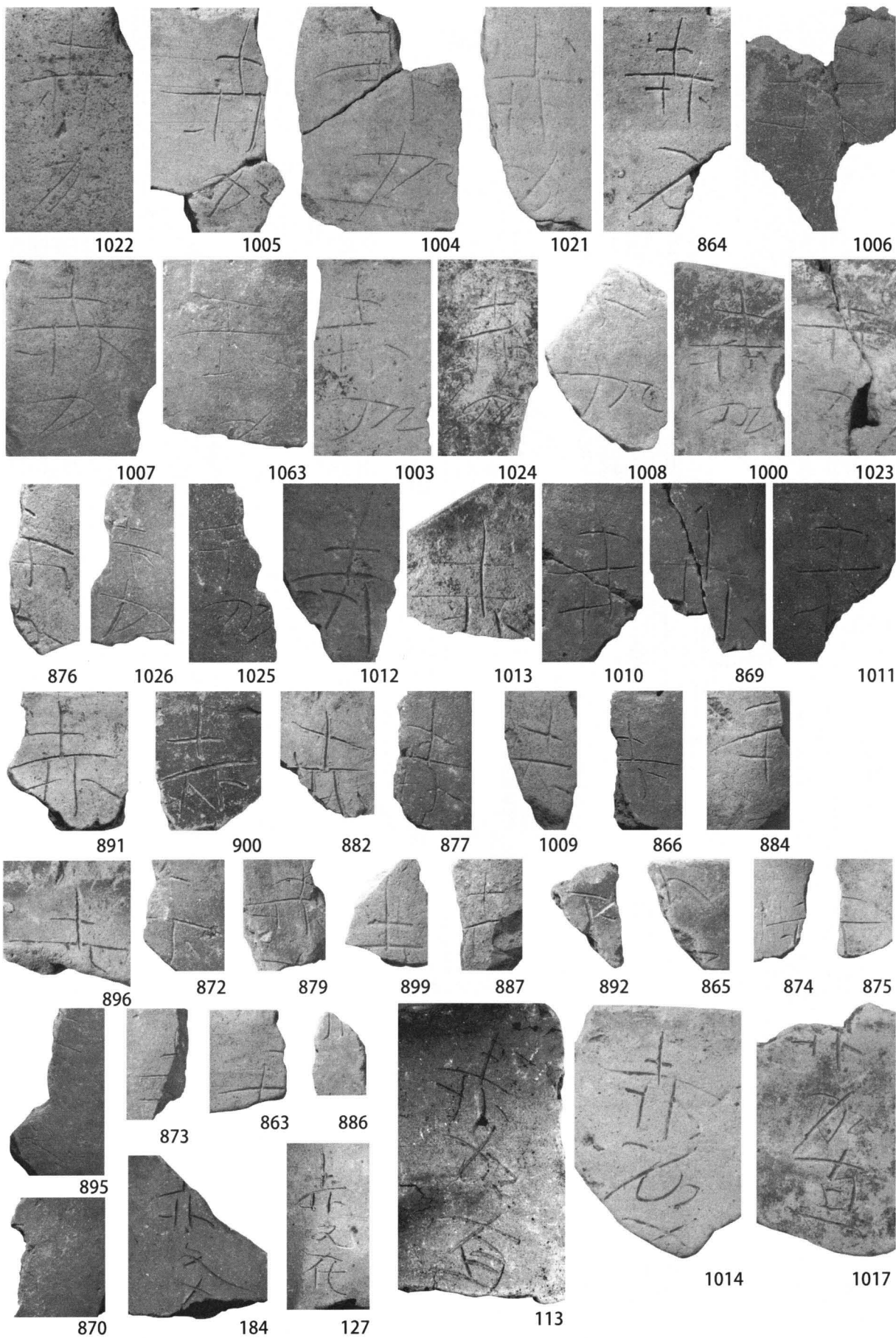
阿/服部



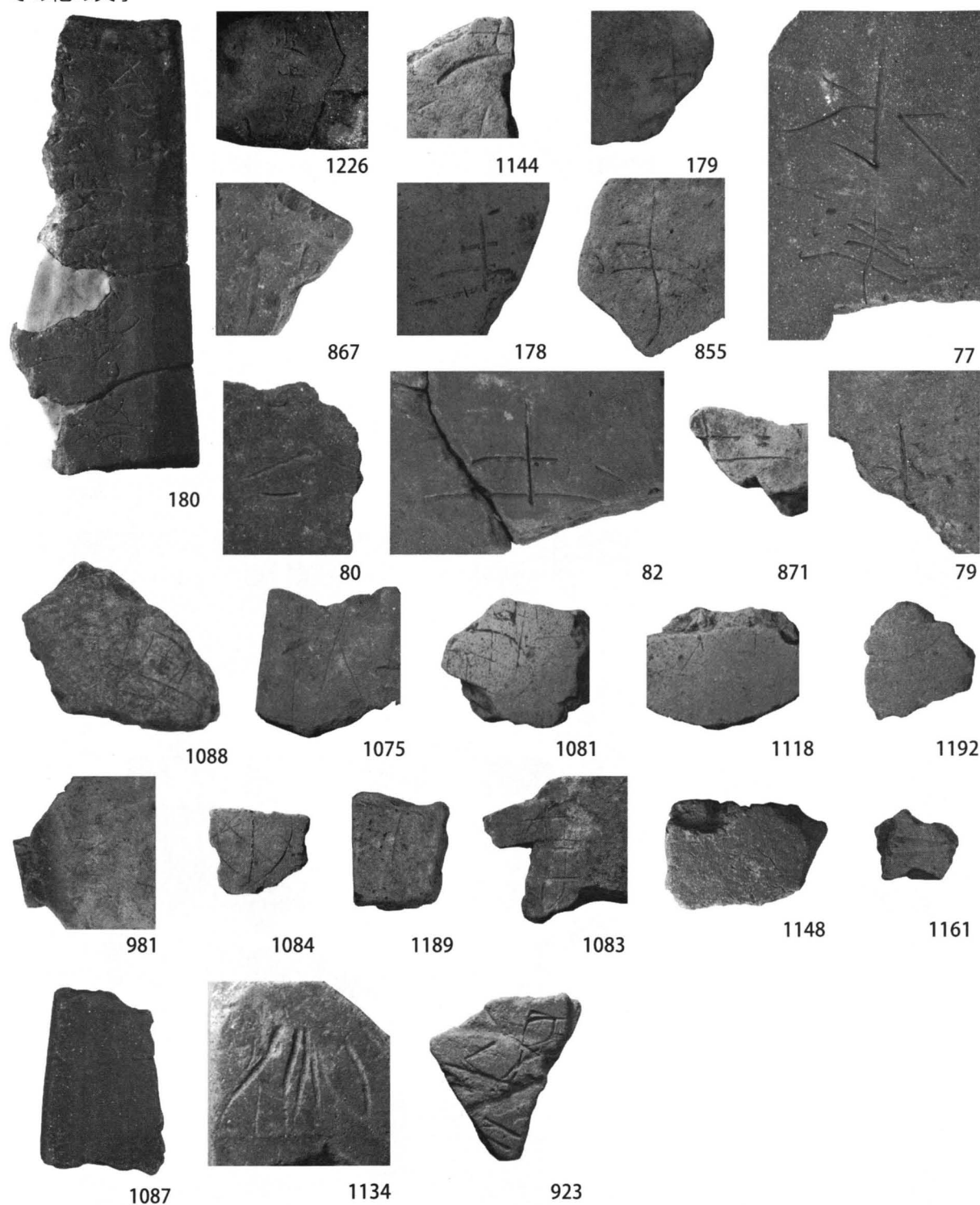
皮真/加/真/麻



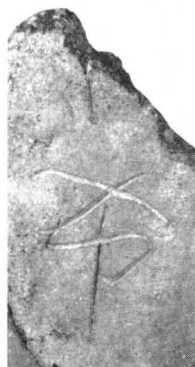
赤加/赤



その他の文字



布



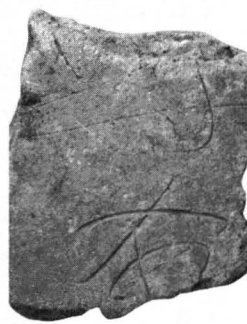
1064



150



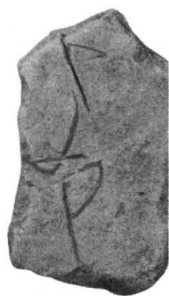
156



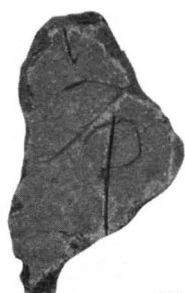
149



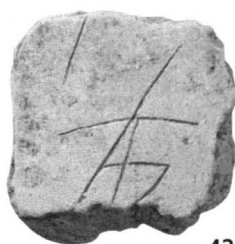
618



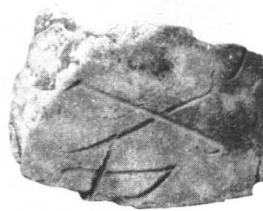
1065



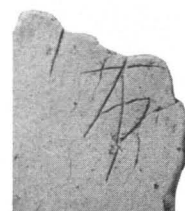
157



425



148



434



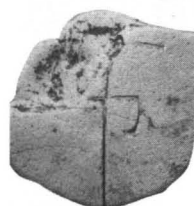
851



840



615



616



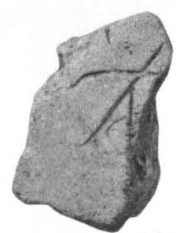
1070



1108



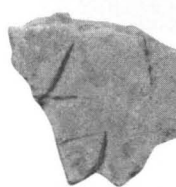
349



335



667



322



339



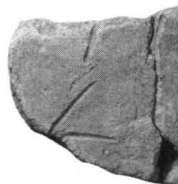
227



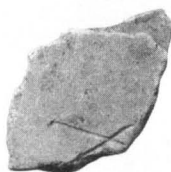
581



774



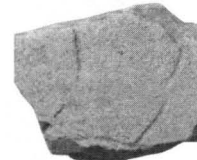
608



585



939



326



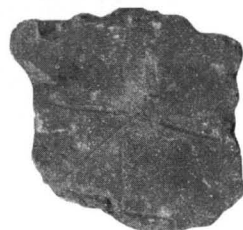
144



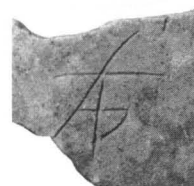
333



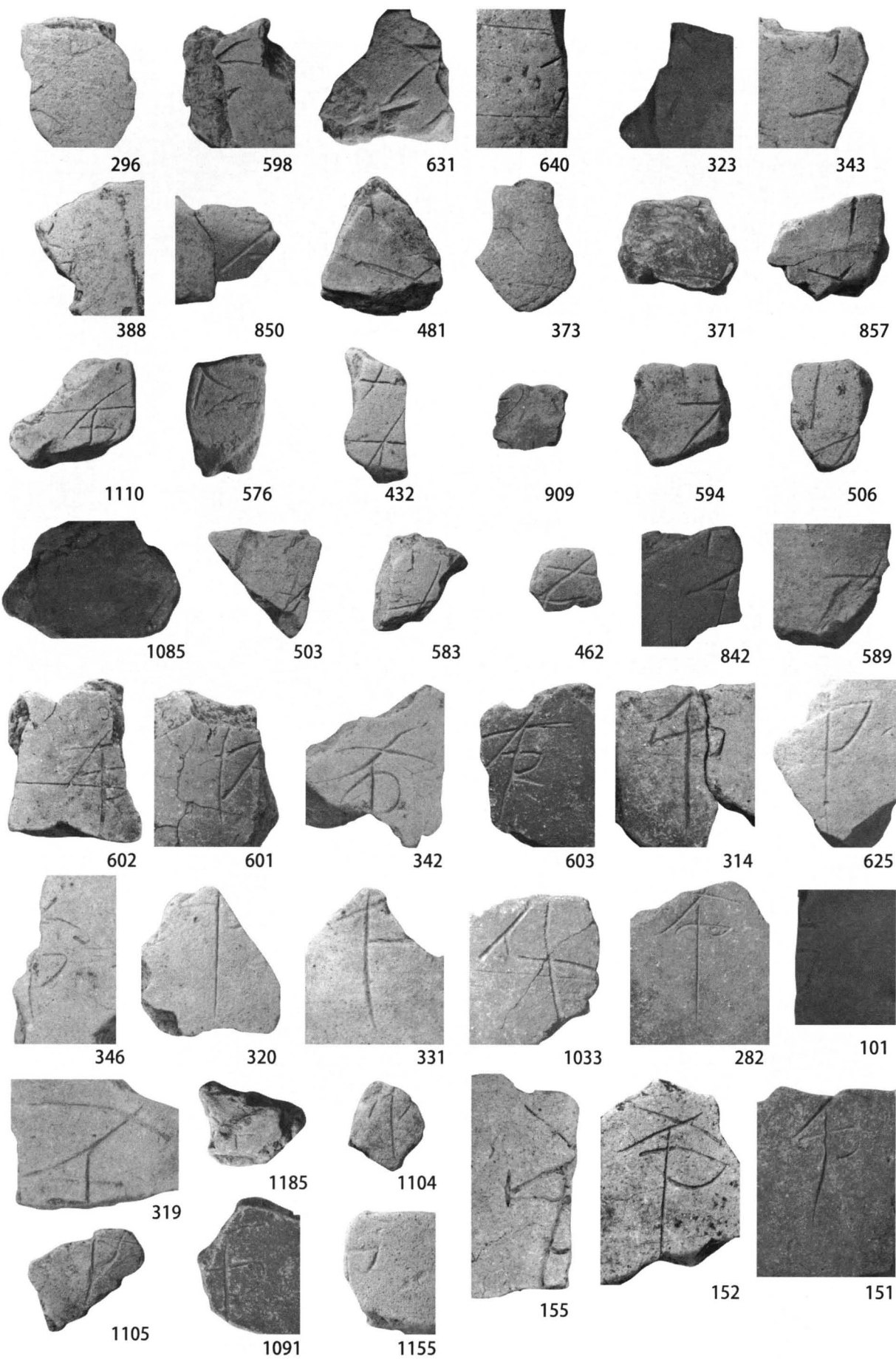
579

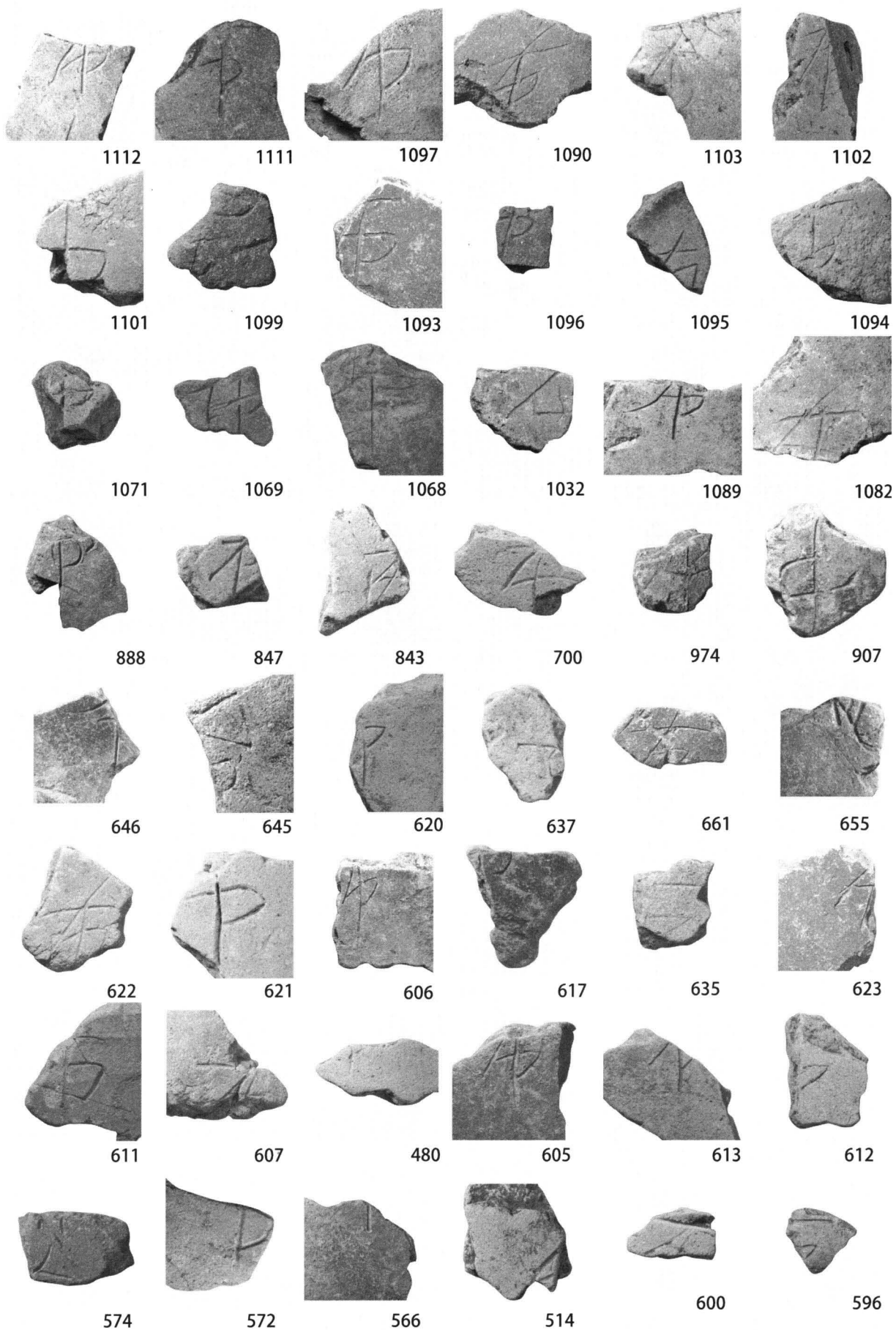


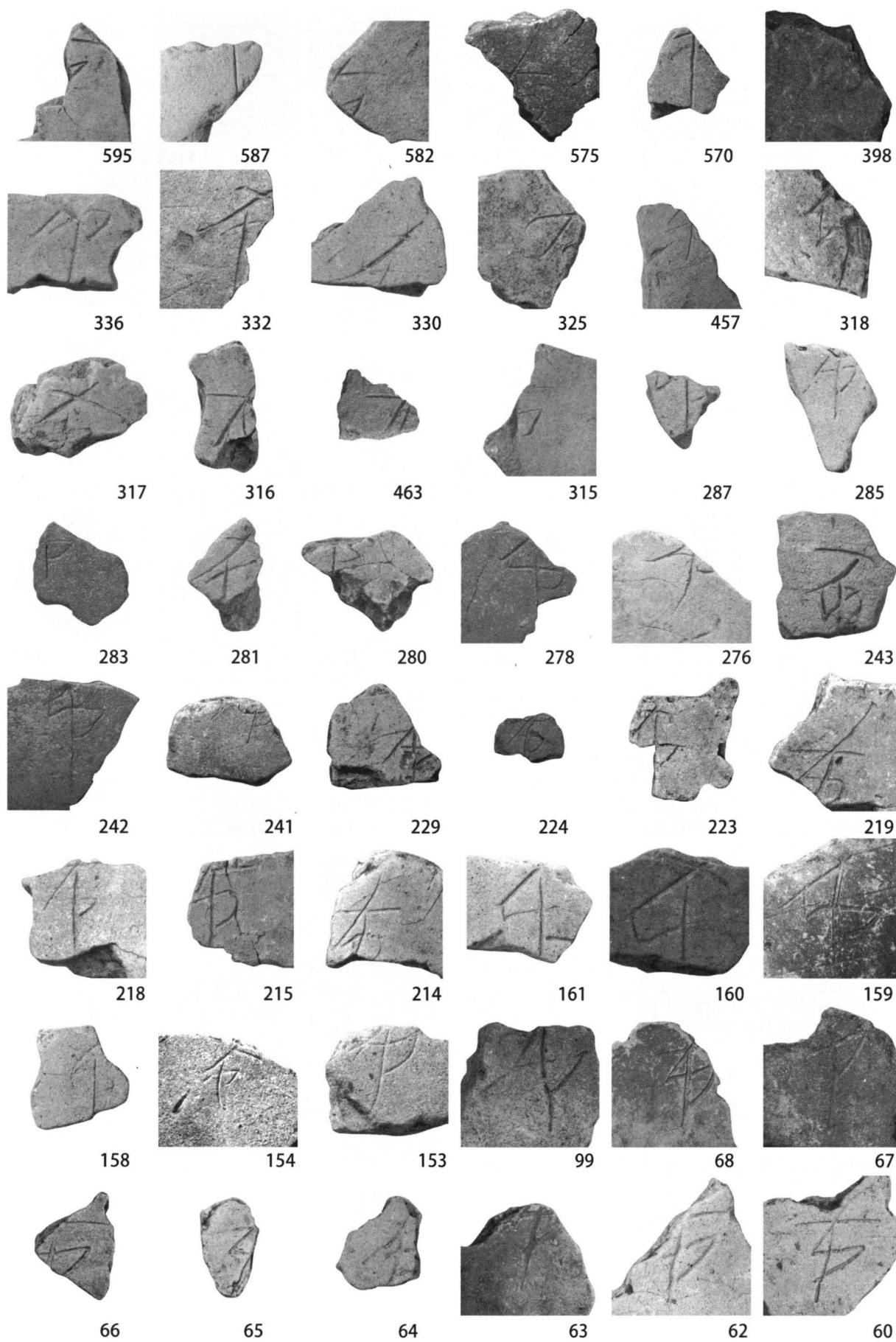
78

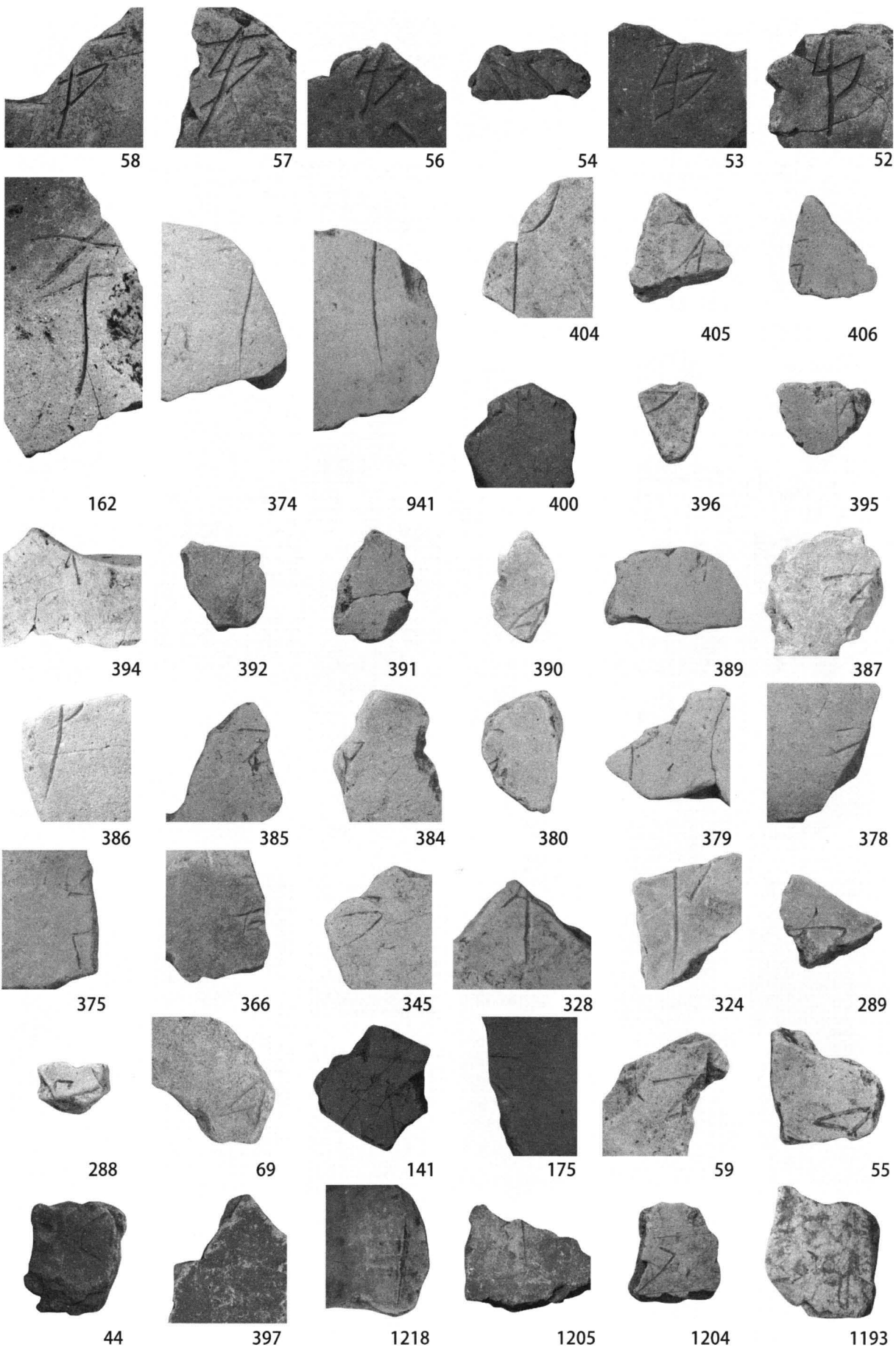


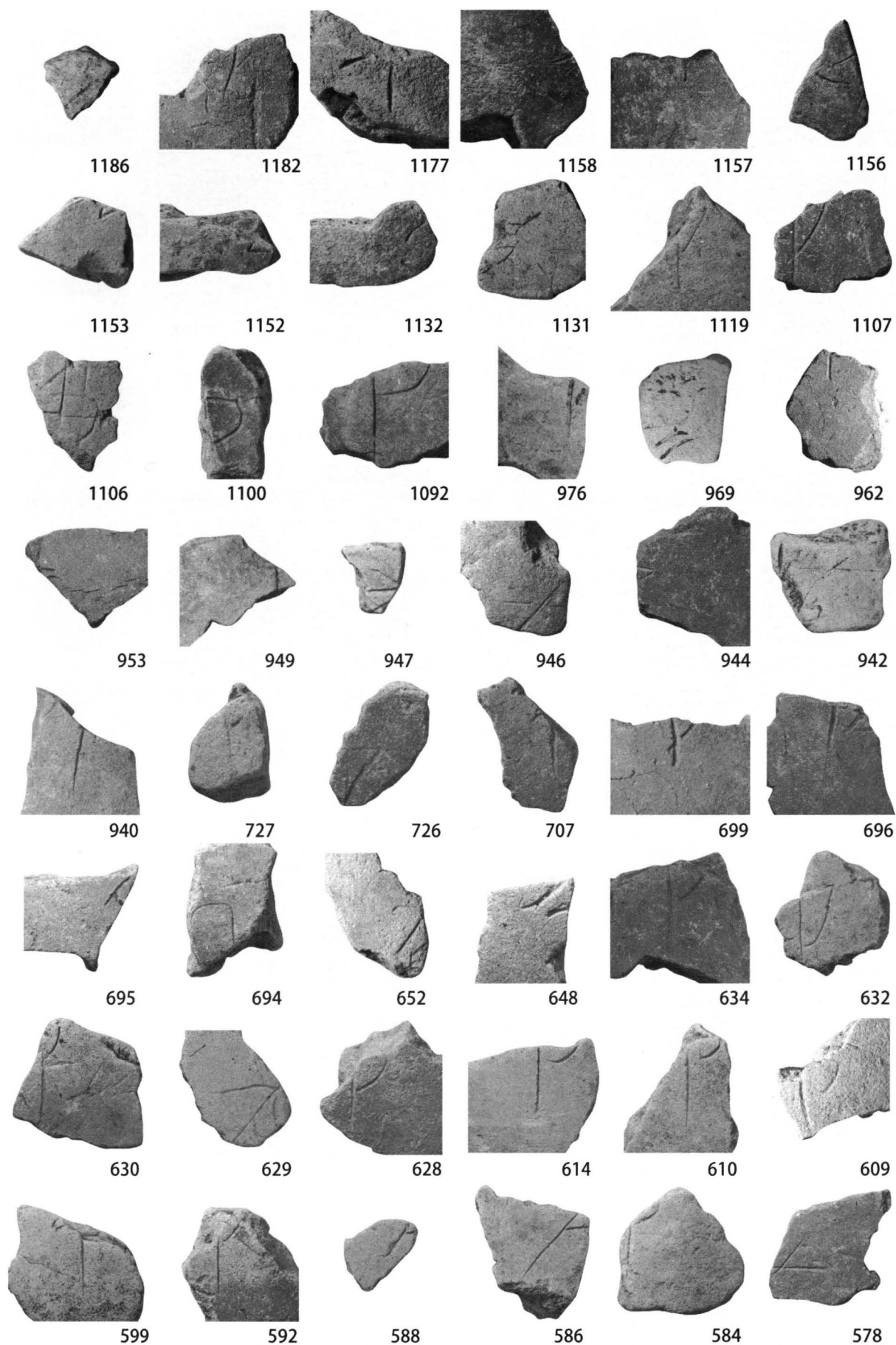
1109





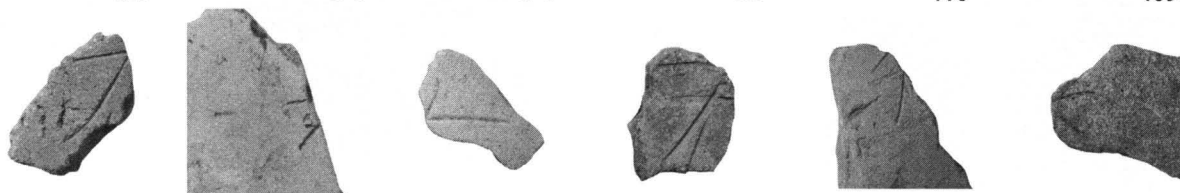








479 476 474 469 410 409

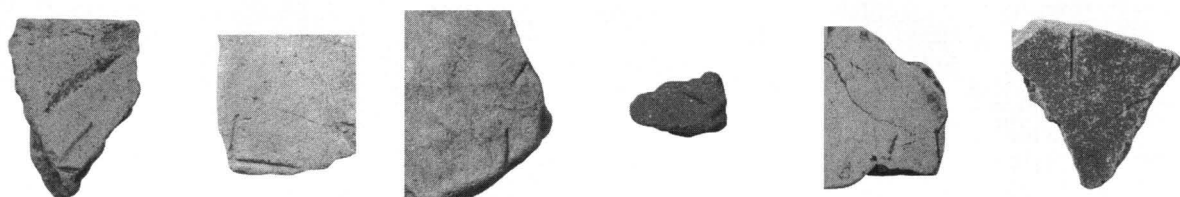


454 452 426 624 457 961

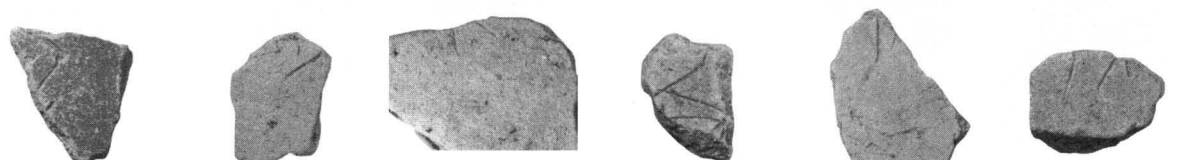


408 407

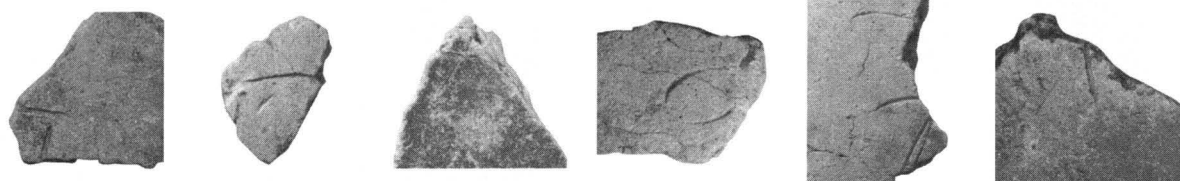
判読不詳の文字



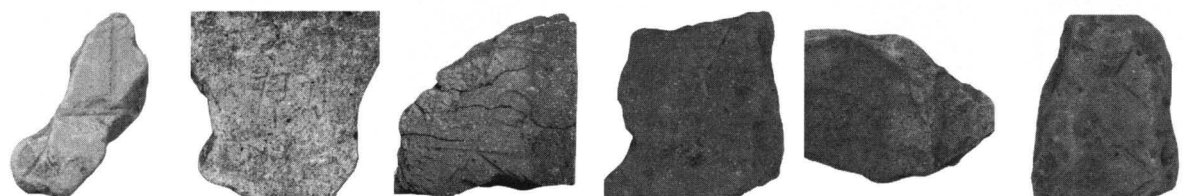
509 475 473 459 456 455



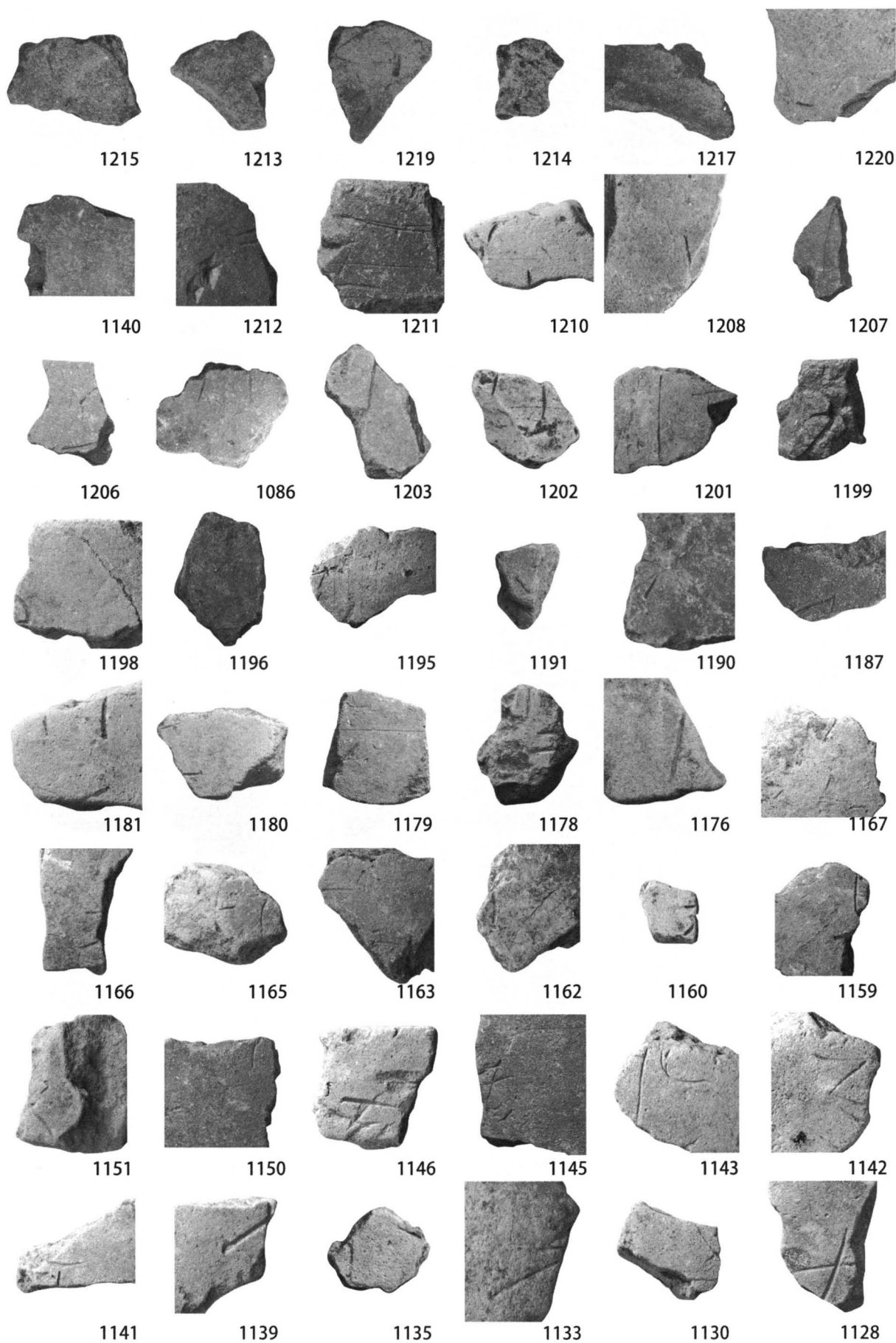
451 383 382 381 370 369

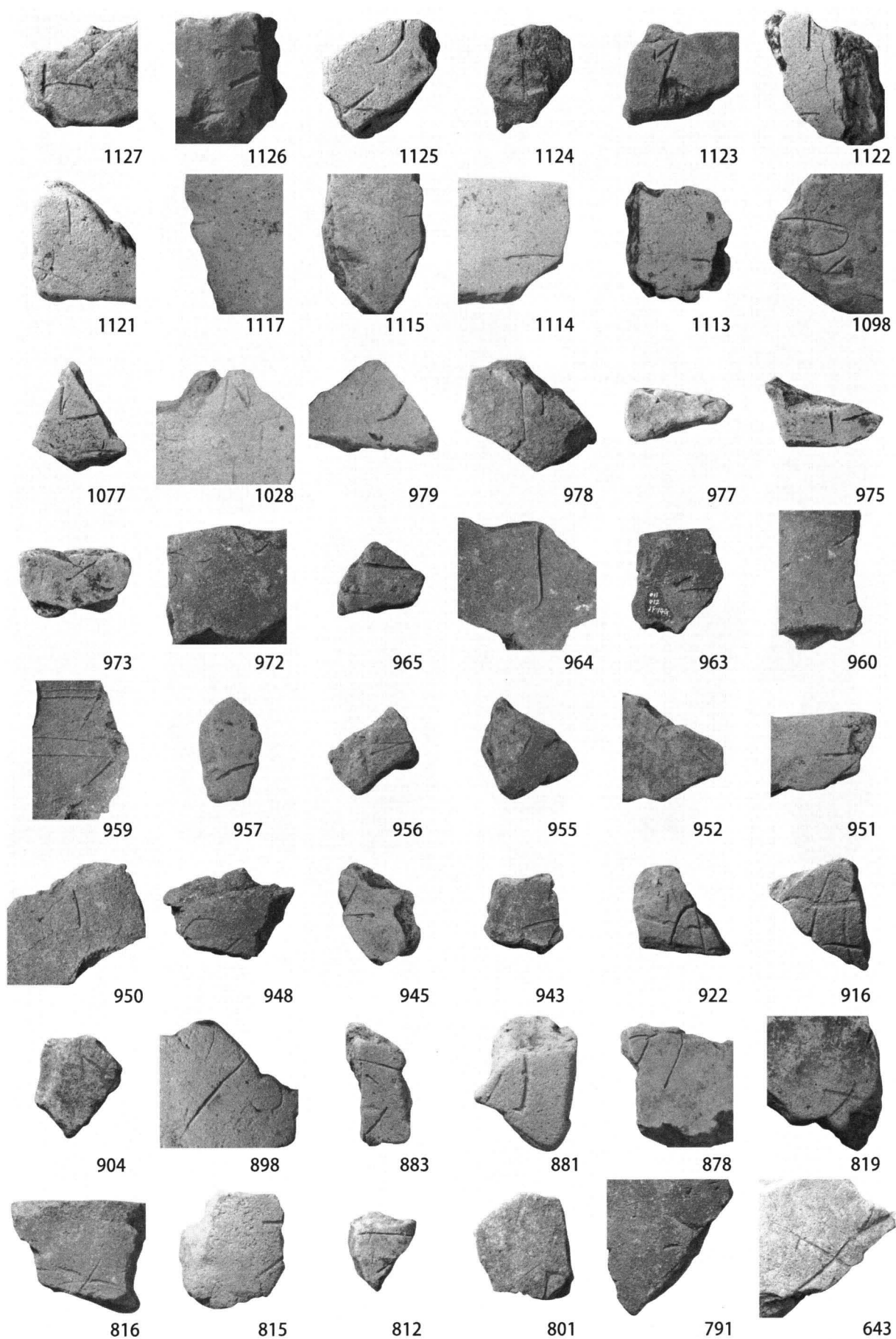


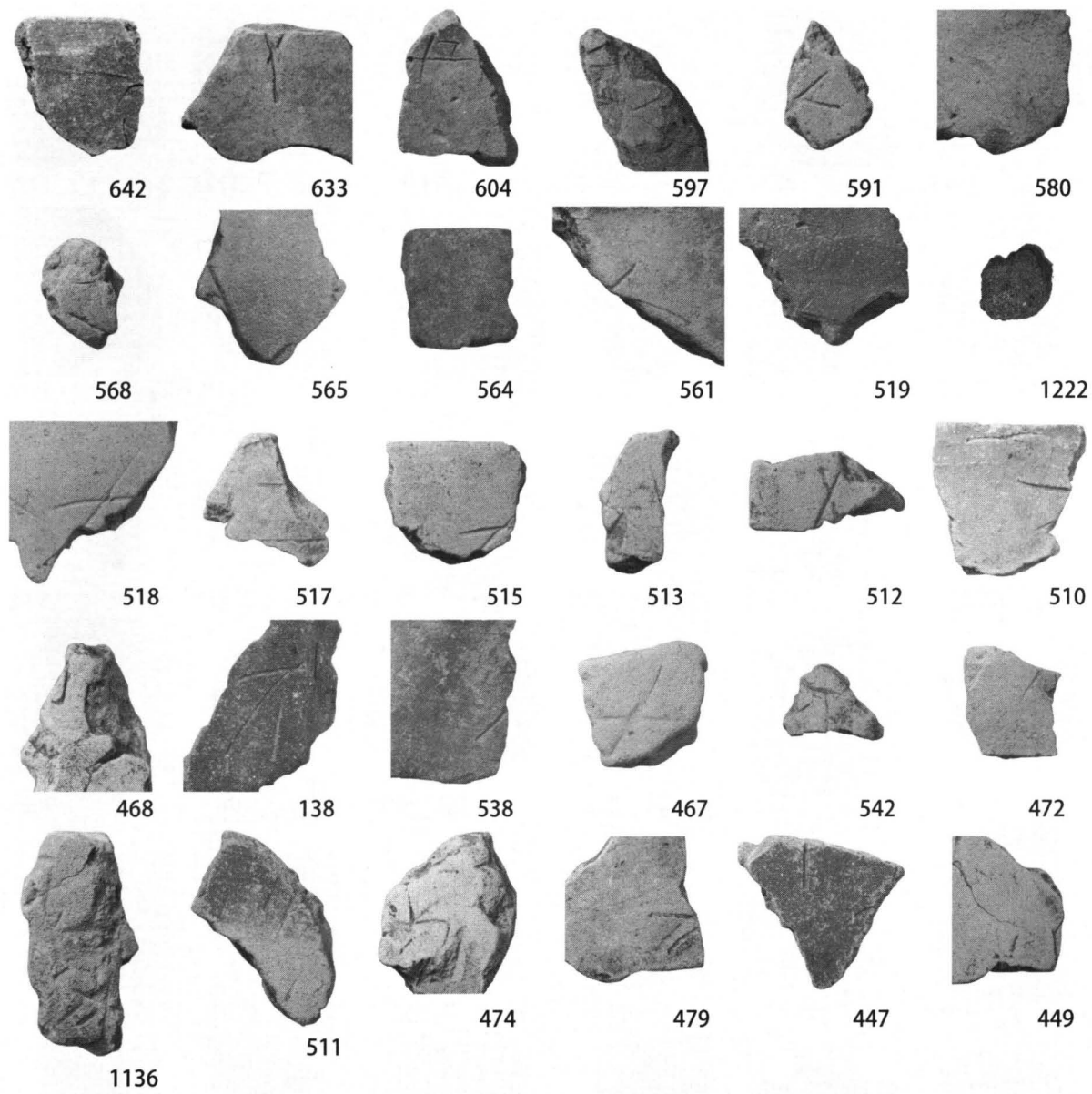
368 367 364 363 270 1129



478 81 131 1154 971 1147







Ⅱ類・Ⅲ類

